

長野県中央道埋蔵文化財 包蔵地発掘調査報告書

—茅野市その4・富士見町その3—

昭和51・53年度

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

茅野市 その4. 富士見町 その3 正誤表

P		誤	正
	序 13行目	大きく凌駕している	大きく凌駕している
5	挿図1	頭殿沢遺跡付近の地形 (1:2000)	頭殿沢遺跡付近の地形 (1:3000)
6	挿図2	頭殿沢遺跡土層図 (1:2000)	削除
7	挿図2	頭殿沢遺跡土層図 (1:2000)	頭殿沢遺跡土層図 (1:200)
9	挿図3	■一羽条縄文	■一羽状縄文
11・12	挿図4	頭殿沢遺跡調査区・遺構全体図 (1:4000)	頭殿沢遺跡調査区・遺構全体図 (1:400)
13	挿図5	……………出土状態実測図	……出土状態実測図 (1:60)
22	挿図11	1. 3号住居址 2. 埋葬炉断面図	1. 3号住居址 (1:60) 2. 埋葬炉断面図 (1:30)
28	挿図15	頭殿沢遺跡集石1実測図 (1:30) 実測図 (1:60)	頭殿沢遺跡集石1実測図 (1:60) 削除
31	挿図18	集石土壌 394実測図	集石土壌 394実測図 (1:60)
35	上から15行目	千鹿頭社遺跡に	千鹿頭社遺跡に
42	挿図22		縮尺スケールにcm挿入
48	挿図27	A B ……節理面からの折損 ……A以外の折損	A…節理からの折損 B…A以外の折損
51	挿図28	●一不製円形状	●一不整円形状
51	上から2行目	1977	1977から引用した。
73	挿図13	御射山西遺跡出土石器実測図 (1:5)	御射山西遺跡出土石器実測図 (1:1.5)
148	註 C	研度し形状を成すもの	研磨し形状を成すもの

長野県中央道埋蔵文化財 包蔵地発掘調査報告書

—茅野市その4・富士見町その3—

昭和51・53年度



日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

序

茅野市に所在する頭殿沢遺跡の第1次発掘調査は、昭和51年4月5日より6月19日にかけて実施された。第2次発掘調査は諏訪南インターチェンジ建設にかかる本線幅の拡幅部分で、1年おいた昭和53年8月21日より12月7日まで実施され、同時に富士見町の手洗沢・御射山西両遺跡の調査も行われた。

この3遺跡は、八ヶ岳連峰の山頂付近から放射状に広がる帯状の台地の先端部分にあたり、標高900から1,000mの位置にあって、縄文時代の遺跡が多いことで夙に知れる地域である。中央自動車道は、これらの台地を横断して計画されたが、山林等のため分布状態があまり明確でなく新しい遺跡の発見も予想されていた。ちなみに、昭和51年度に発掘調査を実施した10遺跡のうち、居沢尾根・阿久両遺跡以外の8遺跡（入の日影・柏木南・中阿久・オシキ・上の原・判の木山西・判の木山東）は、中央自動車道の路線が発表されてから新たに発見されたものであり、この地域が予想以上に大規模な遺跡であることが判明した。今回報告される3遺跡も新たな発見によるものである。

発掘調査の結果は本報告書にみられるとおりであるが、3遺跡とも縄文時代中期を中心とし、平安時代にまで亘る集落址で、住居址・土壇群・集石群が多く発見された。特に頭殿沢遺跡の規模は他の2遺跡を大きく凌駕している。これらの成果は、八ヶ岳山麓台地の原始・古代の集落立地を考究する上で特色が一層明らかにできる資料になりうるものと思われる。

本報告書の刊行にあたり、発掘調査や整理作業に深い御理解をいただいた日本道路公団名古屋建設局、同諏訪工事事務所、長期間発掘調査に精励された大沢和夫前団長をはじめとする調査団各位、調査のために、御協力いただいた諏訪中央道事務所、茅野市、富士見町当局並びに同地区被買収組合等の関係各位に対し、深甚の謝意を表する次第である。

昭和56年3月20日

長野県教育委員会教育長

内 山 袈裟一

例 言

1. 本書は日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいて行われた、長野県茅野市御狩野頭殿沢遺跡、長野県富士見町神戸手洗沢遺跡、同御射山西遺跡の発掘調査報告書である。このうち頭殿沢遺跡は、さきに刊行した『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書茅野市・原村その2』に平安時代に関するものは掲載されたので、それは省略し、第1次調査分で残された縄文時代関係を、第2次調査分と一括した。
2. 報告書の体裁は従来刊行された報告書に従って編集したのであるが、重複を避けるため、すでに刊行された報告書に記載された事項は一部省略してある。
3. 調査結果に関して、一部はかなり検討を加え、類型化などを試みたものもあったが、全般的には十分な余裕もなく記述したので、精粗の差があるため、原則として検出された遺構・遺物の図示に重点を置いている。
4. 発掘調査と整理作業の間はかなり時間が経過しており、その上調査関係者の途中退団も多く、遺物整理の段階では全く新しい班編成を組まなければならない状況であったので、多少の見解の相違や不明確さは生じたが、基本的には当初の協議事項を踏襲してきた。
5. 作業分担は関係者一同の協議により決定し、途中退団者の分担は、その都度残留者に引継がれてきた。各遺跡の発掘調査及び、整理作業担当の全体は本文3頁に記載してあるが、各パートは次のように分担した。

	頭殿沢遺跡（縄文関係のみ）	手洗沢・御射山西遺跡
整理・復元作業	岩佐今朝人 伴 信夫 丸山日出夫 樋口誠司 鈴木御恵子 重倉理恵子	青沼博之 小池 孝 三ッ井きみ子 桑原正枝
遺構図トレース	丸山	小池・三ッ井 桑原
遺物実測・採拓	岩佐、伴、丸山、樋口	青沼、三ッ井
遺物トレース	丸山、樋口、重倉	三ッ井

写真は、木下平八郎、土器復元は福沢幸一が専ら当った。

6. 本報告書は、本文、図、表、図版に分け、本文中へ入るものは挿図、表とし、本文後に一括した分は図・別表・図版とした。なお、土器、石器、土製品の拓影、実測図は各項とも通し番号を付してあるので、本文中に引用する場合は、特別なことがない限り番号のみを記載し、簡略化した。
7. 執筆に関しては協議により分担し、文責は報告書の末尾に一覧表で示した。編集は主として頭殿沢遺跡は岩佐今朝人が、手洗沢・御射山西遺跡は青沼博之が行ない、樋口昇一が全般を総括した。
8. 本報告書関係の遺物・実測図等は長野市長門町長野県中央道遺跡調査団事務所に保管してある。

本文目次

序	
例言	
目次	本文・挿図・表・図・図版
第1章 調査状況	1
第1節 調査にいたるまで	1
1 中央道関係の経過	1
2 発掘調査委託契約	1
3 長野県中央道遺跡調査会	2
1) 昭和51・53年度長野県中央道遺跡調査会役員名簿	2
2) 昭和51・53年度長野県中央道遺跡調査団名簿(茅野市・原村・富士見町班)	3
3) 発掘調査協力者	3
4) 現地指導・視察者	4
第II章 調査遺跡	5
第1節 頭殿沢遺跡(STDB)	5
1 調査の経過	5
2 層序	6
3 遺構と遺物	6
1) 縄文時代早期・前期の遺構と遺物	6
(1) 遺物の出土分布状態(7) (2) 遺構外遺物(7)	
2) 縄文時代中期初頭の住居址と遺物	13
(1) 5号住居址(13) (2) 10号住居址(14) (3) 11号住居址(14)	
(4) 12号住居址(15) (5) 14号住居址(16) (6) 15号住居址(17)	
(7) 遺構外出土土器(18)	
3) 縄文時代中期中葉の住居址と遺物	21
(1) 3号住居址(21) (2) 4号住居址(22) (3) 9号住居址(23)	
(4) 遺構外出土土器(25)	
4) 縄文時代後期の土器	26
5) 竪穴遺構	27
(1) 竪穴3(27) (2) 竪穴4(27)	
6) 集石と遺物	27
(1) 集石1(27) (2) 集石2(28) (3) 集石3(28)	
(4) 集石4(30) (5) 集石5(30) (6) 集石6(30)	
(7) 集石7(30) (8) 集石8(30) (9) 集石土壙394(30)	

7)	土壙・ロームマウンド状土壙	31
	(1) 土壙 (31) (2) ロームマウンド状土壙 (34)	
4	まとめ	34
1)	集落	34
2)	土器	35
	(1) 縄文時代早期・前期 (35) (2) 縄文時代中期初頭 (36)	
	(3) 縄文時代中期中葉 (38) (4) 縄文時代後期 (39)	
3)	石器	41
	(1) 小形石器 (41) (2) 大形石器 (48)	
4)	その他	51
	(1) 土製品 (51) (2) 炭化物・自然遺物 (52)	
第2節	御射山西遺跡 (SMYC)	53
1	位置・環境	53
2	発掘区の設定と調査の経過	53
1)	発掘区の設定	53
2)	調査の経過	59
3	遺構	62
1)	縄文時代の遺構	62
2)	その他の遺構	65
4	遺物	69
1)	縄文時代早期の土器	69
2)	縄文時代中期の土器	71
3)	縄文時代後期の土器	71
4)	石器	72
5	まとめ	77
第3節	手洗沢遺跡 (STAB)	78
1	位置	78
2	調査の経過	78
3	遺構	78
4	遺物	81
1)	縄文時代の遺物	81
2)	平安時代の遺物	83
5	まとめ	83

執筆分担一覧 あとがき

挿 図 目 次

頭殿沢遺跡	
挿図 1 遺跡付近の地形図 …………… 5	挿図15 集石 1 実測図 ……………28
挿図 2 土層図 …………… 6	挿図16 集石 2・3・4・5・6 実測図 ……………29
挿図 3 縄文時代早期遺物の出土分布図 …………… 8	挿図17 集石 7・8 実測図 ……………30
挿図 4 調査区・遺構全体図 ……………11	挿図18 集石土壌394実測図……………31
挿図 5 5号住居址・炭化材出土状態実測図 ……………13	挿図19 主な土壌実測図 ……………32
挿図 6 10号住居址実測図……………14	挿図20 主なロームマウンド状土壌実測図 ……………33
挿図 7 11号住居址実測図……………15	挿図21 石鏃形態分類図 ……………41
挿図 8 12号住居址実測図……………16	挿図22 AW36出土石鏃・BA49出土スクレイパー実測図 ……42
挿図 9 14号住居址実測図……………17	挿図23 使用痕付着部位指図 ……………43
挿図10 15号住居址実測図……………18	挿図24 小形石器の刃こぼれ・刃つぶれ・つぶれの1単位の長さの分布図 ……44
挿図11 3号住居址実測図……………22	挿図25 黒曜石出土分布図 ……………45
挿図12 4号住居址実測図……………23	挿図26 黒曜石相関図(長さ・幅)(1)~(4)……………46
挿図13 9号住居址実測図……………24	挿図27 打製石斧・横刃型石器折損状況模式図及び打製石斧接合実測図…48
挿図14 竪穴 3・4 実測図 ……………27	挿図28 土製円板相関図(長さ・幅)……………51
御射山西遺跡	
挿図 1 富士見町内遺跡分布図 ……………54	挿図 9 ロームマウンド、断層実測図 ……………67
挿図 2 御射山西・手洗沢遺跡地形、グリッド配置図…58	挿図10 ロームマウンド実測図 ……………68
挿図 3 A～D地区遺構配置図……………60	挿図11 出土土器拓影 ……………70
挿図 4 E・F地区遺構、遺物分布図……………61	挿図12 出土土器実測図・拓影(昭和54年度発掘)……………71
挿図 5 土壌実測図……………63	挿図13 出土石器実測図 ……………73
挿図 6 集石実測図 ……………64	挿図14 出土石器実測図 ……………74
挿図 7 ロームマウンド長軸方向……………66	挿図15 出土石器実測図 ……………75
挿図 8 諏訪地方の風 ……………66	挿図16 出土石器実測図(昭和54年度発掘)……………76
手洗沢遺跡	
挿図 1 遺構配置図 …………… 79	挿図 3 出土土器拓影、石器実測図 ……………82
挿図 2 土壌・ロームマウンド実測図 …………… 80	

表 目 次

頭殿沢遺跡	
表 1 遺構別出土石器一覧表 ……………41	表 5 縄文時代中期・後期主要土器一覧表 …………… 142
表 2 使用痕付着部位分類表……………44	表 6 出土小形石器一覧表…………… 144
表 3 土壌一覧表 ……………133	表 7 出土大形石器一覧表…………… 146
表 4 縄文時代早期・前期土器観察表 ……………137	表 8 出土土製円板一覧表…………… 148
御射山西遺跡	
表 1 長野県諏訪郡富士見町遺跡一覧……………55	

目 次

頭殿沢遺跡

- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| 図 1 土器拓影図 (早期 I ~ III 群) | 図24 土器拓影図 (中期初頭・中葉 15・4・9号住居址) |
| 図 2 土器拓影図 (早期 IV・V 群) | 図25 土器拓影図 (竪穴・集石・土壇) |
| 図 3 土器拓影図 (早期 IV・V 群) | 図26 土器拓影図 (土壇) |
| 図 4 土器拓影図 (早期 VI・VII 群) | 図27 土器拓影図 (土壇) |
| 図 5 土器拓影図 (早期 VIII ~ X 群) | 図28 土器拓影図 (土壇) |
| 図 6 土器拓影図 (早期 XI・XII・XIV 群) | 図29 土器拓影図 (土壇・中期初頭 遺構外) |
| 図 7 土器拓影図 (早期・前期 XV ~ XVI 群) | 図30 土器拓影図 (中期初頭 遺構外) |
| 図 8 土器拓影図 (早期 XIII 群) | 図31 土器拓影図 (") |
| 図 9 土器実測図 (中期初頭 5・10・11・12号住居址) | 図32 土器拓影図 (") |
| 図10 土器実測図 (中期初頭 12・14号住居址) | 図33 土器拓影図 (") |
| 図11 土器実測図 (中期初頭 14・15号住居址・遺構外) | 図34 土器拓影図 (") |
| 図12 土器実測図 (中期初頭 土壇・遺構外) | 図35 土器拓影図 (中期初頭・中葉 遺構外) |
| 図13 土器実測図 (中期初頭 遺構外) | 図36 土器拓影図 (中期中葉 遺構外) |
| 図14 土器実測図 (中期初頭 遺構外) | 図37 土器拓影図 (後期 遺構外) |
| 図15 土器実測図 (中期初頭 遺構外) | 図38 石器実測図 (石鏃・石錐) |
| 図16 土器実測図 (中期初頭 遺構外・中期中葉 3・4号住居址) | 図39 石器実測図 (スクレイパー・彫刻器類) |
| 図17 土器実測図 (中期中葉 4・9号住居址) | 図40 石器実測図 (使用痕ある石器) |
| 図18 土器実測図 (中期中葉 土壇・集石・遺構外) | 図41 石器実測図 (打製石斧) |
| 図19 土器実測図 (中期中葉 9号住居址・遺構外) | 図42 石器実測図 (打製石斧・その他・横刃型石器) |
| 図20 土器実測図 (中期中葉・後期 遺構外) | 図43 石器実測図 (横刃型石器) |
| 図21 土器拓影図 (中期初頭 3・5・10号住居址) | 図44 石器実測図 (敲打器・特殊磨石・磨石) |
| 図22 土器拓影図 (中期初頭 11・12・14号住居址) | 図45 石器実測図 (磨石) |
| 図23 土器拓影図 (中期初頭 14・15号住居址) | 図46 石器実測図 (凹石) |
| | 図47 石器実測図 (凹石・石皿) |
| | 図48 石器実測図 (石皿・乳棒状磨製石斧・砥石) |
| | 図49 土製品拓影図 (土製円板) |

図 版 目 次

頭殿沢遺跡

- | | |
|---|---|
| 図版 1 1. 遺跡遠景 2. 遺跡近景 (BC区西側)
3. 遺跡近景 (BC区東側) | 図版 5 1. 10号住居址 2. 4号住居址埋葬炉
3. 3号住居址埋葬炉 4. 12号住居址埋葬炉
5. 10号住居址埋葬炉 6. 14号住居址埋葬炉
7. 15号住居址埋葬炉 |
| 図版 2 尾根頂上部近景 | 図版 6 1. 9号住居址 2. 11号住居址 3. 12号住居址 |
| 図版 3 1. 農道取付部近景 2. 早期土器集中区
3. 3号住居址 | 図版 7 1. 14号住居址 2. 15号住居址 3. 9号住居址
石囲炉(新)と埋葬炉(旧) |
| 図版 4 1. 4号住居址 2. 5号住居址(1) (炭化材出土状態) 3. 5号住居址(2) | |

- 図版8 集石1 1. 上面 2. 中間木炭出土面 3. 底面
- 図版9 1. 凹地のロームマウンド群 2. 土壙235とその周辺 3. 土壙301
- 図版10 1. 集石4 2. 集石8 3. 土壙228 4. 土壙304 5. 土壙319 6. 矢柄研磨器と押型文土器の出土状態(CI-52) 7. 土壙189
- 図版11 1. 遺跡遠景(調査前) 2. 遺跡遠景(調査後) 3. 本線南側近景
- 図版12 1. 西側近景 2. 土壙374 3. 土壙385 4. 土壙390 5. 集石土壙394 6. 土壙388 7. 竪穴4
- 図版13 1. 遺物出土状態(1)15号住居址 2. 土器出土状態(2)9号住居址 3. 土器出土状態(3)AX-62
- 図版14 早期縄文土器(1)(縄文・撚糸文)
- 図版15 早期縄文土器(2)(山形押型文)
- 図版16 早期縄文土器(3)(格子目押型文)
- 図版17 早期縄文土器(4)(貝殻腹縁文)
- 図版18 早期縄文土器(5)(条痕文)
- 図版19 早期縄文土器(6)(絡条体圧痕文)
- 図版20 早期縄文土器(7)(条痕文)
早期縄文土器(8)(貝殻腹縁文)
- 図版21 中期初頭縄文土器(1)
- 図版22 中期初頭縄文土器(2)
- 図版23 1. 中期初頭縄文土器破片(1) 2. 中期初頭縄文土器破片(2)
- 図版24 中期中葉縄文土器(1)
- 図版25 中期中葉縄文土器(2)
- 図版26 中期中葉縄文土器(3) 後期縄文土器
- 図版27 中期中葉縄文土器(4) 煮滓付着土器
種子圧痕土器 炭化物(くるみ)
- 図版28 1. 石鏃 2. 石錐 3. 石匙・スクレイパー
4. 使用痕ある石核 5. 定形石器A~D
6. 彫刻器類 7. 使用痕のある剥片
- 図版29 打製石斧・砥石類 横刃型石器
敲打器 特殊磨石
- 図版30 石器に残された製作・使用の痕跡 (1) 調整痕
(2) 磨耗痕 (3) 線条痕 (4) 磨耗痕 (5) 線条痕
(6) 局部磨製

御射山西遺跡

- 図版31 1. 遺跡付近航空写真 2. 遠景(南より)
- 図版32 1. 遠景(西より) 2. 近景(東南より)
3. 近景(南より)
- 図版33 1. E地区(西南より) 2. F地区(南より)
- 図版34 1. 土壙16号 2. 土壙1号 3. 集石1号
4. 同断面 5・6 ロームマウンド9・14号
7. 断層
- 図版35 出土土器(1:2)
- 図版36 出土土器(1:1)
- 図版37 1. 出土石器(1:3) 2. 出土石器(1:3)
- 図版38 昭和54年度発掘出土遺物 1. 出土土器(1:2)
2. 出土石器(1:1) 3. 出土石器(1:3)

手洗沢遺跡

- 図版39 1. 近景(南東より) 2. 近景(北より)
3. 土壙3号
- 図版40 1. 出土土器(1:2) 2. 出土石器(1:1)
3. 出土石器(1:3)

第 I 章 調査状況

第1節 調査にいたるまで

1. 中央道関係の経過

昭和32年4月に公布された「国土開発縦貫自動車道建設法」に基づく中央自動車道西の宮線は、小牧・東京間約360km、そのうち長野県内は岐阜県中津川市から恵那山トンネルで飯田盆地に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ヶ岳山麓をかすめて山梨県に至る間約122kmの長さである。

昭和42年9月に文化庁と日本道路公団との間に取り交わされた「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、漸く昭和45年9月に下伊那郡阿智村小野川地籍から発掘調査が開始され、本年で9年を経過した。その間、用地買収・登記の終了を持って、原則として下伊那・上伊那・諏訪郡の順に発掘調査が進められ、昭和53年度までに216遺跡の調査が終了した。

発掘調査には県独自の組織が持たないので「長野県中央道遺跡調査会」を特設し、その中に調査団を組織してこの業務を遂行している。

昭和51年度は調査団を3班に分け、中阿久・居沢尾根・オシキ・上の原・入の日影・柏木南・阿久・判ノ木山東・頭殿沢・判ノ木山西の各遺跡（調査費9,174.4千円）の発掘調査を実施した。この内、阿久・居沢尾根・判ノ木山西の各遺跡は規模が大きく、次年度への継続調査となった。

昭和52年度は岡谷市の調査も予定され4班編成となり、茅野市・原村地区では阿久・居沢尾根・判ノ木山西・金山沢北・判ノ木山東一取り付け道路分一・御社宮司遺跡の調査が行われた。

ところが53年度に入ると前年度未急に決定した諏訪南インターにかかる調査が追加され、調査員の補充がないまま主任4名の増員で調査体制がスタートした。4月5日、発掘調査（茅野市御社宮司、同頭殿沢、原村阿久、富士見町手洗沢、同御射山、岡谷市船霊社計6遺跡調査費106,891千円）と整理作業（茅野市入の日影遺跡以下9遺跡分調査費24,509千円）に分割した契約が公団と交され、発掘調査3班、整理作業1班で開始された。53年度はとくに阿久遺跡の保存問題が激化し関係各機関の度重なる慎重審議の結果、現路線を変更せず、土盛り方式による遺跡保存という新方式によって結着をみた。「阿久」に明け暮れた1年ではあったが、茅野市御社宮司遺跡も1ヶ年を費やし、岡谷市船霊社遺跡も買収以前ながら地主の理解によって路線内の未調査地区が完掘され、ここに昭和45年9月から始まった中央道西の宮線にかかる県内の遺跡の発掘調査はほぼ完了し、あとは記録保存のための報告書作成業務を残すのみとなった。

2. 発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施行前に日本道路公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で保護協議することになっている。この結果、記録保存と決定、発掘調査が必要となった場合、公団は県教育委員会に委託して調査を実施している。そこで、つぎのような発掘調査委託契約が締結された 詳細は『中央道報告茅野市・原村その1』にあるのでここでは要項のみをかかげる。

第I章 調査状況

発掘調査委託契約書 ()内は53年度

- 1 委託事務の名称 中央道埋蔵文化財発掘調査 茅野市、原村その2 (岡谷市その4・茅野市その4・5・富士見町その3・原村その3・4)
- 2 委託期間 昭和51年4月5日から昭和52年3月20日まで (53年4月5日～54年3月20日)
- 3 委託金額 91,744.00円也 (106,891.000円)

3. 長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当たっている。

昭和45年7月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年2回の理事会が開かれている。年度当初の理事会において、発掘調査の受託が決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。昭和51年・53年度役員、茅野市・原村・富士見町地区調査団組織はつぎのとおりである。(調査会規約は既刊の中央道報告参照)

1) 昭和51・53年度中央道遺跡調査会役員名簿 (共に10月現在) ○印は53年度 ●印51年度

顧問	一志茂樹 (県文化財保護審議会会長)		
会長	水口米雄 (県教育長)		
理事	金井喜久一郎 (県文化財保護審議会委員)	●久保義幸 (岡谷市教育長)	
	米山一政 (県文化財保護審議会委員)	○岡西良治 (岡谷市教育長)	
	桐原健 (県文化財保護審議会委員)	●中村文武 (諏訪市教育長)	
	原嘉藤 (信濃史学会常任理事)	○今村正明 (諏訪市教育長)	
	●村上一 (県教育次長)	木川千年 (茅野市教育長)	
	○毛涯修 (県教育次長)	●小泉真澄 (原村教育長)	
	●太田波夫 (県文化課長)	○松沢達 (原村教育長)	
	○千野久義 (県文化課長)	小林繁治 (富士見町教育長)	
	下平晃 (伊那教育事務所長)	●小島与四郎 (諏訪教育会長)	
	●名取又男 (諏訪地区教委協議会長)	○八幡栄一 (諏訪教育会長)	
	○花岡文吉 (諏訪地区教委協議会長)	林茂樹 (宮田小学校長)	
	熊谷大一 (辰野町教育長)		
監事	●小栗栄重郎 (県文化課課長補佐)	●上原寛 (茅野市教育委員会社会教育課長)	
	○青木和久 (県文化課課長補佐)	○矢島雅幸 (茅野市教育委員会社会教育課長)	
幹事	青沼一之 (県文化課文化係長)	●水品良彦 (伊那教育事務所総務課長)	
	●浅井舎人 (県文化課文化財係長)	○吉沢乙一 (伊那教育事務所総務課長)	
	○久保浩美 (県文化課文化財係長)	久保田秀明 (伊那教育事務所主査)	
	○小林正良 (県文化課主査)	●武井今朝人 (伊那教育事務所主査)	
	堀内規矩雄 (県文化課主事)	●寺沢公明 (伊那教育事務所主事)	
	●宮島孝明 (県文化課主事)	○内河一男 (伊那教育事務所主任)	
	●平野益雄 (県文化課主事)	○木藤辰男 (伊那教育事務所主事)	
	○佐藤正志 (県文化課主事)	●星野政清 (伊那教育事務所社会教育課長)	

西 沢 宏 明 (県文化課主事)	○片 桐 光 雄 (伊那教育事務所社会教育課長)
小 山 民 雄 (伊那教育事務所社会教育課主事)	関 孝 一 (県文化課指導主事)
小 口 幸 雄 (伊那教育事務所諏訪支所長)	小 林 秀 夫 (")
今 村 善 興 (県文化課指導主事)	青 沼 博 之 (")
樋 口 昇 一 (")	○白 田 武 正 (")
●山 田 瑞 穂 (")	○山 下 泰 男 (")
伴 信 夫 (")	○百 瀬 長 秀 (")
丸 山 徹 一 郎 (")	○土 屋 積 (")
笹 沢 浩 (")	○和 田 博 秋 (")

2) 昭和51・53～55年度長野県中央道遺跡調査会調査団(茅野・原・富士見班)

〈昭和51年度〉 発掘調査

団 長	大 沢 和 夫
調 査 主 任	伴 信 夫 今 村 善 興 (総括)
調 査 員	細 川 光 貞 根 津 清 志 松 永 満 夫 田 畑 辰 雄 郷 道 哲 章 遮 那 藤 麻 呂 片 桐 孝 雄 知 名 定 順
調 査 補 助 員	片 山 徹 原 明 芳 山 内 志 賀 子 丸 山 雅 子 赤 羽 淑 子

〈昭和53年度〉 発掘調査

団 長	大 沢 和 夫
調 査 主 任	青 沼 博 之 白 田 武 正
調 査 員	細 川 光 貞 高 桑 俊 雄 (山本賢治)
調 査 補 助 員	島 田 哲 男 (中村健一 白井泰彦 塚田敏彦 関喜子 矢崎つな子 矢嶋恵美子)

〈昭和54・55年度〉 整理作業

頭 殿 沢 遺 跡	岩佐今朝人・伴 信夫・丸山日出男・樋口誠二・鈴木恵美子・重倉理恵子
手 洗 沢 遺 跡 御射山西遺跡	青沼博之・小池孝・三ッ井きみ子・桑原正枝

3) 発掘調査協力者

昭和51・53年度の現場発掘調査に際して、地元市町村当局の御援助・御協力により、多くの方々に参加してもらい調査遂行の中心となっていた。51年度については前書に掲載してあるので、ここでは53年度関係者名のみを記し、御礼としたい。

富士見町	朝倉 くに 雨宮うたよ 雨宮さち子 有賀 栄作 有賀 善門 伊藤徳久光 伊藤 よし 植松 広 小沢 安喜 菊地ふたみ 久保田 勝 久保田よし子 小池 朝七 小池たえゑ 小林 儀平 小林 仁平 小林 寿 小林はつよ 小林 平吉 小林まさ子 小林三代子 小林弥太郎 小林ワカエ 小林 清之 後町はる子 名取千富巳 原田りょう 細川よしゑ 丸山 吉代
茅 野 市	赤沼 幸一 赤沼やゑ子 有賀 正男 伊藤やすゑ 北原今朝一 藤森ます子

4) 現地指導・視察者

日本道路公団 名古屋建設局庶務課長他

県教委事務局 教育長・伊那教育事務所一行

市町村関係 原村村長・同助役・同村会議員一行・同教育長・茅野市教育長・富士見町教育長

研究者 会田進・安藤茂良・一志茂樹・鶴飼幸雄・岡田篤子・折井敦・笠原安夫・金子裕之・小出
義治・小林公明・河野喜映・末木健・田畑辰雄・戸沢充則・外山和夫・長崎元広・西克久・
能登健・林茂樹・原嘉藤・松本豪・宮坂虎次・宮坂光昭・武藤雄六・森山公一

その他 労政事務所長・茅野市民新聞・桜映画社・信濃毎日新聞社 (敬称略)

なお、「発掘調査の経過」については、頭殿沢遺跡は前書にあるので省略し、手洗沢・御射山西遺跡分は各節で記述したので、ここでは節をたてず、また「発掘調査の方法」も前書同様なので、すべて削除した点御了承下さい。

第 II 章 調査遺跡

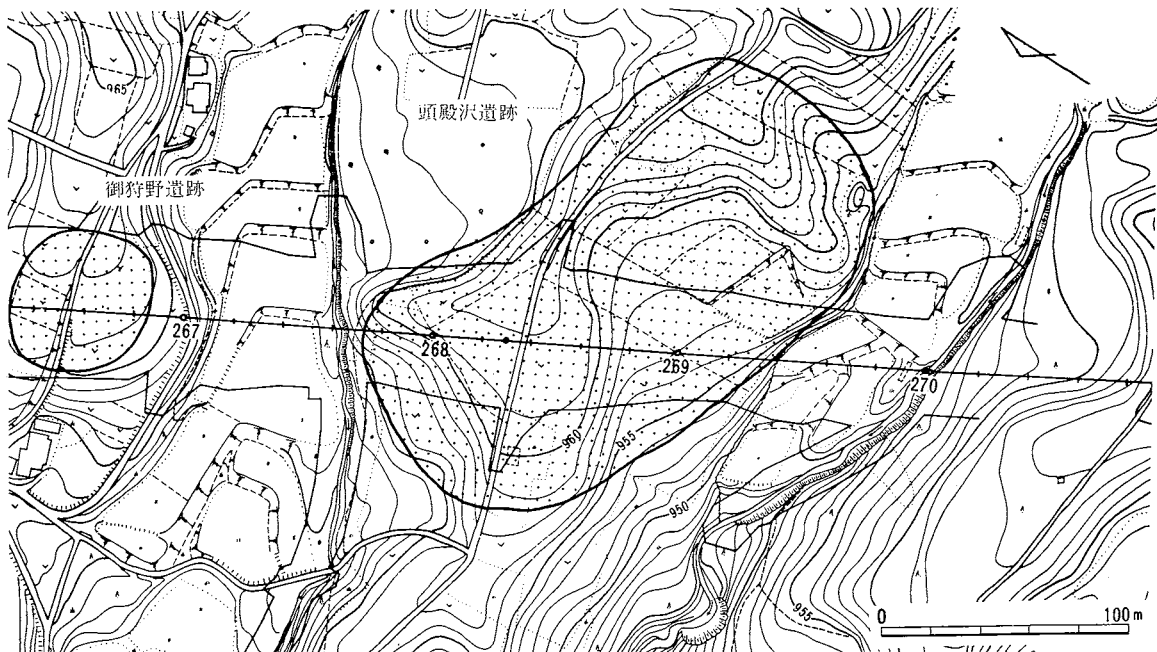
第1節 頭殿沢遺跡 (STDB)

1 調査の経過 (挿図1・4)

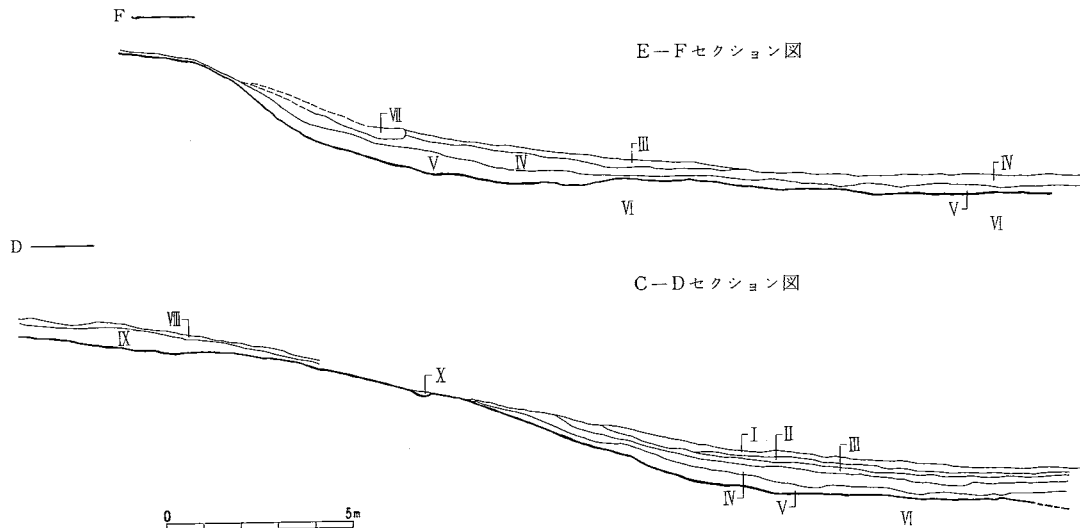
本遺跡の第1次発掘調査は、昭和51年4月5日より6月19日までの約3箇月間実施された。その結果はすでに刊行した『中央道報告書茅野市・原村その2－昭和51年度－』に、一部(平安時代関係分)を報告した。しかし、丁度53年度中に諏訪南インターチェンジ建設に係る本遺跡を含む手洗沢(昭和48年度調査)・御射山西の3遺跡が用地内に入り、急遽第2次調査が必要となったので、残された縄文時代の関係部分は、後日一括として報告することになった。さて、昭和53年9月8日より11月6日までの計60日間実施した第2次調査は、本線幅の拡幅部分のみであり、北側10m、南側5mと範囲が狭く、調査の結果も住居址の検出はなく、縄文時代のものと思われる土壇27基、竪穴1基、集石炉1基が検出されたのみで、第1次調査内容と余り変化はなかった。整理作業は他遺跡の調査やその他の業務の関係で、西の宮線関係地域の発掘終了後の昭和55年度に実施した。

なお、本遺跡の位置や自然的、歴史的環境等については、前書にくわしいが、簡単に大要を記したい。

茅野市御狩野5754番地の畑地に所在する。八ッ岳山麓からの広い台地は本遺跡のある台地縁部で宮川の支流の小河川によって開折され、掌指状長尾根を宮川に向かって張り出す。本遺跡ののる長尾根は御狩野部落の南端にあり、北西側を頭殿沢、南東側を御射山沢に侵蝕されたやや起伏のある200m前後の幅をもち、尾根全体は西側へゆるく傾斜するが、遺跡自体は尾根中央部のみでなく両側の沢への傾斜する部分まで広がっている。西側の長尾根に鉄鐮等を出土した御狩野遺跡がある。



挿図1 頭殿沢遺跡付近の地形 (1:2000)



挿図2 頭殿沢遺跡土層図(1:2000)

2 層序(挿図1・2)

本遺跡は、尾根状台地頂部の平坦面から斜面に位置しており、加えて耕作物(長芋などの栽培)による攪乱もあり、地区により土層の相違が著しい。特にC区は、一時沢が流れており礫が多い。

本調査で確認された層序は6層である。以下、その標準層序について概述する。

第I層・耕土層 約20cm前後。現代の生活具や縄文時代の遺物の一部を含んでいる。

第II層・黒色土層 約10~15cm前後。歴史時代や縄文時代の遺物を含んでいる。

第III層・暗褐色土層 約20~25cm前後。平安時代の遺物包含層である。

第IV層・黒褐色土層 約35~40cm前後。縄文時代中期から後期の遺物包含層である。下層部からは、繊維土器片が出土している。

第V層・褐色土層 約30~40cm前後。

第VI層・ローム層

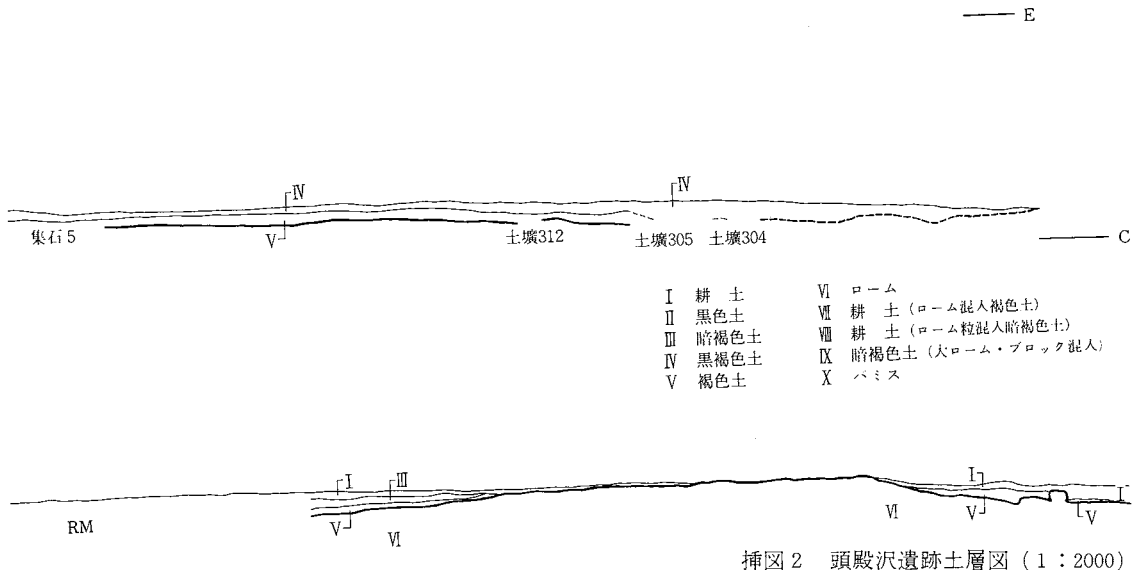
なお、尾根頂部のSTA 268+00~80の間は深耕攪乱部を除いて、第I層が耕土(黒土)で厚さ20~25cm、第II層は黒色土層で約10cm、第III層が黒暗褐色土で5~10cm、第IV層がロームとなる。尾根南斜面下部では、前記標準層序と変りないが、御射山沢寄りのテラス部では表土層は薄い。第I層は耕土(黒土)が20cm前後あり、5~10cmの暗褐色土の第II層(縄文早期遺物包含層)を挟んでローム、または、混礫暗褐色土層となる。

3 遺構と遺物

1) 縄文時代早期・前期の遺構と遺物

早期・前期の遺構は明確ではない。調査時点ではC区の遺物集中箇所を繊維土器生活面として捉えたが、最終的に遺構としては理解せず、単なる遺物の比較的多い地点として取り上げ、後述するようにその分布状況を検討したのみにとどまった。

出土遺物は、1点の矢柄研磨器と425点の早期土器、6点の前期土器で合計432点である。矢柄研磨器については整理作業段階で紛失したため、写真図版10-6のみを掲載した。なお土器については、記述が複雑になるので別表として観察表を付し、簡略化を計ったために一応の基準を述べておく。



挿図2 頭殿沢遺跡土層図(1:2000)

「番号」は拓影図の番号と一致する。「胎土」は鉢物名がわかるものについてのみ付記した。「成形・調整・整形手法の特徴」では、土器製作の工程を復元できる部分で記述し、施文具は推察可能なものについてのみ明記した。「施文・施行手法の特徴」では、器面の乾燥の度合、施文する時期、施文具の用い方を考慮し、施文過程(順序)の判明できるものについては矢印を用いた。「色調」では、外面、内面、器肉とし3面の色調を示した。色調名は、「新版標準土色帖」農林省農林水産技術会議事務局監修によった。

(1) 遺物の出土分布状態(挿図3・4)

遺跡がもつ自然的条件から、斜面に位置していたと思われる早期・前期遺物包含層は把握されていない。遺跡(遺構・遺物)に対する物理的な作用が、調査時点でほぼ同一に起っていたとすれば、自然堆積部分における遺物の出土位置はさほど移動していないと考えられる。それを基に水平分布状況図を作製し検討してみた。〈その1〉では出土土器のI群からV群までを操作した。I群からIV群までは散発的に分布し、V群では1類と4類が各々集中的に纏って、2ヶ所に別れ分布することがわかる。〈その2〉ではVI群からXVI群まで操作した。VI群からVIII群、XI群・XII群は各々集中的に纏ってV群同様ほぼ2箇所に別れ分布することがわかる。

以上の分布状況で群別、或は類別した土器群が分布を異にすることのみで即時間単位の差として把えることはできない。これらは層位的な事実と、他遺跡と型式内容の比較を行ったうえで認識できるものである。県内での諸遺跡と比較検討を若干試みたので詳しくはまとめを参考にさせていただきたい。

(2) 遺構外遺物(図1~9・図版14~20)

出土土器中器形の判明できるものは1個体のみで、他は総て小破片である。ここでは本遺跡の性格づけを前提としXVI群に大別し、必要に応じ類別を行った。特に型式の特徴をもつ文様(装飾的要素)を重視し、胎土、繊維混入の度合等製作技術に関わる要素も考慮し、型式が判明できるものは一群として扱うように努めた。

第I群土器(図1-1~15、図版14) 撚糸文系土器を一括する。施文方法により2分類できる。

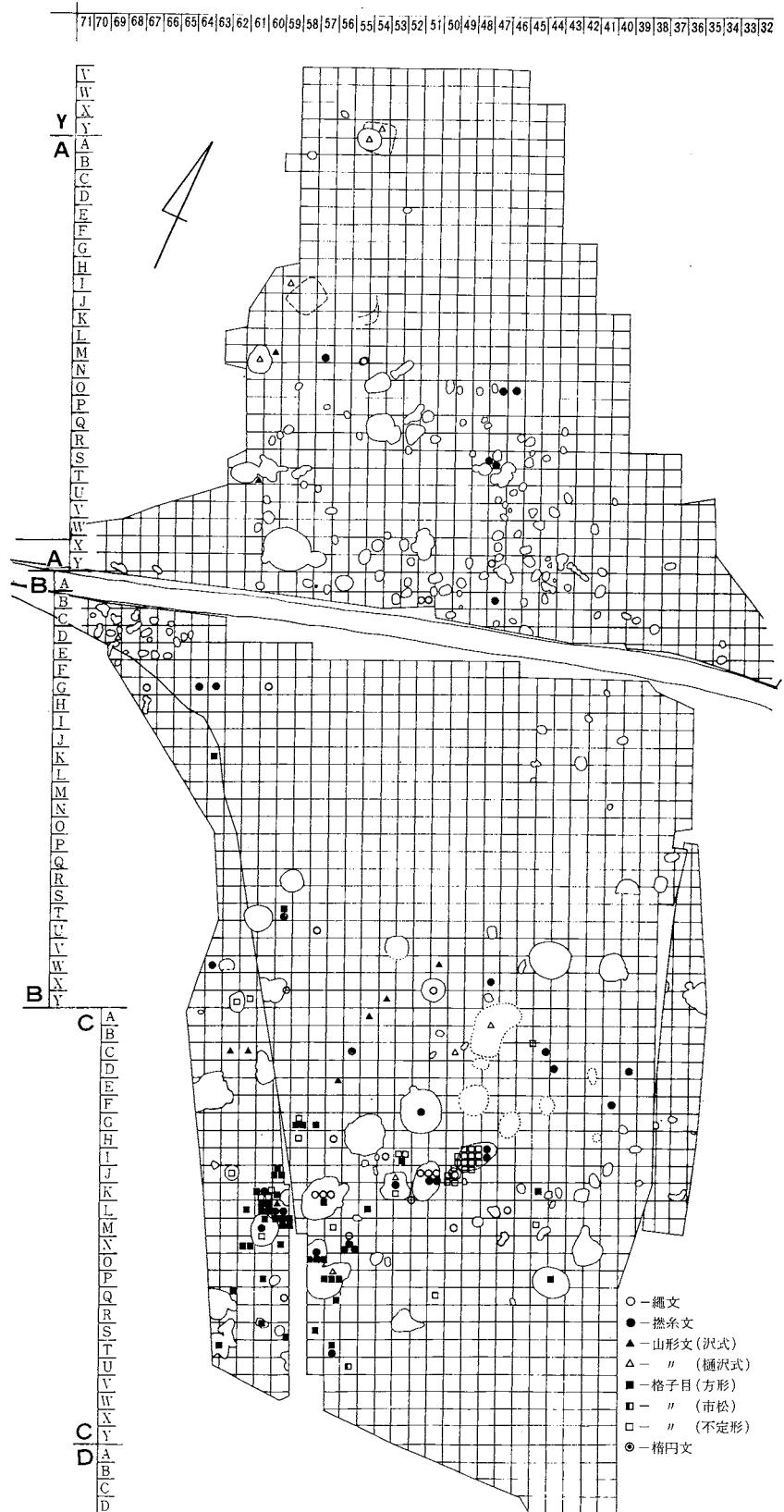
1類 縦方向に施文するもので、撚りの太い原体を使用する1~3、細い原体を使用する4~6がある。両者は内外面とも入念に調整され、前者は器面が軟らかい段階、後者は乾燥した段階でそれぞれ施文している。

2類 横方向に施文するもので、撚りの太い原体を使用する8~15、細い原体を使用する7がある。原体間隔が広い8・9と狭い10~15があり、器面調整は1類に酷似する。13~15は軟らかい段階で施文しているため、沈線状に深くなっている。関東地方、撚糸文系土器の末期的な施文手法と類似する。

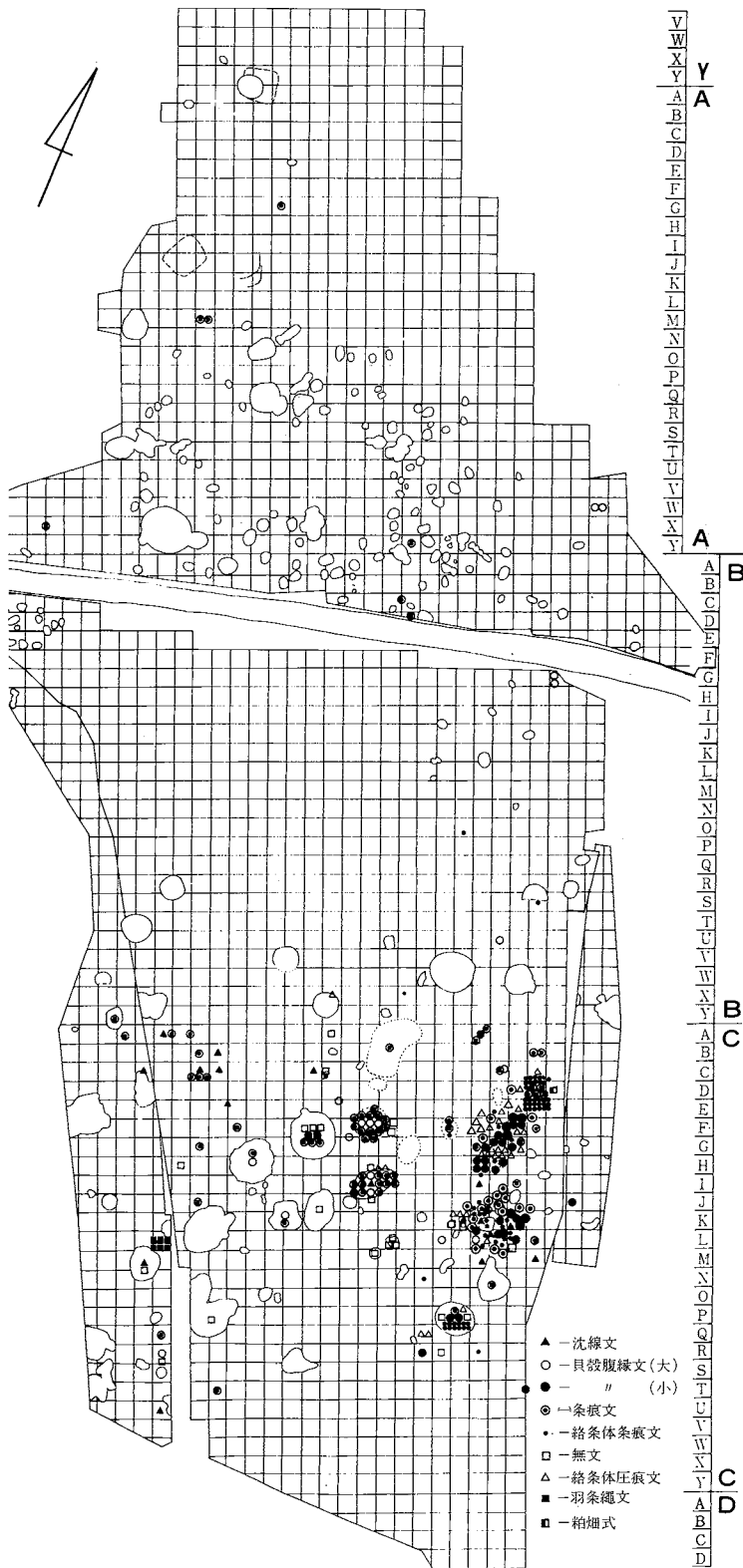
第II群土器(図1-16~24、図版14) 縄文系土器を一括する。口辺部から以下に施文する16・17と口唇部、内面にまで及ぶ18がある。施文方向は斜位が多く、軟らかい段階で施文する17・20がある。18は表裏縄文で、胎土に金雲母を多量に含み焼成は良好堅緻で艶がある。

(1) 第III群土器(図1-25~32、図版15) 沢式土器を一括する。胎土に黒鉛を多量、白色砂粒子を少量含み、焼成は良好堅緻である。色調は30が褐灰色で他は総て暗灰色であり、黒鉛含有量の差と思われる。いずれも帯状施文を特徴とするが、小破片のため文様単位は不明だが、横帯が1条のみの25~27と表裏に施文する30がある。口辺部以下は縦帯施文が一般的で28~31がその破片である。

第IV群土器(図2-33~41、図版15) 樋沢式土器を一括する。III群土器同様帯状施文を特徴とし、焼成は前者に比べ堅緻ではない。山形を刻む方法にも種類があり、頂部が丸身をもつ37~39、鋭角の33~36・40、頂部が連結しない41などがあり、これらが時間差によるものか個体差なのかは不明である。



挿図3 頭殿沢遺跡縄文時代早期遺物の出土分布図(その1)



17|66|65|64|63|62|61|60|59|58|57|56|55|54|53|52|51|50|49|48|47|46|45|44|43|42|41|40|39|38|37|36|35|34|33|32|31|30|
 挿図3 頭殿沢遺跡縄文時代早期遺物の出土分布図(その2)

第V群土器(図2・3-42~92、図版16) 立野式土器を一括する。施文具形態により5類に類別できる。

1類 格子目文の一群で、菱形を成す42~55・65・67と正方形の58~60・64・66がある。文様施文後指でナゾリ無文部をつくっている42~45や、無文部を残しながら施文する58~60があり、III・IV群土器と同様の効果をねらっているものであろう。

2類 山形格子目文で61一点のみの出土である。刻みは菱形で矢羽状にしている。

3類 市松文で91一点のみの出土である。施文具と直行する方を5分割している。一周に刻む単位は把握できない。

4類 不定形文の一群で、69~90は刻目が多角形或は円形で、格子目状に刻む例と不明のものがあり、刻目の単位は把握できない。施文する時間は1~3類より早いことが⁽²⁾窺える。

5類 楕円形文で、92一点のみの出土。胎土は精練され、焼成は良好堅緻で色調は灰褐色を呈し、IV群土器に類似する。

第VI群土器(図4-93・95~107、図版20-2) 沈線文系土器群を一括する。沈線は太いものと細いものに大別され、施文具等により更に類別できる。

1類 棒状工具による太い沈線で平行沈線文を有すもので、沈線は浅いが工具の先端が鈍いものを使用している93・95と鋭利な104・106の2種があり、93・95はアナグラ属系の貝殻による腹縁を充填している。

2類 半載竹管の腹部を利用しているもので、太く深い施文を行う97・99~102と細く浅い施文を行

う 98・103・105 がある。101 は下端に 1 本の沈線が巡っている。

3 類 格子目状に施文するもので、太い沈線の 96、細い沈線の 107 とがあり、107 の外面には鈍い艶が認められ、96 は 101 と同様、下端に 1 本の沈線が巡っている。

第VII群土器(図4-94・108~122、図版20-2) 貝殻腹縁文のみの土器群である。幅広の腹縁を用いる例で破片総数 16 点である。個体数は本類のみで 4 個体以上と思われる。94 は胎土に石英粒子を多量に含み他とは異り、内外面共に乾燥が進んだ段階でヨコナデをしている。腹縁の施文方法は、器面に対しねかせて(平行)行われている。108・109 は、内外面とも入念に調整され平滑であり同一個体である。110~113 も外面貝殻条痕で入念に調整され、内面はヨコナデされており同一個体である。114~122 は胎土、焼成、色調等が類似し、外面に浅い条痕を施す 114・116・118・120・121 と、入念なヨコナデのみの 117・119、内外面に条痕を施す 115・122 がある。これらが同一個体中の部位の相違によるものかは不明である。以上 108~122 の腹縁の施文方法は、器面に対し立てて(垂直)施文している。

第VIII群土器(図5-123~127・130~132、図版17) 幅狭の腹縁を用いるもので、口唇部及び口辺部に施す 125・126・130~132、口唇部のみの 123・124・127 があり、125 を除き他は繊維を多量に含む。器面調整は条痕を用いる 123・124・130~132 と板状工具の 126、指ナデのみの 125 に分けられ、繊維混入の少ないものに条痕がないことから、繊維の含有量の多少により条痕が使い分けられているものと考えられる。

第IX群土器(図5-128・129・133・134、図版17) 口唇部に刻み、或は指圧痕あるものを一括する。134 以外は条痕で入念に調整され平滑である。先端が細く鋭利な工具による 128 や、櫛歯状の工具と思われるもので刻まれている 129、板状工具による 133 があり、134 のみ指頭で波状にしている、いずれも波状口縁の一部分である。

第X群土器(図5-135、図版17) 粕畑式土器である。微量の繊維を含み良質の胎土である。器面乾燥後篋状工具によりヘラ削りを内外面に行ない、皿状把手部及び口唇部に刻みを施している。

第XI群土器(図6-142、図版17) 鶴ヶ島台式土器である。胎土に金雲母、不透明粒子を少量含み、繊維も微量に含まれる。調整は、内外面とも粗いヨコナデをしその後沈線、押し引き沈線等を用い文様を施文している。

第XII群土器(図6-136・137、図版20) 本遺跡出土土器群中で最も多く繊維を含有し、内外面には繩の圧痕があり、これと同一施文具による条痕が付されるものを一括する。136 は、内外面とも簡単にナデられ、内面には絡条体条痕⁽³⁾を用いて調整しており、その圧痕が一部分にみられる。文様は口唇部及びその直下とに浅い刻みを施し、1本の隆帯を一周させその両脇を沈線で押えつけているのみである。胎土中に混入する繊維は、焼成時間が短いため完全に燃えきっていない。137 は内外面、口唇部は入念にヨコナデされ、絡条体条痕がヨコ方向に施され、内面には圧痕が一部にみられる。

第XIII群土器(図8-163~173、図版19) 絡条体圧痕文土器を一括する。胎土は白色粒子を含み、繊維を多量に混入する。器面調整は、内外面とも軟らかい段階で絡条体条痕を施している。文様は器面調整後に隆帯を一本巡らし、その上面に絡条体を押ししている。隆帯下端は沈線状にヨコナデされ、条痕を磨り消している。

第XIV群土器(図6・7-139~141・143~154・157、図版18) 所謂条痕文土器群を一括する。条痕文の種類により細分できる。本群中で最も乾燥した段階で条痕を施し、条間が太く浅い 138・140 と条間が 2 ミリ程度の 139・140・149~152、細い刷毛状の工具で施す 143・144 などがある。149~152・154・157・158 は色調、焼成等からVII群1類土器の胴部片にあたる可能性がある。

第XV群土器(図7-155・156・159~161、図版18) 無文土器を一括する。総て乾燥した段階でヨコナデされているため、胎土中の砂粒が移動して所謂擦痕状になっている。内面はいずれも入念にヨコナデさ



挿図4 頭殿沢遺跡調査区・遺構全体図(1:4000)

れ、161の内面には、指おさえの痕跡が残る。

第XVI群土器(図7-162) 羽状縄文の土器で、同一個体片が他5片出土している。胎土は良質で焼成は良好堅緻であり、繊維の混入はみられない。調整は、内外面とも入念にヨコナデしている。文様は、口唇部ヨコナデ後、細い粘土紐を貼りつけ、末端をナデで密着させ器表にはLR・RL縄文を用い下方から上方へ交互に施し羽状にしている。

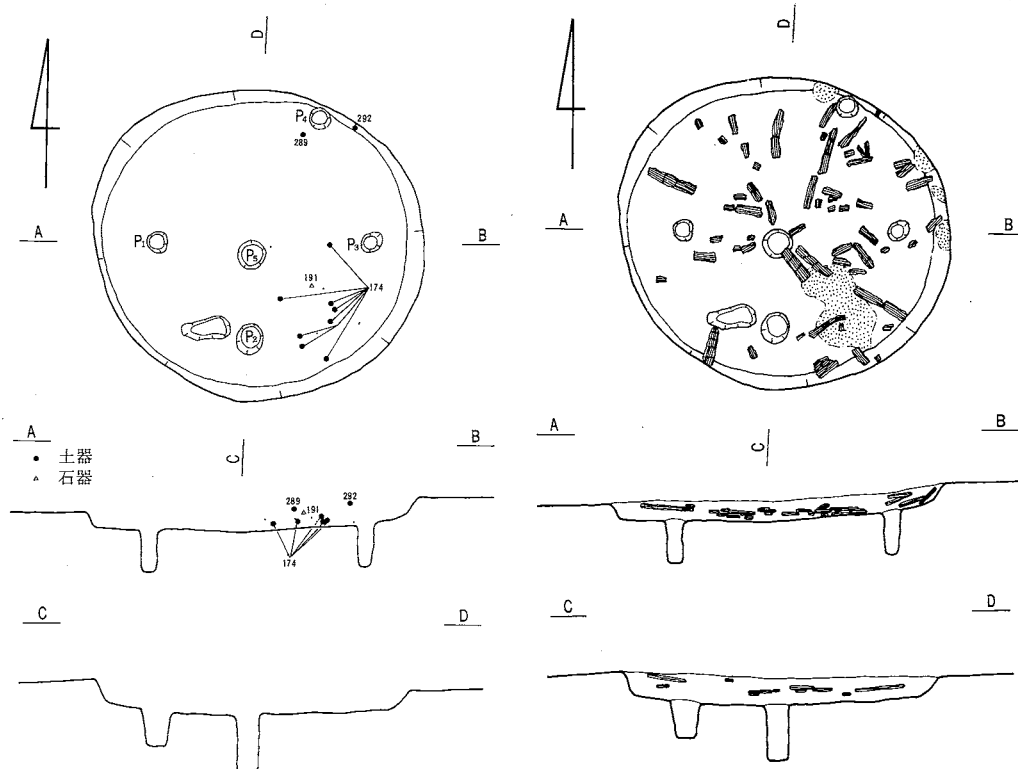
以上、本遺跡出土の縄文早・前期土器をI類~XVI類に分類し、その概要を述べたが、各類土器の問題点については、後章にゆずりたい。

- 註1 この用語は、研磨により生じたものではなく、光沢という用語とは区別して用いた。
- 註2 土器製作が成形→調整・整形→文様施文という行程であれば、最終工程である文様施文までには時間を要し、当然土器内にある水分は蒸発し乾燥するであろう。ここでは器面の乾燥の度合において、およそどの時期に施文したかを観察して用いた用語である。
- 註3 「多摩ニュータウンNo.269 遺跡の調査」で安孫子氏が用いている絡条体条痕と同種のものと思われる。また岡本勇氏は「大浦山遺跡」の報文中で「施文原体を回転せずにひきずったと思われるものがあり一種の条痕をあらわしている」とあり結びつきのあるものとして注意されよう。当遺跡の土器には明らかに圧痕と引きずっている痕跡の二者が認められ、絡条体条痕と考えて間違いないであろう。

2) 縄文時代中期初頭の住居址と遺物

(1) 5号住居址(挿図5、図9・21・42、図版4)

遺構 2号住の貼床部から木炭・遺物が検出され、下層に本址が存在することを確認したものである。従って本址上部は削られており、実際の深さは不明である。2.70×2.50mのほぼ円形の竪穴住居址で、垂木材と思われる炭化材が住居址中心から放射状に全面に検出されたが、南東部は少ない(挿図5、図版4)。P₁とP₂間を入口とすると主軸はN51°Eである。残存壁高は東16cm、西14cm、南16cm、北11cm



挿図5 頭殿沢遺跡5号住居址・炭化材出土状態実測図

で、床面はロームであるが、やや軟弱で根が入り凹凸がある。中央のP₅(22×21、-57 cm)は埋糞炉を抜いた痕跡とも考えられるが、焼土が認められず相当の深さを持っており、柱穴と考えることが妥当であろう。主柱穴はP₁(17×16、-34 cm)・P₂(24×21、-29 cm)・P₃(8×15、-38 cm)・P₄(17×15、-26 cm)の4個である。P₂の西には35×16、-25 cmの凹穴がある。

遺物 土器片と石器が10数点、炭化材の間から出土したのみである。火災にあった住居としては遺物が極めて少ない。深鉢底部(174)はP₂・P₃間の床面に散乱し、深鉢片(289~294)は本址床面より浮き、上部の2号住居址床面までの覆土内出土である。いずれもRL縄文を地文とし、単沈線で文様を構成し、290には三角印刻文が付されているらしい。292は沈線によるY字状懸垂文を持つ型になる。石器では横刃型石器(191)が床より10 cm程浮いて、彫刻器1点が覆土より出土している。

出土遺物からみて、本址は九兵衛尾根II式の盛期に属する。

(2) 10号住居址(挿図6、図9・21、図版5・21)

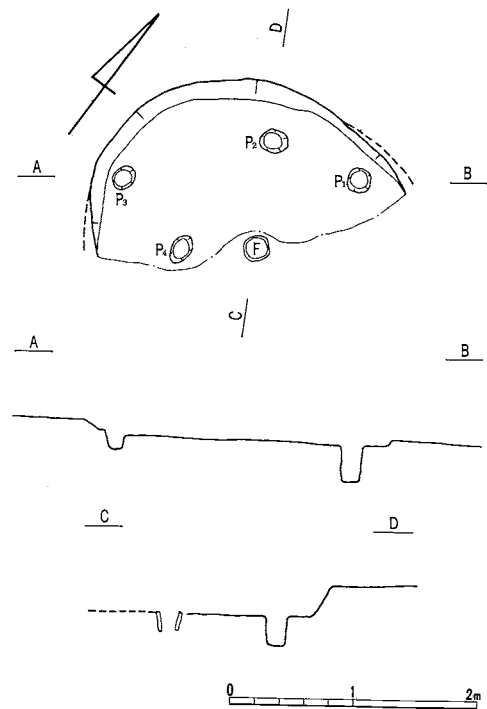
遺構 長尾根から下段平坦面への斜面下部に営まれた竪穴住居址である。この部分では黒土層が厚く堆積するため遺構の大部分は黒土中に存在し、グリット掘りの際埋糞炉の存在に気づいた時には、既に南東部を破壊してしまった。残存周壁から径2.60 m程の円形を呈するプランと推定される。北側壁線は暗褐色土中で確認したが、P₁ - P₃以北の床面はローム層に掘り込まれている。原初状態で把握したのはこの部分のみで壁高は北27 cmである。残存部床面もやや軟弱で凹凸がある。ほぼ中央に位置したと思われる埋糞炉Fも浮いてしまい(図版5)、掘り方の確認はしていないが、内部には、炭化物を少量含む黒土が充満していた。柱穴はP₁(20×19、-30 cm)・P₂(22×8、-24)・P₃(20×17、-16 cm)・P₄(25×16、-20 cm)が検出された。

遺物 床面からは磨製石斧片・打製石斧・凹石が出土し、該当グリット及び覆土からは土器片が相当量出土している。大部分が九兵衛尾根II式で、縄文中期中葉の土器片も若干含まれる。九兵衛尾根II式土器では、本址に確実に伴出するのは、炉に使用された深鉢(175、図版21)と炉内に落ち込んでいた土器片(177・308・313)のみで、他の図示したものは該当グリット遺物である。なお、175は口径25.3 cm、現高16.5 cmである。口縁がキャリパー状になるもの(297)が7個体、口縁部が短く外反するもの(175・298~301)が8個体、口縁外反し波状となるもの(302)が2個体ある。底部では直立或いは僅か張り出すもの(309~312)が5個体と多く、外傾するもの(313~315)は3個体である。295は暗赤褐色を呈し、大粒な長石・石英と金雲母を多量に含み結束RL縄文を地文とし、半隆起線で施文するが、平出第3類Aとの類似性を感じさせる。厚手で細半隆起線の296、平行沈線の307とともに九兵衛尾根I式の手法を残す。細い単沈線の314も若干先行する土器とみられる。浅鉢片3点のうち179~180は本址に伴う可能性が強いが、181は縄文中期中葉であろう。

埋糞炉の土器からみて九兵衛尾根式II式の盛期に属する。

(3) 11号住居址(挿図7、図9・22・41・45、図版6)

遺構 長尾根からの南向き斜面の中腹に位置するため、



挿図6 頭殿沢遺跡10号住居址実測図

黒土層も比較的浅く、南部は耕作などにより攪乱を受け破壊されている。輪郭はローム上面と暗褐色土中で確認したが、径2.80 mの円形を呈する竪穴住居址で、 $P_2 - P_3$ を入口とすると主軸は $N 10^\circ E$ である。北壁はロームで壁高43 cm、東西壁は漸移層中にある。残存する床面はロームの硬いたたきで、中央へ僅かに傾斜するが、北壁下と中央にある地床炉の肩部とでは16 cmのレベル差があり、本来の床面も南へ傾斜していたと思われる。床面の覆土中に大きなものは径5 cm、高さ30 cm程度の炭化材が散在しており、或は、火災にあっているかもしれない。地床炉F (55×40、-17 m)は床面に焼土が見られ、木炭を少量含む焼土粒混入黒土が落ち込んでいた。主柱穴は P_1 (28×22、-44 cm)・ P_2 (24×24、-39 cm)・ P_3 (29×28、-44 cm)・ P_4 (23×18、-37 cm)・ P_5 (20×18、-31 cm)の5個で、 $P_4 \cdot P_5$ は近接しすぎており、遺物の落ち込む P_5 は建て替え後のもので4住構造であったものと思われる。壁下には径7 cm内外、深さ5~10 cmの小ピットがほぼ等間隔に並び、壁柱穴と考える。

遺物 床・生活面出土遺物は僅少であるが、深鉢胴部(182)が P_4 寄り、浅鉢片(327)が P_5 脇で出土している。覆土には猪沢式2片を含め約130片ある。

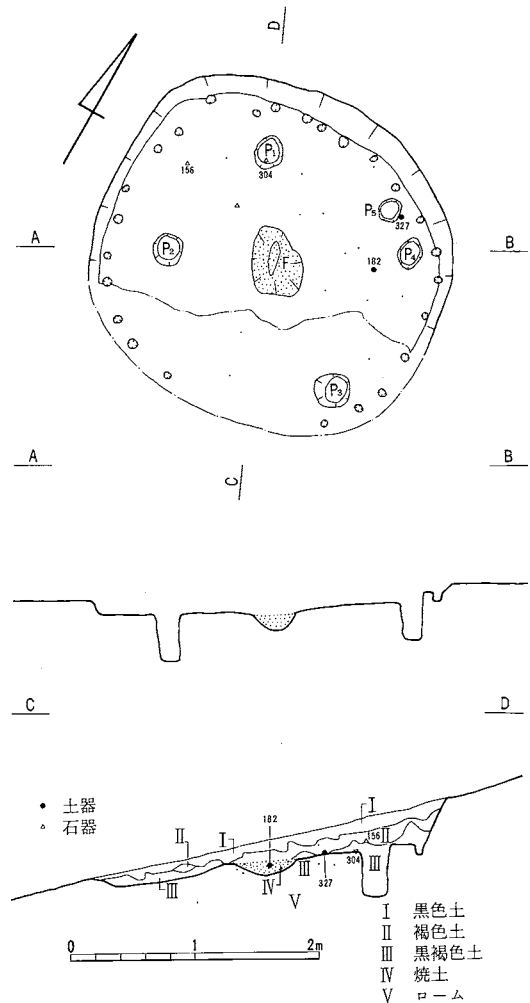
図22-316はRL縄文を地文に細沈線を持ち、317は平行沈線を施文し、若干、先行する。318・319は薄手で内面に指圧痕を残し、長石・石英粒を含み、赤褐色を呈する東海系の土器である。九兵衛尾根II式では深鉢(182・320~326)があるが、縄文を地文に太い単沈線で文様を構成する盛期のものである。浅鉢(327)は遺構外出土と接合したもので、口唇には篋刻目を付す。土製円板1点が覆土より出土している。

石器では打製石斧(156)が床面で、磨石(304)が床より浮いて出土している。

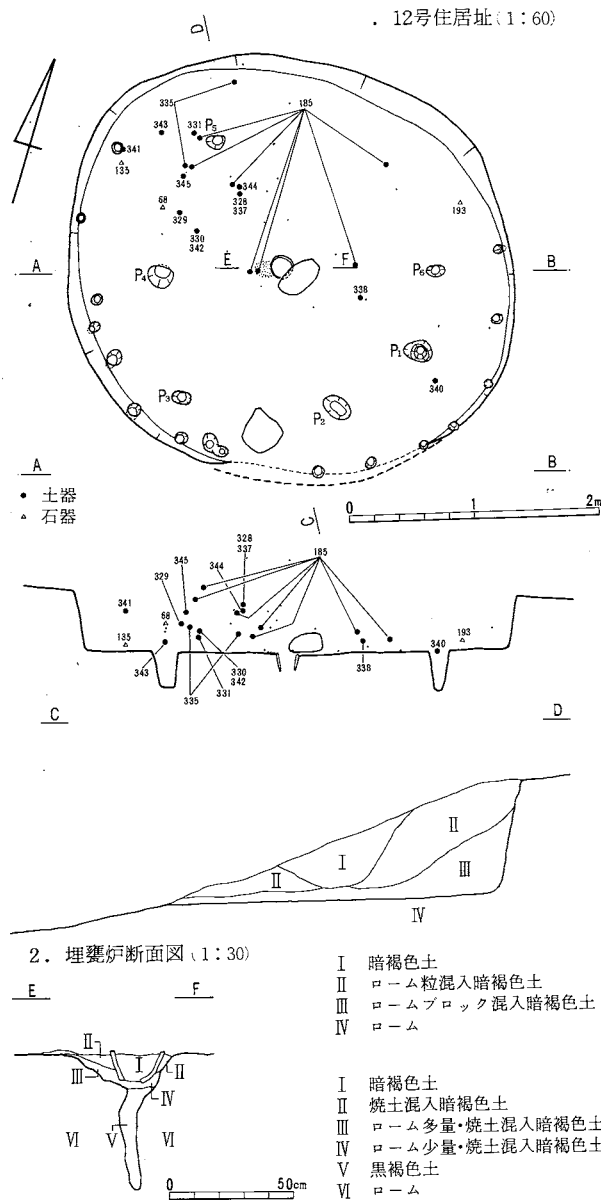
本址は九兵衛尾根II式の盛期に属する。

(4) 12号住居址 (挿図8、図9・10・22・38・39・41・42、図版5・6・21・22)

遺構 長尾根からの南斜面中腹に検出された住居で、一部が一次調査時用地境にかかるため、地主の了解を得て完掘した。検出面は北がローム直上、南が暗褐色土層中であるが、相当の傾斜があるため南部床及び壁は破壊されていた。3.75×3.35 mの楕円形を呈し、南壁寄り床直上の安山岩平石は入口部踏み石とみることができ、主軸を炉の中心方向へとると $N 9^\circ W$ となる。壁は垂直に近く、壁高は北85 cmと高く、南が急速に低くなると考えられる。地形からみて南壁は30 cm程度であったと推察される。床面はロームの硬いたたきで平坦である。 $P_5 - P_6$ から北壁にかけては移動したローム土による10~15 cm程高いテラス部があったが格別な施設はない。このロームと床面の間からは打製石斧(図41-135)の出土をみた。中央には浅鉢(図9-184、図版21)を埋設した炉(図版5)があり、上に40×26 cm、厚さ13 cmの安山岩が密着し、恰も退去時に消火のために置いていったように思われた。炉に接する部分は煤が認められ、中央下部に根が入っている。主柱穴は P_1 (23×18、-33 cm)・ P_2 (25×16、-38 cm)・ P_4 (20×17、-30 cm)・ P_5 (14×11、-



挿図7 頭殿沢遺跡11号住居址実測図



挿図8 頭殿沢遺跡12号住居址実測図
 (135)、横刃型石器 (193) が出土している。
 出土遺物から判断して、本址は九兵衛尾根II式期に所属する。

(5) 14号住居址 (挿図9、図10・22・23・39・41・43・45・46、図版5・7・21)

遺構 長尾根南側肩部にあり、検出面はローム層であるが、南側は傾斜面下部にあたるため耕作で攪乱されている。プランは径3.15mの円形を呈し、P₄・P₆間を入口とすると主軸はN67°Eである。残存する壁は耕土下20cmと浅いため随所に攪乱が入り荒れており、北壁で51cmと高く、南側は破壊され不明である。ロームの床面は僅かに中央が低い、根が入り荒れている。南側は黒土中に床面があったものと思われる。

ほぼ中央の北寄りに埋甕炉F₁があり、深鉢(図10-186、図版21)が埋設されていた(図版5)。その上部では炭化オニグルミ1点が出土し、炉周辺覆土中にも更に7点ある。主柱穴はP₁(17×14、-19cm)・P₃(26×19、-28cm)・P₄(20×17、-13cm)・P₆(29×22、×19cm)の4個で、棟持柱と考えられる位置にP₂(22×21、-13cm)・P₅(22×18、-10cm)があるが浅い。補助柱穴はP₇(16×10、-33cm)・P₈(13×12、-14cm)・P₉(12×

30cm)の4個と思われ、特に奥壁寄りの2個は径が小さく、その中間には柱穴を検出できなかったが、壁が高かったため棟木を壁外からさしかけるだけで充分だったのかと推察される。補助柱穴のP₃(16×11、-15cm)は入口施設のため設けられたと考える。奥壁寄りを除いて壁下には径7~13cm、深さ5~17cmの壁柱穴が検出されているが、土止めに最も必要とする奥壁部にはないことや、内部床面にも小ピットとなる落ち込みがあり、根による疑いもあり、断面観察が必要であった。

遺物 P₅とP₆の中間床面で炭化クルミが1点のみ出土し、生活面出土土器(図22-338・343)の他は覆土遺物である。半隆起線によるB字文を持つ土器(185、図版22)は斜面上方からの流入とみるがこの一部が、清水ノ上第3群第1類Bの胴部片と一緒に出土している。該当グリットの7片を含め41片あり、殆ど九兵衛尾根II式とみられる。キャリパー状口縁(328~332)、短く外反する口縁(333~335)には緩やかな波状突起部内面に三角や状蕨隆帯文を持つ。他に胴部片がある(336~345)。329の外面には煤が、342・549の内面には炭化物が付着している。炉体の浅鉢(184)は口径24.3cm、現高11cmである。

石器では覆土から石鏃2点(9・10)、拇指状スクレーパー(68)、床面からは打製石斧

10、-19 cm)・P₁₀ (12×10、-13 cm)・P₁₁ (9×7、-17 cm)を検出している。壁下には径7~15 cm、深さ15 cm内外の壁柱穴がめぐるが、補助柱穴とも一部は根穴かもしれない(図版7)。

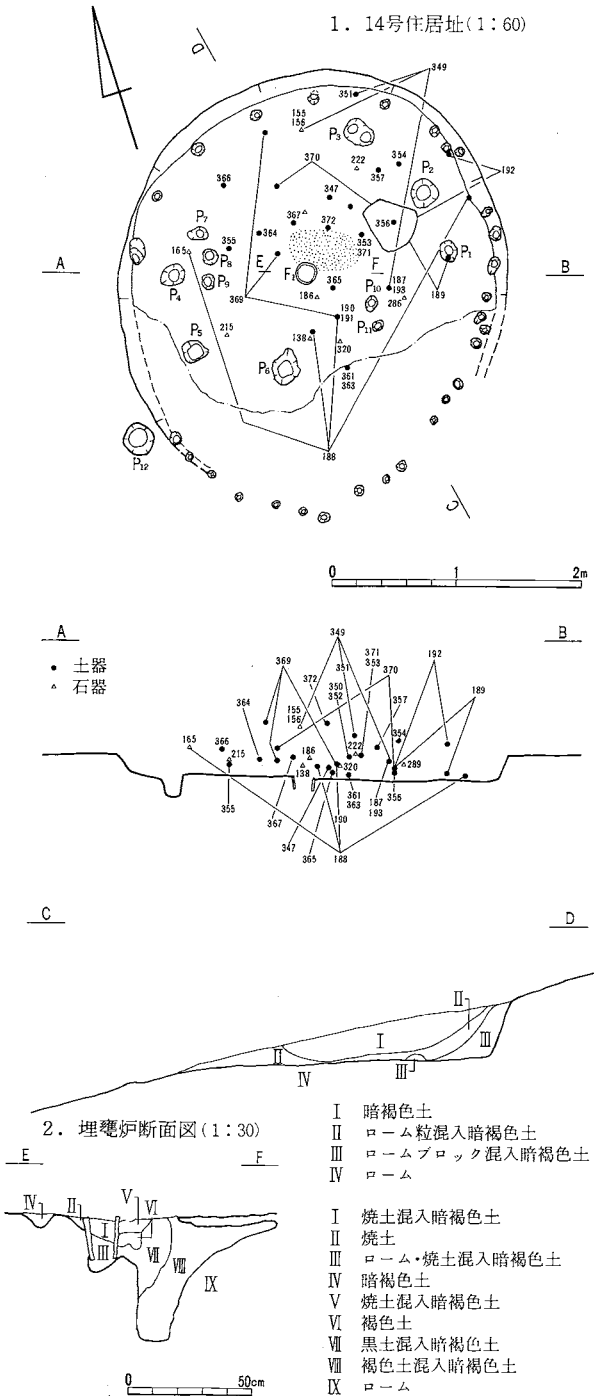
遺物 床或いは生活面からの出土土器は188・347・355・356・364・367・369である。これと上層遺物包含層との間には無遺物に近い間層を置き、沈線文系を主体とする九兵衛尾根II式片や礫が面をなして集中的に出土した。この間層があることは土層遺物が単に上方からの流れ込みでなく、廃絶後、期間において他の住居から投棄されたことを示すと思われる。189・190(図版21)は下層出土であるが、斜面下方に位置し床面と間層を置いている。近接する炉のレベルを考慮すると、若干の時間において廃棄されたものとみる方が妥当と思える。埋糞炉に使用された口径17.5 cm、現高18 cmの深鉢(186)と188、半隆起線を隆帯に沿って垂下させるもの(367)は九兵衛尾根I式の手法を残す原沢式期のもので、列点文を付すもの(365)など床面遺物には九兵衛尾根I式からの移行期であることを示すものが多い。346は縄文を付す隆帯に沿って沈線をひき、他は半隆起線で文様を構成する。347は口縁部に平行沈線文を、頸部には篋刻目を施す隆帯をめぐらし、胴部はRL縄文となる。東海系の土器が9片、5個体分(348~350)あるが、いずれも覆土上層か再流入した状況である。348は赤褐色・長石・石英を多量に含み、低い隆帯に爪形を密施し、それに直交する篋刺突と楔形文を加える。349は橙褐色を呈し、長石・石英粒を主にチャートの磨耗した砂粒を含む。350は無文頸部片、351~366・368・371はRL縄文を地文に太い単沈線を施し、369・370は無文となる深鉢である。372は口縁にRL縄文と竹管による押引沈線を持つ浅鉢である。なお、190は口径25 cm、器高27 cmである。

石器はすべて覆土内の出土である。スクレーパー1点(74)、彫刻器1点、ピエス・エスキーユ1点、打製石斧4点(138・154・155・165)、横刃型石器5点(194・215・217・222・238)、磨石1点(289)、凹石2点(289・320)、その他磨痕を持つ礫(252・253)、側縁加工する石器(186)がある。

埋糞炉及び床面出土土器から、本址は九兵衛尾根II式の初期の住居と判断する。

(6) 15号住居址(挿図10、図11・23・24・41、図版5・7・13・21)

遺構 長尾根南斜面下部に位置し、厚い黒土に覆われていたため、遺構の保存状況も良い部類に属する。



挿図9 頭殿沢遺跡14号住居址実測図

輪郭線の北部は漸移層中で確認したが、南部は黒土中で流失したためか壁線を把握できず、床面から範囲を推定するだけとなった。本址が土壌367を切る。プランは2.85×2.55mで、P₂ - P₄を入口とすると主軸はN7°Eとなる。壁は北北西が49cmと高く、南では消滅しているが、本来は黒土中にある程度の高さであったと思われる。床は北壁下はローム層まで掘り込まれるが、大部分は褐色土層中であり、南端は黒土である。北から南へ10cm傾斜し、全面に根が入り凹凸があり、やや軟弱な床である。中央やや南東寄りの埋甕炉F₁は推定口径14cm、現高14cmの深鉢(図11-194、図版21)を埋設しているが、火種保存程度の用しかなさないとされた(図版5)。東側床面に45×25cmの範囲で厚さ5cmの焼土がみられ、炭化物が混入していた。支柱穴はP₁(15×14、-55cm)・P₂(23×21、-20cm)・P₃(25×24、-27cm)・P₄(24×20、-23cm)の4個で、P₅(35×29、-53cm)は壁を切り込む貯蔵穴と調査者は考えているが、屋外のP₇(31×21、-40cm)とともにロームにまで掘り込まれ対をなしており、柱穴の可能性があろう。P₆は48cmと深く先端が極端に細まり、P₈は褐色土面でとまり下部へは小ピットが延びるが、両者とも根穴を誤認した可能性が強い。壁柱穴も同様のものが多い。

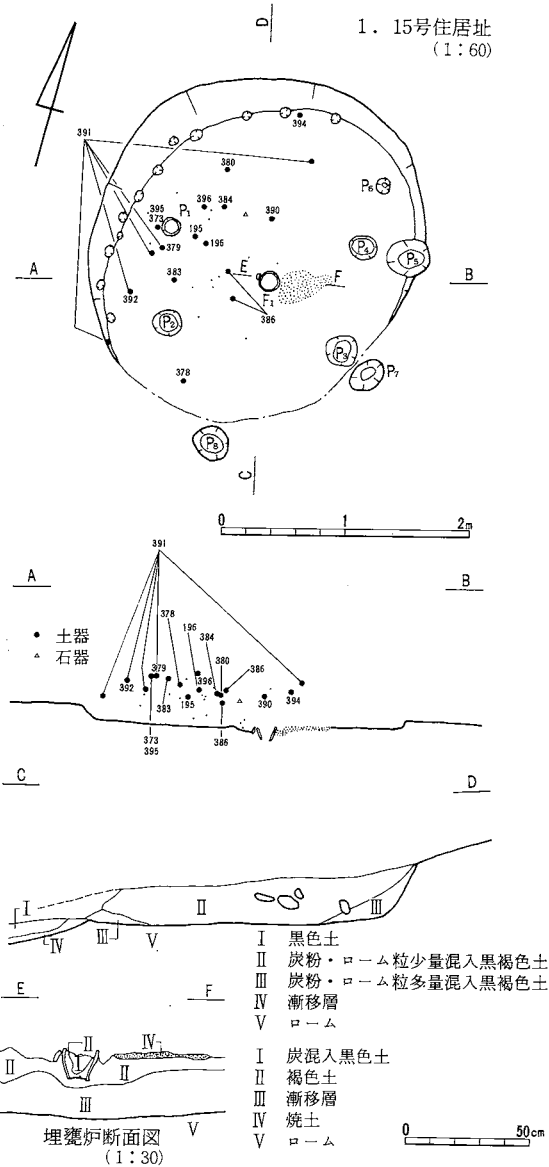
遺物 床面出土の土器は炉内に落ち込んでいた深鉢口縁片(377)の他に微小片が数点あるのみである。然し、この口縁は上面三角形の袋状をなすもので、口唇に連続爪形文を、その下部に太い単沈線をめぐらし、九兵衛尾根I式の手法を残すものである。これと炉体の深鉢が同時存在した可能性は極めて強い。194は区画隆帯部のみ縄文を施し、胴部は単沈線を垂下させるがY字状の懸垂文となっていない。太い単沈線で同文を持つものは総て上層にある事実に注目したい。194は九兵衛尾根II式の初期の所産と考えたい。図示した他の土器は床面との間に無遺物に近い間層を置いて上層より出土している(図版13)。東海系の土器群(373~376)がある。373・374は爪形隆帯に沿って半隆起線、三角印刻文を付し、RL縄文を地文とする。375・376は外反する口縁となり、口辺に爪形隆帯をめぐらし、下部は無文帯となる。378~394・396は縄文を地文に太い単沈線で文様を構成し、392・395はRLの結束縄文を持つ。典型的な九兵衛尾根II式である。土製円板1点(78)がある。

石器では該当グリットでピース・エスキューユ1点が出土しているのみである。

以上の所見から、本址は九兵衛尾根II式の初期に當まれたと考える。

(7) 遺構外出土土器(図12~16・29~35、図版21~23)

中期初頭土器は該期住居址の存在する範囲内に当然とはいえない。5号住の位置する北西への斜面では、土壌139の東から1号住周辺にかけて原沢式段階のものから九兵衛尾根II式土器片が多出し、同址の調査



挿図10 頭殿沢遺跡15号住居址実測図

終了後に無遺物層まで削り下げたが遺構は確認できなかった。また、尾根頂部では4号住と土壌86・134の間に同様遺物の集中をみたため精査し、ルームマウンド状の土壌72・73等や堅穴1などが検出された。然し、後者は、最終的に風倒木による攪乱として欠番とされた。御射山沢寄り下段テラス部でも、C区での出土は散発的である。以下、形式を追って遺物の概要を述べる。

籠畑II式(207・229・599) 御射山沢寄りの下段テラスで少量出土している。207・209は図上復元した土器であるが、近接したグリットの出土である。599は橙褐色を呈し、RL縄文を地文とし半隆起線で渦文等を描いている。

九兵衛尾根I・II式 深鉢・浅鉢別に型式分類を試みている。施文技法により大分類し、更に、器形の判断できるものについてのみ小分類した。

深鉢A型 九兵衛尾根I式系の半截竹管による半隆起線・平行沈線文を持つもので、地文に縄文を施すものと欠くものがある。574～578は半隆起線で区画した内部を平行沈線を窺切する斜格子文で埋めるもので、九兵衛尾根I式の色彩が濃いのが原沢式期の可能性が高い。579～581は前者の後出手法とみられ、単沈線で区画する。582～597はRL縄文を地文に平行沈線を多用し、586～588は同一個体とみられる。596・597は地文を欠く底部片である。598・600～610はRL縄文を地文に細半隆起線と隆帯で文様を構成する。612～617・619～621は竹管文を主にするもので、612は結節状沈線文、616は玉抱き三叉文となるようである。618は大粒な石英粒を含み、暗赤褐色を呈し断面三角形の隆帯を持つもので、後出の可能性もある。651は半隆起線帯に縦の爪形刺突を加えている。A1型 口縁がキャリパー状に内湾し胴部の張る器形となる。全面に縄文を施文し、口縁部には弧状隆帯区画を持ち、胴部には頸部の横走る隆帯から2対の隆帯か半隆起線による懸垂文を垂下させる。209・210に代表されるが、212もほぼ同様の器形と予想される。A2型 口縁がほぼ直に外反し、胴はやや張りだす器形で、半隆起線による区画内を縦平行沈線や斜格子文で充填する。203は2種の半截竹管を用い、頸部の区画文の接点に背面押圧点を付す特色をもつ。211は胎土・色調等平出第3類Aに似ているが、交互刺突文・結節状沈線文を多用し(図版21)、622と同一個体となる可能性もある。A3型 円筒形の胴部から口縁が、ほぼ直に外反する器形となる。213は基本的なモチーフは九兵衛尾根II式のものとなりながら、半截竹管による平行沈線により円文等を施文する。推定口径30cm強、器高32cmとなる。

B型 東海地方との関連の強い土器群で、爪形文を密施する隆帯文を持ち、薄手で小形な深鉢が多い。

B1型 口縁部がくの字に内折する器形で、内面や外面肩部に縄文・半隆起線・楔形文による施文帯を有するもの(205・635～637)は、暗赤褐色を呈し無文部は丁寧に磨きされる。爪形隆帯文のみを付すもの(214・215)は、赤褐色を呈し調整も雑である。B2型 円筒形に近い器形で、三角印刻文が多用されることが他の型との差である。217は口縁に蛇行する隆帯を貼付し竹管背面による押圧を加え、218は口縁の突起部から蛇行する高い隆帯を垂下させ、その側面に三角印刻文を施文し、長石・石英の角砂に加え硅質岩の丸砂を含んでいる。B3型 かぶと状の器形で、口縁が大きく外反し、球形に近い胴部となる。概して、橙褐色を呈する。口唇に爪形隆帯文を横走させその下は無文となり、胴部は縄文を施文し、楔形文・窺切沈線文による文様帯となる(221～223・631～644、図版21・22)。胎土は長石・石英を主とするが、221～223・644は他にチャート粒も含む。638・639は半隆起線、642は口縁の爪形隆帯間にも縄文を施文している。B4型 219は口縁に特異な紐線文をもつ。隆帯を貼付し上方から連続指圧後、下方から同様の圧痕をつけるもので平出第3類A等にもみられる手法とは差は感ずる。183も同様である。

C1型 内湾する口縁部に単沈線による縦平行線を施文する。631は全面に、632は頸部隆帯に縄文を持つ。227は暗赤褐色を呈し、長石・石英・金雲母を含み、五領ヶ台II式の浅鉢の胎土・色調と共通する

もので、胴部はC 2と酷似する施文となる。C 2型 器形は不明であるが、623~625は平行沈線に沿う押圧列点文を、626~630・633は単沈線に沿って下方から刺突し、634は平行沈線に平行に施文する。C 3型 224・648~650は結節状爪形文・爪形隆帯間に単沈線文・三角印刻文を配するもので、224は口縁に具象的で複雑な加飾をする。648は波状口縁突起部が漏斗状となり、15号住出土377と同一個体の可能性が高い。

D型 口縁や頸部に交互刺突文帯を付するもので、E~F型では部分的に施文するのに対し、232は全周するものと推定され、独立した型となることが他遺跡例から予想される。細い単沈線である。

E型 単沈線等で文様を構成する九兵衛尾根II式の中核となる群で、胴部円筒形となる例を1、胴上部で張り出すものを2とした。両者とも、施文する口縁部が内湾するが、平縁のものと波状を呈するものがある。E 1型 228・233に代表されるが、後者の頸部のV字状把手から隆帯を垂下させる手法は隆帯によるY字状懸垂文の先駆形態と思われる。652~667の内の多くは本型の口縁部となろう。E 2型 234は断面に種子痕を持つ。235は10号住の下方に接するグリット出土(図版22)で、236は尾根頂部で単独出土(図版13・22)し、口径31.5cm、現高33.0cmである。668~672は本型の口縁の可能性が高い。

F型 縄文を施文する短い口縁部が円筒形の胴につくものを1、胴が張りだすものを2とした。F 1型 238は推定口径21.6cm、器高27.2cmで口縁に顔面状把手を貼付する。この型は平縁が基調をなすが、673~694にみられるようなさまざまな把手を付し、変化をつけている。F 2型 237があげられるが、この型は個体数が非常に少ない。

G 1型 F 1型と同様の器形となるが、E 1型の口縁部文様が簡略化されたともみられる土器群である。231・695~707が該当し、704・705のように内面に沈線文を付すものも含めた。

H型 主として縄文が施文される群である。H 1型 220は口唇に連続爪形を付す。H 2型 722は円文と思われる隆帯が剥落しているが、縄文を施文に口縁に楔形文を全周させる。H 3型 遺構外では図示しなかったが、14号住出土の189に代表されるもので該当する破片がある。H 4型 230は甕形となり口唇に篋刻目を付すものである。

I型 無文か、僅かに隆帯文のみの深鉢である。各種の器形が予想されるが細分しない。赤褐色~暗赤褐色を呈し、外面を丁寧に整形するものが多い。239~243・716~721が該当する。

浅鉢 A 1型 723~729 九兵衛尾根I式以来の系統を踏むもので、口縁内面肥厚帯に幅広な連続爪形文を付すが、I式期では3~5条であるのに対し、1~2条と少なく、爪形文をくくで区切る手法や2条の連続爪形文間に付す三叉文から延びる単沈線が加えられるのが特徴でもある。また、724・725のように、波状突起部の渦文・円文の中心に刺突や穿孔する頻度が高まる傾向もみられる。胎土は本遺跡例では、前段階のに比して金雲母が減少し、殆んどが微量含むだけとなるが、この型の全般について言及することはできない。器形は波状傾向が強まり、A 2型とともに平面形は六角形に近い舟底形を呈するものが多いと推察される。729は押引が粗間隔となり角押文に類似してくるものは類例をみない。

A 2型 730~732 口縁内面の肥厚帯に縄文を施文し、その上に連続爪形文、楔形文を加えるのを基本とするが、732は縄文のみである。胎土・色調・焼成はA 1とほぼ同様の特徴をもつ。遺構外では3個体のみである。

B型 連続爪形文を口唇と口縁肩部にもつ群である。B 1型 244・733・734は金雲母を多量に含み暗赤褐色を呈す。244は4号住南側グリット、他は1号住周辺出土で、4個体分5片がある。B 2型 次のC型との中間型で連続爪形文とRL縄文を口縁に付し、x字状隆帯文によって4単位に区画すると

考えられる。735は1条の単沈線、737は結節状沈線、245・736は単沈線による長楕円文を付し、いずれも長石・石英の他金雲母少量を含む。3個体分5片があるが1片がC区、他は1号住周辺出土である。

C型 交互刺突文を口縁に施文する群である。C1型 くの字に内折する口縁に縄文も施文されるもので、247は下方からの刺突する手法で特異であるが、738～740・743が基本となる。7個体分の破片がある。C2型 口縁の立ち上がりが消滅し、肥厚帯に交互刺突文のみを施文する。暗赤褐色を呈し、長石・石英・金雲母を多量に含む。図示した741・742・744の3個体のみである。

D型 口縁部に沈線文を施文する。D1型 246・745～748のように口縁が内折し、その部分にRL縄文を地文とし沈線をひくの原則とするが、748は縄文を欠く。6個体分7片ある。D2型 749の他に2個体分があるが、口縁が低く稜を持ちRL縄文を付す。D3型 750の他に3個体分があるが、沈線を口唇の僅かな肥高部に付すもので、胎土は縄文時代中期中葉に近づいている。

E型 D2・3型の口縁断面形で、フの字隆帯文を貼付する例で、248・249の他2個体分がある。

以上は九兵衛尾根式内の一時期帯でセット関係をなすと考えられる土器群であるが、明らかに客体的な移入土器として船元II式がある。645・647は尾根頂部東側で近接し、646は1号住北側のグリットより出土しているが、このグリットでは九兵衛尾根II式約10片以外に中期中葉土器片はみられない。645・646は幅広の爪形文と刺突文を持ち、口縁内面にも繊細なRL縄文を施文するが内面は無段である。647は揚げ底となり同様の縄文を有する。いずれも、黒褐色～橙褐色を呈し、長石を主に、他にチャートの磨耗した砂粒を少量含んでいる。移入された時期は確定できず、猪沢式期の3・4号住に近接する出土地点で、同式期かとも思われる。

3) 縄文時代中期中葉の住居址と遺物

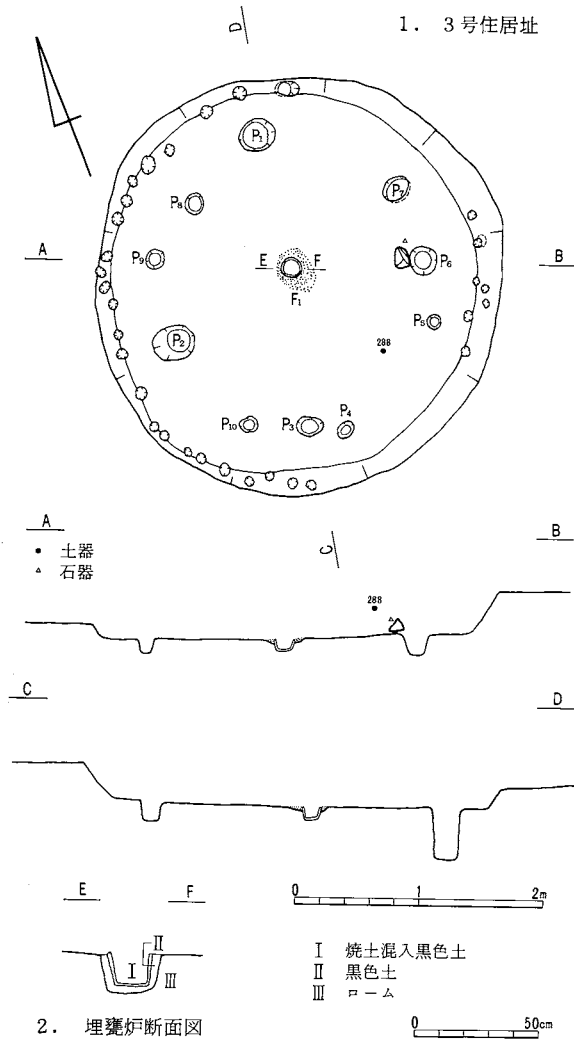
(1) 3号住居址 (挿図11、図16・21、図版5-2・25)

遺構 頭殿沢に沿ってのびている主長尾根から北へ突出する支尾根の分岐点頂部、西方への緩傾斜面に位置し、表土層は約20cm～30cmで耕土である。耕土を剥いだ第二層は暗褐色土で、炭粉が少量含む黒土の落ちこみを確認し輪郭は容易に把握できた。規模は3.35m×2.25mのほぼ円形を呈し、土壙102を切っている。P₄ - P₅を入口部と考えると主軸方向はN25°Wである。壁は良好で壁高は東36cm、西12cm、南26cm、北18cmである。壁沿いには入口部と北東部を除いて小ピットが並ぶ。径8cm～15cm、深さ10cm内外が多く、一部傾斜するものも含まれP₁の北側のものは根跡の誤認かと思われる。床面はP₅～P₇にかけて硬いが、他はやや軟弱で北西方向へ8cmほど傾斜する。中央に埋甕炉F₁が設けられ、周囲の床面が27×35cmの範囲で焼けていた。支柱穴はP₁ (30×25・-41cm)・P₂ (33×27・-60cm)・P₃ (22×15・-14cm)・P₆ (23×21・-16cm)と考えられる。P₇ (22×17・-28cm)は北へわずかに傾斜するが、支柱であった可能性もある。

補助柱穴は入口施設と推定するP₄ (15×11・-12cm)・P₅ (12×11・-44cm)とP₈ (16×15・-7cm)・P₉ (15×15・-10cm)・P₁₀ (16×13・-7cm)がある。

遺物 極めて少ない。埋甕炉に使用された250は胎土が長石・石英・金雲母を含み中期初頭の胎土に近い。251も同様でしかも胴部に篋削り痕が顕著で底部には部分的ながら幅25mmほどの連続篋押圧痕を残す整形技法から、ともに猪沢式とみてよいと思われる。本址の所属時期を判断する唯一のものである。なお覆土下層からはP₆周辺で九兵衛尾根II式深鉢小片285～288と上層でさきの猪沢式深鉢片284の1片をえたのみで、他に打製石斧片1点が出土している。

本址は猪沢式期の住居址である。



挿図11 頭殿沢遺跡3号住居址実測図

ピットより深く平均して、位置的にも支柱穴ではないかと容易に把握できる。P₅ (20×20・-14 cm)・P₆ (30×29・-18 cm)・P₇ (32×26・-17 cm)・P₈ (22×18・-8 cm)・P₉ (30×29・-13 cm)・P₁₀ (32×24・-12 cm)・P₁₁ (40×32・-17 cm)・P₁₂ (26×24・-10 cm)・P₁₇ (37×36・-11 cm)・P₁₈ (40×30・-18 cm)・P₁₉ (34×29・-13 cm)は大きさ深さともほぼ平均したピットであるが、補助柱穴と考えてよからうか。P₂₀ (44×30・-32 cm)はやや大形で袋状を呈し、底の広いもので貯蔵穴を考えてもよいと思える。P₂₁ (97×74・-9 cm)は楕円形の広いピットで、住居址とは別に構築された遺構ではないかと思われる。

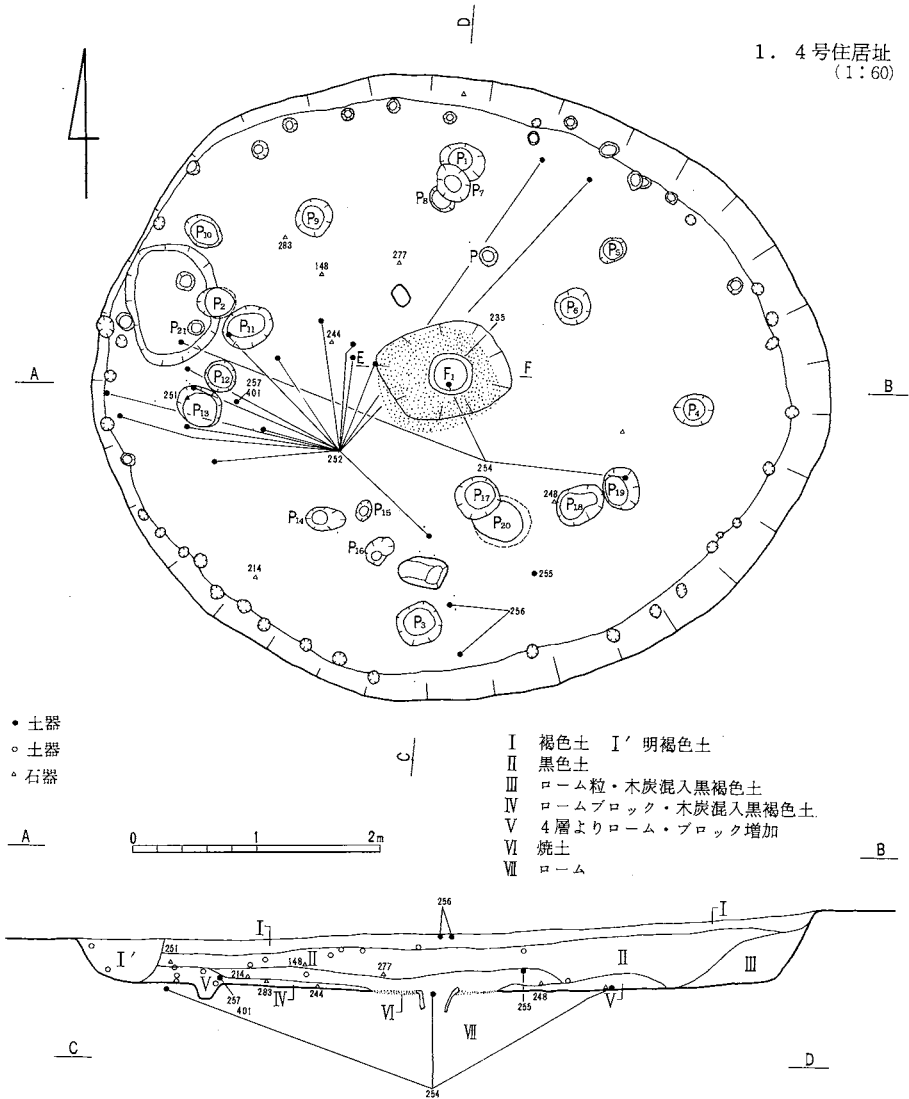
遺物 土器252は住居址の床一面にバラバラになって散乱していたものを接合したのである。今回調査の出土土器中一番大形の深鉢土器である。253は埋甕の土器で底部を欠いているが胴上部は完全の形で検出された。254は埋甕炉の土器と混在した一片と床面及びグリットから検出された土器片と接合したもので橙褐色の明るい土器である。床面よりはこのほかに255の小形の深鉢土器片、257の浅鉢土器の口縁部片と別個体の底部片が出土し、覆土内の土器402、251、256を含めると合計70点余の多量にのぼる。石器は打製石斧(148)1点、横刃型石器(244、214)2点、磨石(277、283)2点、敲打器(248、283)2点、黒曜石片3点が出土している。

本址の埋甕炉の土器を初め床面から出土した土器の特徴は、細かい長石・石英・雲母等有色鉱物を多く混じえた胎土で、赤褐色の明るい焼きのものが多く、施文は横の楕円区画文と角押文の押引いた文様が中心で猪沢式のもので、本址の所属も該期として間違いはないと思われる。なお、土壌との切合関係であるが、

(2) 4号住居址 (挿図12、図16・17・24・41・43・44、図版26)

遺構 頭殿沢に沿った主尾根頂部、農道の北側の台地上に位置する。本址はグリット掘りにより、ローム面まで掘り下げたところ住居址の存在に気づいたのである。表土を全面排除し、ローム面に暗褐色土による落ちこみを確認し、輪郭が容易に把握できた。東西5.9m 南北5mの規模を持ち、ほぼ円形を呈する大形の住居址である。土壌182は本址に切られ土壌189は本址を切っている。なお土壌183は隣接している。入口部をP₃~P₄の間と考えると主軸方向はN 35° Wである。壁は明確で良好、壁高は東56 cm、西10 cm、南44 cm、北28 cmである。壁に沿って住居の壁を支えた留杭と思われる小穴が径約10 cm、深さ10 cmほどの大きさで等間隔で全周している。この小穴の掘り方はどれも内側に傾斜している。なお入口部と思われるところは小穴がみられない。炉は埋甕炉であるが、周囲は径約1.4 mほどの楕円形状に焼土が広がっている。床面は入口部と思われる南東部がやや高く硬い。多くの炭化物が床面に散乱していた。住居址内にはピットが多く掘られ21を数える。この内P₁ (36×25・-69 cm)・P₂ (29×24・-68 cm)・P₃ (38×34・-75 cm)・P₄ (32×25・-76 cm)は他の

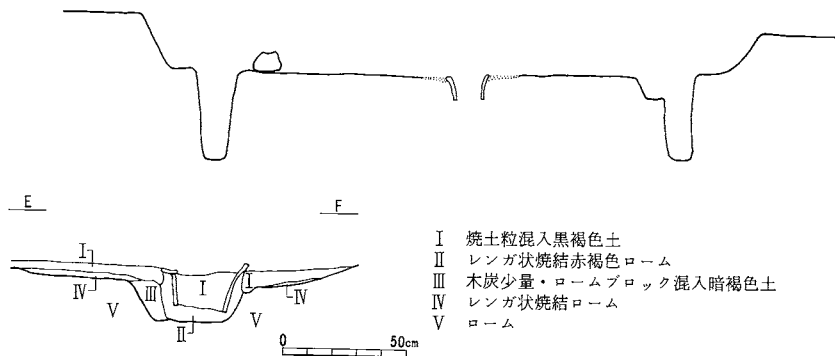
発掘調査の時点では不明の点があり、遺物整理の段階での検討が求められていた。幸い 182・189 の 2 土壙とも、完形あるいは完形に近い土器を所有し、しかも良好な出土状態を示しているので、容易に結論を導きだせることができた。土壙 182 の土器 (198) は九兵衛尾根 II 式で、明瞭に前後関係が理解でき、土壙 189 の土器 (263) は新道式の特徴である三角押文を混じえた施文があり、住居址出土土器より新しいタイプに入り、前後関係は明らかに土壙 189 が新しくなるといえるのである。



(3) 9号住居址

(挿図 13、図 17・19・24・38・42・43、図版 25)

遺構 主尾根の南斜面の裾部に位置する。規模は 4.7×4.3 m のほぼ円形を呈す



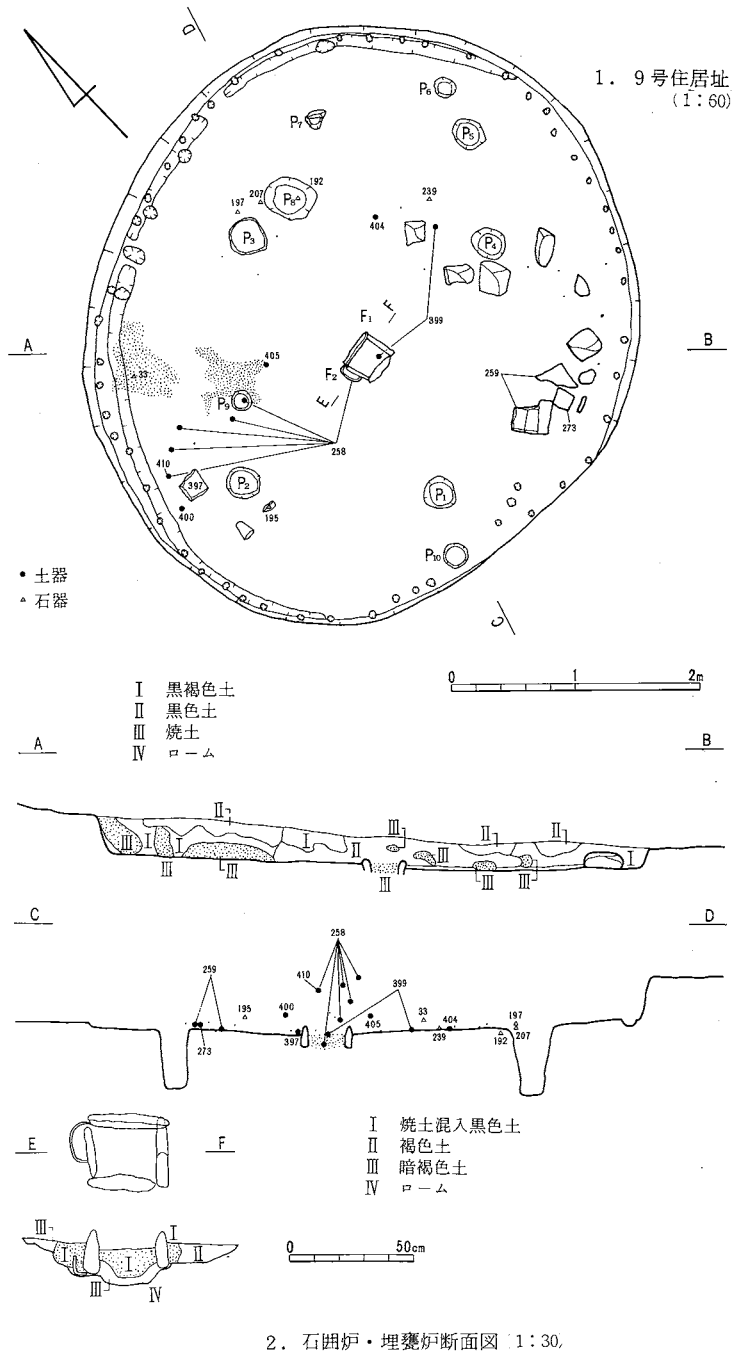
2. 埋甕炉断面図 (1:30)

挿図12 頭殿沢遺跡4号住居址実測図

。入口部を P₁ - P₄ と考えると、主軸方向は N 20° W である。壁はおおむね垂直で良好、壁高は東 42 cm、西 18 cm、南 6 cm、北 45 cm である。壁沿いに 20~30cm の間隔で径 5 cm、深さ 10 cm ほどの円形の小孔が全周し、南側は住居址内部まで入りこんでいる。北側半周は壁直下に幅約 10 cm、深さ 10 cm~15 cm の周溝が掘り巡らされている。床面は小石混じりで凹凸があり、南へやや傾斜していて全体的に硬くしまっている。炉は中心より西寄りであり、縦 35 cm、横 30 cm 板状の安山岩で 4 枚方形に組み、石囲炉としている。柱穴と思われるピットは 8 個あり、P₁ (26×25・-49 cm)・P₂ (27×24・-61 cm)・P₃ (30×30・-59 cm)・P₄ (28×23・-55 cm)・

P₅ (28×23・-48 cm)・P₈ (39×31・-54 cm)・P₁₀ (19×19・-46 cm) である。他にピット2個 P₆ (39×31・-54 cm)・P₇ (14×13・-27 cm) がある。さてこの住居址は石囲炉を精査したとき、現住居址とは別の遺構と思われる埋糞炉を発見し、住居の重複、炉の造替などの注意すべき点を知った。まず、炉であるが、埋糞炉の土器は猪沢式の典型的なもので、石囲炉を中心とした現住居址の土器と型式的に若干のずれがみられるのである。次に柱穴であるが、掘り出されたピットでは配置が雑然としていて数も多く、また、P₉のごときは焼土に埋もれて明らかに古い時期に掘られたものと推測がつくので、新旧の住居の建替えを考えてみた。P₁・P₉・P₈・P₄を支柱とした旧住居とP₁₀・P₂・P₃・P₅を支柱とし拡張した現プランの住居である。この点は細密な検討と他の例を参考に考察されるべき問題であるが、今後の課題としておきたい。短期間において連続した同心円状の建替住居址の例はいくつかあるが、曾利遺跡の66・67号住居址の例は最近知られたものである。

遺物 258は本址石囲炉の下から発見された埋糞炉である。P₉内や北西隅の焼土内から検出した破片と接合でき、復元した深鉢土器である。長石・雲母粒を多く混入し、指圧痕の鮮明な器面で、胴上部には楕円区画文、強い押し引きによる角押文がみられ、猪沢式の典型的なものである。259・273は南東壁寄りの床面に喰いこむように密着し、押しつぶされた状態(図版13-2)で検出したもので、ともに長石・雲母その他の有色鉱物の粒子を多く含む。器形も深鉢である。楕円区画文・方形区画文をいく段か重ね、区画する隆帯に沿って角押文、肥大した口頸部には三角形区画文、区画内にジグザグの刺突文などを特徴とする土器である。その他床面出土の土器片は、大粒の長石・石英粒を混入し黄褐色で内外よく横ナデした平出3類A(399・400)、金雲母の混入が目立ち、太い紐を指圧により蛇行させた隆帯に仕上げたものを貼付けた大破片(397)、口縁部に細い竹管により斜めの刺突文を並べる浅鉢片などである。覆土内からは九兵衛尾根II式数点があったが、他からの流入によるものであろう。石器は石鏃(33)、横刃型石器(192・195・197・207・239)5点を検出している。



挿図13 頭殿沢遺跡9号住居址実測図

旧住居は埋甕炉の土器からみて、猪沢式期に構築され、時間差をおいて新道式期に新住居が掘り込まれたと考える。

(4) 遺構外出土土器 (図18~20・35・36、図版24~26)

猪沢式 破片のみで図上復元例も少数である。約150片が尾根頂部から南斜面下部まで散乱する。

1類 光沢を有する器面に断面三角形の隆帯を貼付し、暗赤褐色~黒褐色を呈する深鉢である。767は隆帯区画内に単沈線で文様を描く。図示しなかったが、大石遺跡6号住出土土器(同書図118-17)に酷似し、口縁隆帯下に1cm強の半隆起短線をそれに直角に施文する大形深鉢がある。

2類 幅3mm弱の細い角押文を施文するもので、光沢を有する。267の他に2個体ある。

3類 角押文以外に禾本科茎内面による斜格子や押引文を施文する。755は口縁下の2条の角押文間に交互刺突文を、その下部と頸部に鋸歯状押文を付する。778・779は黒褐色で同一個体の口縁は前者と同一文様である。ともに長石・輝石を含み、3~5類は長石を主とする砂粒を多く含み、器面はザラつく。

4類 角押文の区画内や条間に竹管刺突による円文を充填する。隆帯は5類とともに断面かまぼこ状となる。761・762は暗褐色、763は橙褐色で口縁にU字状隆帯文を付する。

5類 多くは楕円区画内に角押文による施文をみるが、指圧痕を残すものもある。754・758~762・764・773が該当し、末尾は幅5mmと3mmの角押文である。771は本類の底部である。

6類 浅鉢を一括した。a種 268は縄文中期初頭浅鉢C1型の後続型で交互刺突文が粗間隔となり、単沈線が部分的に角押文となる。交互刺突文の下部に更に1条角押文を横走させるものがある。b種 角押文を口端に一条横走させるが、同D3の断面形となり口縁部に更に縄文を付すものと、欠くもの各1点がある。c種 内折する口縁部が幅広となり、横走する角押文に直交する押圧文を施文する257・405の施文手法となるものだが遺構外にはない。d種 269・772のように鋸歯状文・円文等を施文する。e種 262・769のモチーフは三角押文に変化して新道式へ継ぎされる。f種 幅広の口縁と肩に紐線文を有し、体部の整形手法も猪沢式のものである。

新道式 272~275・277は9号住周辺から10号住南グリットの径10m程の範囲で出土し、273は底部が9号住床面で出土している。これらの一部は同址に由来する可能性もある。

1類 楕円区画に沿って連続爪形文を巡らし、角押文による鋸歯状文を横走させる。271の他に数個体分ある。2類 方形区画で1類と同様の施文をみるものは274のみである。3類 楕円区画を残しながら、他の区画手法も取り入れ篋具による施文をする。273は口縁最大径29.7cm、器高25cmで口唇の一部に赤色塗彩され、外面には部分的に煤が付着する。275は口径23.6cm、器高37.2cmで三角押文の施文具先端を平らにそいだ篋具での施文である。279は口径30cm、現高18.5cmであるが、777とともにモチーフは角押文が三角押文に変化しているだけで猪沢式の手法を残している。4類 連続爪形文と三角押文が共用されるもので、755の他8個体以上の破片がある。5類 三角押文による文様で278は三角区画をもつ。6類 6cm弱の短い粘土紐を全面に幾つも貼付するもので、768は連続指圧痕が顕著に残されている。7類 口縁に隆帯貼付文を付すだけの無文に近いもので、145・272は猪沢~新道式期であろう。

以上、1~7類は深鉢であるが類別しなかった小片776は連続爪形・角押文による区画内を篋具の押引列点文で埋め、隆帯は一部剥落している。780は二種の三角押文による施文である。

8類 有孔鏝付土器で770の他2個体分片がある。9類 浅鉢を一括する。276は口縁に2条の三角押文を横走させるもので新道式の基本となる型である。

10類 北陸系及びその影響下で成立した土器群である。781は橙褐色を呈し透明な石英粒・長石・金雲母を少量混入する焼成堅緻な深鉢で、内外面は丁寧に横ナデされる。口縁に2～3個組の山形突起が付されるもののようで、その脇下部に屈折部が盛り上るL字状隆帯を付すが4個現存する。口縁には半截竹管を押圧し花卉状部を作り出した有扶蓮華文を配し、下部には器面に深くくい込む半隆起線、結節状沈線文を9条横走させ、頸部の狭い長方形無文部には周囲に同具先端の一方を器面に押し当てる方法で連続爪形文を施文する。胴部はRL縄文を地文として、半隆起線によるL字入組文・B字文を縦に割りつける複雑な文様構成で、半隆起線に囲まれる空白部は半肉彫三叉文となる。なお、口縁内面は竹管背面による沈線がめぐらされる。胎土等からみて移入土器である。尾根頂部の農道南側のBK～L47グリットから出土した。

783～787は黒褐色から暗赤褐色を呈し長石を主にする砂粒を多量に含み、新道式期の土着の深鉢である。783は前記と同手法の蓮華文ではあるが、竹管幅も狭く篋切沈線も長く類例も多い。784はRL縄文を施文後に細い隆帯を2本胴部に貼付し、浅く細い半隆起線区画文となる。785・786は深い半隆起線区画を、787は781の頸部にみられた文様帯を縦に有する。

藤内式 明らかに該式と認められるのは、楕円区画内を沈線で埋める788と屈折底の789のみである。

4) 縄文時代後期の土器(図20・37、図版26)

縄文時代後期に該当する確実と思われる遺構の発見はなく、遺物も他の時期に比し少ない。土器は遺跡全体から断片的に小破片を採集したが、特に尾根頂上部の西、農道より北側にあたるグリット内に集中的に発見され、大半はここのものである。復元され器形のわかるものは4点あるが、他は破片で百余点である。土器以外は、後期の遺物と断定できにくいのでとりあげることはできなかった。

I群土器 破片のみで器形を知るものはないが、280は土壌248の覆土中より同一個体の破片がいくつか検出でき、土器の全貌が窺い知れる。細かい長石粉末を多く含み、器肌は荒い、色調は暗い赤褐色である。器形は口縁部と底部を欠くが、胴部はやや張り頸部はやや縮る。口縁部が内湾したキャリパー形の面影を残す深鉢が推定できる。文様は太い沈線で曲線構図を主に描く。縄文帯と無文帯を分けている。803～814はこれと同様な施文構成を持つ土器である。801は縄文は施されないが同じ構図である。828は厚手で胴部に縦の細い半截竹管による沈線文を引いている。これらの土器は中期終末から後続するもので、大安寺式として知られる称名寺式に併行関係にある土器群である。

II群土器 この土器が破片の大半を占めている。281はCF54・55グリットより多く検出された土器片で図上復元したものである。細かい砂粒を混じ、明るい橙褐色で、器形は胴部が球形に近いまで張り、頸部は強くくびれ、くの字状を呈する。頸部に8の字貼付文を等間隔に付し、これを起点とした沈線の曲線構図の文様を胴部に描く。この文様を持つものとして815があり、817～824はその胴部破片であろう。282は口縁が大きく開き、胴部径より大きくなる浅鉢形態を持つ土器である。口縁がくの字状に折れ曲り縁辺部に簡単な文様を描くいわゆる縁帯文がある。また、この土器の鎖状隆帯文も特徴的であり、類例は、諏訪市千鹿頭社遺跡出土例がある。縁帯文を持つものとして、790・791・793・798・800などあげられる。799は小突起ある口縁部、829は網代底、831は素文の把手である。これらはみな堀之内I式の特徴を示す土器である。

III群土器 283は精選された粘土に砂粒を混じ、薄手(4mm)で黒灰褐色をしている。器形は胴上部より口頸が開き、底部はやや張り出した朝顔形である。文様は縄文はなく、三角形をモチーフにした正・逆の構図を持ち、沈線で胴部を巡らしている。類例は岡谷市上向、諏訪市千鹿頭社にみられ、堀之内II式の典型的なものである。825は磨消縄文手法を用い、827は鋭利な篋先きで、弧状の曲線を描いている。

5) 竪穴遺構

本遺跡において住居址の体裁を整えず、また土壙とは言い難い遺構が2基検出された。

(1) 竪穴3 (挿図14-左)

10号住より北東へ2m程離れた尾根状台地の裾部に位置する。東西1.80m、南北1.96mの規模で、ローム層に掘り込まれ、壁高は、東24cm・西17cm・南12cm・北42cmを測る。覆土は、小木炭片を混入した黒色土である。床面は、タタキ状で硬く締っている。深さ5cmと12cmのでピットが対照的にあるが、炉址、焼土はない。ピットを結んだ線は、最大傾斜線にほぼ直交する。本址に類似した遺構としては、静岡県蛭ヶ谷遺跡で弥生時代の住居址として報告されているが、本址は、住居址とは言い難く、上屋構造を有するものと思われる竪穴状遺構としておく。遺物は何ら出土していない。

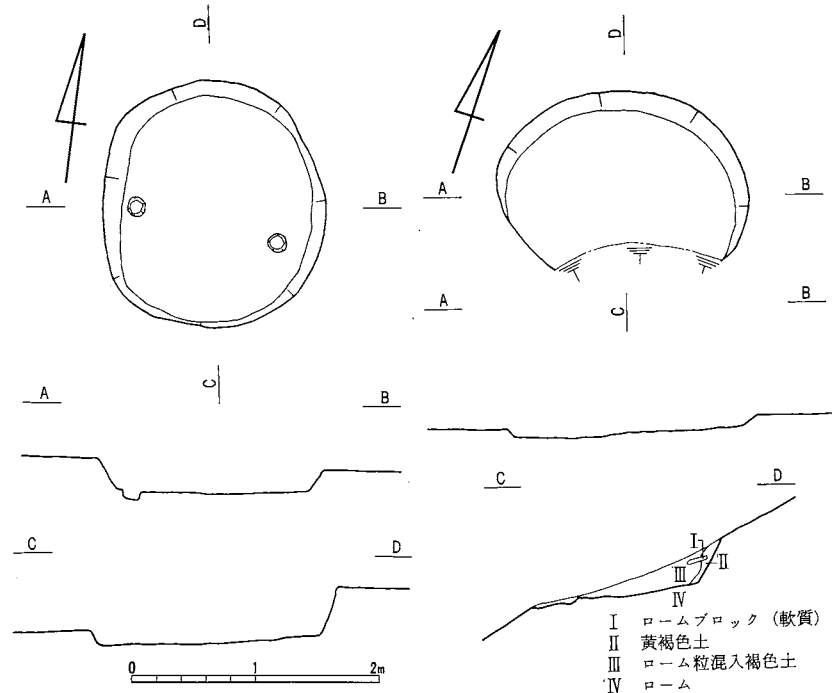
(2) 竪穴4 (挿図14-右)

12号住より南へ5m程離れた斜面上に位置する。東西1.98m、斜面のため南壁は確認できなかった。覆土は2層である。1次堆積は、黄褐色土で壁ぎわにわずかに堆積し、次に、ローム粒が混入した褐色土が1層となり落ち込んでいる。柱穴、炉址は認められない。本址南下方に黒曜石が集中しており、本址と何らかの関係があるかとも思われる。出土遺物は、覆土中より表面に煤が付着した無文土器1片のみである。本址へ流れ込んだものと思われ、直接の関係は持たないであろう。

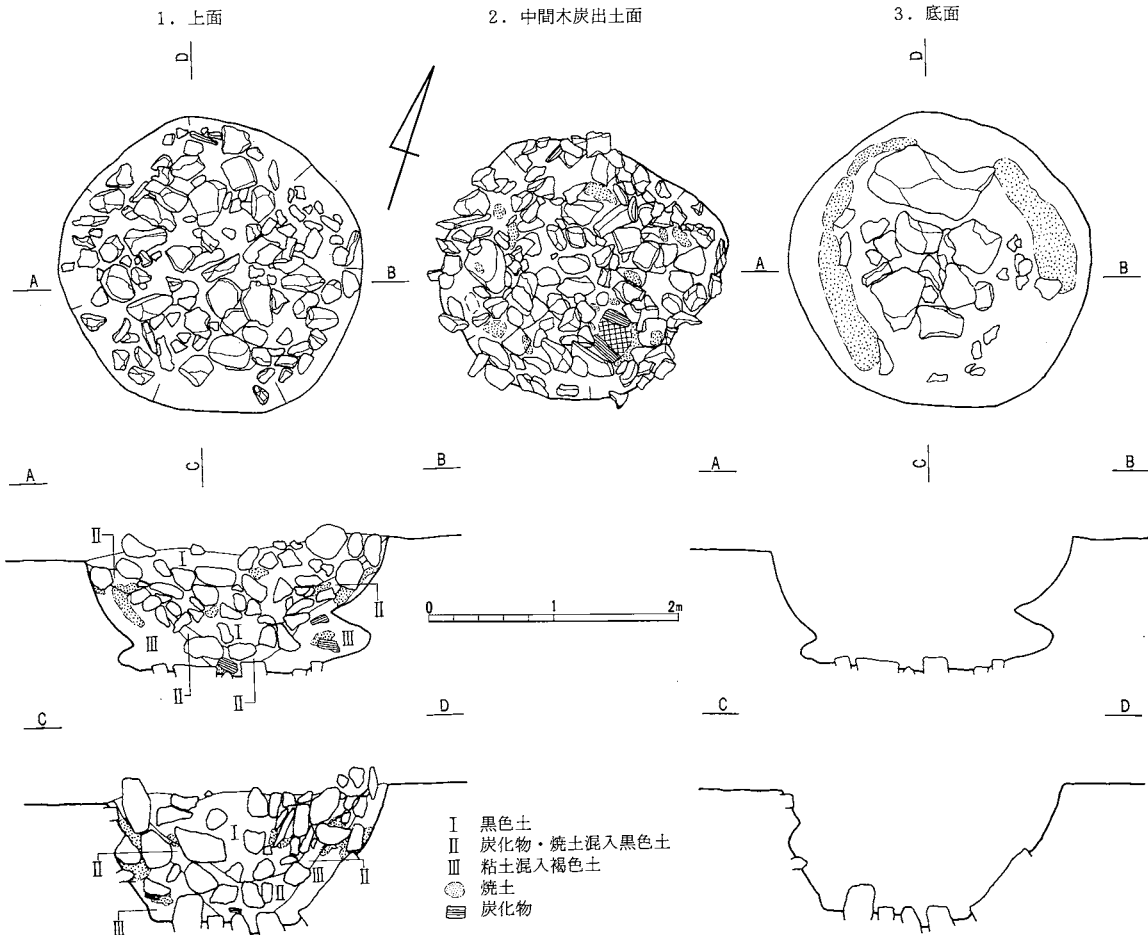
6) 集石と遺物

(1) 集石1 (挿図15、図48、図版8)

御射山沢寄りの下段の中央部、CM48グリットにあるが、本遺構は其中でも北北東から尾根状に走る微高地の先端部を選んでいる。排水の利を考えてのことであろう。上層の黒土25cm程を除去後、漸移層から落ち込む本址を確認した。1.28×1.22mの円形を呈する集石炉でローム層中に掘り込み、最深部まで53cmある。断面は基本的にはすり鉢形をなすが、袋状となる部分があり地山の石が抜き取られた痕跡とも考えたが、その中に比較的大きな炭が入り込み即断できない。内部には人頭~拳大の礫がびっしり詰まり、その間隙に相当量の炭を含む黒土が入り、各所に焼土がみられる。殆どの礫が焼けており、火熱のためひび割れたものも相当みられた。礫のあり方をみると、部分的に同一方向に並べられたかとする箇所もあるが、全般に雑然としている。但し、下底面は大礫が敷きつめられており、その下部のローム面でも相当量の焼土・炭がみられた。III層はローム・粘土を含み、部分的に焼けて硬くなったところもある。焼土が各レベル



挿図14 頭殿沢遺跡竪穴遺構3・4実測図(1:60)



挿図15 頭殿沢遺跡集石1 実測図 (1:30) 実測図 (1:60)

にみられることは、礫を投入しながら何回も火が焚かれたことを示していると思われる。

遺構内からは黒曜石チップ20片と砥石(375・376)を、南壁外でLR縄文を斜位施文する深鉢片1点、検出面の礫上面で繊維土器小片を得ているが、本遺構が茅山式期より古いことを示すとみられ、近接して出土している格子目押型文の立野式に属すると考える。

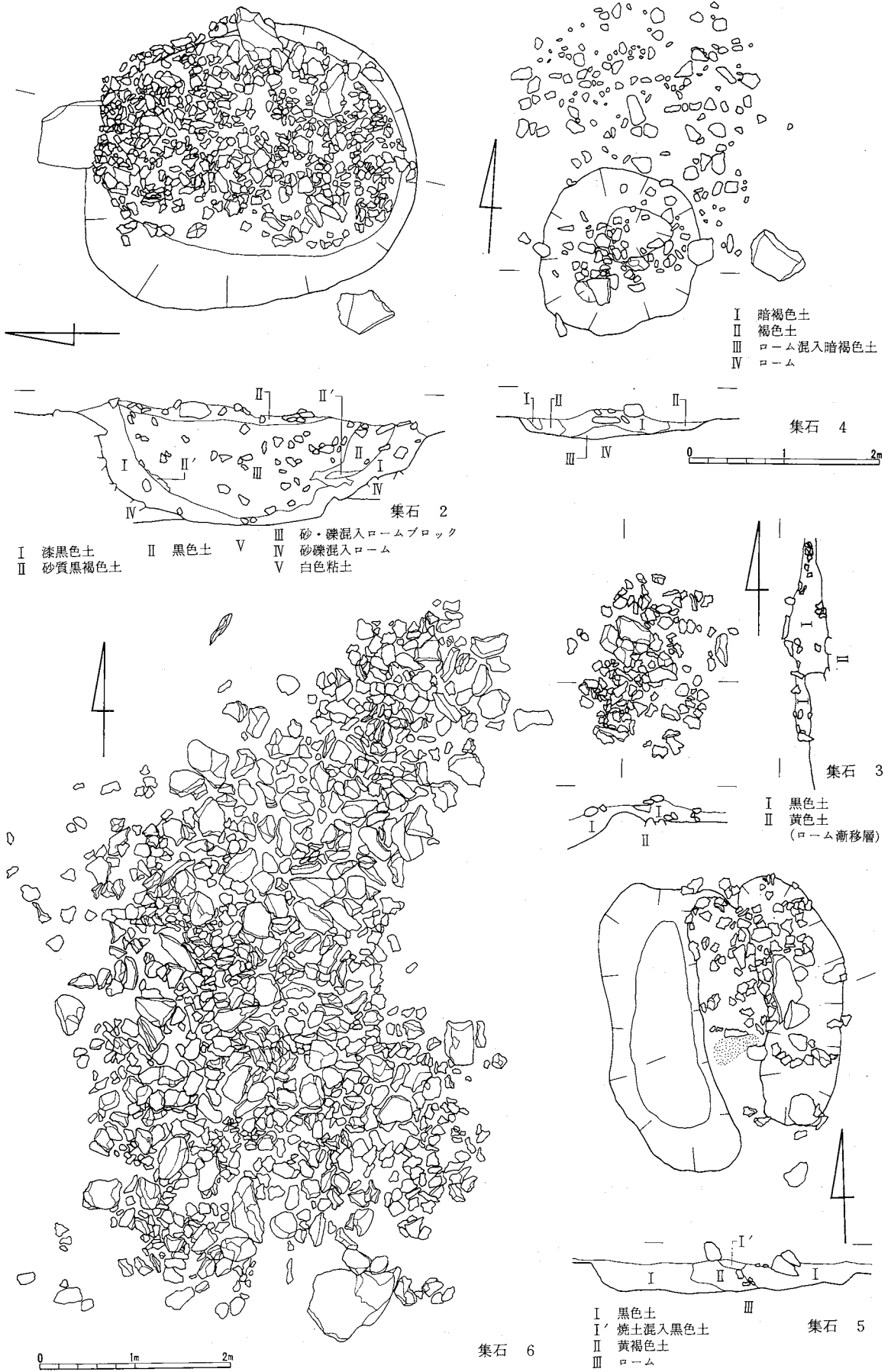
(2) 集石2 (挿図16、図25)

C区下段平坦面の尾根よりCFグリット他に所在する。黒土層中に径10~20cmの礫が集中して発見され、集石として捉えたが、断面観察からはロームマウンドと同様の性格と考える。規模は3.45×3.10mで深さ1.20mとなる。本遺構周辺の基盤は礫を多量に含む二次堆積ローム層で、マウンド部の礫混入ロームブロックは基盤ローム層と同一である。マウンド部周囲から底部の一部を除き黒土が帯状に入り込んでいるが、特に西側の黒土帯は幅広である。掘り下げ後一定期間を置いて埋め戻され、西側の黒土は埋め戻し後に流入したものと考える。

本遺構黒土層中と周辺から田戸上層式片や九兵衛尾根II式土器片(414~416)、縄文時代中期中葉深鉢片(417)が出土しているが、時期を決定することはできない。集石2から土壌301にかけては田戸式土器片が比較的多い。

(3) 集石3 (挿図16)

CF44グリットにあり尾根斜面下の自然礫群から僅かに離れて位置する。この礫群より上層の黒土層中に1.80×1.70mの範囲に礫が集中して認められた。ローム層までは50cmあるが、礫下に掘込みは存在しない。風倒木により基盤の礫が持ち上げられたかと思えたが、礫間より田戸系条痕文深鉢片、特殊磨石などの遺物が出土し、縄文早期末の遺構であるかも知れない。



挿図16 頭殿沢遺跡集石2・3・4・5・6 実測図(1:60)

(4) 集石4 (挿図16、図版10)

CH 41 グリットにあり、黒土層中で礫混入暗褐色土の高く盛り上がる部分が確認され、その下部から1.7×1.6mで深さ32cmの暗褐色土の落ち込みが認められた。断面観察では炭・焼土は認められず小規模なロームマウンドに似た様相を持ち、風倒木により基盤の礫層が持ち上げられた攪乱と思われる。上面で茅山式深鉢小片が出土している。時期は決定しがたい。

(5) 集石5 (挿図16、図18・25)

集石2に近接するCG46グリットにある。黒土層中に礫群が突出している部分があり、2号集石と同様に上面のロームが流され礫だけが残存したものかと思われた。然し、中央部に焼土があり、それを中心に礫が集まっていることが判明した。礫の下部は3.10×2.50mの凹穴となり、深さは33cmである。焼土東側の上部礫間には、九兵衛尾根II式土器片(418・419)、猪沢式浅鉢片(266)・深鉢片(藤ノ台型)1、緑泥岩剥片1、南壁外で特殊磨石片が出土した。礫が意識的に集められたかは不明であるが、本遺跡と無関係のものとする事もできない。

(6) 集石6 (挿図16)

CB47グリットを中心にあるが、黒土層中に礫群が10×4mの範囲で突出していた。西外縁部で早期山形文、上面で乳棒状石斧頭部片、中期初頭深鉢、浅鉢片各1を得ているが、断面観察では下部に掘り込みもなく人為的な可能性は少ない。北東から南東へ延びるが、ほぼ傾斜方向に沿っており、南側の自然流礫群より上層にあり、斜面にあった礫がなんらかの状況でこの位置へ集中していたことが考えられる。

(7) 集石7 (挿図17、図25)

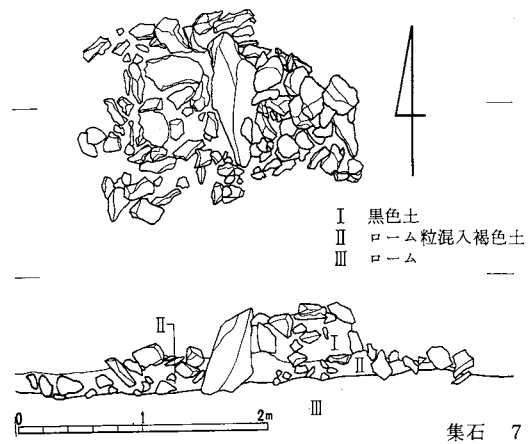
集石6の南に接している。2.2×1.5mの集石である。自然流礫群より30cm程盛り上がり、中央部の大石を中心に礫が集中する。礫間より九兵衛尾根II式深鉢片(420~426)を得ている。下部に掘り込みもなく、人為的なものでないとしたい。

(8) 集石8 (挿図17、図版10)

CD 41 グリットにある。黒土中で黒褐色土に礫を多量に混入するマウンド状部を確認し、東側に広範囲に繊維土器片が散乱するところから集石炉等の可能性を考え調査した。下部には2.60×2.10mの浅いローム面の落ち込みがみられ暗褐色土が入り込み、東側の礫を欠く部分に1.35×0.6m 深さ25cmのピットがみられ炭粉混入黒土が充満していた。凹穴の底面も荒れており、上層の礫はピットを掘った際のものとも考えたが、礫量の方が多く不合理で風倒木痕としたい。

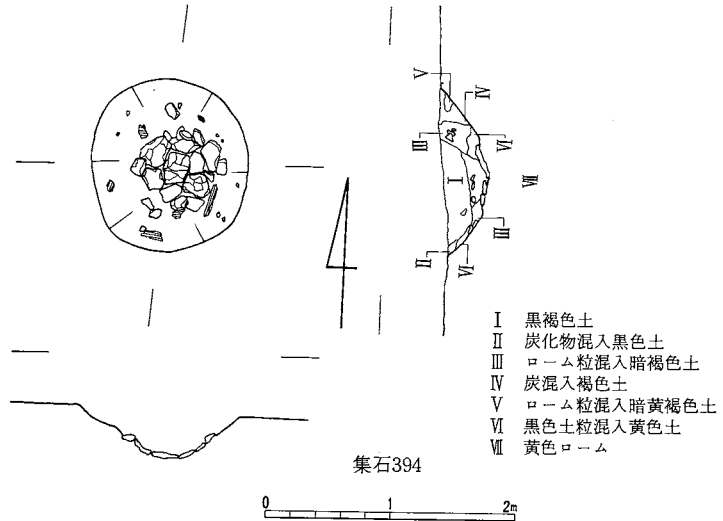
(9) 集石土壙394(集石炉) (挿図18、図29、図版12)

下段平坦面の御射山沢寄り先端部にある。1.35×1.26



挿図17 頭殿沢遺跡集石7・8 実測図(1:60)

mの円形を呈する炉址状遺構で、掘り方最深部まで42cmである。下層に木炭を多量に含む黒土が堆積し、底部には安山岩平石が整然と敷きつめられ、長さ25cm程の炭化材も認められた。敷石と地山のローム層との間には2~5cmのローム粒混入黒褐色土が入る。断面観察からは使用中止後短期間で自然埋没したとみられた。覆土内には礫径10~20cmが6個、10cm前後11個、5cm前後11個が検出されたが、殆ど、安山岩の平石か割石であり下層に多い。またI層中からは九兵衛尾根II式深鉢片4片(570~573)が出土している。縄文中期初頭九兵衛尾根II式期の屋外炉と考える。



挿図18 集石土壙394実測図

7) 土壙・ロームマウンド状土壙 (挿図1 9・20、図版9~12)

すでに刊行した『茅野市・原村その2』で、平安時代に関する土壙は報告してあるので、大部分にあたる縄文時代の関係分のみここに取上げる。

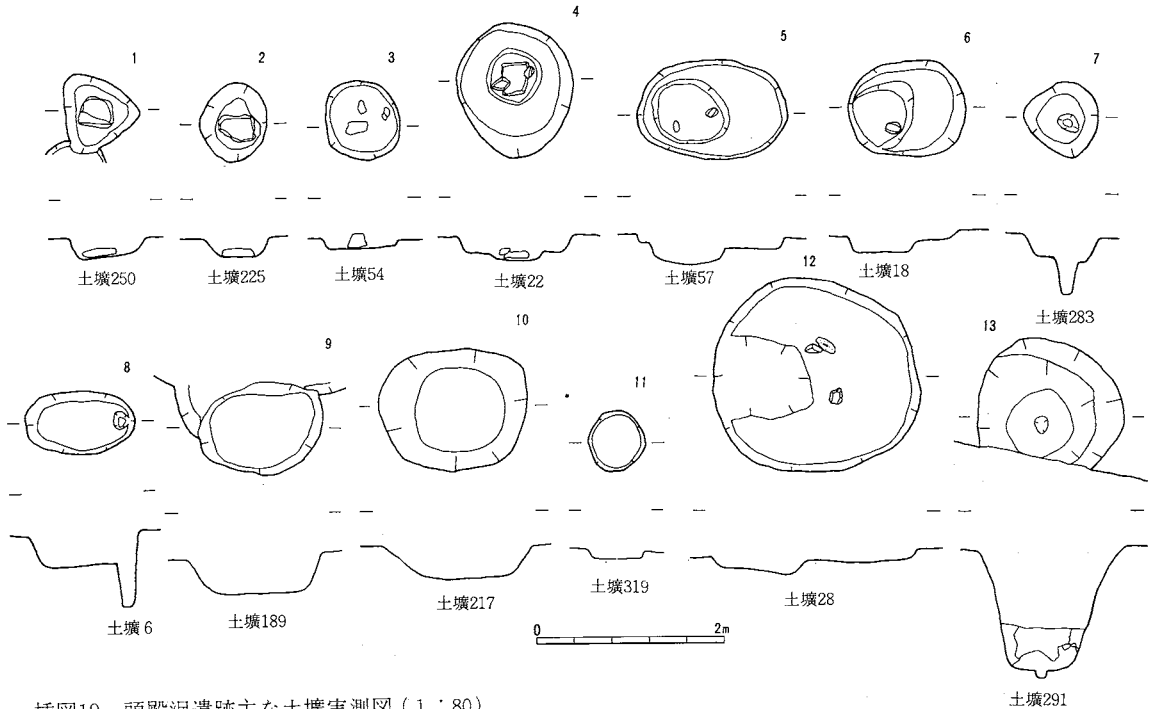
本遺跡のある地表は、縄文時代早期より中期・後期そしてさらに平安時代を経て、今日に至るまで断続的ではあるが人間活動の舞台とし生活が営なまれ、多くの痕跡を残してきたことは報告書の示すとうりである。だが、それにも増して自然の風水害やその他物理的な営力による地表面の侵食は相当激しかったことも想像される。このことは、調査時においても理解され気付かれ注意もしていたのであるが、発掘され出土する遺構は、それぞれ判別も困難で検討する余裕もなく、どうかという事実としてすべてを取上げざるを得ない状況であった。発掘記録や遺物の整理が進む中でこのことの検討が迫られ、自然的要因によりできたと思われる遺構は極力整理してきた。しかし、ロームマウンドについては、風倒木などの自然営力説、肥料穴説などいまだ結論をみない今日、厳選の上二・三の例にとどめ、今後の検討の素材として取上げておくことにした。

(1) 土壙 (挿図19)

土壙は表3に示すとうりであるが、総数215基を数える。大きさからみると計測のできた206基のうち最大が、土壙140で長軸3.1m、短軸1.27mの楕円形の例から、最小は土壙260のような径35cmの円形のものがあるが、長径1.0m以内が73基で35.4%、2.0m以内が124基の60.2%、3.0m以内は8基の3.9%とここへくると急に落ち、3.0m以上の土壙は前記の最大のもの1基0.5%となってしまう。径50cm以下は一・二基しかないので60cmから2.0m以内にほとんど納ってしまう。

平面プランは、多分に視覚的なものだが、A円形、B楕円形、C方形、D三角形、E不整形円形に分けられる。形態のつかめる216基のうち、円形48基の22.2%、楕円形148基68.5%と両者を合せると90%余となる。方形7基33%、三角形2基0.9%、不整形円形11基5.0%とあるが、これは偶然的なものか、後の変化であろう。平面プランは土壙の構築法や目的も多少窺える。土中を穿って必要な空間を求めた土壙は、たいした設計的なプランは要しなかったことであろう。

断面形態は壁が垂直におり、底部は平らで浅いたらい状のものが、145基67.1%で過半を占める。壁が斜めに下り底の深い摺鉢状のものはこれに次ぎ46基20.8%である。土壙18・22・57のごとく底面の一部



挿図19 頭殿沢遺跡主な土壙実測図 (1:80)

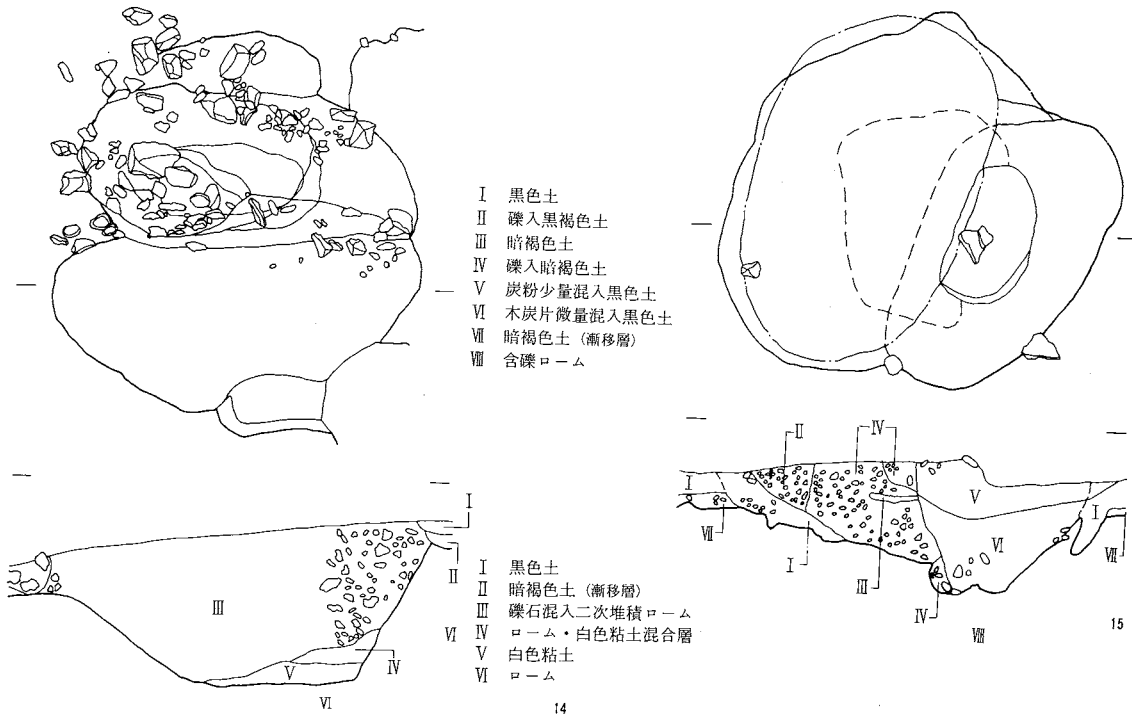
をさらに掘下げ二段底にしているものがある。また土壙6・283のごとく小さな深いピットを穿っているものもある。ともに10基で4.6%づつある。土壙内には樹木の根がはびこり、この痕跡のみられるものも多く、人工的な操作によりできた形態とは見分けの困難なものであったが、ここでは人工的な形態と考えられるものを選定した。

土壙9・69・244のごとく明らかに礫や石が流れこんだもの、あるいは礫層中に構築したとわかるものがあるが、土壙7・8・19・20・28のごとく上部に平らな石を覆土上に乗せているもの、土壙5・22・40・54・225のごとく底部に据えられているような状態のものがある。このような土壙は墓壙として考えられる遺構として報告されている例がある。

内部に炭・灰など多く検出する土壙は33基13.6%ある。土壙217では柴栗の炭化したものが検出された。これらの中には採集された栗・くるみなどの食糧の貯蔵穴もあろう。土器片を検出したものは、全体の42.8%、石器・土製品などが検出された例は15.2%あり、この中には土壙182・252・319のごとき完形ないし半完形の土器が出土したものがある。特に189のように土壙の床面に新道式にみられる角押文のある浅鉢が伏せた状態で検出されたもの、182や319のように九兵衛尾根II式の土器が横倒しの状態で出土したのが注目されよう。人骨や骨片・骨粉の出土した遺構は一つもみあたらなかった。

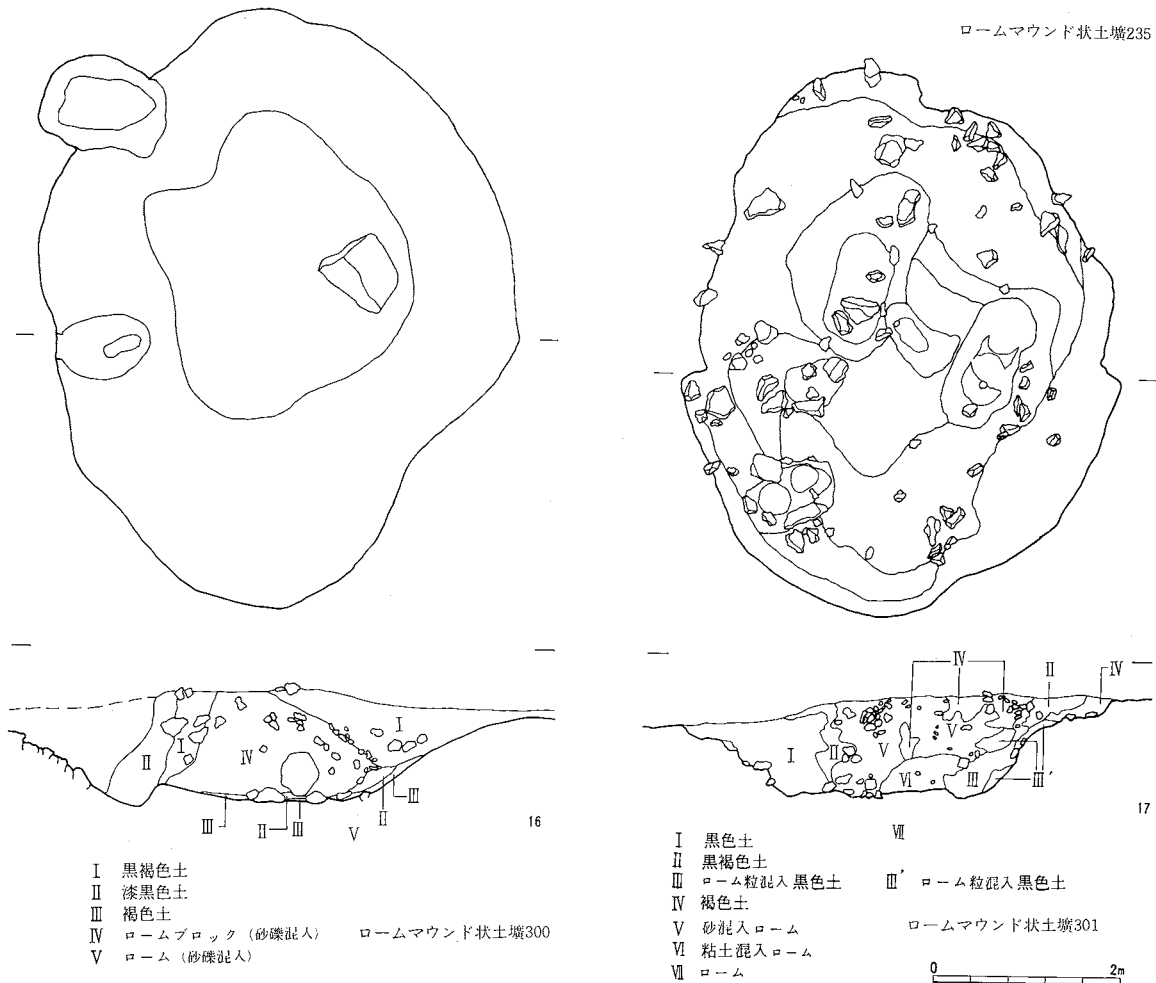
各土壙の検討から墓壙的なもの、貯蔵穴的なもの、狩猟の落とし穴等々土壙の機能的な面までみたいのであるが、今のところ決定を下すものは、構造的にも出土する遺物からも裏付けられるものはない。強いていえば、大きさ形態から墓壙的なものが大部分である。今後の検討を待ちたい。

土壙の構築された時期は出土土器により一応の推定はできる。推定できるのは100基で全体の41.2%にあたる。うち早期11%、中期初頭62.0%、中期中葉24.0%、後期2%である。これらの分布状態をみると、早期は早期土器片の集中的にみられるC区の窪地に集中し、中期はA区・B区にわたる尾根頂上部に密集してみられる。これは当時の集落のあり方と関連して考えられよう。この時期に関連した集石群も多く展開している。この間に早期の土壙が縫うように散在している。中期は遺構も遺物も頭殿沢遺跡において質量とも大半を占めている。土壙もこの時期のものは合わせて86%になる。住居址をみると尾根を囲むよう集落を営んでいる。中期をさらに初頭と中葉に分けてみると初頭の住居址6基、中葉3基となる。土壙もこ



ロームマウンド状土壌228

ロームマウンド状土壌235



挿図20 頭殿沢遺跡主なロームマウンド状土壌実測図(1:80)

れに関連した比率を示している。このような住居址と土壌との関連や土壌自体の使用目的等、詳細な検討は今後の研究課題としておきたい。

(2) ロームマウンド状土壌 (挿図20、図版9)

この種の遺構は全体で28基あり、このうち土壌235・300・301をあげてみたい。

土壌 235 遺跡の東南隅に当る一部礫群中にかかる位置にあり、規模は南北3.8m、東西2.3m、深さ1.0mに達する楕円形のロームマウンドである。東側は土壌状の遺構に切られている。上面はもり上りまわりの黒色土は底面約20cmの深さ、幅約30cmほどで暗褐色の土塊に接し、さらに四方からクサビ状にマウンドに向かって斜めに入りこんでおり、完全にマウンド真下まで続かず、マウンド真下は黒土の塊となって切れぎれに挟みこまれている。マウンドは下層に砂質暗褐色土を包むように、鉄分の多い赤褐色土・粘質の褐色土が二重に覆い、上部に礫混入暗褐色土が重なっている。遺物はマウンド部にはなく、東側の土壌状落ちこみの覆土から炭粉が少量混じり、繊維を含む早期土器片が数片検出された。

土壌 300 遺跡の南側に当る下段のテラス上にあり、南北6.3m、東西5.5m、深さ1.15mの規模を持つ大形のロームマウンドである。マウンドをとりまく黒褐色土は幅約1.0mでマウンドに接するところは深さ約1.0mに達する。マウンドはわずかにすり上りを見せ、ローム塊中には小礫を多量に含んでいる。下部には褐色土や漆黒土が入りこんでいる。遺物は周溝部にあたる黒褐色土中に多く、早期・中期・後期に及ぶ土器片が混在していた。

土壌 301 C区の西寄りの傾斜地の付根中央部付近、礫の多い場所にある。規模は南北5.8m、東西4.5mで中心の深さ1.0mに達する楕円形の大形ロームマウンドである。上面はややもり上りまわりの黒色土は西側は厚く約80cm、まじりのない黒色土であり、東側は薄く(20cm~50cm)ローム粒や暗褐色土が混じった黒色土である。マウンドに向い斜めに入りこんでいるが、真下までは達せず真下は粘土質ロームである。マウンドの土塊は砂質でところどころ褐色の土塊も含まれている。壙内には四つの長径約50cm、深さ20cmほどの楕円形のピットが存在する。遺物は周囲の黒色土から早期・中期初頭・後期の土器片が数片検出された。

4 まとめ

1) 集落 (挿図1・4)

縄文時代早期では立野式から茅山式までの長期間にわたる遺物があり、本遺跡で断続的に生活が営まれたことを示している。立野式期に所属すると考えた集石(炉)1は赤坂遺跡⁽¹⁾、細ヶ谷B遺跡⁽²⁾にみられるものと類似し、押型文期の生活の中心が御射山沢寄りの下段テラス部にあったことを示している。茅山式期では土壌228・235の脇に掘り込まれた深いピットがあるが、遺物はSTA 268+90を中心に用地内東側に集中する傾向をみせた。いずれにしても、早期には仮泊地として利用されている。

縄文時代中期初頭には九兵衛尾根II式期の6軒の住居が確認されているが、用地外に残存する可能性が強い。遺物から14・15号住居は初期段階の原沢式期に営まれた最初の住居で5・10・11・12号住居はII式の最盛期の住居と考えられる。いずれも、尾根斜面か裾部を選んでおり、本遺跡の縄文中期中葉の住居が平坦部に立地するのと対照的である。近接する遺跡でも、この傾向は感じられる。原沢式期の遺物は4号住居西側の取付道路付根部と1号住居周辺に集中する傾向だが、14・15号住居から尾根をこえて廃棄されたとは考えにくい。近くに住居があるのであろうか。尾根頂部での遺物・土壌は多く、この空間が貯蔵穴等を設ける場として利用されている。また、屋外炉の性格をもつ土壌394は櫛田第IV遺跡⁽³⁾に2基の類例を見る。関東地方では既に幾つかの遺跡で同様遺構が確認されているが、県下では初めての発見例である。九兵衛尾根II

式でも盛期の可能性が強く、本遺跡の場合、4軒ある住居の中央、尾根頂部ではなく御射山沢寄りに位置していることから、祭祀的性格より水の使用と結びついた行為、例えば、集落の共同作業による食料保存のための煮沸処理施設ということも考えられよう。

縄文時代中期中葉では弥生式期の3・4号・9号旧住、新道式期の9号新住が存在するが、集落構造の解明は用地外の調査が行われた段階で始めて可能となろう。今後を期待したい。

2) 土 器

(1) 縄文時代早期・前期 (図1～8、図版14～20)

撚糸文・縄文系土器：中部地方の本系土器群は、発見されても明確な遺構と伴出する例がなく、小破片であることから詳述されず従来あまり扱われてはこなかった。樋沢⁽⁴⁾・細久保⁽⁵⁾等の押型文を出土する遺跡でも発見はされているが、確実に同時期のものかは不明である。本遺跡の遺物についてみると、1～3は外面に艶がみられ研がれている可能性があることや、節が大きい、条間隔があくこと等からも夏島⁽⁶⁾式の特徴に類似する。縦方向に施文する撚糸文は、伊那市西春近細ヶ谷B遺跡⁽⁷⁾、塩尻市ぬか塚遺跡⁽⁸⁾、松本市岡田合戦場遺跡⁽⁹⁾、岡谷市洩矢遺跡⁽¹⁰⁾等があるが、これらには繊維が含まれていて当遺跡とは様相が異なる。一方、横方向に施文する撚糸文は伊那市西春近北丘B遺跡⁽¹¹⁾、同百駄刈遺跡⁽¹²⁾、諏訪市千鹿頭社遺跡に同種のがみられるが詳述されていないため、比較することができない。土器への繊維の混入は、当遺跡では横方向に施文する撚糸文(2種)からであるのに対し、他では縦方向の撚糸文からすでに始まっている。このような現象は中部地方特有なものかも知れないが、繊維土器が後出的要素であるならば、本遺跡の撚糸文と他遺跡のそれとは、時間的な差として捉えることができよう。他方、縄文系土器は他遺跡と比較する際に、分類上後出する土器と一括されて扱われているため、どの時期に属するかが不明で記述が曖昧なこともあり抽出できなかった。当遺跡の分布状態は散発的で法則性を見出せず、層位的にも十分把握できないので帰属する時期は不明だが、胎土がV群1類に類似するものがあることを記しておく。いずれにしろ今後十分検討されなければならない問題であろう。

押型文土器：III群土器が沢式、IV群土器が樋沢式、V群土器が立野式に各々類似する特徴をもっているが、なかでもV群土器が比較的まとまって出土し、1類と4類の分布が異なる点が注意される。百駄刈遺跡では、格子目文と市松文が主体であり、当遺跡の分布が異なる点を時間の差とすれば、4類土器は百駄刈遺跡の格子目文と市松文の間を埋めるものとすることができよう。

沈線文系土器：VI群1類が田戸下層式、同2類が田戸上層式に類似する特徴をもっている。以下少し詳しく述べる。田戸下層式の型式学的特徴は、①口唇部が外ソギ状になる。②器面研磨後沈線区画内に貝殻腹縁、竹管等を充填する。③太い沈線、細い沈線による平行沈線、幾何学文様を構成する。④天狗の鼻状の尖底部を有す等であり、1類土器93・95は口唇部が外ソギ状をなさないが大略田戸下層式の特徴と一致する。伴出土器の内容等が複雑だが、特に貝殻腹縁を施す類例は、下高井郡木島平村三牧原遺跡⁽¹⁴⁾、小県郡真田町富沢畑遺跡⁽¹⁵⁾、伊那市浜弓場遺跡⁽¹⁶⁾、茅野市御座岩遺跡⁽¹⁷⁾、塩尻市古山遺跡⁽¹⁸⁾、松本市中山遺跡⁽¹⁹⁾、更級郡大岡村鍋久保遺跡⁽²⁰⁾等があり、1類土器93・95は鍋久保遺跡2群2類に比定できる。2類土器は半截竹管状工具で平行沈線を引く手法で県内では類例がない。これらは夏島⁽²¹⁾貝塚のIV式期、東方第13遺跡⁽²²⁾の3群2類土器と整形手法や繊維の含有量の度合等が酷似する。3類土器は繊維が混入するものとしなないものがあり、田戸下層式から野島式のいずれかの型式と思われる。

貝殻腹縁文土器：VII・VIII群土器が含まれ、VII群土器は田戸上層式、VIII群土器が茅山上層式に類似する特徴をもっている。田戸上層式については、田戸遺跡⁽²³⁾、夏島貝塚等で層位的に把握され、少なくとも下層式との間に時間差があるものと認識できる。型式内容については、徐々に資料が蓄積されてきているが内

容はまだ明らかとは言えない。また併行期である常世式⁽²⁴⁾についても十分な内容を持っている訳ではない。田戸上層式の型式学的特徴は、①貝殻腹縁文が発達する。②繊維が混入する。③文様一般の感じは鋭さに欠け、曲線的な沈線、隆線文が採用される等でVII群土器はこれらに類似する特徴をもつ。駒ヶ根市舟山遺跡の第IV類F、鍋久保遺跡の第2群1類に比定できる。VIII群土器は繊維の含有量が多くなり、条痕が発達⁽²⁵⁾することからも茅山上層式の特徴をもっている。また共伴すると思われる粕畑式土器も出土しており、分布域もほぼ同一であることから、伊那市西春近山の根遺跡例に比定できると思われる。

条痕文土器：条痕自体は、田戸上層式から発達する手法⁽²⁶⁾であり、型式分類の基準でもある。本遺跡でも田戸上層式に類似する土器群からは条痕が基本的につけられている。ここで対象とした条痕は前記したもの以外であり、XII・XIII群土器の絡条体条痕とそれ以外の条痕である。特にXII・XIII群土器についてみることにする。器形がおよそ判明できるのは136一個体のみである。口唇部が内側にやや内傾し、砲弾形を呈する。XIII群土器は、内外面に絡条体条痕を施し、口辺部に隆帯を貼りつけた後に、絡条体を押捺している。本遺跡では、田戸上層式以後の土器群が判然としないこと、器面調整を行う工具が絡条体であること等を総合すれば、田戸上層式以後茅山上層式以前のいずれかの時期のものと考えられる。同種のもは、茅野市棚畑遺跡⁽²⁸⁾の第4類Aにみられる。

無文土器：擦痕が顕著なものがあり、繊維が混入しているかは不明であるが、色調等から条痕文土器のいずれかに相当すると考えられるが、詳細は不明である。

羽状縄文土器：共伴する他の土器はないと思われる。無繊維で内外面の調整は入念に行われていることや細い紐線が貼られていることなどから前期後葉と思われる。

以上土器の型式学的特徴を提示し、頭殿沢遺跡の編年の位置付けを試みたが、十分な検討ができなかったものもある。中部地方撚糸文系土器の編年の確立と絡条体条痕あるいは圧痕がつけられている土器群の性格づけと、編年の位置については今後検討されなければならない問題であるとする。

(2) 縄文時代中期初頭

各型式の特徴については、2) - (7)の項で概略を述べている。ここでは代表例を他遺跡と比較検討することによってその性格を把握したい。

A 1型 209は堂地狐窪遺跡、原沢遺跡⁽²⁹⁾に類例を求め得る。後者は弧状隆帯区画内に単沈線文が用いられ、より九兵衛尾根II式へ接近した様相を持つが、半隆起線等の胴部施文手法は共通する。船霊社遺跡にも破片で存在する。185は同遺跡土器No.5が単沈線でB字文を描出するのに対し、半隆起線であり、その先駆をなすと考える。同土器No.299が同一手法である。この原沢式期にはB字文や、186に施文されるU字文が相当の頻度で用いられる。この時期に北陸地方からの影響を受け、土着の土器にその手法を取り入れている証処であろう。

A 2型 187は梶田第IV遺跡土器156に近似する。203・211は類例をみないが、特に、後者は平出第3類Aの胎土に類似している。現在のところ、平出第3類Aの最古型は九兵衛尾根II式の終末期である船霊社遺跡11号住出土土器No.38と考えるが、203の胴部区画内の斜格子文が篋切沈線に変化したものとみられる。後続する猪沢式期には261の型となり安定する。従来、平出第3類Aの祖形を梨久保式或いは九兵衛尾根I式に求める考え方が種々発表されてきたが、時間的な距離がありすぎ、間に別形式を挟むため無理がある。本型が九兵衛尾根II式の盛期まで残存した確証はないが、前記の型に最も近い時期の資料として注目されよう。

A 3型 213は船霊社遺跡土器No.52に近似する。A 4型 186の類例は知らない。

B 1型 205の施文手法でこの器形となるものは類例を知らない。214～215は雑な整形で土着の土器か

もしれないが、北裏C I式1類⁶³に類似するが、B 3型を模した可能性が強い。

B 2型 202は大石遺跡18号住埋甕炉及び船靈社に類例をみる。B 3型 216・221～223は清水ノ上貝塚3群第1類Aに胴部片が、Bに口縁部が分離されている⁶⁴。船靈社遺跡14号住に伴出するが、原沢式期である。B 4型 183・219は柏窪遺跡⁶⁵に類例がある。

C 1型 631～632は曾利遺跡⁶⁶14号土壙で原沢式と共伴するものに類例がある。その胴部から類推すると、575～581がこれらの胴部であって良い。227は宮ノ原貝塚第7群b中の地文に縄文を付す土器19に近い。756は口縁に連続爪形・交互刺突文を付し、暗赤褐色で多量の金雲母を含み、前者に類例する。

C 2型 623～630・633～634は清水ノ上貝塚第3群1類Aに該当し、住居址内出土が皆無であることから、原沢式期に伴出する型で、九兵衛尾根II式の少なくとも最盛期には削減していると考えられる。

C 3型 224は頸部に連続爪形文のある棒状把手を付すなど九兵衛尾根I式の手法を強く残している。鳥頭状の口縁部把手は386や曾利遺跡34号住居址例の先駆とみられる。

以上の土器群は一部に沈線を施すものもあるが、多くは細いもので、九兵衛尾根I式系の最終段階・原沢式期に位置づけられる。本遺跡での分布状況はA 2・4、B 4、C 1型を除いて他の大部分は尾根頂部の農道北側に片寄り、A 1・3、B 1・3は1号住周辺と4号住西側に集中した。勿論、本格的な九兵衛尾根II式も相当量出土しているため簡単に結論を出すことは危険であるが、他遺跡の状況も勘案すると原沢式期、少なくとも14・15号住居址の床・生活面遺物の時期までに限定されるものと考えられる。東海地方との関連を持つB型の土器群は胎土からみると移入品であるが、個体比率で見るとA・C型に対し、相当高い。本遺跡に限られるかもしれないが、この期のセットの一部を構成し、船元II式のような客体的存在とは異なる。

上記土器群は遺構外を含め全資料に近い形で図示した。実際には、下記の単沈線文系の九兵衛尾根II式が90%以上を占める。口縁形で見るとF型が60%、D・E型などのキャリパー状口縁となるものが40%で胴部から直立する口縁となるものは206など数点にすぎない。底部は80%が屈折底乃至直立に近いもので占める。胴部文様は単沈線によるY字状懸垂文の比重が高いようにみられた。

D 型 232のように口縁が頸部に交互刺突文帯を持つものは、船靈社遺跡では胴部のY字状懸垂文の未発達な初期の深鉢にみられ、同懸垂文を持つ最盛期では部分的に施文される特徴がある。

E 1型 182は原沢式の弧状隆帯区画手法を残し、177・199はそれが消滅している。ともに初期とみられるが、前者をa、後者をbとして細分する。196・228は本型の胴部であるが原沢式の色彩が濃い。

E 2型 194は195・236より若干先行すると考えるため、それぞれa・bと細分するが、この器形となるものは船靈社遺跡にはない。大石遺跡にあり、口縁突起部や頸部に橋状把手をつける。

F 1型 船靈社遺跡土器No.55は初期とみられaに、175は隆帯によるY字懸垂文の三角区画が大きく、内部に文様を充填するものでbに、190は175とともに盛期と思われるcに、206は頸部に楕円区画の祖形ともみられる横帯を持ち、胴部隆帯懸垂文も猪沢式への傾斜が始まっていると考えるためdに細分したい。

G 1型 198は最盛期型で、口唇部や部分的な角押文を付す。H 3型 189は大石遺跡に例をみる。

I 型 尾根頂部西側の土壙331を中心とする径4mの範囲に225・240・241が集中し、他は尾根の南斜面に散在する。底部では10数個体存在する。九兵衛尾根II式の終末期に出現する型であるが、この時期の住居が用地外に存在する可能性がある。240は船靈社遺跡土器232・373の退化型であろう。茅野和田遺跡西5号特殊遺構にも類例をみるが、共伴したとする有孔鋳付土器は上で出土し後出であろう⁶⁸。

J 型 751～753は繊細なRL縄文を地文に角押文を多用する。751は429のように部分的に施文されたものの可能性も強い。然し、752～753は他の同一個体片で見ると、F 1型の器形で頸部に6条の細い角

押文を横走させ、胴部に懸垂する隆帯に沿っても同文を施文する。757は2条の同文を横走させC2型と同系の土器であるが、垂型として含めておく。I型とともに貉沢への移行に手懸りとなる例である。

浅鉢 A1型 192・251は九兵衛尾根I式期の大石遺跡Ia型に類似するが、前記の特徴を持ち分別されなければならない。10号住炉内より1片と192の一部が14号住床面出土で、同II式の初期まで存続していることは確実である。船霊社遺跡1号は原沢式期であるが、ここにもある。本型は原沢式期から九兵衛尾根II式の下げても盛期までに使用されたものであろう。櫛田第IV遺跡土器No.287は本型に属し、同遺跡G2類は大石遺跡Ia型と本型に分離される。また、中西充氏がG1・G2類は勝坂式の古い段階まで存続するとされるが、G1類に該当する浅鉢と阿玉台Ib深鉢が共伴したとされる月見松59号住例は重複する61号住との切り合い関係が不明確であったもので、後者は61号住の遺物で誤認しているものと考えられる。59号住は九兵衛尾根I式の後半期であろう。勝坂期の住居で破片で入っているものは混入とみられ、船霊社ではG2類に該当する小片があるが、九兵衛尾根I式に伴った可能性が強い。

A2型 201は九兵衛尾根II式の初期に属する大石遺跡42号住に類例を見る。本例は深鉢A型の多かった地点での出土であり、11号住床面からも小片が出土している。船霊社遺跡にはないが、九兵衛尾根II式の前半にA1型と共存したと考えて良い。

B1型 244。B2型 197・245。197は船霊社遺跡1号住にあり、原沢式期である。爪形文からいっても九兵衛尾根II式の初期までの型と考える。

C1型 179・200・247がある。179は10号住炉内より一部が出土し、C2・D型とともに盛期に中心がある型であろう。

D1型 184・246は船霊社遺跡土器71の退化したものである。

E型 180・248は船霊社遺跡にはない。

F型 181は端部を平らに整形するものであり、中期初頭の可能性もあるが貉沢式浅鉢の769・772の断面形に近づいている。

以上、原沢式・九兵衛尾根II式の初期・盛期・終末期と分けて考えてきたが多分に予察的なもので、独断であろう。原沢式に伴う単沈線文系が本遺跡で分離されていないなど問題が残されている。今後、他遺跡の検討・資料の充実を待つて解決して行かなければならないと思う。

(3) 縄文時代中期中葉

貉沢式 1類は大石遺跡6号住・18号住出土の沈線文を付す大形深鉢例以外に類例を知らない。2類は4号住の255も断面三角形の隆帯を持ち、阿玉台Ibに比定されよう。4類は藤ノ台遺跡、新木東台遺跡に類例が見られ阿玉台I式とされる。本遺跡では761が楕円区画となるが、264、762は貉沢式に見られない文様構成である。然し、胎土・整形等5類と差はなく、それとセットをなすものと思われる。5類は4号住の主体をなす土器で252～254の3点がある。この土器組成に類似したセットを持つのは茅野和田遺跡西17号住で、272に類似する深鉢を伴う。9号住出土258にみる渦文は月見松63号住に類例を見る。典型的な貉沢式とみて良いと思われる。6類とした浅鉢の内a～e種は貉沢式の各段階に伴うものであるが、c種は大石遺跡にも類例がない型で4号住床面の深鉢253・254とセットをなすことが確認されたことは好運であった。f種は同遺跡21号住に類例をみるが、新道式とともに上層で出土しており、幅広の口縁・紐線文とも新道式浅鉢では後出段階のものにみられ、新道式まで降ることは確実である。

新道式 9号住床面出土の259は新道式でも特異な型で、口縁部第1文様帯は大石遺跡21号住出土図

179-4の区画手法に、胴部は同15号住出土図162-12などに類似し、同遺跡新道式深鉢I型と対比できる。然し、同型が連続爪形文と角押文を混用するに対し、本例は角押文のみで施文され、長胴となり独立した型とみられる。同址床面で出土した一部の273は、同II a型に対比され、方形区画文を多用する274は同VI a型に該当し、いわゆる後田原式の代表例とされて来た型である。後田原式を構成する個々の土器については再検討されるべき時期に来ているが、この後田原型は大石遺跡21号住下層で見られ新道式の前半であることは認めて良い。277は大石遺跡同VII C型、279は同II a'型に対比されよう。

10類中781は明らかに移入された土器で、上山田貝塚第III様式第3型式の特徴と完全に符号する。上山田古式ともされるもので、大石遺跡22号住床面で貉沢式から新道式への移行期の土器と同じ第III様式第4型式に比定される小形深鉢が伴出する。また、月見松遺跡65号住でも同第4型式が貉沢式の新しい段階と共伴している。本遺跡において伴出関係を確定することは出来ないが、浅鉢263はこの移行期の好資料で舟形の器形も貉沢式からこの時期に盛行するものである。この浅鉢の時期の可能性が強い。

従って、貉沢式期の終末から新道式への移行期中信地方は北陸からの相当強い影響を受け入れ、貉沢式にはない半隆起線による施文手法を模倣し、新道式期の土器セットで相当の比重をしめる783~787の型として土着させていったものと考えられる。新道式が北陸へ濃厚な影響を与えていることが指摘されているが、その逆の流れも強く存在し、上山田貝塚第III様式の各型式の発展に応じ、中信地方のこの型の土器群も変化して行くと思われる。

(4) 縄文時代後期

後期の遺構は確認されなかったように、ここから発見される土器の量も少なく、変化も乏しい。遺跡における土器のあり方は全く短期間小人数の存在しか考えられない。八ヶ岳西南麓の縄文時代は、今まで調査され研究された結果、中期に爆発的に繁栄し、質量とも豊富に足跡を残した各遺跡とも、中期が終るとほとんど姿を消し、晩期に至るとほんのわずかの痕跡をとどめるに過ぎないことは定説化している。頭殿沢遺跡についても明瞭にこのことを示している。土器は中期終末から継続した中に生まれた後期最初頭から前半にわたるもので後期中葉には全く姿を消している。一般に後期の土器は精製・粗製の区分、器種の分岐などあげられるが、ここでは量が少ないこともあり、深鉢土器以外他の器種は認めにくい。また、精製・粗製土器の区別もしがたく、ただ非常に胎土が密となり、丁寧な調整が施された土器(790・794・798・802)が現われていることは事実である。型式の上でも後期土器は地域性があまり認められず、関東の編年型式に包含されてしまうことも通例であるが、ここでも他地域との関係を考えられるような特徴的な資料には恵まれていない。

注1 遮那藤麻呂「上伊那郡赤坂遺跡における押型文土器と遺構」『長野県考古学会誌』16 1973

2 今村善興・丸山敏一郎他「赤坂遺跡」『長野県中央道報告-伊那市西春近』長野県教委 1973

3 『棚田遺跡群』八王子市資料刊行会 1979

4 戸沢充則「樋沢押型文遺跡」『石器時代』2 1955

5 松沢亜生「細久保遺跡の押型文土器」『石器時代』4 1957

6 この用語は、比定できるという意味では使用していない。あくまでも型式学的特徴が似ていることで使用している。以下この用語は、これに従い用いている。

7 今村善興・宮沢恒之他「細ヶ谷B遺跡」『長野県中央道報告-伊那市西春近』長野県教委 1973

8 藤沢宗平他「ぬか塚遺跡」『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻歴史上 1973

第II章 調査遺跡

- 9 藤沢宗平他「岡田合戦場」『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻歴史上 1973
- 10 樋口昇一他「洩矢遺跡」『長野県中央道報告—岡谷市その4』長野県教委 1980
- 11 今村善興・唐木孝雄他「北丘B遺跡」『長野県中央道報告—伊那市春近』長野県教委 1973
- 12 今村善興・宮沢恒之他「百駄刈遺跡」『長野県中央道報告—伊那市西春近』長野県教委 1973
- 13 今村善興・小林正春他「千鹿頭社遺跡」『長野県中央道報告—諏訪その3』長野県教委 1975
- 14 広瀬昭広『三枚原遺跡』木島平村教委 1977
- 15 森嶋稔・川上元他「富沢畑遺跡」『菅平の古代文化』菅平研究会叢書5 1970
- 16 友野良一他『浜弓場遺跡』伊那市教委 1973
- 17 宮坂英式・宮坂虎次『蓼科』尖石考古博物館研究報告叢書5 1966
- 18 藤沢宗平他「古山遺跡」以下注8に同じ
- 19 藤沢宗平「中山遺跡」、以下注8に同じ
- 20 森嶋稔・笹沢浩「鍋久保遺跡の調査」『長野県考古学会誌』23・24号 1976
- 21 杉原莊介・芹沢長介「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」『明治大学文学部研究報告 考古学』第二冊 1957
- 22 伊藤郭「東方第13遺跡」『港北ニュータウン地域内文化財調査報告』III 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1971
- 23 赤星直忠「横須賀市田戸先史時代遺跡調査」『史前学雑誌』7-6 1935
- 24 中村孝三郎・小片保「室谷洞窟」『岡岡科学博物館研究調査報告』第6冊 1964
- 25 林茂樹『舟山遺跡緊急発掘調査報告書』駒ヶ根市教委 1971
- 26 今村善興・唐木孝雄他「山の根遺跡」『長野県中央道報告—伊那市西春近』長野県教委 1973
- 27 三戸式段階から条痕は使用されているが未発達である。条痕自体は原則として、含繊維→器面調整の必然性→条痕の発達という相関関係において成り立つもので、田戸下層式併行の三戸式や、田戸式に影響された三戸式では、条痕が用いられる手法は後出的であるといえる。
- 28 宮坂英式他『棚畑遺跡』茅野市教委 1971
- 29 今村善興・伴信夫「堂地狐窪遺跡」『長野県中央道報告—箕輪町地区』長野県教委 1974
- 30 戸沢充則「原沢遺跡」『岡谷市史—歴史編上巻』岡谷市教委 1973
- 31 青沼博之・島田哲男他「船笠社遺跡」『長野県中央道報告—岡谷市その4』長野県教委 1980
- 32 注3に同じ
- 33 増子康真『岐阜県八百津町南森遺跡発掘調査報告』八百津町教委 1980
- 34 伴信夫・土屋積他「大石遺跡」『長野県中央道報告—茅野市・原村その1 富士見町その2』長野県教委 1976
- 35 杉崎章他『清水ノ上貝塚』愛知県南知多町教委 1976
- 36 「静岡県文化財調査報告書」第16集 静岡県教委 1977
- 37 武藤雄六他「曾利—第3・4・5次発掘調査報告書」富士見町教委 1978
- 38 宮坂英式他『茅野和田遺跡』茅野市教委 1960
- 39 注3に同じ
- 40 宮沢恒之・速那藤麻呂他「月見松遺跡」『長野県中央道報告—伊那市西春近』長野県教委 1973
- 41 西村正衛「千葉県小見川町阿玉台貝塚」『学術研究』19 早稲田大学教育学部 1970
- 42 川口正幸・桐生直彦「町田市藤の台遺跡の調査」『考古学ジャーナル』163 1979
- 43 上守秀明他『新木東台遺跡』我孫市教委 1979
- 44 注38に同じ
- 45 注40に同じ
- 46 高堀勝喜・平口哲夫『上山田貝塚』石川県考古学研究会 1969

引用・参考文献

- 安孫子昭二『平尾遺跡発掘調査報告1』南多摩郡平尾遺跡調査会 1971
大野政雄・佐藤達夫「岐阜県沢遺跡調査予報」『考古学雑誌』53-2 1967

- 岡本勇・戸沢充則「縄文文化の発展と地域性」『日本の考古学』II 1965
 岡本勇「茅山貝塚」『横須賀市博物館研究報告』1 1957
 岡本勇「三浦市大浦山遺跡」『横須賀市博物館研究報告』4 1960
 岡本勇「三浦市鶴ヶ島台遺跡」『横須賀市博物館研究報告』5 1961
 岡本勇「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器(一)」『横須賀市博物館研究報告』6 1962
 森嶋絵・百瀬新治他『編年』千曲川水系古代文化研究所 1980
 原田昌幸他『藤の台遺跡II』藤の台遺跡調査会 1980
 松島透「長野県立野遺跡の捺型文土器」『石器時代』4 1957

3) 石器 (図38~48, 図版28~30)

本遺跡からは、総数1,271点の石器が出土した。若干の後期の土器片を出土しているが、早期から中期の遺構・遺物が多く、出土石器もほぼこの時期に属するものと思われる。ここでは、その機能や形態・石質等を考慮し、便宜的に大形石器と小形石器とに分け検討・考察することにした。器種毎の遺構及び遺構外出土状況は表1にまとめてある。

表1 遺構別出土石器一覧表

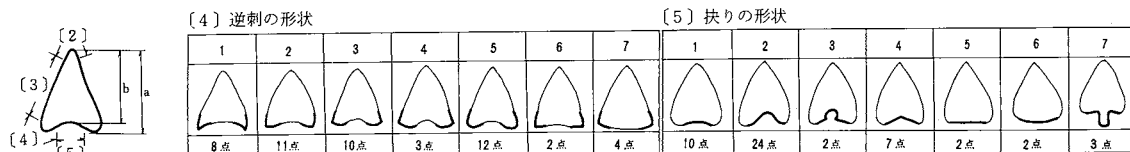
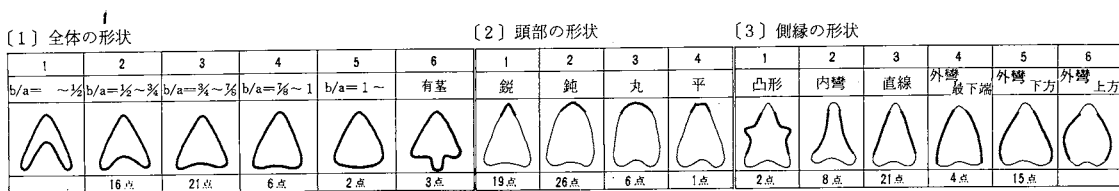
遺構 器種	住居址										その他			計
	3	4	5	9	10	11	12	14	15	土壙	集石	グリット		
石 鏃				1			2				6		48	57
石 錐											1		10	11
スクレイパー								1			1		10	12
彫刻器			1	1					2		3		27	34
使用痕ある石器		4	3	12		4	5	19	2	76		406	531	
打製石斧	1	1					1		5	14		160	182	
横刃型石器		2	1	6		1	1			4		158	173	
石 匙												3	3	
敲打器		2								1		1	4	
礫核石器												1	1	
特殊磨石						1				2		27	29	
磨石		2						1		2		48	54	
凹石									1	3		53	57	
石 皿										1		12	13	
乳棒状磨製石斧				1								18	19	
磨製石斧												2	2	
局部磨製石斧												2	2	
砥石											2	3	5	
その他の石器									2	2		11	15	
調整痕のある剥片		2		10			1	4	3	12		26	58	
合計	1	13	5	31	0	6	11	29	10	128	2	1026	1262	

完形品、破損品に関係なく、1点として数えた。また遺物出土数は遺構確認面からのものではなく、耕作土表面から遺構埋土内の一括しているため、遺構にかかるグリット遺物総てを遺構内遺物として扱っている。

(1) 小形石器(挿図21~26、図38~40、図版28)

定形石器125点、不定形石器531点、剥片・石核・原石(使用痕の観察できないもの)906点が出土している。これらの石質は、チャート1点・緑色変岩1点の他は総て黒曜石である。以下、器種別に検討・考察し概述する。

① 石鏃(1~47) 57点(遺構出土3点)出土した。殆どが透明度の高い、良質の黒曜石製である。形態を[1]全体 [2]頭部 [3]側部 [4]側辺 [5]逆刺 [5] 抉りの各形状で分類した(挿図21)



不整形による形状の不明-O 欠損による形状の不明-Z

挿図21 石鏃形態分類図

② 石匙(59~60) 2点出土している。59は、石質がチャートで刃部を2カ所持つ縦型石匙である。

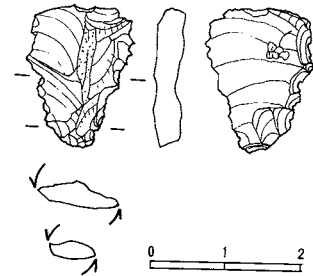
摘み部は、丁寧な調整による浅い抉りを有し、刃部は共に両刃の直刃である。基部は全体に軽いねじれを生じているが、これは素材そのものがねじれていたものであろう。60は、主として使用したであろう刃部と整形時の剥離面を利用した従的刃部との2ヵ所に刃部を持つ縦型石匙である。摘み部は、調整剥離による抉りを有し、刃部は共に両刃で、主とした刃部は軽く外湾し、従とした刃部は直刃である。石質の関係からか、摘み部・刃部共に剥離は大まかなものとなっている。

- ③ 石錐 (48~58) 11点(完形品7点・破損品4点-内2点は先端のみ-)が出土している。摘み部を持つものと、両端が調整加工されたものとの2形態がある。摘み部の断面形状は三角形を成し、両端が調整加工されたものも摘み部と成り得る部位は、同様に断面三角形形状である。

錐にとって最も着目すべき錐部を中心に、その製作状況や断面形状等により下記の様に分類できる。

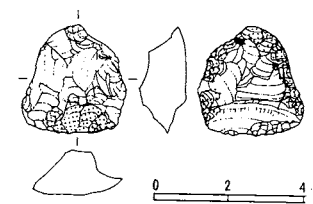
- 製作・全側縁を両面より調整加工 48・49・52・58
 ・1側縁あるいは2側縁を両面より調整加工 53~55・57
 ・2側縁を片面より調整加工 56
 形状・長さ・最先端のみ調整加工 49
 ・二等辺三角形形状に調整加工 48・52・53・57
 ・基部と錐部の境に加工あり内湾する 54・55・58
 断面形・円形もしくは楕円形 48・51~59・57・58
 ・方形もしくは扁平形 49・50・56

56は、錐部の作りにおいて興味深い。2側縁を片面より調整加工しているが、その加工は、挿図22上に示すごとくモーメント方向となっている。これは、明らかに回転を意識したものといえよう。



- ④ スクレイパー類 (61~70) 石器の一边あるいは円周部に調整剥離を施し、刃部を作り出しているものをまとめて扱い、さらに調整剥離の状態等により、便宜的にサイドスクレイパー・拇指状エンドスクレイパー・スクレイパーと分類した。以下、その特徴等を概述する。

A サイドスクレイパー (61~64) 5点出土。石器の1側辺に直刃を持つナイフ状のものを指す。総て破損品であるが、1端部を有するものは3点ある。62は、両刃の直刃で、荒い調整剥離を施した端部を持つ。断面形状は、三角形を成し使用するのに持ちやすい。63は、片刃の直刃で、刃部は荒い剥離が施され、端部は彫刻器等によくみられる細い丁寧な調整が施されている。61・64は、雑な調整剥離が施されており、あるいは石槍の一部かもしれない。



挿図22
 A W36出土石錐(上)・B A49
 出土スクレイパー(下)実測図

B 拇指状エンドスクレイパー (68・69) 2点出土している。石器側縁の全周に調整剥離を施し刃部とした拇指状のものを指す。68は、大剥離により形作られている。裏面は、平坦にするため調整剥離が施されているが、余りにも雑であり未製品かもしれない。69は、丁寧な調整剥離を施した片刃であるが、裏面はプラットホームを平坦にする調整が施されている。

C スクレイパー (65~67・70) ここで扱うものは、その形態に特徴的なものがないため単にスクレイパーとした。5点出土している。総て片面加工の刃部を有している。70は、裏面に丁寧な調整が施されているが、裏面は雑な大剥離となっている。丁寧な調整が施されると拇指状スクレイパーとなろうか。また、挿図22(下)のように刃部のあり方に興味を覚える。一般的に、ここに挙げたものは器形が丁寧に形作られていないが、刃部は丁寧であるといえる。

- ⑤ 彫刻器 (79~92) 34点出土している。両端あるいは片端に彫刻器状の調整剥離が施されたものを

指す。各々の形態や剥離の状況により、曾根型彫刻器、垂曾根型彫刻器、ピエス・エスキーユ、コア型彫刻器、片端彫刻器、彫刻器と分類した。以下、分類ごとにその特徴を概述する。

- A 曾根型彫刻器 (79~81) 4点出土している。柱状の石器の両端に細長い剥離を持っている。
 - B 垂曾根型彫刻器 (82~84) 6点出土している。曾根型彫刻器に類似したものであるが、曾根型彫刻器ほど丁寧に作られていない。82はシマ状の夾雑面があり、83は調整を施してない端には夾雑物が入り込んでおり、84は細長い剥離と成らずにつぶれ状となっている。
 - C ピエス・エスキーユ (85~88) 11点出土している。扁平状の両端に細長い剥離を持っている。
 - D コア型彫刻器 (89~91) 6点出土している。ピエス・エスキーユが扁平状を呈しているのに対し塊状を成す石器である。
 - E 片端彫刻器 片端のみに刃部を有するものが2点出土している。観察の結果、刃部の状況は両端に刃部を有する彫刻器と何ら変わるものでないとし、この項で扱うことにした。
 - F 彫刻器 (92) A~Eの分類に属さない彫刻器が5点出土している。刃部は丁寧に調整剥離が施されている。
- ⑥ 使用痕ある剥片・石核・原石 (図93~132) 本遺跡から出土した黒曜石 1,437点余のうち 531点 (37%) に使用痕が認められた。このうち剥片を利用したもの 342点 (64%)、石核を利用したもの 151点 (28%)、原石を利用したもの 38点 (8%) である。

本稿においては、本遺跡出土の全黒曜石を検討し、使用痕あるものの性格を明らかにすべく若干の考察を行うことにする。

A 素材について 使用痕あるものをその素材の状態において分類すると次の通りである。

- 剥片 F_A ・チップ状 (93~97)、 F_B ・自然面を有するもの (98~105)、 F_C ・所謂「剥片」(106~108)
- 石核 C_A ・自然面を有し、何ら調整を施さないもの (120・121)
- C_B ・調整が施されているが、使用箇所とは関係を持たないもの (122)
- C_C ・所謂「石核」

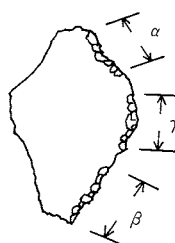
使用痕あるものの素材は、チップ状のものや自然面をそのまま使用していること等から、特に選択しての使用とはいいいにくい面がある。夾雑物についても、層を成して混入している等多量の夾雑物を含むものは別にしても、使用痕あるものとないものとの両者に差違は認め得るものではない。

B 使用痕付着部位について 石器の形態等を考慮した時に、わずかではあるが、右手或いは左手による使用と考えられるものなど、使用方法が窺い得るものがある。しかし、出土した大部分は、明確に使用方法が窺い知れないものであり、それらにおいては、使用痕が石器のどの部位に付着しているかについて検討することにした。

使用痕付着縁辺を右に置いた

- (1)上側辺に付くもの(α)
- (2)下側辺に付くもの(β)
- (3)真中に付くもの(γ)

とし(挿図23)、一つの石器で2~3箇所あるものは、その組み合わせとし分類した。表2で



挿図23 使用痕付着部位指図

表2 使用痕付着部位分類表

使用痕付着部位	石核数	剥片数	合計
i 総て α の位置につくもの	48	99	147
ii 総て β の位置につくもの	33	84	117
iii 総て γ の位置につくもの	32	100	132
iv α と β の位置につくもの	9	23	32
v α と γ の位置につくもの	3	9	12
vi β と γ の位置につくもの	4	10	14
vii α と β と γ の位置につくもの	1	5	6

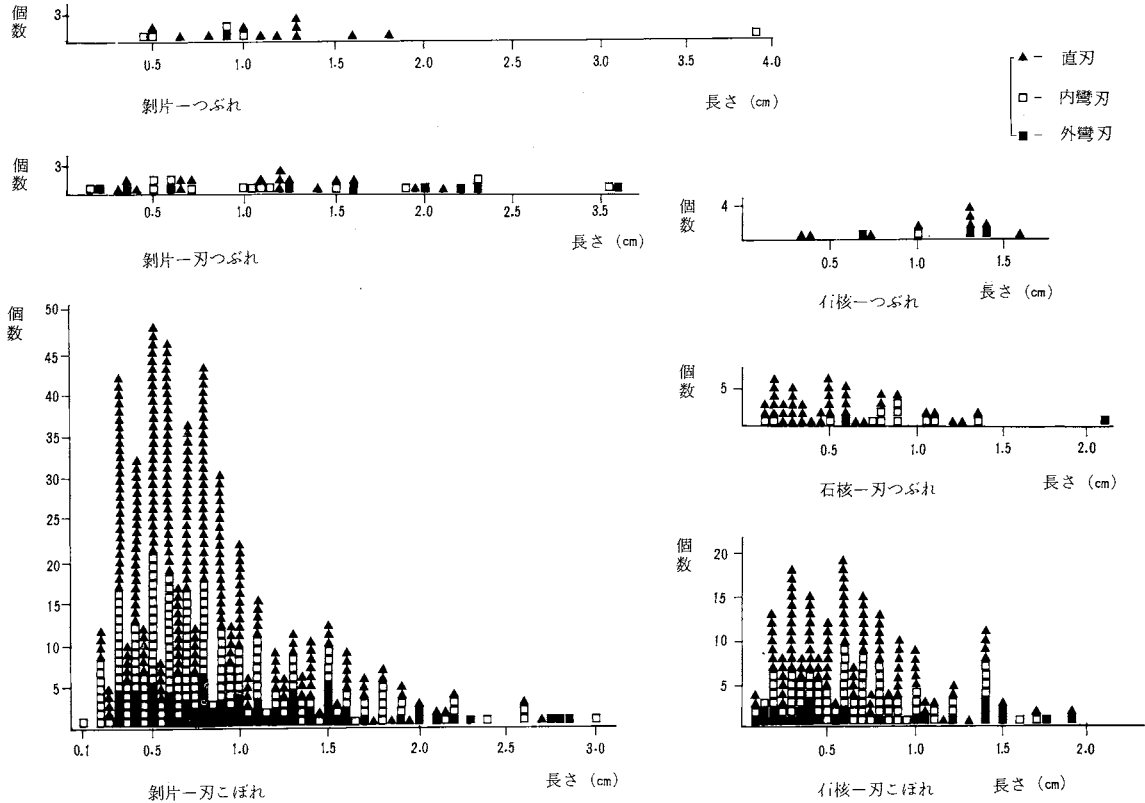
は、上側辺と下側辺とに付く率はほぼ等しいことがわかる。

C 刃部の剥離状況について 挿図24は、剥片・石核における、刃こぼれ・刃つぶれ・つぶれの長さを最小計測値0.5mmとし計測したものの分布図である。この分布状況により刃こぼれにおいては、1単

位2.5mm前後となる。刃つぶれ・つぶれは、個数も少なく明確なラインは出てこない。また、刃部の剥離を観察した結果、剥離の大きさや剥離順序・使用痕の状況等について次の事柄に気づいた。

(i) 剥離の大きさ・順序について 剥離の順序がわかる遺物は皆無といえるが、その中でもあえていうと何片かが認識し得た。それによると、次の3分類ができる。

- イ) 剥離痕の大きさが一定で剥離順序に規則性が認められるもの……片 36・311・核 49 etc
 - ロ) 剥離痕の大きさは一定であるが順序には規則性がないもの……片 111・191・201・核 21・108
 - ハ) 剥離痕の大きさが一定でなく順序にも規則性がないもの ……片 53・299・320、核 40・177
- 剥離痕の大きさが一定であるか否かは、使用時の対象物と使用方法に関係する事かと思われる。



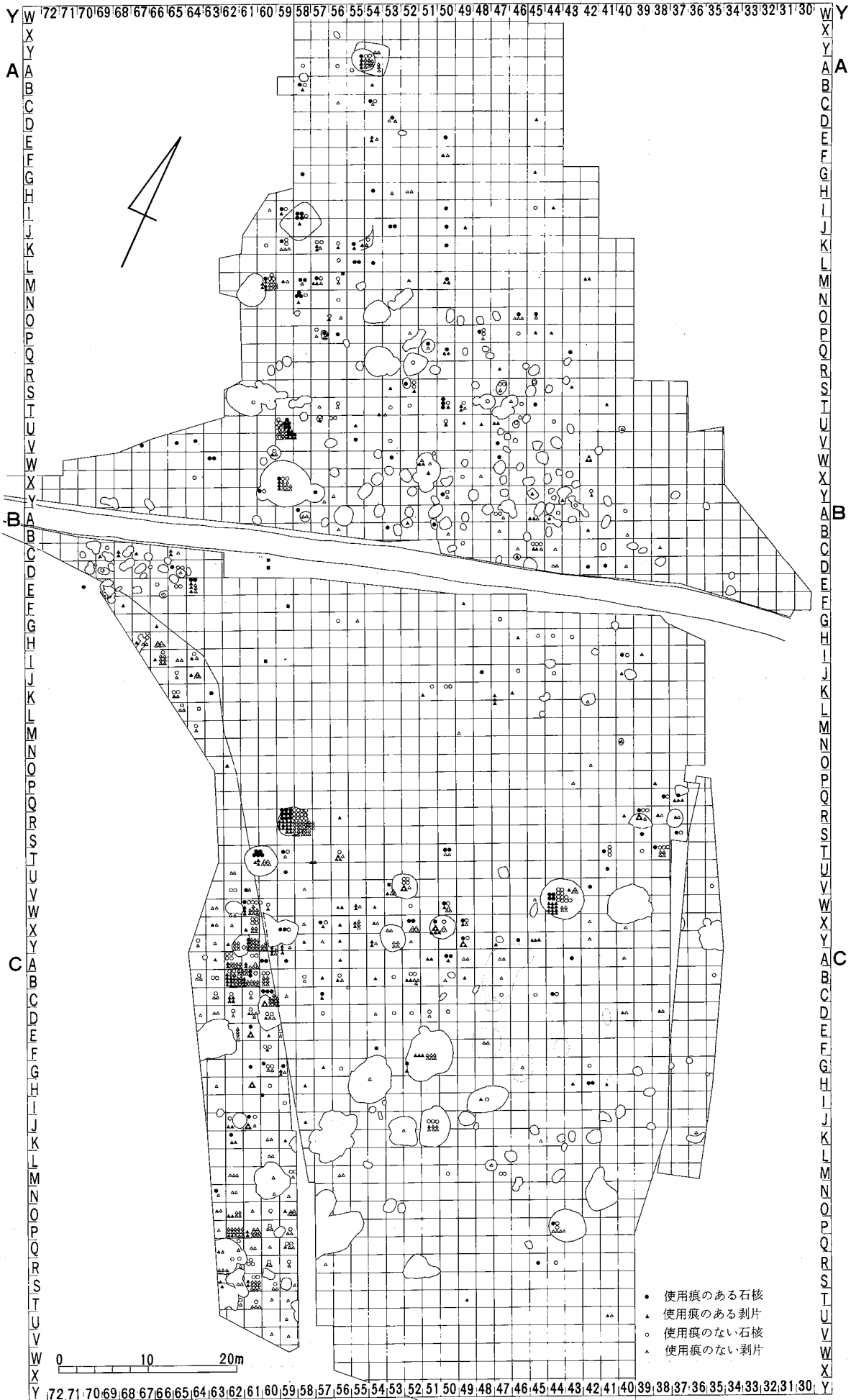
挿図24 小形石器の刃こぼれ・刃つぶれ・つぶれの1単位の長さの分布図

(ii) 剥離痕の状況 剥離痕の状況を観察すると特記すべきものとして次の2つがある。

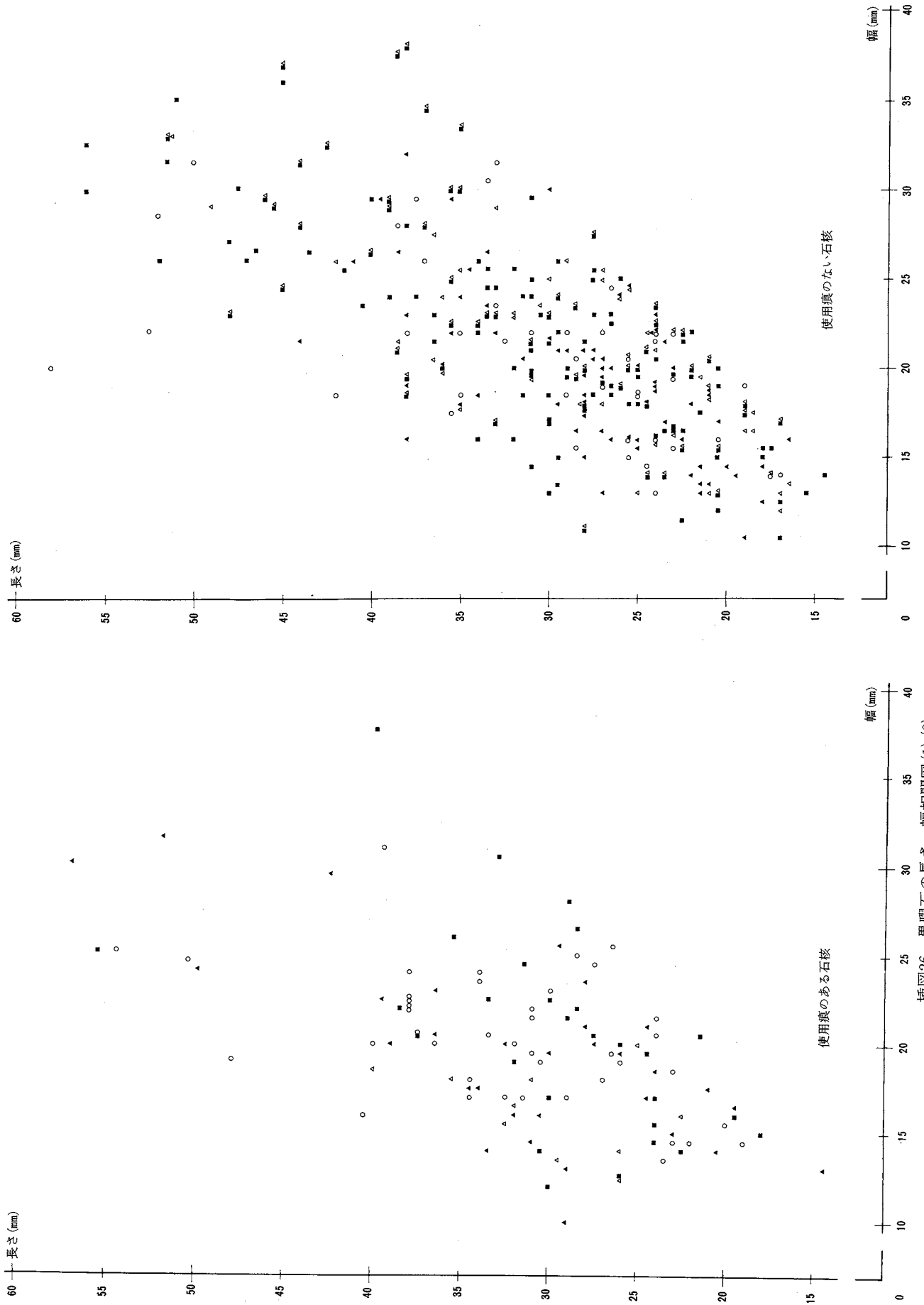
イ) 尖突状を有する石器にドリル状の使用痕が見られる。土壙49より出土した核179は、断面三角形の錐状の尖突端を有し2側辺に使用痕が付いている。この使用痕には、回転により付着したと思われる線状痕もあり、ドリル的使用が行われたものと思われる。

ロ) 核8は自然面を有しネガティブな主要剥離面を持つクズ状のものであるが、その1側辺に「彫刻器」的な使用痕が見える。同様に核77は、層状に夾雑物が入り、端部は細長い剥離の「彫刻器」的な使用痕が見える。端部以外は何らの調整も施されていない。

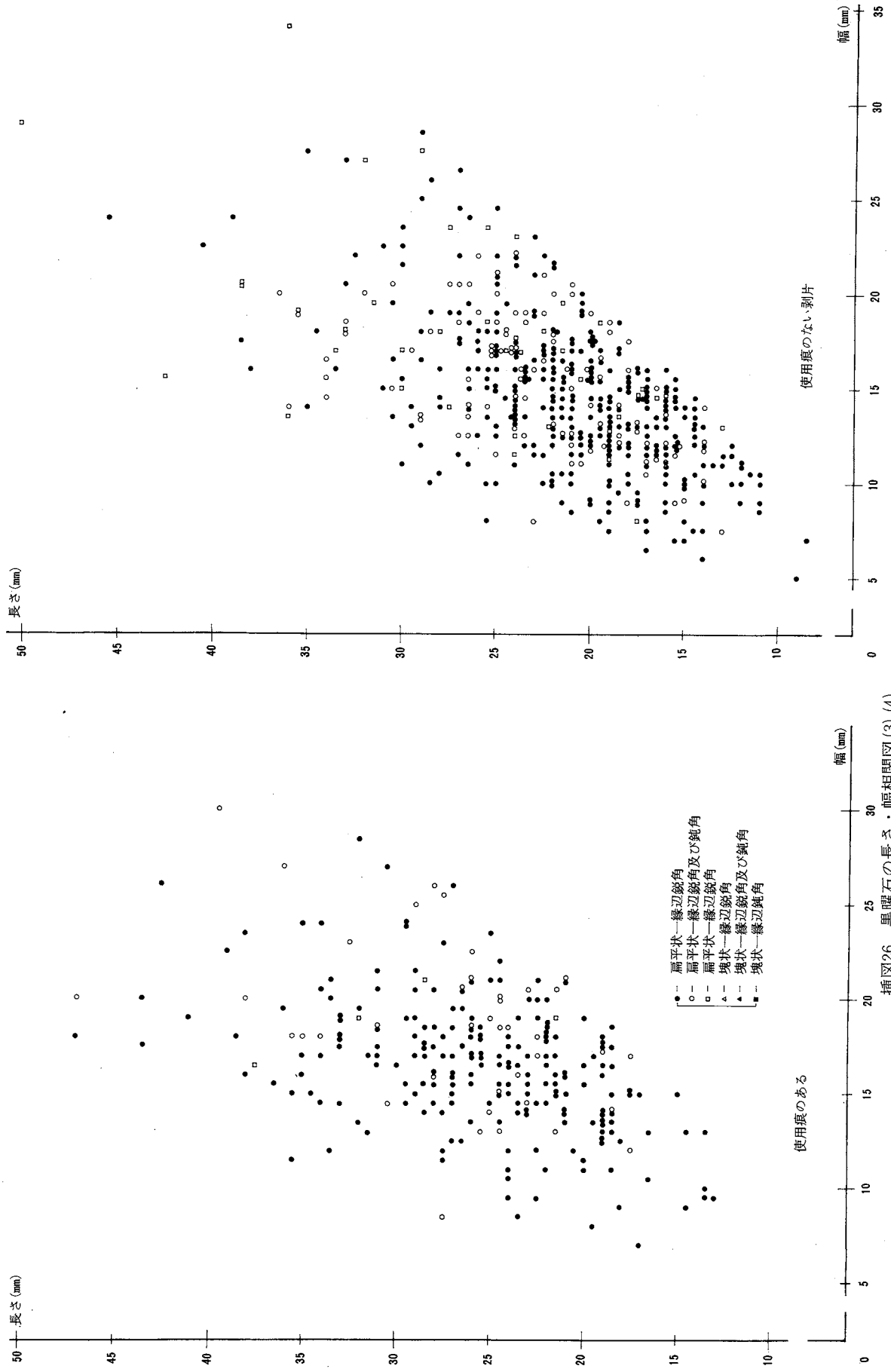
D 使用痕あるものとなないものにおける様々な比較 挿図25は、本遺跡における不定形黒曜石の水平分布の状況を示した図である。これによると、遺構内及び遺構近隣に集中して出土し、使用痕のあるものとなないものの分布状況に差違は認められない。また、挿図26は、剥片と石核を形状及び縁辺の角度で分類し、長さとの相関関係を示した図であるが、使用痕のないものの分布は、あるもの分



挿図25 黒曜石出土分布図



挿図26 黒曜石の長さ・幅相関図(1)(2)



挿図26 黒曜石の長さ・幅相関図(3) (4)

布を一回り大きくしたものとなり、ここにおいても明確な差違を認めることはできなかった。

当調査団では、使用痕ある石器については、十二ノ后遺跡より注目しており、「手頃な縁辺を持つ良質の素材であれば十分」であり「作業自体も不特定」のもの、「特定作業のために使用されたもの」⁽⁸⁾ではなく「各作業のために任意の石材を使用したもの」⁽⁹⁾、明確な結論付けをさけてきた。これは、今後十分な検討を要するものとの配慮からである。本稿においても同様ではあるが、ほんのおずかではあるが、用途や使用方法を暗示する痕跡を持つものが出土していた点と、遺跡内での水平分布と形状分布においては、使用痕あるものとならないものに差違が認められなかった点などを指摘しておきたい。今後さらに、細い点までも検討・考察することが大切であろう。

(2) 大形石器 (挿図 27~29、図41~48、図版29・30)

総数 615 点が出土した。所謂定形石器 585 点、その他の石器 15 点である。以下、各器種毎に分類し、観察した内容を概説する。

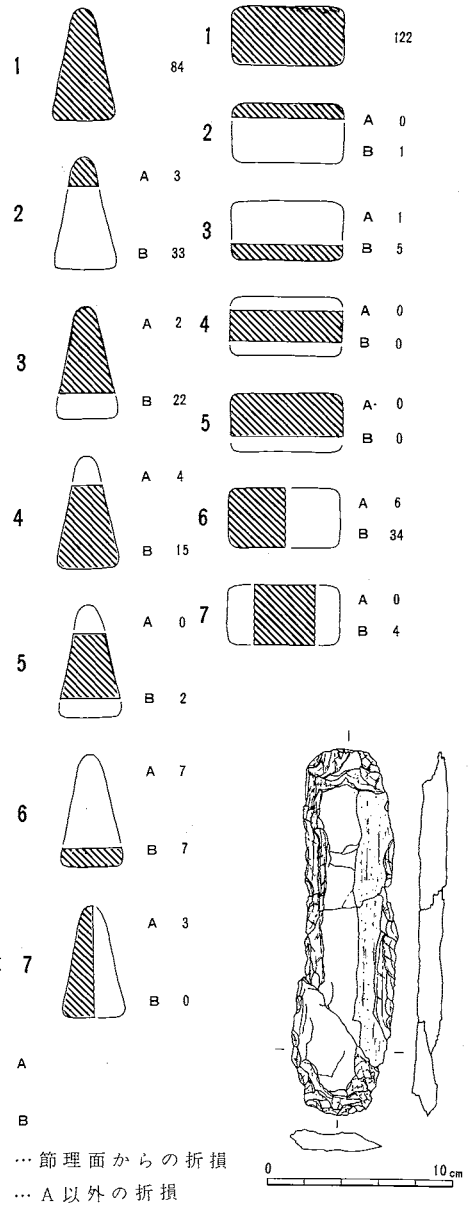
- ① 打製石斧 (133~172) ¹⁰ 182 点が出土した。完形品 84、破損品 98 点である。形態別にみると、I-短冊型 97 点、II-撥型 9 点、III-分銅型 1 点で短冊型が圧倒的に多い。他方、刃部形態についてみると、A-直刃 12 点、A-B-直刃と円刃の中間型 19 点、B-円刃 30 点、C-斜刃 36 点、D-ペン先状 5 点、E-一直線的な斜刃 2 点となる。また、特に I・II の側縁部形態を見れば、頭部幅に対し刃部幅が長くなる「ハ」の字状のもの、頭部を頂点に刃部が最大幅をもつ直線状のもの、頭部幅と刃部幅がほぼ同じく平行で直線のもの、胴部に最大幅をもち胴張型のもの、同じで内湾するもの等がある。

使用痕については、線状痕があるものは 2 点 (139・161) のみで、他は総て磨耗痕である。使用痕のつく部位は、側縁部ではつぶし加工が行われている部分以下に認められ、基部面ではつぶし加工と平行する位置か、それ以下に集中して観察される。また、断面では片側に長くつく傾向がある。このような現象は、つぶし加工が着柄時の緊縛のためにつけられるものと仮定すれば、使用方法によるものか着柄法の差違によって起るものと思われる。

破損品の折損状況を模式化したものが挿図 27 である。石器自体が持つ節理面と、それ以外で折損しているものを見分け、数量を出した。これらから、頭部のみ残存するものが多いことが窺える。

接合された石器は 10 例である。このうち一ヶ所で折損しているもの 8 例、二ヶ所は 2 例である。挿図 27 はその一例で、58 メートル離れた場所から出土し、石器の長さは 19.7 cm と当遺跡最大である。刃部に近い第一次折損部は、断面右から左へ力が加って折損している。第一次折損部の裏面に一部加工を施して再使用し、最終段階に第二次折損部で破損したものである。

- ② 横刃型石器 (188~247) 総数 173 点が出土した。完形品 122 点、破損品 51 点である。刃部



挿図27 打製石斧(左)、横刃型石器(右上)折損状況模式図及び打製石斧接合(右下)実測図

形態をみると、A-円刃 37 点、B-直刃 82 点、C-内湾刃 10 点となる。背部の形態は、I-直線的なもの 61 点、II-丸身を呈するもの 32 点、III-三角形のもの 34 点、IV-内湾するもの 10 点である。使用痕は打製石斧と同様の痕跡がみられる。磨耗痕のつきかたも、刃部の一部分のもの(188・189・237)、全体につくもの(190・213)、側縁部から刃部までのもの(219・220)がある。線状痕は、刃部に平行する 228、刃部に直行するもの(190・242)のほか、200のように砥石状に平滑な磨耗もみられる。このように使用痕のつき方が一定でないことは、使用方法が多様であったことを意味している。製作については大きく二種類あり、第一次剥離面を残し、縁辺部に粗雑な調整加工するもの(208～212)と、背部、側縁部を入念に調整剥離するもの(213・215・216)に分けられる。背つぶし加工を行っているものは僅か 2 例にすぎない。

破損品の折損状況を示したものが挿図 27 である。打製石斧同様、節理面とそれ以外で折損しているものを見分け、数量を出した。完形品が最も多く、次いで半損品が多い。打製石斧とは明らかに異った使用方法による結果であると思われる。

- ③ 横型石匙(184) 砂岩性の石材を利用している。大きなつまみを持ち、側縁を両面から剥ぎとり、両刃を作り出している。磨滅や風化作用が進み全体を知ることはできないが、ほぼ完形品であると思われる。
- ④ 敲打器(248～251) いずれも転石を利用している。敲打が両側縁部から両端に集中して行われているもの(248～250)と、一部分に敲打が集中し、周辺が剥離されるもの(251)とがあり、使用法が異った結果であろう。
- ⑤ 特殊磨石(254～269) 合計 29 点の出土である。完形品 7 点、破損品 22 点である。形態は円柱状をなし、断面三角形か不整円形を呈する。所謂「機能磨面」を有し、他の面とは稜を持って分たれ区別される。機能磨面は形状に左右されるのか、磨面の幅が一方のみ広いもの(254・256・260)、ほぼ均一なもの(255・259・269)、比較的小規模な面のもの(261)などがある。磨面の面数も 1 面-12 点、2 面-1 点、3 面-2 点があり一面のものが多く、また、敲打痕を持つもの(254～258)があり、いずれも円柱状の細身部分の先端に限り認められる。
- ⑥ 礫核石器(185) 1 点のみの出土。節理面で半損するが残存状態はよく、胴が少し張った三角形と思われる。刃部の調整は片側に多く剥離を施し、裏面は部分的に行われるのみで片刃を呈す。
- ⑦ 磨石(270～312) 54 点の出土である。完形品 30 点、破損品 24 点である。凹部や敲打調整をもつものがあるが、転用の先後関係が石質等により不明確なため、磨面を有すもの総てを磨石として一括することにした。磨面は素材のある一面にみられ、ほぼ平滑面を有すものと曲面を有すものの二種類に分類でき、後者は更に一ヶ所に磨面あるもの(270・277)、二ヶ所のもの(284・286～289)、凹をもつもの(290～311)、凹と敲打調整を有すもの(304・305・307・309～311)、敲打調整のみもの(312)に分類できる。
- ⑧ 凹石(313～350) 磨石に比べ、不定形の石を多用する。形態別にみると、平面円形で断面石輪形の 344、平面及び断面が不整円形のもの(319・340～343)、平面及び断面が不定形のもの(332・333・335～339)がある。凹の形状は、深い円錐状のもの(335・343)、浅い凹のもの(316・320～322)があり一定しない。凹の個数も、小さな凹が多数のもの、単一のもの、二つかそれ以上のもの、連結して溝状になるものと多様で、更に凹面の面数も、一面、二面、三面と各種があり、規則性を見出すことができない。
- ⑨ 石皿(351～358) 13 点出土。351を除き総て破損品である。皿部の形状についてみると、「□」状のもの(351)と「∩」状のもの(352～358)に二分できる。352は土壇 28・BA60、BO60より

の出土で接合したもので、皿部には赤色顔料が塗られている。354の裏面には、凹石にみられるような敲打による凹が4ヶ所にある。このような破損は、石皿自体が皿部と凹部を使用の対象とするだけならば、擦り減ることはあっても破損はしないと考えられる。機能的な面以外の利用法があったものと理解した方が合理的である。

- ⑩ 乳棒状磨製石斧(359~368) 19点の出土で、完形2点、破損品17点である。365を除き他は、つぶし加工・研磨調整の製作途中段階である。形態は刃部から基部にかけて直線的なもの(359・360・363)と片側に反るもの(361)とがある。断面形は円形と偏平のものに分けることができ、刃部形態も円刃と偏刃とに各2分できる。折損状態は、斜めと直線的に折れる二者があり、ある程度強度の力を加えない限り起らない状態で、刃部のみの調整で使用された可能性がある。折損部を再加工し、形態と機能を保持しようとしているものや、砥石として再利用しているもの(368)がある。
- ⑪ 小形磨製石斧(369・370) 2点のみの出土である。いずれも頭部(基端)を欠損している。刃部形態は「弱凸強凸刃」で、右側基部は整形剥離面が残存している。370は頭部が細くなる形態で、刃部は「両凸刃」である。側基部は整形剥離・つぶし加工が残存している。
- ⑫ 局部磨製石斧(371) 371は剥片を利用し、片面を入念に整形剥離を施し、図版30-(6)は打製石斧と同様の整形調整剥離を行っている。371より入念に磨いている。
- ⑬ 砥石(372~376) 5点の出土である。有溝の372・線状痕の373、磨面のもの(374~376)と多様である。372は表裏面に三条ずつ溝をもち、片側のみ一条深くなっている。373は、対応する面の二ヶ所に同様の線状痕がある。374~376は自然礫の平滑な面を利用して、磨面はいずれも一面のみでかなり使用している。
- ⑭ その他の石器(173・176~183・186・187・252・253) 意識して製作された石器で、上記項目に分類されないものを一括した。176は、側縁を部分的に一方のみ調整し、剥離を行ったものである。177は節理面で剥離した部分の一方を加工して刃部としており、表裏面とも刃部から縦長の磨耗がみられる。182・183は把手状のつまみを有し、それ以外に調整を加え刃部としているようである。186・187は靴筥状を呈し、一辺を残し他に調整加工を行い刃部にしている。252・253は卵形を呈し、両端及び片方をペン先状に研磨したものである。これらは調整を加えたものか、使用の結果生じたものか不明である。

註1・森山公一氏の御教示を賜り分類した。曾根型及びピエス・エスキーユに関しては、時代をも含めた意味で命名している。

2・原石とは、採石し一次加工を施さないものをいい、石核とは、ネガティブな主要剥離面を有するものを、剥片とは、ポジティブな主要剥離面を有するものをいうことにする。

3・使用痕についての検討は、『長野県中央道報告-岡谷市その4-昭和52・53』で試みられている。参照されたい。

4・ここでいうチップ状とは、そのものから定形石器を作り出すことが不可能である大きさのものをいう。クズもしくは、それに等しいものである。

5・使用の方向が押し出す方向か引く方向かにより、右手使用・左手使用と異なるが、石器の形態・使用痕の付着等を検討した結果、111は押し出す方向での右手使用、126は押し出す方向での左手使用というようにわかるものがある。

6・使用痕ある石器においては、剥片は「剥○」、石核は「核○」、原石は「原○」と番号を付け整理した。

7・C区A・B 61・62に黒曜石が集中して出土しているが、この地は斜面であり上方には竖穴4が存在している。

8・百瀬長秀「経塚遺跡」『長野県中央道報告-岡谷市その4』 1980

9・青沼博之「船霊社遺跡」『長野県中央道報告-岡谷市その4』 1980

10・打製石斧の器種分類・形態分類は、「長野県中央道報告-諏訪市その4」 1976の十二ノ后遺跡、横刃型石器の器種分類・形態分類は、同岡谷市その4を参照しそれに従った。

11・これらの用語については 佐原真「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古論集—松崎寿和先生六十三歳記念論文集—』同刊行会 1977

4) その他

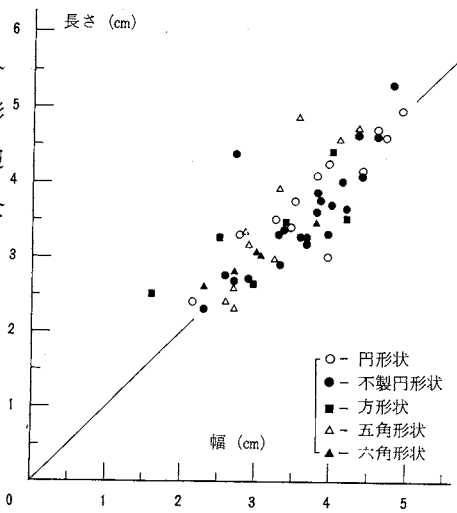
(1) 土製品 (挿図 28、図 49)

縄文時代の土製品として土製円板⁽¹⁾ 60点 (遺構内16点、遺構外44点) が出土している。土製円板の加工は、a・打ち欠いて円形状等の形状を成すもの (2点・3.3%)、b・打ち欠いた後に縁辺部の一部を研磨し整形したもの (28点・47.7%)、c・縁辺部全周を研磨し整形しているもの (29点・49%) の3段階に分けることができ、また、形状を分類整理すると次の通りである。

I・円形状 (12点・20%)、II・不整形円形状 (23点・38.4%)、III・方形形状 (9点・15%)、IV・五角形状 (11点・18.3%)、V・六角形状 (5点・8.3%)

挿図28は、形状別に長さ⁽³⁾と幅の相関関係を示したのであるが、45°線上に分布し、形状による何らかの意味あいは読み取れない。また、各形状のパーセンテージも、ほぼ等分であり、この形状が直接土製円板の性格を決定する要素になり得るかは不明である。⁽⁴⁾

土製円板に使用された土器片の部位を見ると、1 口縁部 (2点・3.3%)、2 胴部 (52点—うち底部に近い胴部1点を含み—86.7%)、3 底部 (6点・10%) となる。胴部を利用した土製円板が多いのは、土器における胴部の占める割合が多いので当然といえよう。口縁部や底部に近い胴部、底部等も利用されており、特にどの部位を利用するという事はなかったと考えてよからう。⁽⁵⁾



挿図28 土製円板相関図 (長さ・幅)

註1・ここで扱う「土製円板」とは、土器片を再加工した縁辺部に切り込みを持たない製品をいう。漁撈具・編み物のおもり・メンコなどの玩具と考えられているが、本来そのものが研究対象とされることが少なく、その製作過程や性格等に関しては不明な点が多い。

2・縁辺部の研磨は、1) 加工によるもの、2) 使用用途におけるもの、3) 廃棄後に付けられたもの等が考えられるが、本遺跡の遺物においては、角形を示す各辺が明確に作られていることから加工時における製作痕と考えた。

3・ここでいう「長さ」と「幅」とは、円形状・方形形状の遺物においては、長手方向の最大長さを「長さ」とし、それに直交する最大幅を「幅」とした。五角形状のものは、一辺を水平に置き対置する頂点への長さを「長さ」とし、それに直交する最大幅を「幅」とした。六角形状のものは、対角線の最大長を「長さ」とし、それに直交する最大幅を「幅」とした。

4・土製円板が、玩具あるいは数を示す用具であるならば、形状は重要な要素になるかもしれない。

5・厚さが一定していない底部に近い胴部においては、厚さを整えるための加工は施されていない。

(2) 炭化物・自然遺物 (図版 17)

炭化物・自然遺物は遺跡の数箇所から出土したが、主なものを列挙したい。

① 土器附着炭化物 1はAW-65グリット内から検出された、中期中葉無文深鉢土器片の、内面に附着した炭化物である。深鉢土器の中には煮沸器として実際使用され、土器面に煮こぼれを付けたりと、お焦げを残しているものがある。これは土器内面に焦げ付いている煮滓である。煤化して細かく炭化の進んだもので、厚さ2mm以上も附着しているところもある。なんの煮滓かは判別しないが、多分食物の煮沸後の焦げ付きであることは間違いなく。なおこのような焦げ付の附着した土器は他にも

あり。それぞれの土器のところで指摘している。

② 土器面・器肉内に残る種子痕 2は九兵衛尾根II式深鉢胴部の胎土中に混じりこんだ植物種子であろう。縦5mm、横3mmの米粒状の種子である。3・4は同一個体の土器の口縁部であるが、内外面は勿論器肉内にも無数の種子痕を残している。大きさはどれも2mmほどでやや長い球状である。粟粒状の禾木科の種子であろう。5は中期中葉の土器内面に残る長径7mm、短径5mmの卵形の圧痕である。カヤの実ではなかろうか。

③ 自然遺物 14号住居址と12号住居址より出土したもので、完形のものはないが、半割にされた殻は両住居址から各1個ずつ検出されている。共にくるみである。14住出土のくるみは、縦2.1cm、横1.9cmで鬼くるみである。12住出土のものは縦2.2cm、横2.3cmの姫くるみである。

第2節 御射山西遺跡（SMYC）

1 位置・環境（挿図1・2、図版31～33）

諏訪南インターチェンジ用地内の遺跡発掘調査は、既に本線内に於て昭和48年に調査された手洗沢遺跡、51年に調査された頭殿沢遺跡の一部、新たに追加された御射山西遺跡の3遺跡について行なわれた。頭殿沢遺跡については、第1節において昭和51年発掘分とともに報告したので、ここでは同一地形上にある手洗沢、御射山西両遺跡についてまとめてその位置、環境を概述する。

両遺跡ともに、諏訪郡富士見町御射山神戸にある。富士見町に数多く存在する遺跡の中では、西はずれにあり、御射山、一ノ沢、徳久利下遺跡とともに御射山遺跡群を構成している。昭和48年度中央道報告書・『諏訪郡富士見町内その1』で報告された遺跡数は124箇所、昭和54年に長野県教育委員会によって行なわれた『八ヶ岳西南麓遺跡分布調査報告書』によると137箇所と、13の遺跡が新たに発見追加されており、御射山西遺跡は、御射山中遺跡とともに新発見の遺跡としてあげられている。

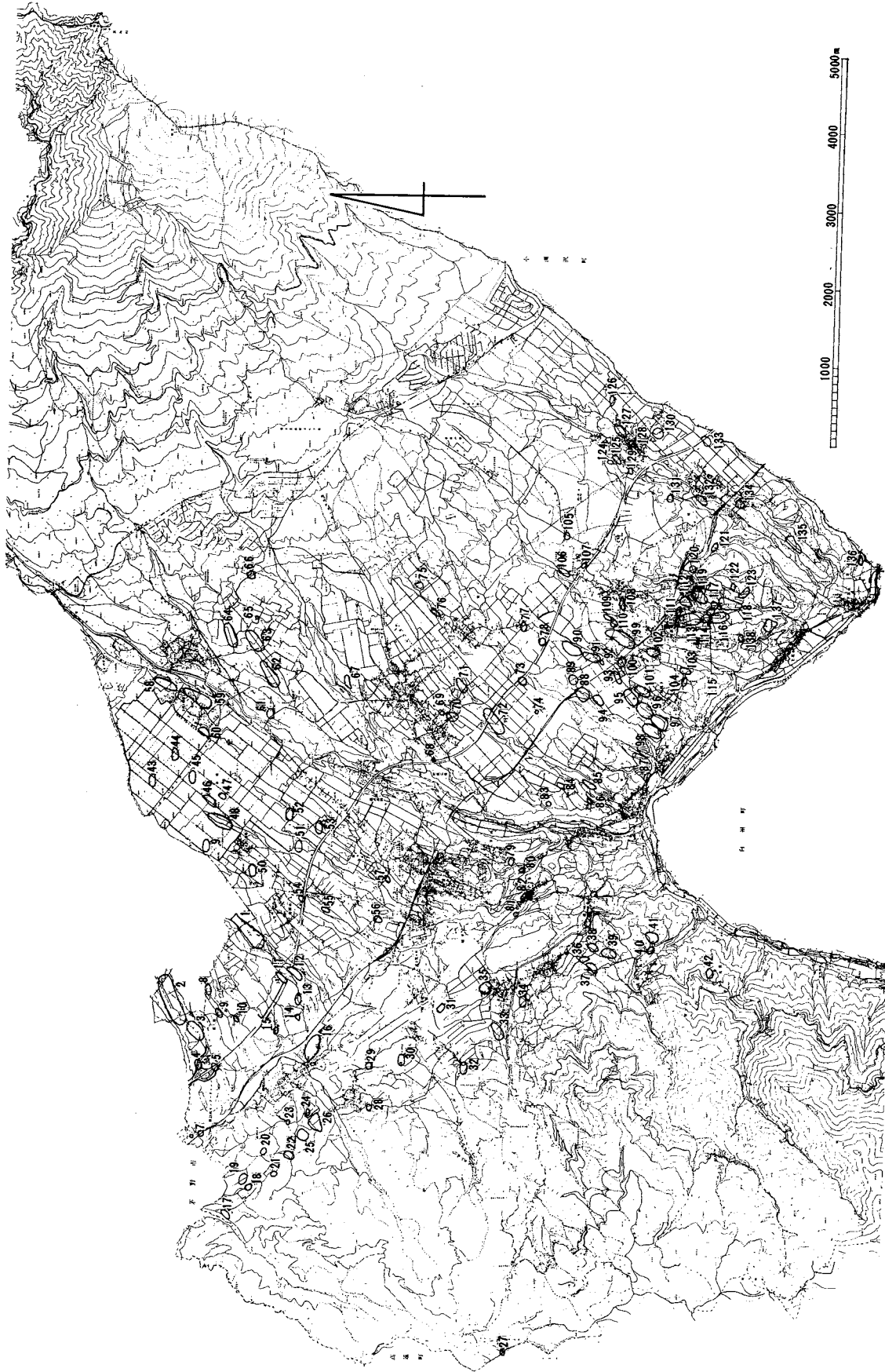
八ヶ岳西南麓に広がる広大な裾野が、幾筋もの沢や川とともに、糸魚川—静岡構造線である宮川の谷へ急になだれ落ちるその縁に両遺跡はある。遺跡附近の地形は、八ヶ岳火山列の噴出活動によって形成された泥流堆積物を主体とする基盤の上に、上・中・下部の三段階のローム層が堆積して扇状地状になっており、この扇状地状を示す裾野を手洗沢が南を、御射山沢が北を開析してできた帯状の台地に立地する。南を流れる手洗沢との比高差15～20m、北を流れる御射山沢との比高差も7～10mと大きい。

遺跡の北東約300mの位置に、諏訪大社上社の摂社である御射山社があり、附近からは平安時代から中世にかけての遺物が採集されている。また、手洗沢に沿って参道であった松並木も遺存している事等から、御射山祭に関係する遺構の存在も推定されている御射山遺跡(挿図1-2)と、道路をはさみ東の尾根部に縄文時代早期、後期土器片や、石鏃が採集されている御射山中遺跡(挿図1-3)が、尾根東方に位置している。手洗沢遺跡はこの尾根の南斜面に位置し、昭和48年の調査で、平安時代末の住居址1、土壙2、ロームマウンド3、溝状遺構1が検出されている。御射山西遺跡はこの尾根上の、西へゆるやかに傾斜する平坦部にあり、遺跡一帯は赤松を主体とする山林で覆われ、今日まで遺物の採集等もなされずにきた。しかし、御射山遺跡と地続きであることや、御射山沢を隔て北西に接する頭殿沢遺跡との関連も考えて、新遺跡として追加された。御射山沢に沿って小さく張り出す小尾根上に、縄文時代早期の土壙が検出された他は、縄文時代早期・中期・後期の土器片が点在するのみで、人々の生活址は確認されず、狩猟・採集等の後背地としての性格が強い遺跡である。

2 発掘区の設定と調査の経過

1) 発掘区の設定（挿図2、図版31～33）

諏訪南インターチェンジにかかる用地は、既に掘削工事が完了している本線部分を除き、本線東八ヶ岳寄りに位置する御射山西遺跡で約46900㎡、本線西南宮川寄りに位置する手洗沢遺跡に約17400㎡、頭殿沢遺跡では本線の両側に約1000㎡と広範な地域に及んでいる。このうち御射山西遺跡地内に19200㎡、手洗沢遺跡地内に3900㎡の広さで、現地形が残される地域が設けられてはいるが、いずれにしても調査予定範囲が大きな広がりをもっていることと、掘削により、現地表面より約10m下げられている本線部分、密



挿図1 富士見町内遺跡分布図 (1 : 75000)

表1 長野県諏訪郡富士見町遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代					弥生時代		奈良・平安		中世	備考
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後		
1	徳久利	富士見町富原					○	○						縄中期住居跡7 縄後期 " 6
2	御射山	富士見町神戸										○	○	
3	御射山中	富士見町神戸		○			○							
4	御射山西	富士見町神戸		○										土壙
5	手洗沢	富士見町神戸手洗沢		○							○	○	○	平安住居跡1 土壙
6	大石	富士見町神戸大石					○							
7	川音	富士見町神戸川音					○							
8	山沢上	富士見町富原山沢					○				○	○		
9	山沢下	富士見町富原山沢									○	○		
10	大久保	富士見町富原大久保		○							○			
11	一の沢	富士見町富原		○										
12	徳久利下	富士見町富原		○										
13	一ツヤブ	富士見町神戸一ツヤブ					○							
14	長尾根尻	富士見町神戸長尾根尻					○				○			
15	坂上	富士見町神戸坂上					○							
16	牛頭城跡	富士見町神戸											○	
17	大沢川端	富士見町神戸					○							
18	小テングク	富士見町神戸小テングク					○							
19	雨乞池	富士見町神戸小テングク	○								○			
20	池の平	富士見町神戸池の平					○							
21	清水窪	富士見町神戸清水窪									○			
22	太郎口	富士見町神戸太郎口					○				○			
23	新屋敷	富士見町神戸新屋敷					○							
24	堤下	富士見町神戸堤下					○				○	○		
25	御所平北	富士見町神戸御所平					○				○	○		
26	御所平	富士見町神戸御所平		○	○						○	○	○	平安住居跡1
27	御所平峠	富士見町神戸					○						○	
28	牛首城	富士見町栗生											○	
29	栗生東	富士見町栗生												
30	せど平	富士見町大平					○							
31	中山	富士見町若宮											○	
32	芝平	富士見町松目					○							
33	松目原	富士見町若宮					○							
34	大背戸	富士見町木ノ間大背戸					○							
35	八幡社	富士見町若宮					○							
36	阿原端下	富士見町木ノ間					○				○	○	○	平安住居跡2
37	蛇場見	富士見町木ノ間					○							
38	城の尾根	富士見町木ノ間					○							
39	馬詰平	富士見町木ノ間					○							
40	無法塚	富士見町休戸		○	○									
41	広原	富士見町休戸					○							縄中期住居跡16
42	大小屋	富士見町大萱					○				○			
43	ホウズキイA	本郷立沢ホウズキイ		○	○									
44	ホウズキイB	本郷立沢ホウズキイ					○							
45	ススキイノ	本郷立沢ススキイノ					○							
46	大畑東尾根	本郷立沢大畑					○					○		

第II章 調査遺跡

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代					弥生時代 奈良・平安			中世	備考	
				草	早	前	中	後	晩	前	中			後
47	ミズカケ	本郷立沢ミズカケ					○							
48	大畑	本郷立沢大畑					○							縄文中期住居跡11
49	ウツボギ	本郷立沢宇津木					○							
50	南原山尾根	本郷立沢南原山				○					○			
51	野田原	本郷立沢野田原						○						
52	藤原	本郷立沢藤原					○					○		
53	二の沢	本郷立沢											○	
54	ビヤグリ	本郷南原山										○		
55	分水	本郷南原山												
56	一ツヤブ	富士見	○											
57	一の沢	富士見						○						
58	大婦奈	本郷立沢大婦奈						○						
59	立沢	本郷立沢						○						縄中期住居跡 4
60	薬師尾根	本郷立沢薬師尾根					○	○						縄中期住居跡 1
61	坪平	本郷立沢坪平					○	○						縄、ドルメン状遺構
62	札沢	本郷立沢札沢						○						
63	中道尾根	本郷立沢中道尾根							○					
64	オギハラ	本郷立沢オギハラ						○	○					
65	杉原	本郷立沢杉原						○	○					
66	稗の底	本郷乙事稗の底						○					○	中世集落跡
67	梶尾根	本郷乙事乙事沢						○						
68	西垣外	本郷乙事	○											
69	丸尾根	本郷乙事						○						○
70	関屋	本郷乙事						○						○
71	金山	本郷乙事										○		
72	足場	本郷乙事足場						○			○	○	○	平安住居跡14 土 城24
73	母沢	境小六母沢						○						縄、土壇
74	南沢	境小六						○						
75	乙事沢	境小六乙事沢						○	○					
76	御柱尾根	境小六						○				○		
77	小六石	境小六										○	○	平安住居跡 1
78	当内	境小六当内						○						
79	蛇込	落合瀬沢蛇込						○						
80	オクメサマ	落合瀬沢						○						
81	小手沢	落合芋ノ木小手沢							○					
82	芋の木	落合芋ノ木							○					
83	番匠原	落合机番匠原							○					
84	芦原	落合机番匠原							○					
85	机平	落合机番匠原机平						○	○			○	○	前期住居跡25 土壇 中期 1
86	矢の上	落合机番匠原							○					平安 2
87	天白	落合机番							○					○
88	小母沢	落合烏帽子小母沢						○	○				○	縄後期住居跡 2 土 壇 8
89	底潜	落合烏帽子						○	○					
90	鷹の巣	落合烏帽子鷹の巣						○						
91	九兵衛尾根	落合烏帽子梨木原							○	○				縄中期住居跡50 土 壇

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代			弥生時代		奈良・平安		中世	備考
				草	早	前	中	後	晩	前		
92	猪 沢	落合烏帽子				○						縄中期住居跡7
93	源 治 尾 根	落合烏帽子				○						
94	梨 木 原	落合烏帽子梨木原				○	○					
95	唐 渡 宮	落合烏帽子梨木原				○	○		○	○		縄前期住居跡4 平安住居跡1 縄中期住居跡28
96	上 の 原	落合平岡				○	○					縄前期住居跡3 環状列石遺構 縄中期住居跡5 土壇
97	向 原	落合烏帽子				○						
98	坂 上	落合平岡				○						縄中期住居跡8 土壇、石組遺構
99	藤 内	落合烏帽子				○						縄中期住居跡9
100	丸 森	落合烏帽子				○						縄中期住居跡1 土壇1
101	居 平	落合烏帽子				○						縄中期住居跡14 土壇
102	森 平	落合烏帽子森平				○	○					
103	森 平 下	落合烏帽子森平				○						
104	清 水 端	落合烏帽子				○			○			
105	押 立	境高森							○			
106	大 泉	境高森				○	○					
107	小 泉	境高森					○					
108	高 森	境高森									○	地下式土壇
109	籠 畑	境高森				○		○				
110	新 道	境高森新道				○						縄中期住居跡2
111	井 戸	境池袋井戸					○					
112	干 沢	境池袋干沢				○						
113	新 田 平	境池袋新田平				○	○					
114	大 花	境池袋						○	○			縄後期住居跡2 縄晩期住居跡1
115	西 沢	境池袋西沢				○						
116	曾 利	境池袋曾利				○			○	○	○	縄中期住居跡76 平安住居跡3
117	日 向	境池袋日向				○	○					縄前期住居跡5 縄中期住居跡2
118	井 戸 尻	境池袋井戸尻				○	○	○	○	○	○	縄中期住居跡11 縄後期住居跡1
119	池 袋	境池袋				○						
120	池 生	境池袋池生							○		○	
121	小 井 戸	境池袋				○						
122	地 蔵 林	境池袋				○						
123	小 平	境池袋小平				○						
124	尖 石	境葛窪尖石				○						
125	中 ヲ リ	境葛窪	○			○						
126	泉 前	境葛窪泉前				○						
127	蔭 河 原	境葛窪蔭河原				○					○	
128	葛 窪	境葛窪									○	
129	三 十 三 番	境葛窪				○						
130	円 見 山 下	境池袋							○		○	
131	清 水	境先達				○						
132	先 達 城 跡	境先達									○	
133	甲 六	境先達甲六				○						縄中期住居跡4



挿図2 御射山西遺跡・手洗沢遺跡 地形、グリッド配置図(1:2,000)

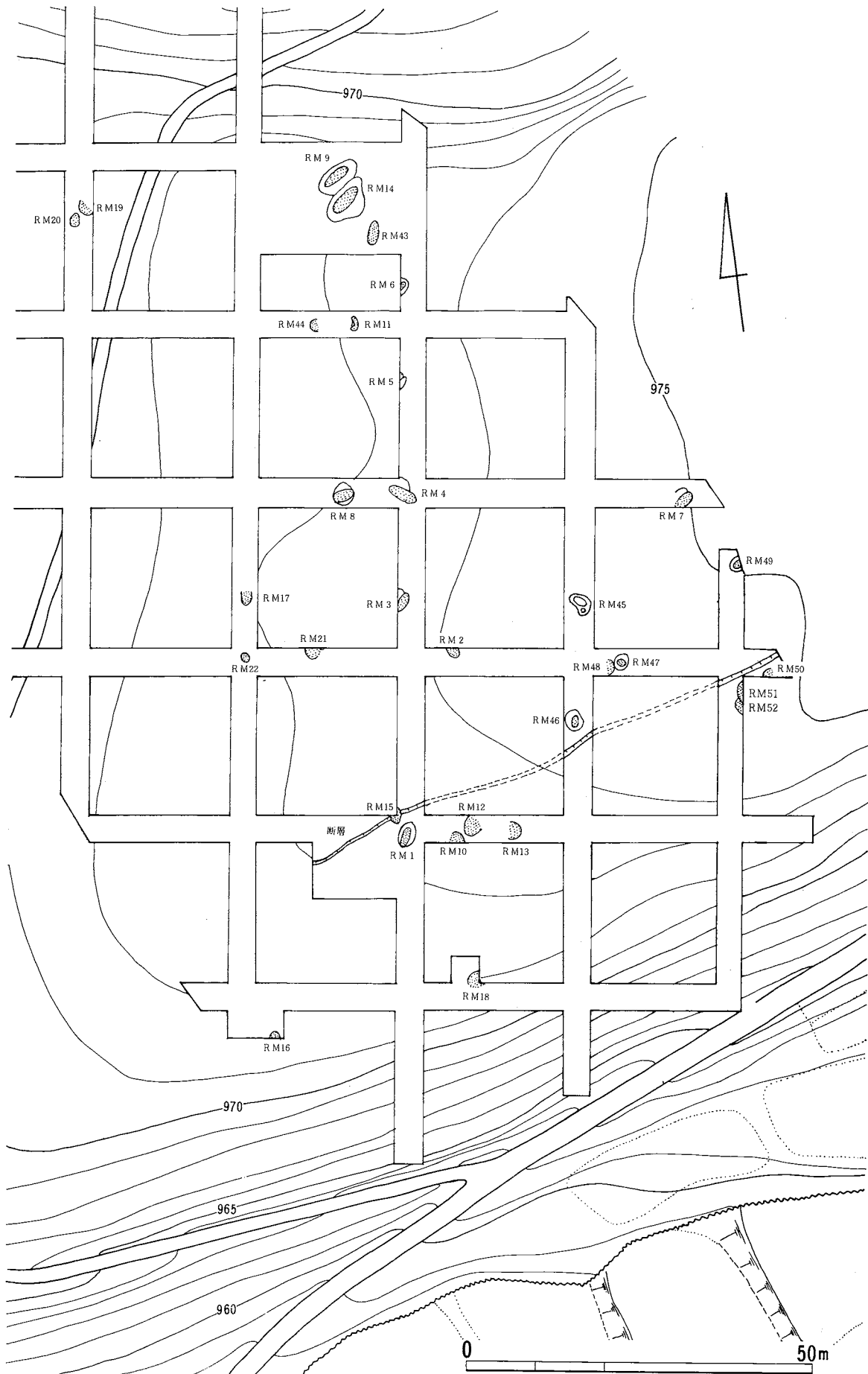
集している松林等々の条件により、従来行なわれてきた、本線センターラインを基線とした発掘区の設定方法では困難であるので、御射山西遺跡、手洗沢遺跡については、国土地理院座標を用いて発掘区の設定を行なうこととし、東西の基線をX-7.300、南北の基線をY-25.600にし、全域を2m方眼に区切りグリッドの設定をした。東西方向には、X-7.300、Y-25.600の基点から東へA・B、西へC・D・E・F・G・Hの計8の大地区を50m毎に設け、各地区内を東からA～Yの25小地区に分割、南北はX-7.300を50ラインとし、北から02～49、南へ50～129の地区に分割し、2m四方のグリッドをAC-65と表現するようにした。御射山西、手洗沢両遺跡へは国土地理院座標をもとに、グリッド設定のため26本の基準杭を打ち測量を行なった。測量は正確を期するため、長野市の写真測図研究所へ依頼した。なお、南北の基線とした国土地理院座標Y-25.600から、磁北は6°20'西偏し、真北は0°10'東偏している。

2) 調査の経過

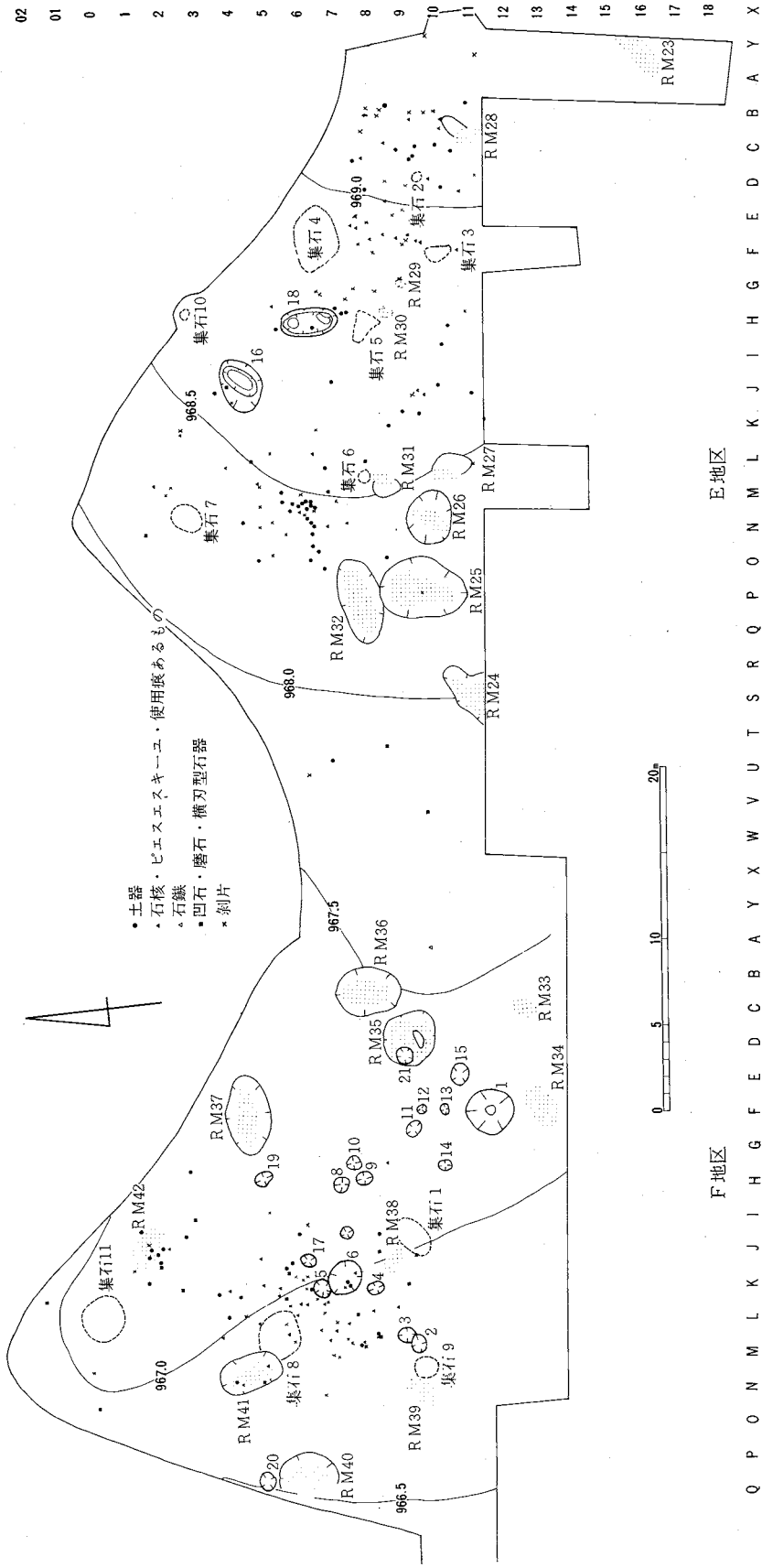
昭和53年8月21日、遺跡地内の立木の処理が終了していないまま、調査日数の関係から発掘調査に着手した。発会式の後、土層確認のため、御射山西遺跡地内の任意の地点20箇所において、2m四方の坪掘りを行ない、平行してグリッド設定を行なった。グリッド設定後、B地区XYライン4m×140mと、B・C・D地区の50・51ライン4mの表土除去、抜根をバックフォーによって行ない、以後この直交する二列を中心に、20m間隔で2グリッド分4m幅で試掘溝の表土除去を行なう。表土除去の終了したグリッドから手掘りによる掘下げを行ない、28日にB地区XY列、24～95グリッド、144㎡を終了した。ロームマウンド5基の他に遺構は皆無であり、遺物も縄文時代早期の土器片数片と、黒曜石数点を得たのみであり、遺構の存在は希薄と考え、以後は20m間隔に入れた試掘溝内を4mおきに掘り下げていった。この結果、A～D地区において検出されたのは、ロームマウンド25基、断層1のみで、他に遺構は皆無であり、遺物もCA-74～77、CF-74～77グリッドにおいて無文土器片、黒曜石片の比較的多い集中箇所があったのみで、他には点在しているだけであった。A～D地区調査終了後の9月8日頭殿沢遺跡へ移動、本線西部の斜面の発掘に着手した。9月25日手洗沢遺跡の表土除去をバックフォーで開始する。頭殿沢遺跡では10月5日検出された、土壇・小竪穴・ロームマウンドの測量を開始、さらに本線東側部分の調査に着手する。ほぼ全域の発掘を終了し、測量・写真撮影を残し10月11日手洗沢遺跡へ一班を、同19日主力を御射山西遺跡E・F地区へ注いだ。頭殿沢におけるすべての調査を11月6日に終了し、手洗沢遺跡は11月13日に全作業を終えた。この結果、頭殿沢遺跡において、竪穴・土壇・集石の遺構とともに、縄文時代早期の土器片、石器を得たが、51年度調査の際検出された早期生活址の続きと思われる。また、手洗沢遺跡では、当初期待されていた、48年に検出された、平安時代住居址を含む集落としての住居址は発見されず、溝状遺構のみが南斜面から検出されたただけであった。尾根上の平坦部よりはロームマウンド22基、陥し穴と思われる土壇1基が検出されたのみである。

御射山西遺跡E・F地区は、御射山沢沿いに小さく張出す二つの尾根上に、縄文時代早期の押型文土器・無文土器や、凹石・磨石・石鏃等とともに、土壇・集石が検出され、早期の生活址と判断した。土壇の中で、1、16号土壇は、その規模、内部状況から陥し穴の機能をもっていたことがうかがえた。このせまい範囲より、土壇21基、集石11基、遺物279点を検出した。霜柱が午後3時頃に立ち始め、朝は30cmもある霜柱をかきわけての調査が続き、発掘作業を11月25日終了し、以後調査員・調査補助員のみで御社宮司班の応援を受け、測量、写真撮影を行ない、12月7日すべての作業を終了した。

御射山西遺跡において、料金徴収所より30m以東は、県道取付部分にあたり、工事主体者である長野県の発掘地区となるため、BA-53、BU-65、BA-89のグリッドを結ぶ以東の地区は、長野県より委託をうけた富士見町教育委員会が調査団を結成し、団長の武藤雄六氏を中心に、昭和54年7月17日より28



挿図3 御射山西遺跡A～D地区遺構配置図(1:800)



挿図4 御射山西遺跡 E・F地区遺構・遺物分布図(1:400)

日まで発掘調査が行なわれた。同一遺跡であるため、グリッドの設定は中央道調査団で用いた地区割りを延長して行なっていたが、遺物、遺構番号も続き番号としてもらった。調査団からは、土屋、佐藤、青沼が出かけグリッドの設定を手伝った。その結果、ロームマウンド8基、断層とともに縄文時代早期・中期・後期の土器片、石器等約50点の遺物が発掘された。本稿では富士見町教育委員会、団長武藤雄六氏の了承を得て、遺構は全体図へ挿入し、遺物実測図、土器拓影を掲載させていただいた。なお、県分担地区の調査報告書『中央道諏訪南インターチェンジ県道取付用地埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』(昭和54年)を各所で引用させていただいた。県分担地区の発掘調査面積は640㎡である。

3 遺構

1) 縄文時代の遺構 (挿図3・4)

御射山西遺跡のほとんど大部分を占める広大な尾根上のA～D地区については、ロームマウンド、断層の遺構しか認められず、遺物も縄文早期から後期の土器片30点程と、黒曜石片及び使用痕の認められるもの80数点、石鎌2点、凹石2点程が点在しているのみであるのに対し、E・F地区の、御射山沢に沿って西南する小尾根がラクダのコブ状に小さな二つの張出しをもつ地域には、検出された土壌、集石のすべてが集中し、遺物も縄文時代早期土器片とともに多数の石器、黒曜石片等が集中して検出され、規模はごく小さいながらも、縄文時代早期の生活址としてとらえることができた。以下各遺構について概述する。

(1) 土壌 (挿図4・5、図版34-1・2)

21基が検出されたが表土が浅いため、木の根による破壊等も見られ、明確な土壌としてとらえることができたのは少ない。土壌の分布は、御射山沢沿いに小さく張り出す二つの尾根の内、西側F区に19基が集中し、東側E区には2基のみ存在するだけである。21基検出された土壌の中で、その性格等が類推できるのは、1号、16号の2基で、規模、内部状況等により陥し穴と判断される。

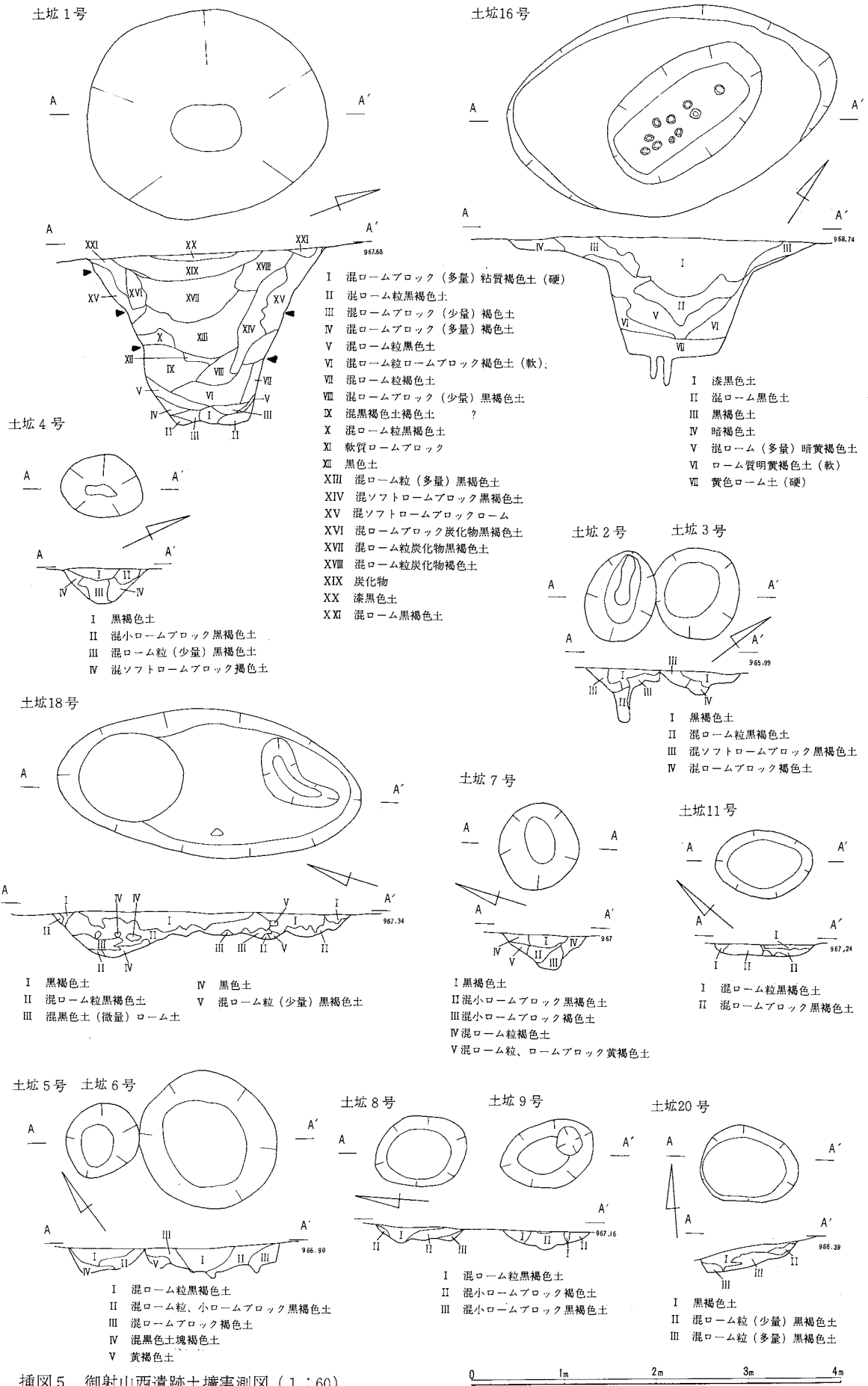
①土壌1号(挿図5)FC-11・12グリッドより検出された。検出面のローム中に漆黒の土が直径2.5mの円形に落込んでおり、相当大きな土壌が予想された。覆土の観察のため東半分を残し掘り下げた。覆土の様子は全体に自然堆積の様相を示している。I～V層のロームブロックを含む褐色土の堆積の後、VI・VII層が、次にまたロームブロックが含まれるIX・XII・XIII・XIVが堆積し、その後、X・XII・XVI・XVIII・XXの各層が順次堆積していったものと思われる。直径2.1m、底径0.8m、深さ1.9mの規模をもつ大きな土壌で、挿図5の断面図に▶で示した所に段差があり一巡している。また、土壌壁には一面に、掘削工具でつけられたと思われる幅3cm、長さ約25cmの痕跡があり、掘棒の使用がうかがえる。

②土壌16号(挿図5)EJ-5・5グリッドより検出された。東側の張出した尾根の端近くに位置し、南東3mには土壌18号がある。3.5×2.2m、深さ10cm程の楕円形を呈す浅い掘り込みの中に、1.9×1.1m、深さ1.2mの長方形を呈す土壌本体がある。土壌底部には直径10cm、深さ20～30cm以上の小ピットが不規則に10個あけられていた。この土壌底部にあけられた小ピットにはおそらく木の棒が立てられていたと思われ、本址を陥し穴であると判断した。覆土は自然堆積を示しているが最下層に見られるVII層はロームであり、小ピットに棒が立てられた後に固定させるために作られた層と思われる。

③ その他の土壌(挿図5)土壌18号を除き他は円形・楕円形を呈す。いずれも掘り込みは浅く、最深30cm程である。表土が浅いために、木の根等に攪乱されているものも多く、覆土の混乱が多い。遺物はほとんど土壌内には落込んでおらず、検出面からの出土が多い。前述した2基の陥し穴とともに、縄文時代早期に属すると思われる。

(2) 集石 (挿図6、図版34-3・4)

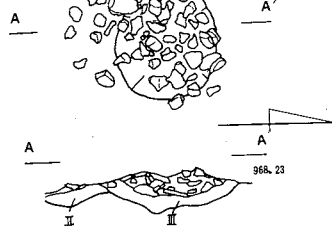
11基検出された。いずれも、八ヶ岳の火山活動にともない生成された、複輝石安山岩の転石が用いられ



挿図5 御射山西遺跡土壇実測図 (1:60)

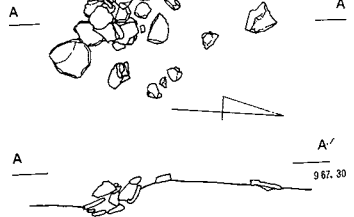
第II章 調査遺跡

集石1号



- I 黒褐色土
- II 混ローム粒黒褐色土
- III 混ローム粒、ローム塊黒褐色土

集石4号



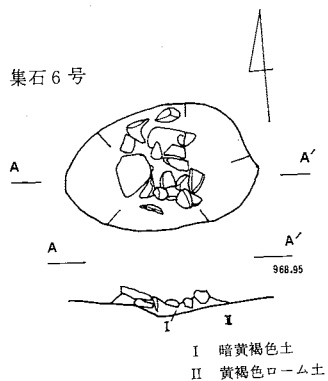
集石5号



集石8号

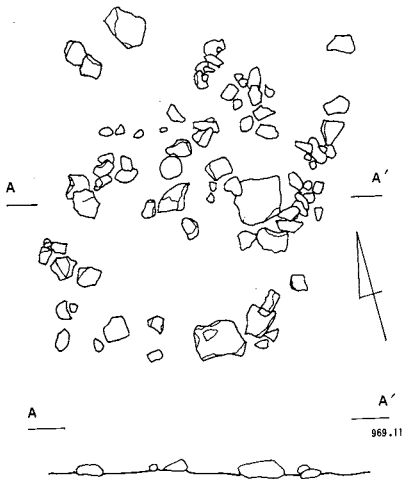


集石6号

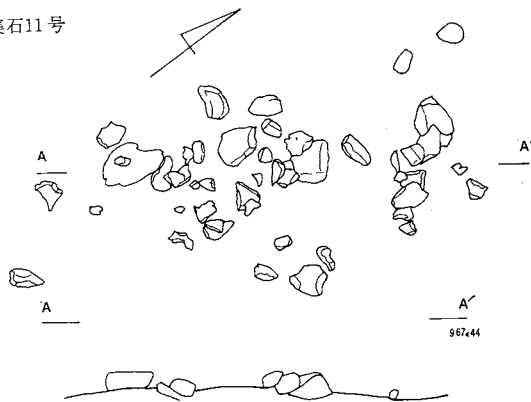


- I 暗黄褐色土
- II 黄褐色ローム土

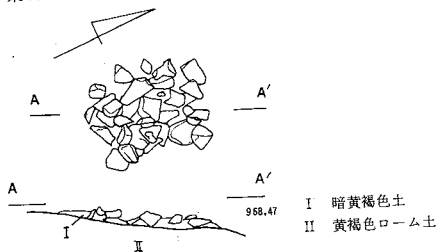
集石7号



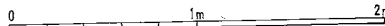
集石11号



集石10号



- I 暗黄褐色土
- II 黄褐色ローム土



挿図6 御射山西遺跡集石実測図(1:40)

ており、おそらく、すぐ北を流れる御射山沢より運びあげられたものと思われる。1・6号集石の2基のみが土壇をもち、他の9基には下部遺構がない。9基のうち、2・4・5・10号集石は、50cm～1.2mの範囲にかたまっているが、3・7・8・9・11号集石は散乱した状態であった。いずれの集石も、使われている石に明瞭な焼け痕を見ることができなかった。

(3) 遺物集中区 (挿図4)

御射山西遺跡より検出された約430点の遺物のうち、約65%の279点がEA～EY-02～14、FA～FQ-02～14グリッドに集中しており、20%の86点がCA～CF-74～79グリッドから出土した。

E・F地区より出土した遺物は、E区で24×14m、F区で10×16mのせまい範囲に集中していた。遺物はいずれも早期に属し、両地区より出土した土器片96片は山形押型文7点、楕円押型文15点、無文土器片62点、縄文2点の割合である。E地区のみ見れば、山形文7点、楕円文3点、縄文1点、無文52点で山形文と無文で94%を占める。一方、F地区では、山形文なく、楕円文12、縄文1、無文10で、楕円文が半数の52%を占め、E地区と較べれば押型文の差がはっきりと見られ、無文土器はE地区に圧倒的に多い。石器は、石鏃2、凹石8、磨石3、横刃型石器2、石核9、スクレイパー1、使用痕あるもの21がE地区から、F地区からは、石鏃2、凹石6、磨石2、石核7、使用痕あるもの10と、E地区から出土した石器の方が多い。また、黒曜石片、原石も50点ほどあり、F地区の17点の3倍にのぼる。

CA～CF-74～77グリッドにも遺物の集中があり、無文土器片23点、山形押型文1点、縄文1点の他、石鏃3点、ピエス・エスキーユ26点、使用痕あるもの13点の他、凹石1点、黒曜石片が出土した。殆どの遺物が、断層によってできたと思われる浅い凹地とその南に散在している。無文土器のうち10点程は早期にかかるものと思われ、他は後期のものである。

いずれも遺物散布の範囲はせまく、遺物の量から考えても長期間続いた生活址とは考えにくい。おそらく狩猟、採集等の折に営まれた跡と見ることができよう。

2) その他の遺構

(1) ロームマウンド (挿図3・4・9・10、図版34-5・6)

御射山西遺跡の発掘面積は5300㎡で、検出されたロームマウンド数は52基である。平均100㎡に1基のロームマウンドがあることになり、未発掘の地区内も含め、相当たくさんのロームマウンドが存在していることと思われる。時間的な制約もあり、わずかに5基を完掘できたにすぎない。

すべてのロームマウンドは尾根上の平坦部より検出され、斜面には皆無である。発掘調査した5基の他は平面形のみ検出しただけであるが、高さ4～40cmのマウンド部をもち、周囲の全周、片方、一部に黒色の落込みがあるものが約半数認められた。

発掘調査のできた各々のロームマウンドについて概述すると、ロームマウンド1号は、東西に走る断層のすぐ南の凹地に位置している。断層が起こる以前のものである。3×0.9m、高さ4cmのマウンドをもち、下部壇3.8×2.5m、深さ37cmの規模をもつ。土層は中心部に下部壇底部にまで及ぶ明黄色ロームがつまり、南側の帯状に入る黒褐色土の入り込みが一番大きく、北側にはわずかにあるのみである。4号は1.5×1m、高さ10cmのマウンド部2つと、4.8×3.2m深さ30cmの下部壇からなり、ほぼ全周する位置から黒色土、混ローム粒黒色土が底部へ入り込むが、西側が強い。8号は2×1.6m、高さ30cmのマウンド部と、2.8×2.6m、深さ43cmの下部壇から成る。黒色土の入り込みは東側からが一番深く、他には少ない。9・14号は1.5mの間隔で隣りあい検出された。マウンド部は、9号5.5×2m、高さ31cm、14号は6.3×2.3m、高さ19cmと52基中で一番大きい。同様に下部壇も、9号は6.2×3.5m、深さ80cm。14号は6.8×4.5m、深さ92cmと最大である。黒色土の入り込みは少なく、南北方向の入り込みがやや大きい程度であ

る。断面から判断すると14号が9号に切られた状態が観察でき、9号の方が新しい。以上が発掘調査したロームマウンドであるが、未掘分もほぼ同様である。

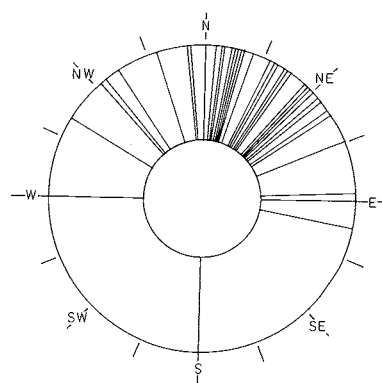
ロームマウンドに関する報告は、中央道報告例では、昭和45年調査の飯田市大門原B遺跡が初見で、以後中央道関係では、大門原タイプ of 土壌として扱われている。大規模発掘によりその調査例を増していく中で遺物の伴出がないこと等により性格づけは不明となっているが、昭和49年、「信濃」第26巻3号で能登健氏が風倒木痕説を、また、昭和50年武藤雄六氏は「山麓考古」第3号で、肥料溜めとの説を提示している。他に住居址、おとし穴、貯蔵穴、墓壙、産小屋等々の見解が示されている。本址で検出されたロームマウンドは伴出遺物は検出面からのものが大部分で、下部壙からの出土例はなく、その性格については知り得ない。

ロームマウンドの性格を知るための1つの方法として、風向とロームマウンドの長軸角を比較してみた。風倒木痕を発展させる意味での1つの方法と思ったからであるが、発掘例が少ないため土層との比較検討もできず今後への課題となった。紙数の関係で詳述できないが、別の機会を待ちたい。

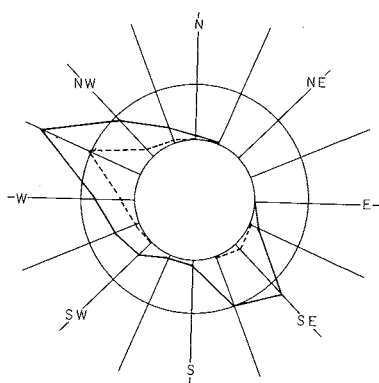
挿図7は今回発見された、ロームマウンドのマウンド部の長軸が示す角度である。北～東へ向くものの数が大部分を占める。大きく三つの方向に大別でき、 $N 0^{\circ} \sim 20^{\circ} E$ 、 $N 20^{\circ} \sim 35^{\circ} E$ 、 $N 40^{\circ} \sim 60^{\circ} E$ の方向にほぼまとまる。挿図8-1は気象庁諏訪測候所から借用した資料で、1945年～1978年の平均風向割合で、実線は風速10 m/s以内、破線は10 m/s～14.9 m/sの風である。2は、長野県刊、「長野県の気象と災害」から、昭和20年～54年におこった台風・突風の記録を諏訪地方のみ抜き出して作図したものである。諏訪測候所は諏訪湖東岸にあり、この位置の観測資料と、八ヶ岳山麓にあるロームマウンドの方向について比較するのは非常に危険ではあるが、八ヶ岳山麓における資料がない現在あえて使用した。

これによると、普通に諏訪地方を吹く風は西北西の風が一番多く、挿図8-2 諏訪地方の風(台風・突風)南東の風が次いで多いことがわかる。さらに、台風・突風の最大風速も南～南南東の風が多く、次いで西北西の風が多い。瞬間最大風速の方向も、南南東、西北西が多い。この風向とロームマウンドの長軸方向を重ね合せて見れば、長軸が示す方向と風向はほぼ直角となるものが多い。土層についてはその共通点を見い出せなく、風向との関連性については結論を出せず、さらに多くの例が必要となろう。

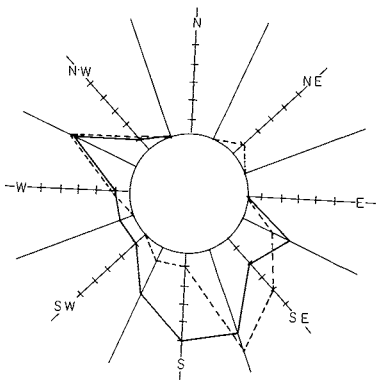
風向と直角に交わる長軸をもつロームマウンドの数が多くは指摘でき、単なる偶然とも思えない。また、黒色の落込みも、風向との関連が強いと思われ、これ程の資料では風倒木痕である証明もできないが、何らかの因果関係があると思われ、ロームマウンドの中には風倒木痕である可能性が強いものもあることがうかがえる。花粉分析などを通し、当時の自然環境の復元も今後必要となってくるであろう。なお、ロームマウンドができた時期については、上面に早期の土器片がある場合もあり、早期以後と考える。



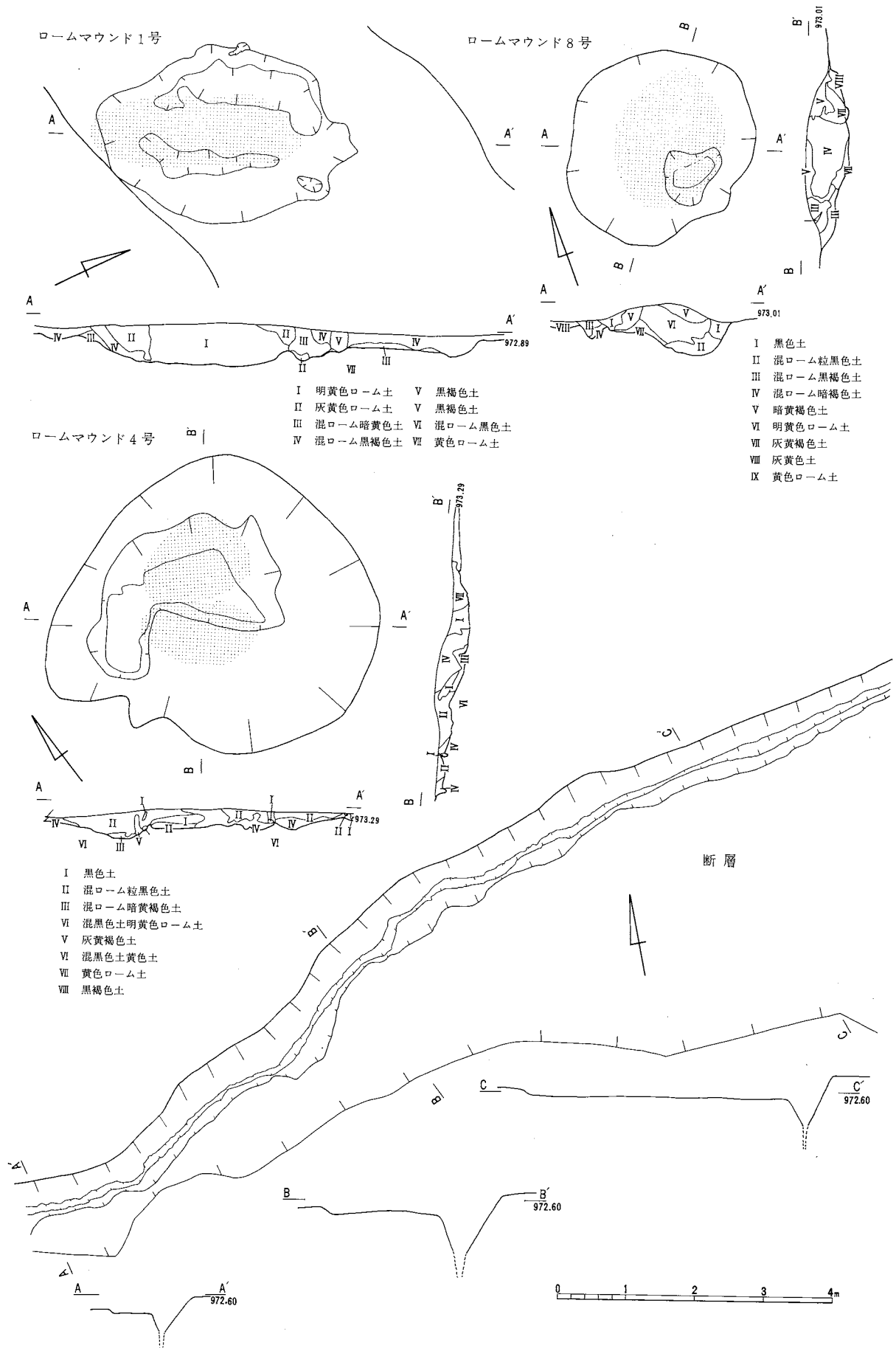
挿図7 ロームマウンド長軸方向



挿図8-1 諏訪地方の風(実線-10%
破線-10%~14.9%)



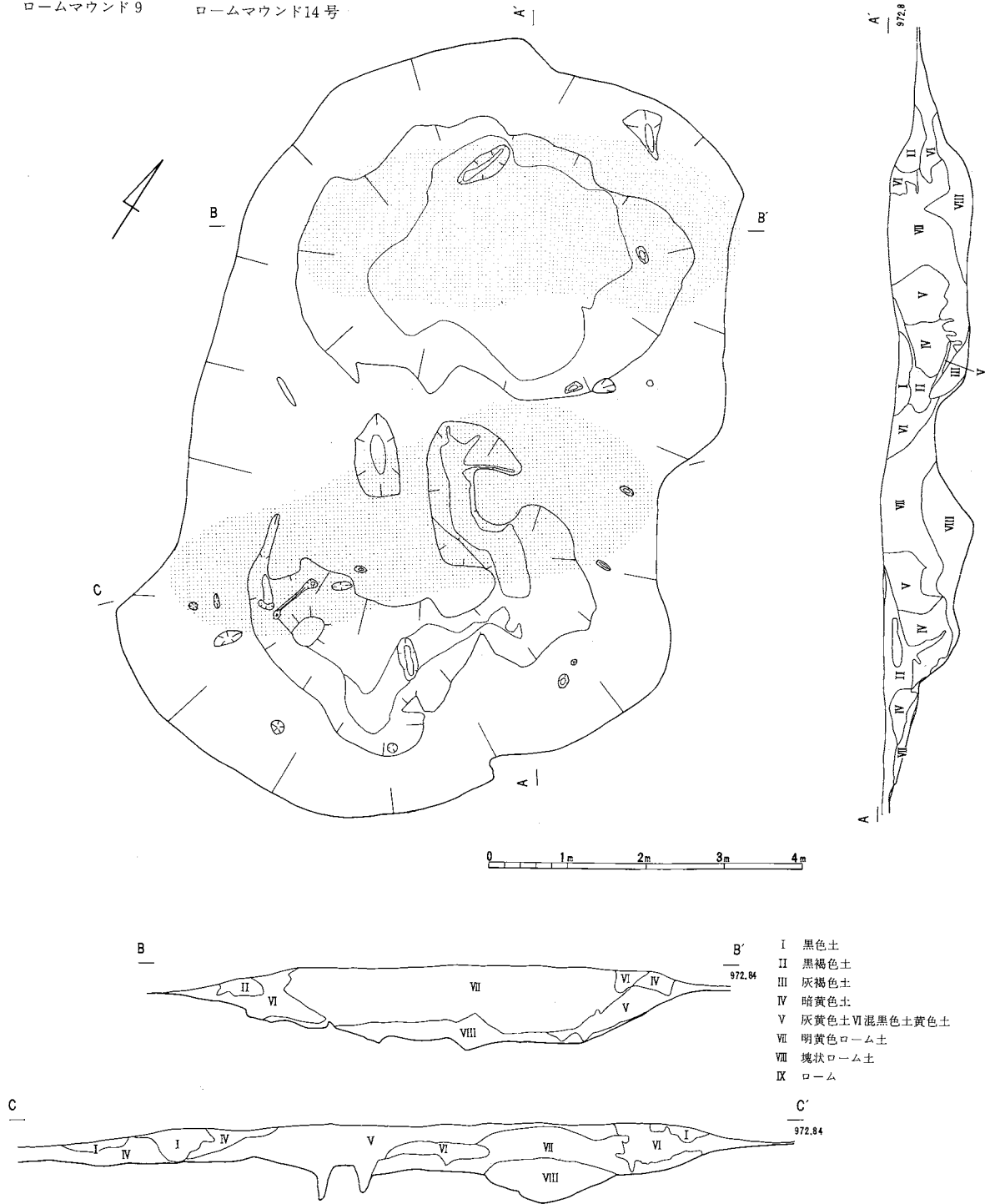
挿図8-2 諏訪地方の風(台風・突風)
実線-最大風速、破線-瞬間最大風速



挿図9 御射山西遺跡ローママウンド・断層実測区 (1:80)

ロームマウンド9

ロームマウンド14号



挿図10 御射山西遺跡ロームマウンド実測図 (1:80)

(2) 断層 (挿図9、図版34-7)

C地区～A地区にかけ、手洗沢に開析された尾根縁より25m程尾根中央へ寄った地点に、ほぼ東西の方向に走っている。東はAY-63グリッド辺で消滅しているが、西は調査したCF-76グリッドより以西へ伸びていっているものと思われる。調査範囲で長さ70mを測り、段差は西へ行く程大きく30～40cmに達する。断層の南側には、10cm程の落込みが平行して走る。この断層は、泥流堆積物の上面が南方に向いずれたために発生したものと思われ、その規模、範囲は小さく、最大幅も、1～2m程度である。段差の走るCA～CF-74～77グリッドより早期・後期の土器片が出土しているが、断層をはさんで北・南側に早

期無文土器を検出していることから考え、おそらく早期末以後の時期に断層が起ったと思われる。

(3) 比丘尼さま

尾根斜面裾に御射山社へ通じる松並木のある参道があり、そのかたわらに土地の人々が「比丘尼さま」と呼んでいる無縫塔が一基立っていた。むかしこの場所で行きだおれになった尼僧がいて、御射山神戸の人々が供養塔を立てたという。現在でも御射山祭の折には腹がけ(御射山社は原山様ともいわれ、原と腹が通じる所から腹を病まないご利益がある)やおそなえ物があげられている。工事のため破壊されるので、地元の人々が尾根上へ移転し、その跡を発掘したが、下部からは何も発見されなかった。地山をわずかに削り、切石の基壇を置き、その上に無縫塔が立てられたものであったようだ。いつ頃のものかはいずれも知らないが、おそらく近世以降のものであろう。

4 遺物

1) 縄文時代早期の土器

(1) 押型文土器 (挿図11-1~21、図版35)

27点が出土し、内16点が楕円文、11点が山形文で、格子目文はない。楕円文の16点は3点がE地区から、大部分の13点はF地区より検出された。11点ある山形文は、3点がB地区、1点がC地区で、7点がE地区より出土し、地点により差がある。

楕円文は挿図11-1の円形に近い例を除き他はすべて細長い楕円形で、長軸5~6mm、短軸3mmのほぼ一定した大きさの紡錘形を示す。破片が小さいために全体を求め得ないが、帯状施文ではなく、全体に密接して施文されていると思われる。口縁部片は4片あるが、口唇部にわずかな無文帯が認められるが意識的に無文帯部が作られたかどうかは判断できない。胎土には石英粒、雲母片を中程度に含み、焼成は良好であるが、表面が剥落しているものもある。器厚は8mm前後である。原体の幅・長さを復元できる破片は少ないが、2単位の文様構成が4・7から観察できる。細久保式と思われる。

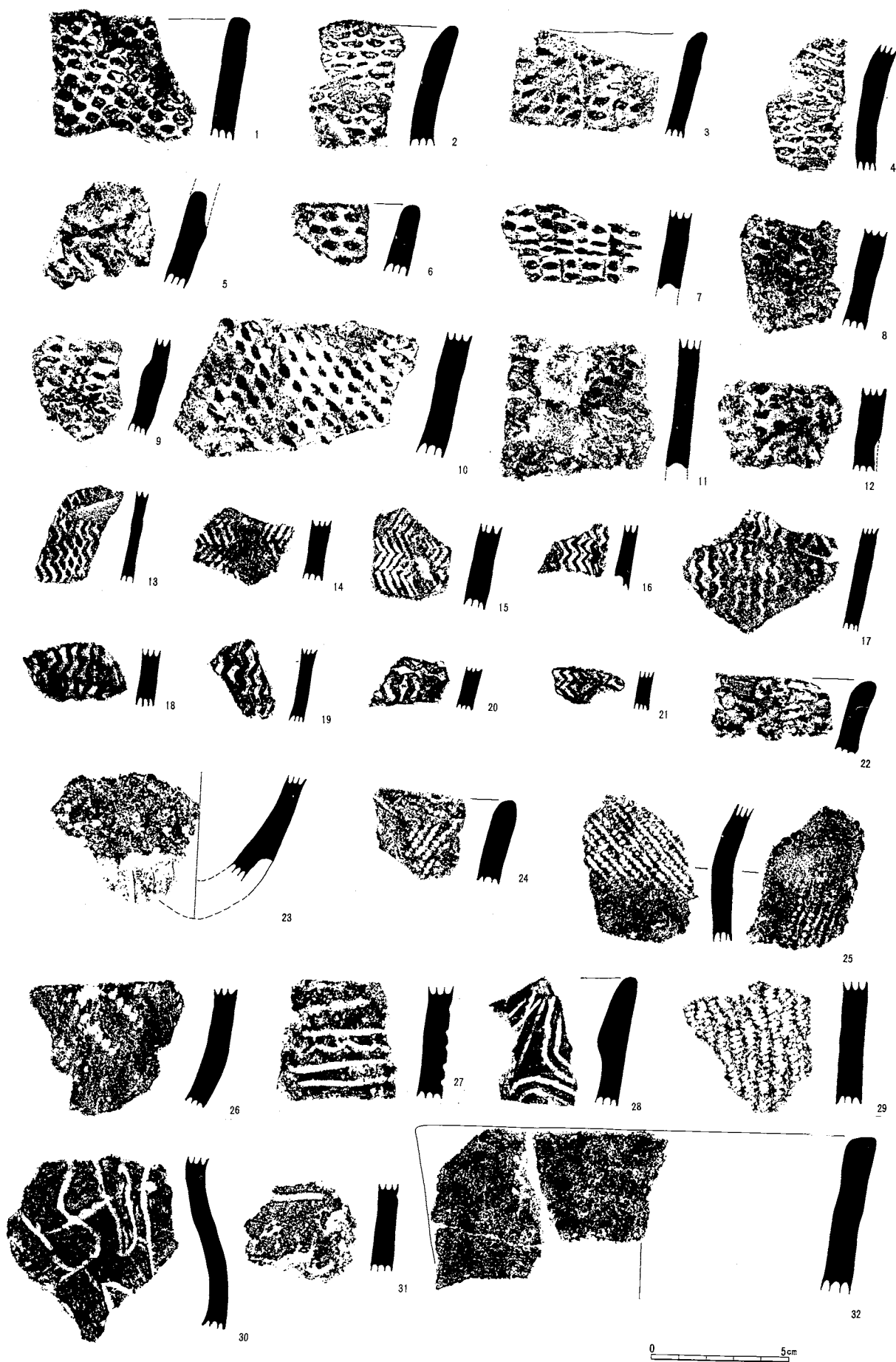
山形文は13~15がB地区より、他はE地区より出土したものである。14・15の器厚は7mmと厚く、他は4mmと薄い。山形の一波動間は薄手のもので6~9mm、厚手のもは15mmで器厚により差が認められる。山形のなす角はすべて鈍角を示すが、21のみほぼ直角に近い。山形の幅は2mm前後であるが、14・15は1mmと細い。破片が小さく原体の長さは復元できない。すべて縦方向に施文されるが、20のみ横方向に施文された下が縦方向となる。14のみ無文帯が作られている他は密接した施文と思われる。胎土には石英粒の混入があるが、13・15は雲母の混入もある。黒褐色を呈し焼成はよいが、14・15・21の焼成はややあまい。楕円文と同様細久保式に比定できよう。

(2) 無文土器 (挿図11-22・23、図版35)

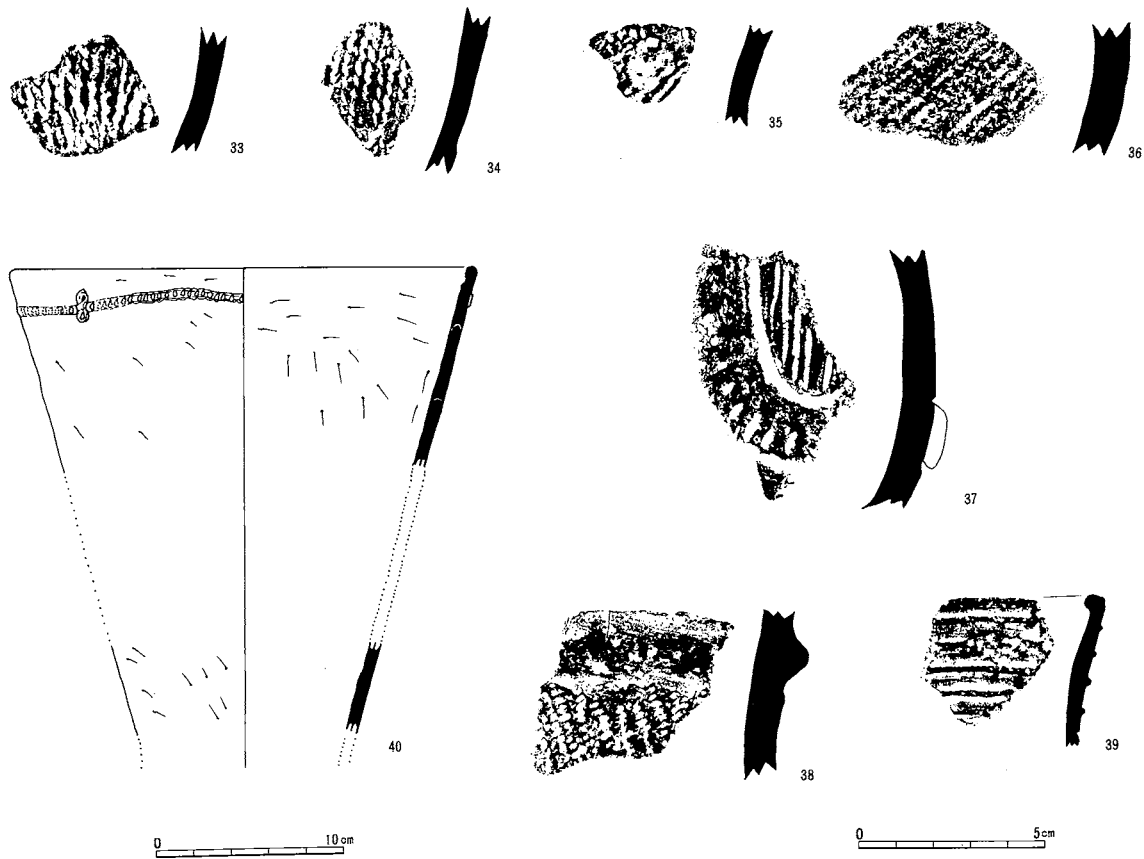
95片が出土したが、早期の土器片と思われるものは71点であり、そのうち92%にあたる65点はE・F地区より検出された。特にE地区から多く52点を数える。23はE地区より出土した尖底部で、胎土中に石英粒と多量の雲母が混入されている。焼成はよく、内面は黒色を帯びる。22は無文の口縁部で2個の補修孔があげられるが、1個は完通していない。他の無文土器は口縁部4片の他はすべて胴部破片で、胎土に多量の雲母が含まれるもの、少量含まれるもの、全く含まれないものがあり、3~5個体分程が認められる。全体に焼成はよい。E地区においては無文土器と楕円押型文の占める割合が高く注意される。

(3) 縄文のある土器 (挿図11-24、25、図12-33~35、図版35)

3点出土した。24は口縁部片であるが胎土に石英粒と乳白色を呈す砂粒が混入されている。内部には横ナデの痕が残る。25は表裏に縄文が施文される。外反する口縁の内側と、頸部外側に逆よりの細かな縄文が施文されている。石英・雲母の細粒を胎土に含む。FK-5グリッド出土。26は、絡条体圧痕文である。



挿図11 御射山西遺跡出土土器拓影(1:2)



挿図12 御射山西遺跡出土土器実測図(1:4)・拓影(1:2)(昭和54年発掘)

焼成は非常によい。EH-10グリッド出土。図12-33~35は撚糸文土器片で、胴部から胴下半部の破片で、焼成は非常によい。AY~AB-62、63グリッドより検出された。早期でも前半のものと思われ、押型文土器に先行するものであろう。

(4) その他(挿図11-27、図版35)

27は田戸下層式土器片と思われる。CKグリッドより出土した。棒状工具による沈線が4条横走し、その間に波状に沈線が施文される。胎土に石英粒を含み焼成は余りよくなく風化がはげしい。

2) 縄文時代中期の土器(挿図11-28・29、12-36・37、図版35)

挿図11-28・29、同12-37・38がそれである。28は半截竹管による平行沈線が施文される波状口縁部片で焼成は非常によい。胎土に石英粒・雲母を含む。縄文中期初頭、九兵衛尾根I式。29は右撚りの縄文が全面に施文される胴部片で井戸尻III式と思われる。36・37は井戸尻I式に属する土器片で、37は楕形文が施される。

3) 縄文時代後期の土器(挿図11-30~32、12-38~40、図版35・38-1)

30は棒状工具による沈線が施文される。暗褐色を呈し胎土に石英、乳白色砂粒を含み焼成はよい。称名寺式併行の土器である。31は頸部片と思われ一条の沈線が横走する。32は無文の口縁部で、口径17cmをもつ深鉢形土器で、器厚は約1cmと厚く、器面に指圧痕がみられる。CE-75グリッドの土器集中区より出土した。挿図12-40は昭和54年度の発掘でBL・M-63グリッドからまとまって検出された。口縁部に粘

土紐を貼布し、刻みを入れ8の字形に粘土紐を貼布する。胎土に1mm前後の砂粒を多く含み焼成はよい。器面内外にへら削りの痕がのこる。口縁部はラッパ状に広がり、胴部から底部近くですぼまり、底部がやや開く器形をもつと思われる堀之内式土器である。

4) 石器

127点出土した。その内訳は、石鏃10点、スクレイパー2点、石核状石器2点、ピエス・エスキーユ7点、石槍状石器が2点、打製石斧1点、横刃型石器5点、磨石10点、凹石18点、砥石1点、使用痕のある黒曜石69点で、他に黒曜石剥片、原石等が出土している。

(1) 石鏃 (挿図13-1~10、図版36)

すべて黒曜石製で透明度の高い良質な石質である。基部は抉りの深いもの、浅いもの、平基、有柄の4種に分けられ、側辺線は、直なもの、外湾するものに分けられる。抉りが深いものは直な側辺をみせるが抉りの浅いもの、平基のものは外湾する側辺をもつ。2は他と異なる形態をもち、返しの部分が外反する。調整もていねいである。

(2) スクレイパー (挿図13-11・17-70、図版36)

11は硅質粘板岩、70は黒曜石製である。ともに刃部に簡単な調整が加えられているのみである。11の右中央部の稜線には磨耗痕跡が認められる。

(3) 石核状石器 (挿図13-12・13、図版36)

2点とも黒曜石製である。『中央道報告書—諏訪市その3』千鹿頭社遺跡において始めて注意された遺物である。2点ともに不特定方向からの剥離が見られ、13は一面に自然面を残している。

(4) ピエス・エスキーユ (挿図13-14~20、図版36)

両端に打撃をうけた時に生じる細かなつぶれをもち、二方向からの剥離面をもつ。いずれも黒曜石製で、18を除き、一面、あるいは部分的に自然面が残る。平面形態は長方形を呈するものが多い。19・20は他のものと違い、側辺に切断面と思われる痕跡を残す。

(5) 使用痕のあるもの (挿図13-21~31、図14-32~44、図版36)

すべて黒曜石製で21~37が剥片、38~43は石核、44は原石の側辺に1~数ヶ所の細かな刃つぶれ、刃こぼれ状の使用痕が認められる。石器全体の54%を占める。側辺につけられたものが大部分を占めるが、37のように先端部につけられるものもあり、直・外湾・内湾と使用痕の形態に三種類があげられる。42・43に見られるよう、使用痕としてではなく、あきらかにスクレイパーエッジとした方がよいものもある。

(6) 石槍状石器 (挿図15-45・16-69、図版36・38)

45は粘板岩製、69は硅質頁岩製である。45は簡単な調整のみで作り出されており、胴部でややくの字状を呈し先端は尖がる。その形状、大きさ等より、石槍もしくは刺突具としての機能が考えられる。69は昭和54年度に発掘されたもので縦長の石匙状の形態をもつ。平板な石材の両側辺にそれぞれ反対面から幅6mm程の調整を加え側縁を形づくっており先端を尖らせている。縄文時代後期に属するものと武藤雄六氏は判断している。

(7) 打製石斧 (挿図15-46・図版37)

1点のみの出土である。粘板岩製で、身部が中程より厚くなり刃部へと続く。側縁は一方のみからの調整で作られており、刃部には顕著な加工が認められない。

(8) 横刃型石器 (挿図15-47~49・16-74・75、図版37・38)

49・74が硬砂岩製で、他は粘板岩が用いられている。いずれも刃部は楔形を呈し、背部は丸みをもつか平らである。いずれも直刃をもち、背部も刃部と平行になるものがほとんどであり、中央道調査団での横

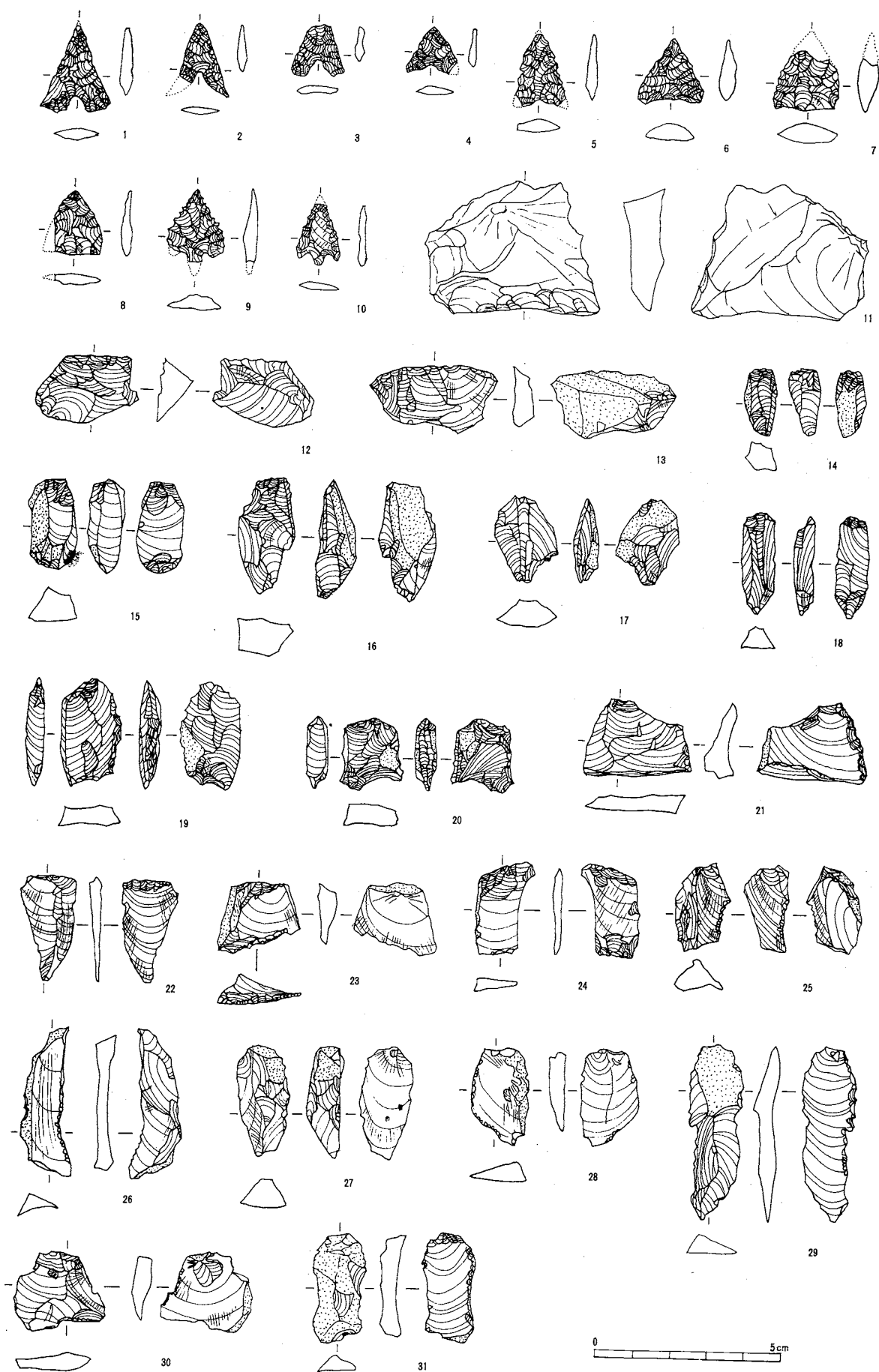


插图13 御射山西遺跡出土石器实测图(1:5)

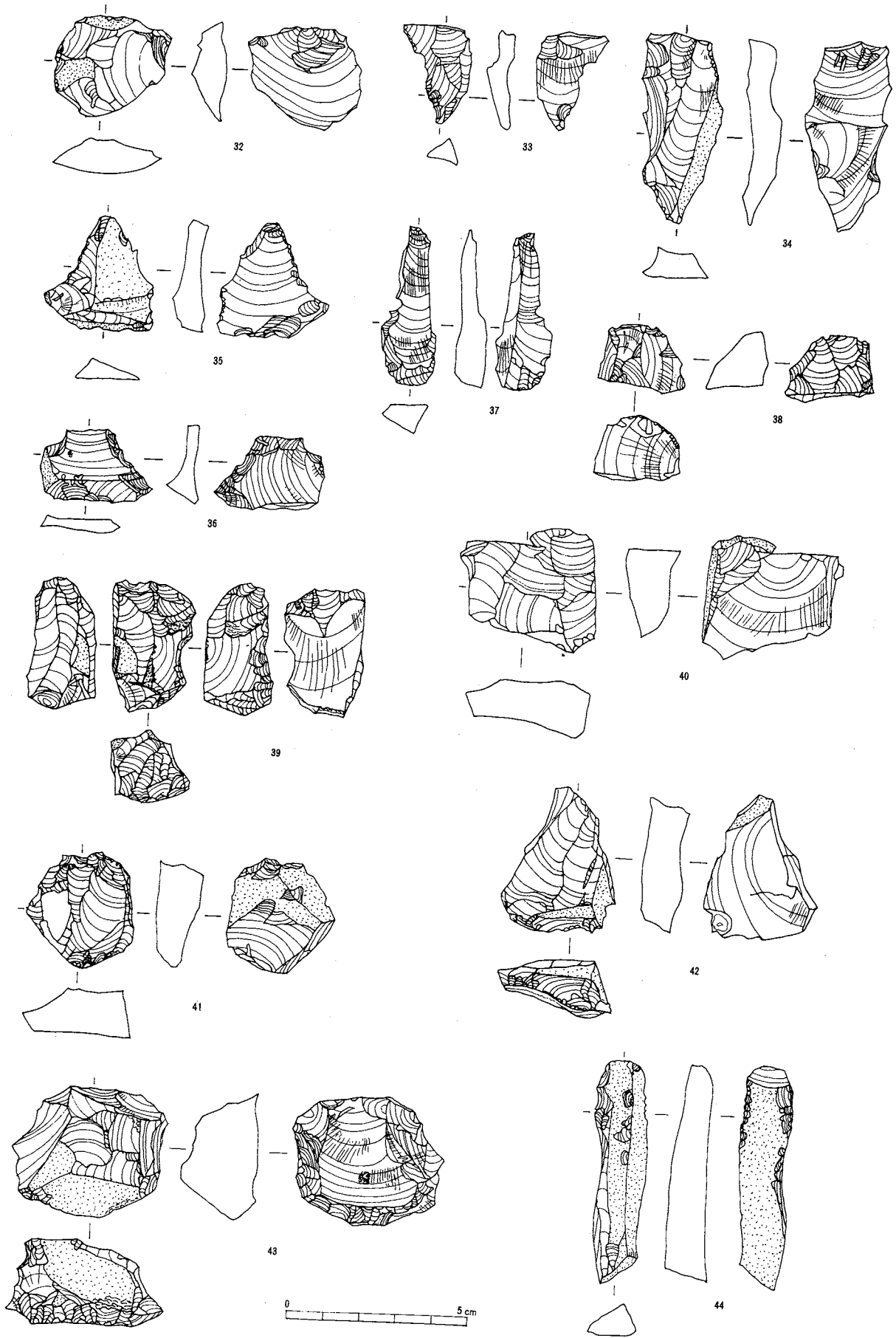
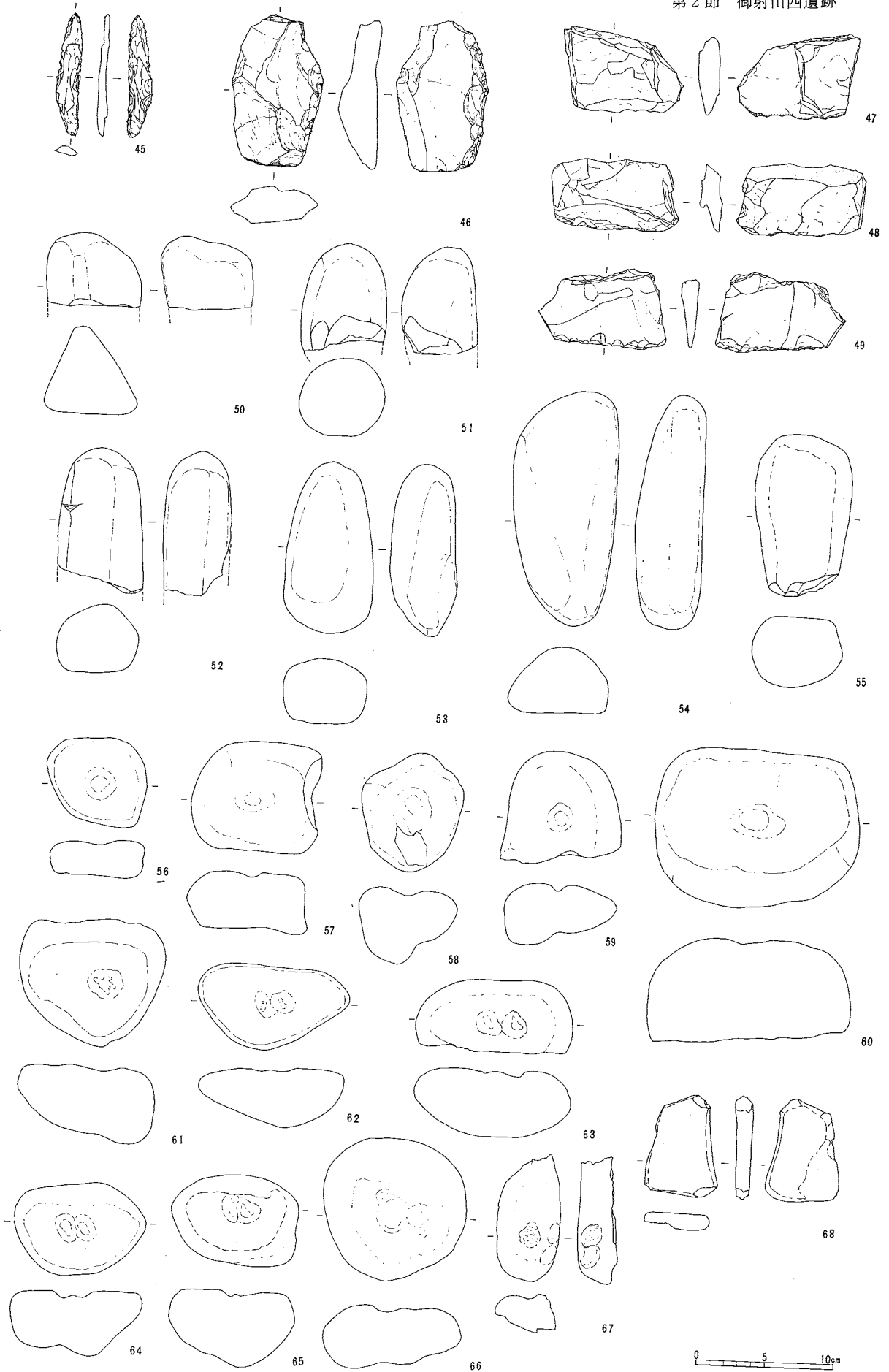


插图14 御射山西遺跡出土石器実測図(1:1.5)



挿図15 御射山西遺跡出土石器実測図(1:4)



挿図16 御射山西遺跡出土石器実測図 (69~70、1 : 1.5、74~80、1 : 4) (昭和54年発掘)

刃型石器の形態分類、I B類に属する。

(9) 磨石 (挿図15-50~55・16-77~79、図版37・38)

52の硬砂岩製のぞき、他はすべて輝石安山岩製である。早期に特徴的に見られる断面三角形を呈すいわゆる特殊磨石は50のみであり、他は自然礫が用いられ、側辺・平面に磨痕が認められる。80は平板石皿としてとらえられている。

(10) 凹石 (挿図15-56~67・16-76、図版37)

すべて輝石安山岩製である。凹みが表裏に、1 : 0、1 : 1、1 : 2、2 : 2、とバラエティに富む。凹みの直径は2cm内外でほぼ一定しているが、深さは、わずかに凹むものから最高7mmまでで、平均3~5

mm程度である。平面形は色々で、転石を任意に使用しており統一性はない。67は他の凹石と違い、鋭角なものでつついた痕跡が上面に1、側面に2ヶ所見られる。中央道路線内の岡谷市船霊社遺跡からこれと同じつけられ方をしたものが打製石斧にあり、いわゆる凹石とは別種の使われ方をしていたものと思われる。

(11) 砥石（挿図14-68、図版38）

安山岩製で厚さ1cmの平板な自然石を用いている。表裏面と側辺を全周する磨痕跡が認められるが、特に側面の磨耗が顕著で、図の左側面は約3mm程内湾し使用の多さをあらわしている。大きさ、形状から固定させて使用したものでなく、おそらく手をもって使用されたと思われる。

5 まとめ

御射山西遺跡の中心部は、御射山沢に沿い小さく張り出す二つの尾根上部にあり、縄文時代早期の人々の生活址としてとらえることができた。その規模は小さく、20m四方程度の範囲で2ヶ所に認められる。その1つであるE地区の生活址には、大小の集石が7基、土壙1基とともに、楕円押型文と無文土器が散在しており、尾根縁に陥し穴がある。F地区の生活址では土壙18基、集石4基と山形押型文、無文土器が検出された。数は少ないながら石器の数種類と、黒曜石片も検出された。おそらく御射山沢での漁撈、東に広がる広大な地域での狩猟・採集等のための生活の跡であろう。

土壙1号・16号は陥し穴としての機能をもっていた遺構である。早期土器片が上面より検出されていることも考えれば、おそらく同時期か時間的に若干の差がある範囲で掘られたものと考えられる。御射山沢をへだてた北側の尾根には、頭殿沢遺跡があり、本址が利用される以前の押型文土器（立野式・沢式など）等が発掘され、縄文時代早期の生活址としてとらえられている。その意味でいえば、本址の陥し穴は頭殿沢遺跡の人々が利用したことも考えられよう。全面発掘でないため2基のみの発見であったが、おそらく、御射山社附近から伸び、手洗沢遺跡へと続く広大な尾根上にはもっとたくさんの陥し穴が設けられていたに違いない。陥し穴は普通けもの道に作られると聞く。1号・16号の土壙は、生活址の範囲内に位置しており、生活址が使用された時期に同時存在していたものとは思われない。おそらく時期的に違う場所に設けられていたことも考えられよう。

52基というたくさんの数が検出されたロームマウンドについてはその性格をつかむことはできなかったが、風の方向とはほぼ直角に交わる長軸をもったマウンドが多いことが、不備な資料からではあるが指摘できる。風に対し直角のマウンド部は風倒木の根が持ち上げたロームが崩れ落ちた後にできた層であると考えると同時に、その数の多さから他の説は満足させられない。発掘面積から割り出せば、100㎡に1基のロームマウンドがあり、それをこの尾根上の面積に単純にあてはめれば、実に400~500基の数があったことになる。同時期にできたものとは思えないながら、その数は多すぎるからである。まだまだ資料不足、検討不十分であり速断はゆるされないが、この地は豊かな森林が広がり、その所々に縄文時代の各時期を通じて人々が、狩猟・採集のためのキャンプを張っていたと考えたい。今後花粉分析等も行ない、当時の自然環境の復元をしていけば、ロームマウンドの性格もはっきりとつかめることができよう。しかし、ここで試みた風向との関係も不備な点がほとんどであり、他地域との比較もなされていない。地域差も考えられ、一様な結論づけができようはずもない。今後課題をのこしたまま、さらに比較検討を続けていきたい。

遺跡地内を走る断層としては、中央道用地内の諏訪市荒神山遺跡が報告されている。本址もその一例となるであろうが、断層の起った時期をはっきりと決める資料に乏しいのは残念である。

本報告にあたり、快よく資料をお貸しいただいた気象庁諏訪測候所、ご指導、ご協力をいただいた富士見町教育委員会、武藤雄六氏にお礼申し上げます。

第3節 手洗沢遺跡（STAB）

1 位置（挿図1、図版39）

手洗沢遺跡は、諏訪郡富士見町御射山神戸にある。前節で報告した、御射山西遺跡が立地する尾根の南斜面にあり、位置・環境については前節1の報文中に含めたので割愛する。本遺跡は、昭和48年度に本線部分の調査がなされ、昭和48年『中央道報告書—諏訪富士見町その1—』で報告されているので参照願いたい。

2 調査の経過

昭和53年10月11日、頭殿沢遺跡の測量・写真を残し二班編成で一班は御射山西遺跡E・F地区、一班は手洗沢遺跡の調査に着手した。8月末すでにグリッドの設定を終了してあったので、昭和48年度に発掘された平安時代住居址の広がりを追うために、直ちに南斜面の発掘に着手した。しかし、住居址の検出はできず、わずかに平安時代の杯破片数点を検出したのみで、他に溝状遺構を、海拔960mラインで二本、尾根の上縁で一本検出したのみであった。10月23日、南斜面の調査を断念し、尾根上部の平坦地の調査に着手した。すでにバックフォーで表土下30cmまでを除去してある85・86と98・99各ライン、南北のFX-Y、GK-GLラインを掘り下げる。住居址の検出はなく、遺物もわずかに認められるのみで、GK-L-95・96グリッドで土壇1基を検出した他は22基のロームマウンドが検出されただけである。11月5日、土壇3号の測量を終へ、発掘したロームマウンド5・6・15・16号の4基の測量、写真撮影を11月13日終了させ、手洗沢遺跡の調査のすべてを終了した。なお、遺構番号は昭和48年度の遺構番号を引きついで、土壇は3号より、溝状遺構は2より、ロームマウンドは4号からそれぞれつけた。

3 遺構

本址より検出された遺構は、尾根の南斜面より溝状遺構2、尾根上の平坦部より土壇1基、溝状遺構1とロームマウンド22基である（図1）。以下それぞれについての発掘所見を概述する。

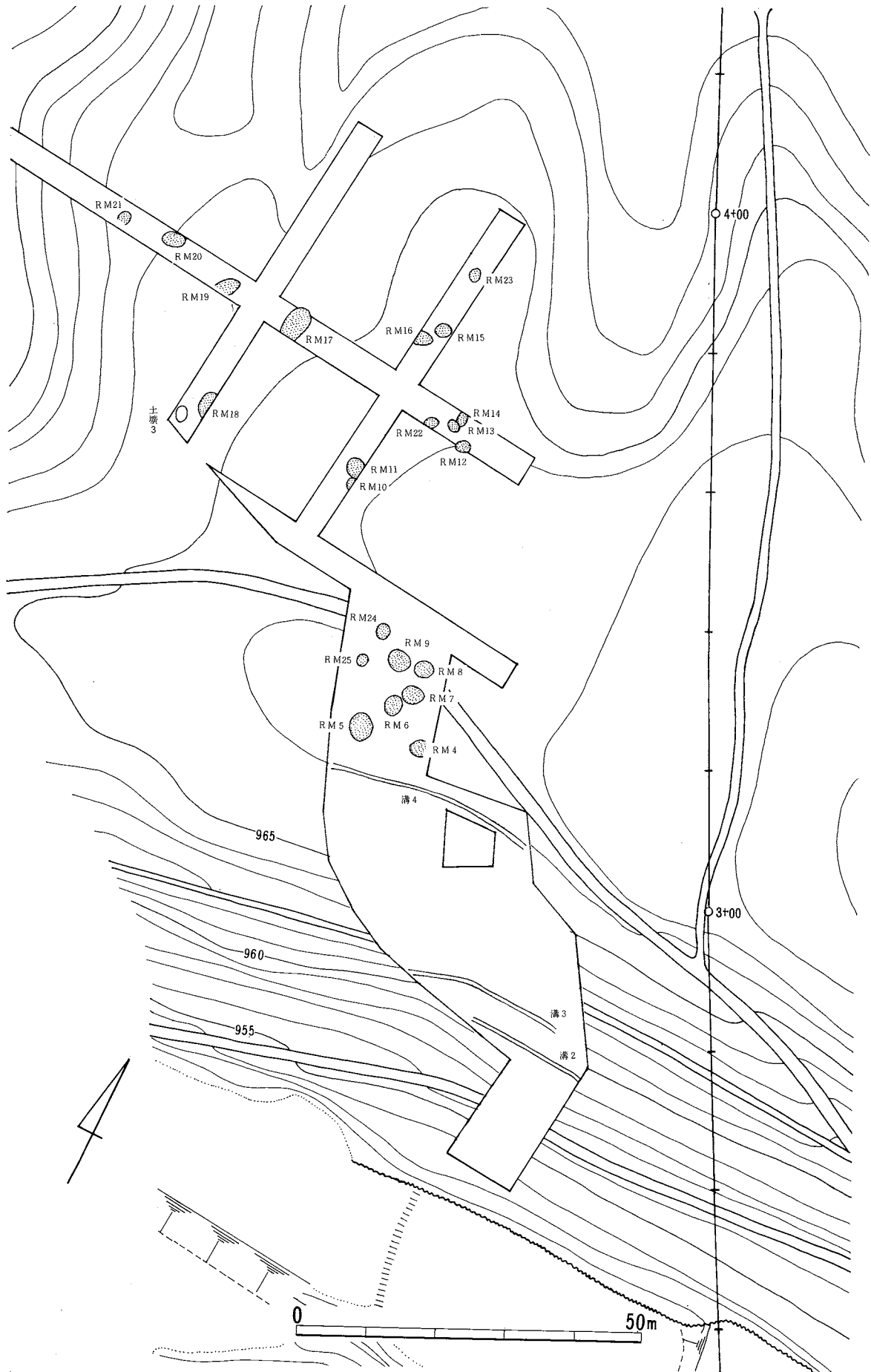
(1) 土壇3号（挿図2、図版39）

尾根上の平坦部が西方へ傾斜していく縁の部分に、長軸をほぼ北に向け検出された。2.3×1.2m、深さ65cmの規模をもつ楕円形の土壇である。底径は2.1cmで、断面逆台形を呈しており、覆土は自然堆積を示し、土壇底部へ壁にそって黄褐色土が落込み、次に黒褐色土が、最後に黒色土が落込んでいる。土壇検出面、及び覆土最上層より6点の土器片が検出された。いずれも縄文時代中期九兵衛尾根I式土器で土壇に附随したものとは思われないが、本址はそれ以前に構築されたものであろう。近くに人の居住した痕跡もなく墓塚の可能性は薄い。おそらく御射山西遺跡で検出されたと同様の陥し穴としてとらえたい。

(2) 溝状遺構（挿図1）

3本検出された。内2本は南斜面に、1本は尾根上縁部に、等高線に沿って東西の方向に走っている。溝2は昭和48年度に検出された溝1とつながると思われる。いずれも幅50cm、深さ20cmで、斜面の下辺に落込部はなく斜面へと続く。覆土最下層に砂質層が若干認められる。伴出遺物はない。

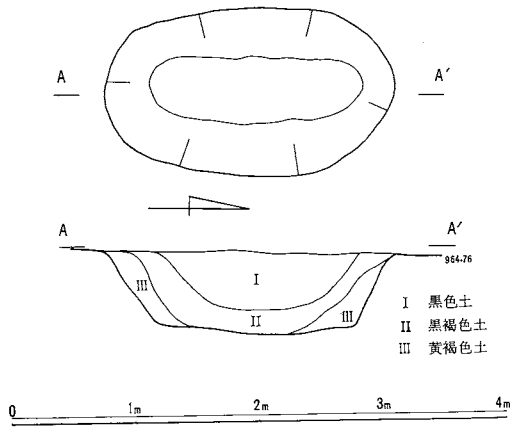
(3) その他の遺構



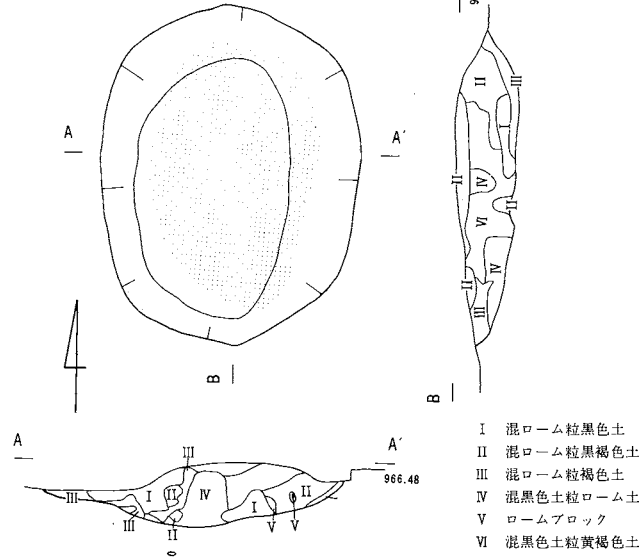
(挿図1 手洗沢遺跡遺構配置図 (1:800))

第II章 調査遺跡

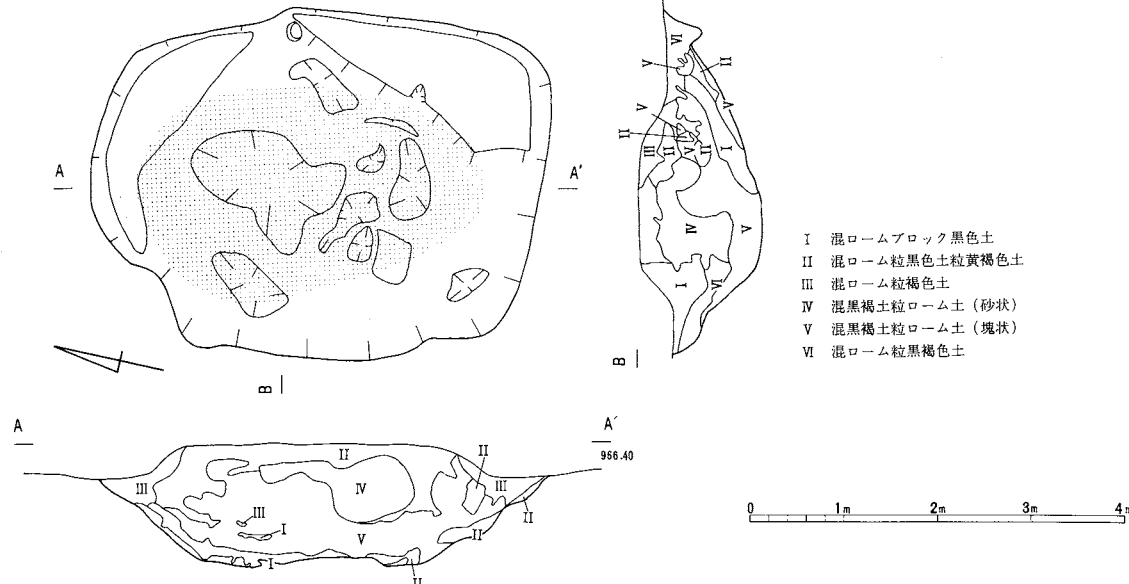
土坡3号



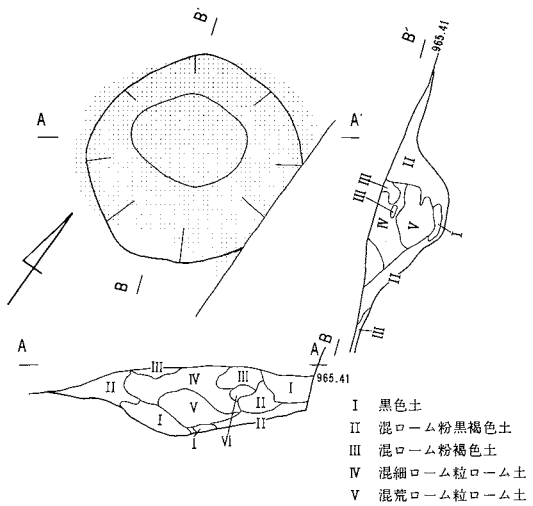
ロームマウンド6号



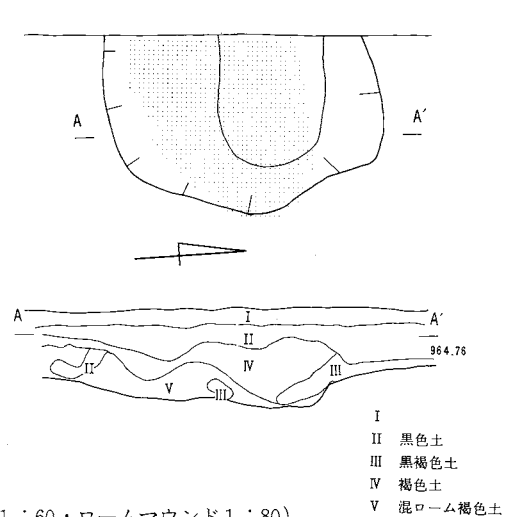
ロームマウンド5号



ロームマウンド15号



ロームマウンド16号



挿図2 手洗沢遺跡 土壌・ロームマウンド実測図(土壌1:60・ロームマウンド1:80)

ロームマウンド 22 基がある。すべて尾根上の平坦部より検出され、斜面には皆無である。22 基のうちの 4 基を発掘調査し、他は平面プランのみ確認した。

ロームマウンド 5 号は、3.6×2.3 m、高さ 30 cm のマウンド部と、4.3×3.7 m、深さ 96 cm の下部墳をもつ。マウンド長軸は N 15°W を指す。マウンド部は上面に黄褐色土がのり、下部墳底部まで黒褐色土を含むブロック状のロームが堆積する。マウンドの周囲からローム粒、ロームブロックを含む黒色土、褐色土が入り込んでいる。ロームマウンド 6 号は、2.9×1.8 m、高さ 21 cm のマウンド部が N 1°W とほぼ磁北を向き、下部墳は 3.6×2.8 m、深さ 45 cm を測る。マウンド部は黒色土粒を含む黄褐色土が主体をなし、北方向よりローム粒を含む黒色土、黒褐色土、褐色土が多量に入り込んでいる。ロームマウンド 15 号はほぼ円形を呈し、マウンド部が下部墳より広い範囲を占める。マウンド部は 1.7 (以上)×1.5 m、高さ 20 cm、下部墳は 2.2×1.8 m、深さ 50 cm の規模をもつ。黒色土、黒褐色土の入り込みは大きく、下部墳底部にまで及ぶ。東・北方向からの落込みが大きい。長軸は N 70°E を指す。ロームマウンド 16 号は半分程発掘したのみである。ロームが多量に混じる褐色土のマウンドがあり、褐色土が北側より入り込む。マウンド部 1.9 (以上)×1.8 m、高さ 17 cm、下部墳 1.9 (以上)×2.9 m、深さ 28 cm。長軸は N 88°E を向く。

4 遺物

1) 縄文時代の遺物

手洗沢遺跡より出土した縄文時代の遺物は、前期・中期・後期に属する土器片、石鏃、スクレイパー、横刃型石器、磨石があり、剥片等を含めても 72 点と少ない。

(1) 縄文時代前期の土器 (挿図 3-1・2、図版 40)

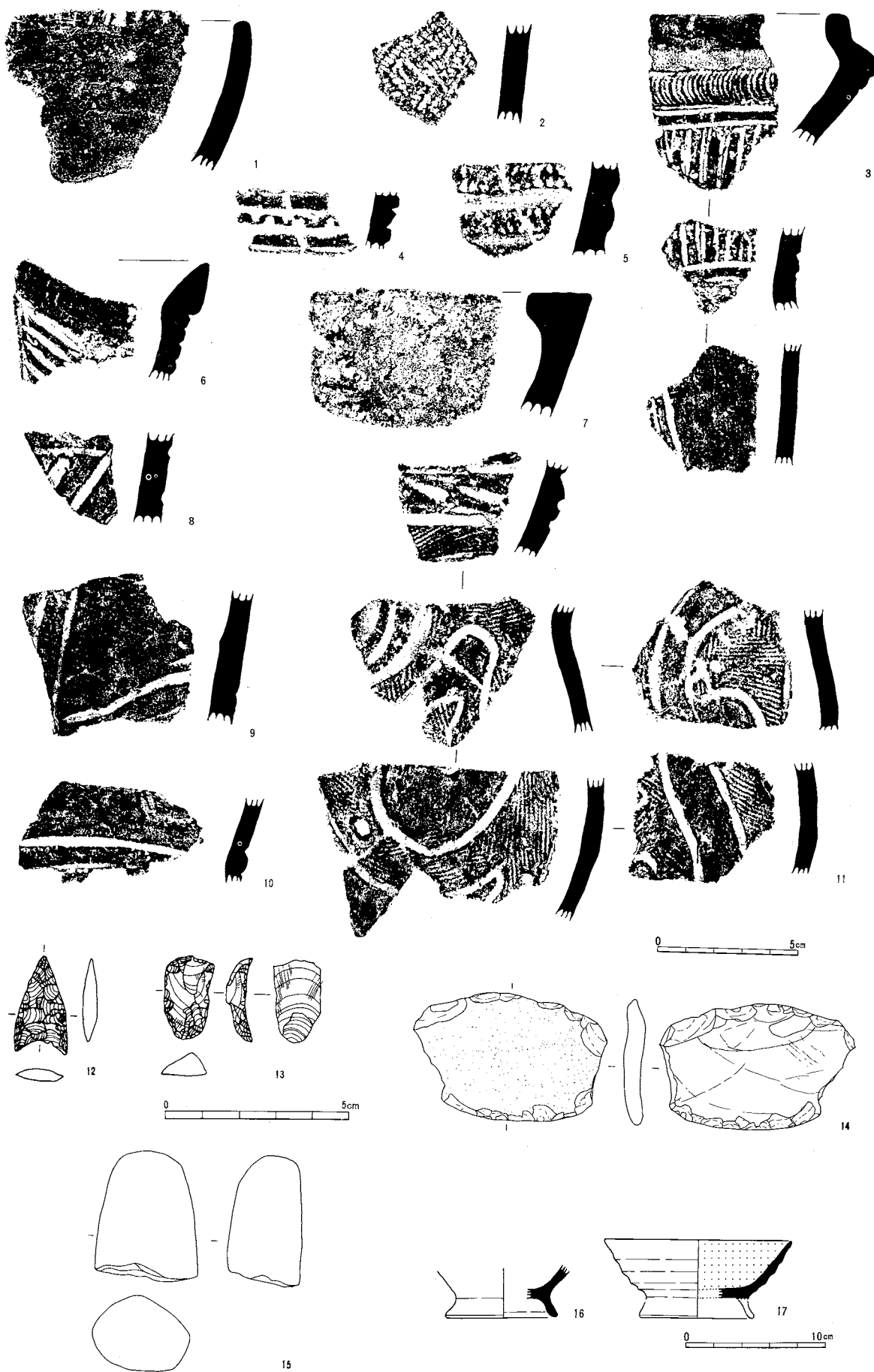
1 は無文の深鉢形土器の口縁部で、口唇部にはへら状工具により刻み目がつけられている。胎土には石英粒、雲母粉を中程度含み焼成は非常によい。器面には指によると思われる横ナデの痕が残り、裏面はへらによる横ナデの痕が見られる。2 は胴部破片で、左擦りの縄文が施される。胎土には小さな石英粒が中程度含まれる。焼成は非常によい。裏面にはへらによる横ナデ痕が見られる。

(2) 縄文時代中期の土器 (挿図 3-3~7、図版 40)

3 は深鉢形土器のくの字状に折れ曲る口縁部と、それに続く胴部から底部近くの破片 2 片で、無文の口唇部に続き半截竹管による爪形文が幅 1 cm で横走し、その下へ幅 1 cm の半截竹管による二条の沈線がつけられ、さらに、縦方向へ平行し密接する平行沈線が施される。胴下半は、横走する二条の沈線で区切られ、底部近くは、二条から数条の平行沈線が縦方向に施される。胎土中に雲母が多量に入れられ、石英粒が中程度混入されており焼成は非常によい。九兵衛尾根 I 式の土器で、土壇 3 号の周囲及び覆土中より検出された。4 は棒状工具により交互に刻み目が入れられ、上下を粘土紐が横走する。5 は二条の粘土紐上に半截竹管による爪形文がつけられる。6 は波状口縁部の破片で半截竹管による平行沈線が斜めにつけられている。胎土には微細な砂粒と雲母が若干含まれている。7 は深鉢形土器の無文の口縁部で、胎土に石英粒を多く含む。4・5 は九兵衛尾根 I 式、6・7 は井戸尻 III 式に属する。

(3) 縄文時代後期の土器 (挿図 3-8~11)

8・9 は棒状工具により沈線が施される。胎土には石英粒が中程度と雲母が若干含まれる。焼成は非常に良く堅い。両者とも内面に横ナデの痕が残る。9 の表面にはススの付着がある。称名寺式土器と思われるが、8 は曾利 V 式であろうか。10 は頸部片で、二条の沈線が横走する。表裏面に横ナデ痕が残る。胎土に若干の石英粒を含み、焼成はよい。11 は堀之内式土器で、胴部破片のみ 20 点近くが F L-103・104 グリッドより検出された。口縁部近くに、幅 1.3 cm 程の粘土紐上を棒状工具により斜め方向に凹みが入れられ、胴部には地文に縄文を施し、沈線により画し磨消部を作っている。所々に円形の刺突がある。胎土に



挿図3 手洗沢遺跡出土土器拓影、石器実測図（1～11-1：2、12・13-1：1.5、14～17-1：4）

石英粒が混入され、表面は黒褐色を呈する。内面はていねいなミガキがなされ光沢をおびている。

(4) 石器 (挿図3-12~15、図版40)

12の石鏃は黒曜石製で、長さ2.6cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ1.2gを計る中形品である。基部の挟りは浅く、側縁は外湾する。13はいわゆるサムエンドスクレーバ状を呈す。刃部には細かな調整痕が見られる。縦はぎの剥片が用いられ、身部は湾曲する。長さ2.2cm、幅1.2cmの小さなもので、透明で良質な黒曜石製である。14は横刃型石器で、厚さ1.4cmの一面に自然面を残す平板な硬砂岩が用いられ、刃部と背部に簡単な剥離が加えられているのみである。長さ9cm、幅13.6cm、重さ254g。15は磨石の半欠品で現長9cm、幅7.4cm、厚さ5.3cmを計る。硬砂岩製で、両側面に磨かれた面が残る。他に黒曜石片16点が検出されたのみである。

2) 平安時代の遺物 (挿図3)

平安時代の遺物は、土師器杯片7点、黒色土器片3点が検出されたのみである。挿図3-16は土師器杯底部で底径8.4cmを計る。明黄褐色を呈し胎土中に石英粒が若干混入される。焼成はよい。右回転のロクロで成形され、全面に横ナデの痕が見られる。EO-122グリッド出土。17は内面黒色土器杯で、高台部を欠き、底部3分の1、胴~口縁部が5分の1個体からの復元である。ES-111グリッド、ローム直上の漸移層より検出された。胎土に石英他の砂粒を中程度含み、焼成は余りよくなく風化が進んでいる。内面は黒色研磨されているが、ていねいではない。器外面に水びき痕が残る。両杯とも平安時代後期に属するものである。他に平安時代にかかる遺物の出土はない。

5 まとめ

当初期待されていた南斜面一帯からの平安時代住居址の検出はなかった。48年度発掘の1号住居址より上流120mに、住居址断面が道路切通しにのぞいていたことを考えれば、集落は尾根東へと続いているものと思われる。斜面下に泉があり、泉の上下に住居が展開しているとの期待もあったが、斜面が急すぎるためであろうか。いずれにしても斜面上への住居の構築等より、多数の住居によって集落が構成されていたとは思われず、多くて7~8軒程度の規模と思われる。ロームマウンドが所在する平坦地は御射山西遺跡と同一平面であり、各期にわたっての狩猟・採集等の後背地としてとらえることができ、土壌3号の存在と、各期にわたる土器片の点在がそれを裏づけていると考える。御射山・御射山中の両遺跡の位置から、おそらく縄文期の集落は、尾根の東方に営まれていたのであろう。

参考文献 (第2・3節分)

- 【霧ヶ丘】 霧ヶ丘遺跡調査団 1973
- 【蓼科】 尖石考古博物館 1966
- 【よせの台】 茅野市教委 1978
- 【鍋久保遺跡の調査】 長野県大岡村教委 1976
- 戸沢充則「樋沢押型文遺跡」『石器時代』2 1955
- 松沢亜生「細久保遺跡の押型文」『石器時代』4 1957
- 松島透「長野県立野遺跡の捺型文土器」『石器時代』4 1957
- 武藤雄六「所謂“ロームマウンド”に挑む」『山麓考古』3 1975
- 今井啓爾「縄文時代の陥穴と民俗誌上の事例の比較」『物資文化』27 1976
- 宮沢貴、今村康博「縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題」『調査研究集録』1 1976
- 『中央道報告書 昭和46年~52年』
- 松島義章・伴信夫「糸魚川-静岡構造線の活動によって変位した諏訪湖南東岸の縄文住居址」『第四紀研究』18-3 1979

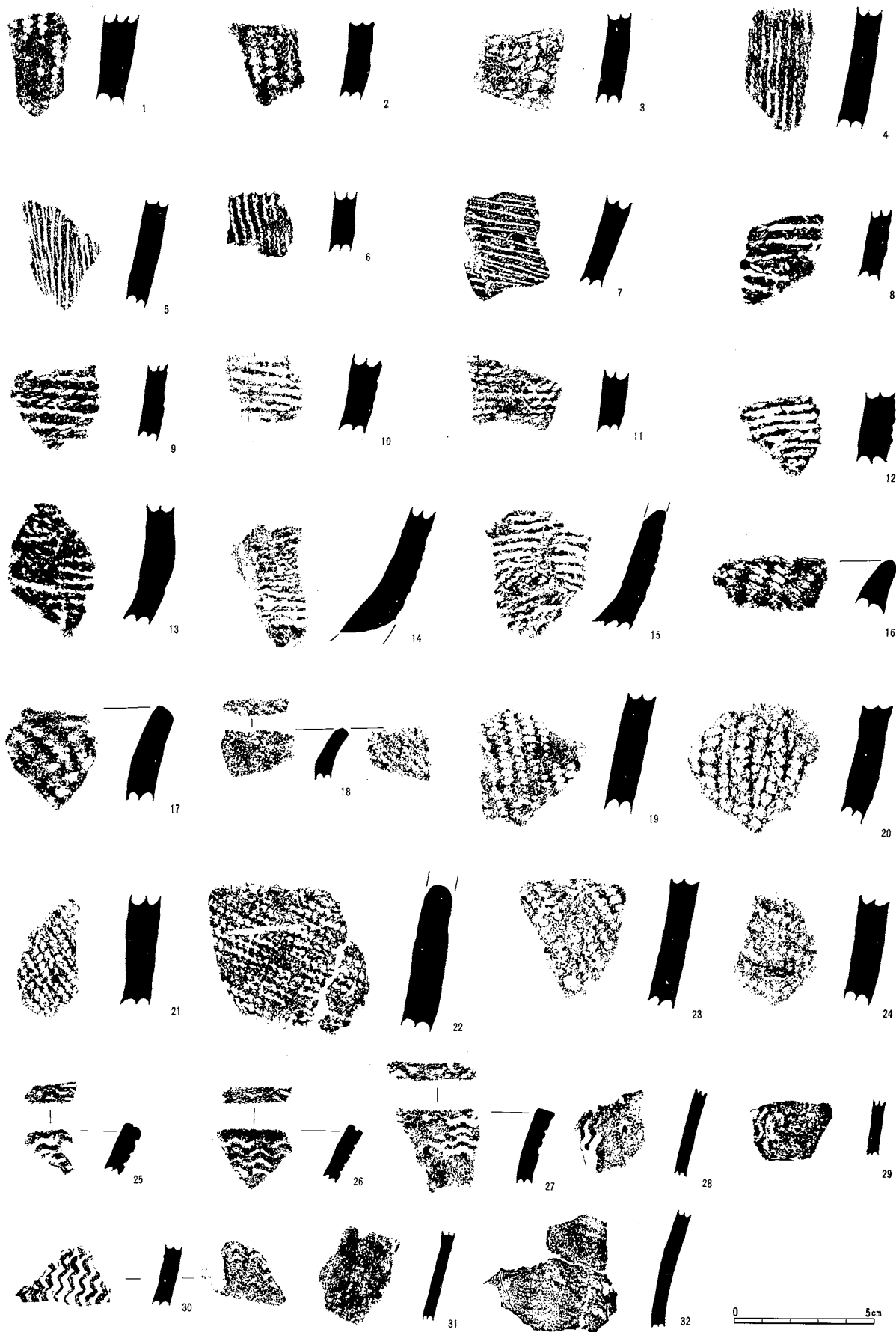


图1 頭殿沢遺跡土器拓影图(早期I~III群)



图2 頭殿沢遺跡土器拓影图(早期IV·V群)

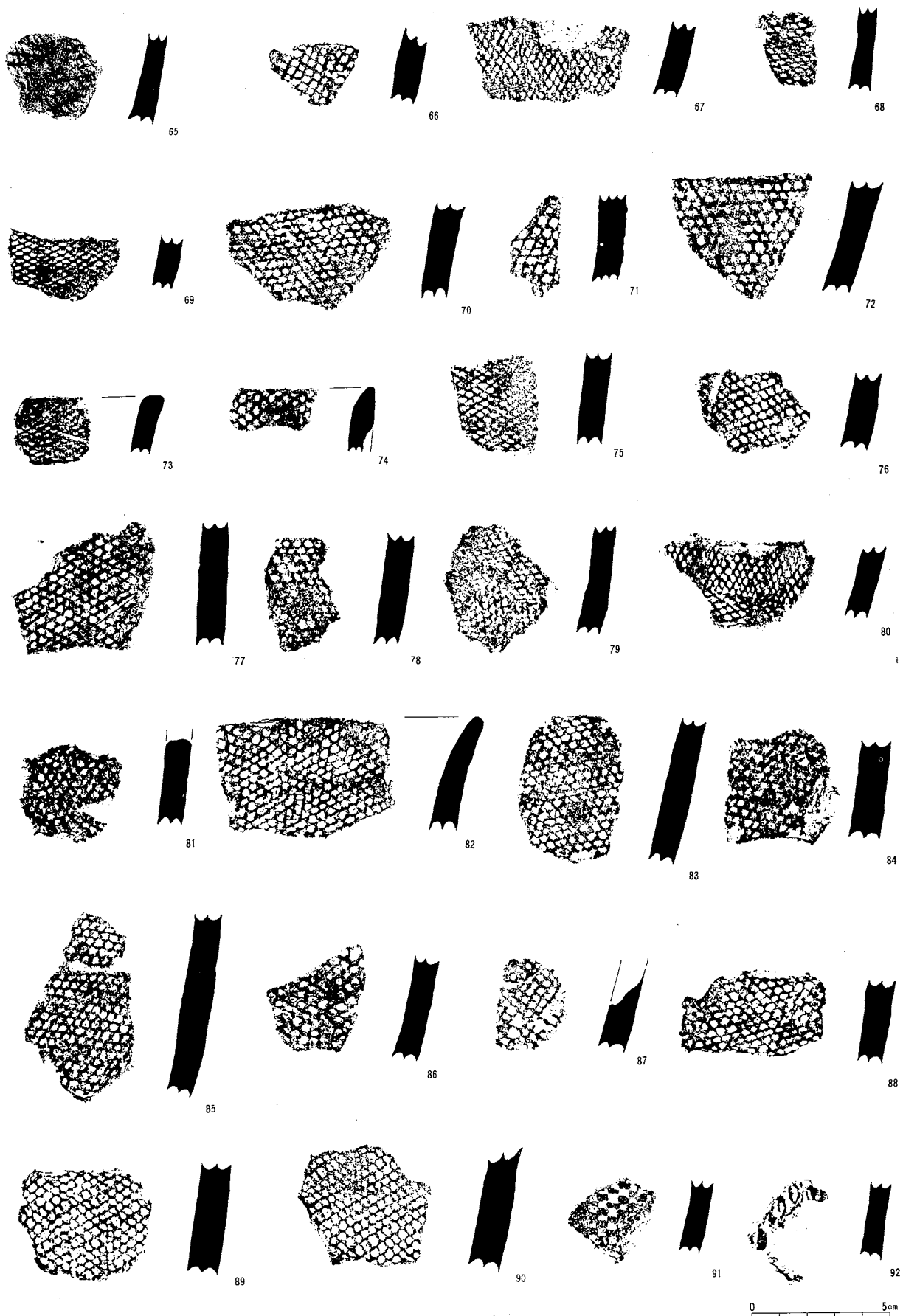


圖3 頭殿沢遺跡土器拓影圖(早期IV・V群)

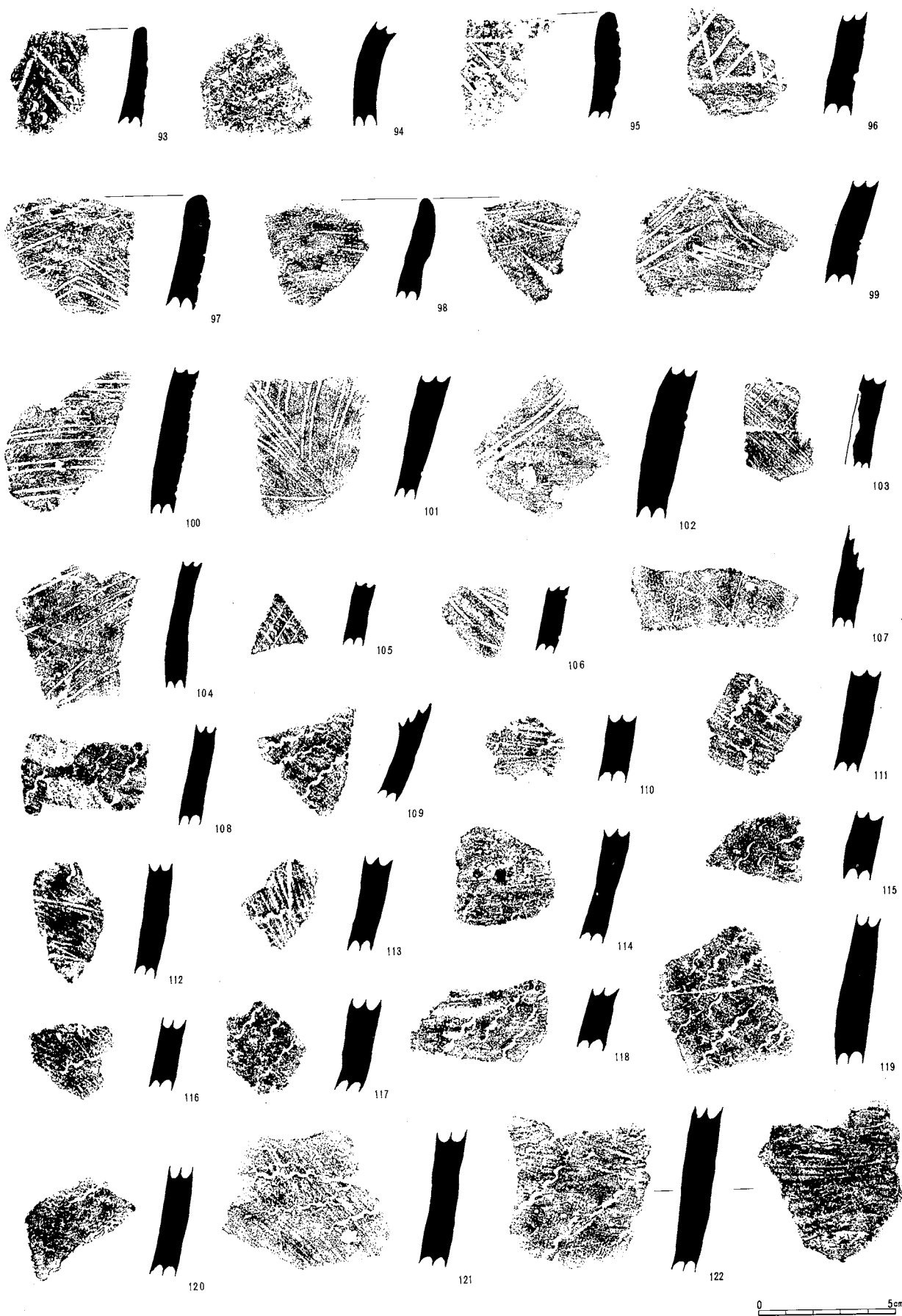


图4 頭殿沢遺跡土器拓影图(早期VI·VII群) — 87 —

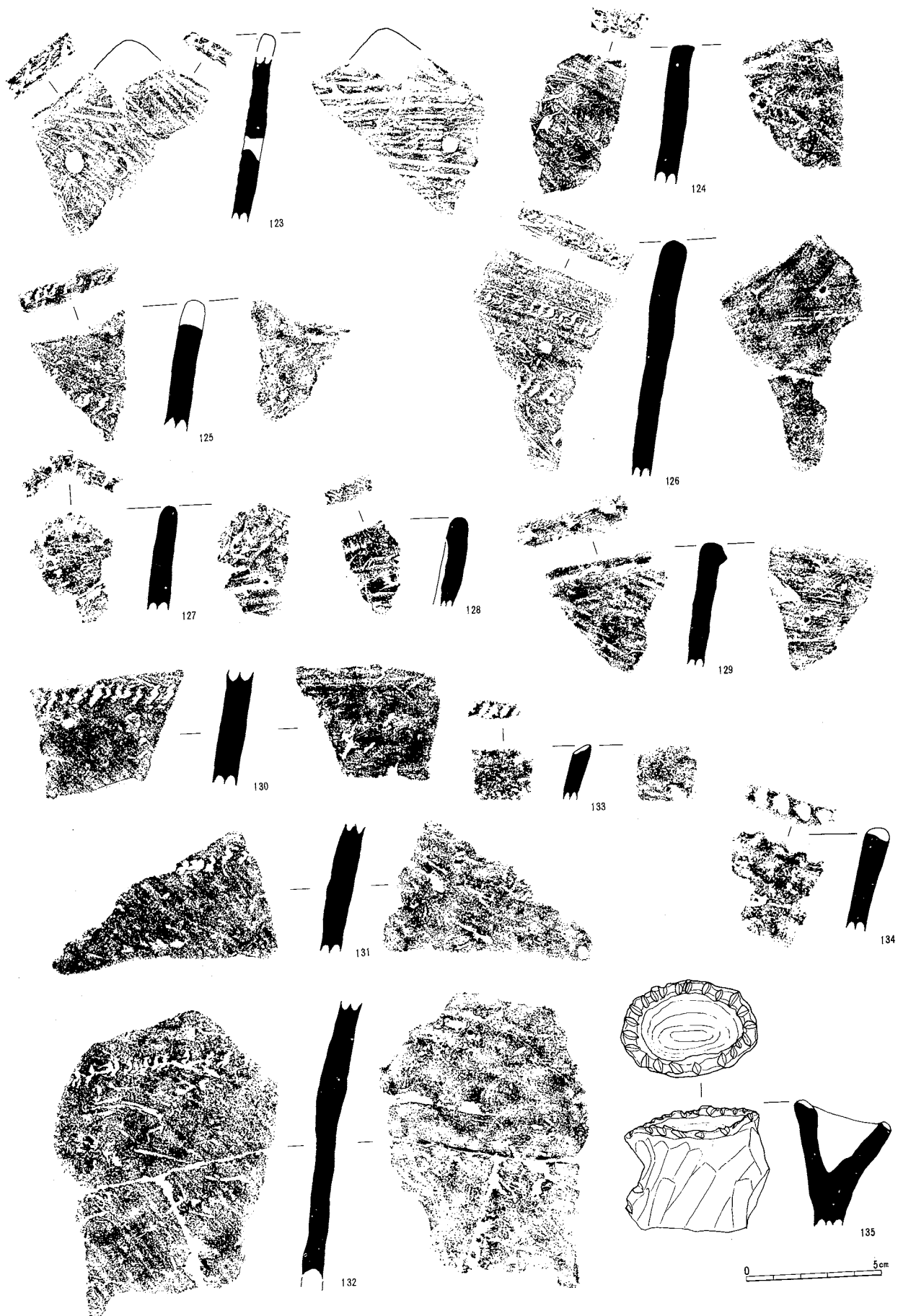


図5 頭殿沢遺跡土器拓影図(早期Ⅶ～Ⅹ群)

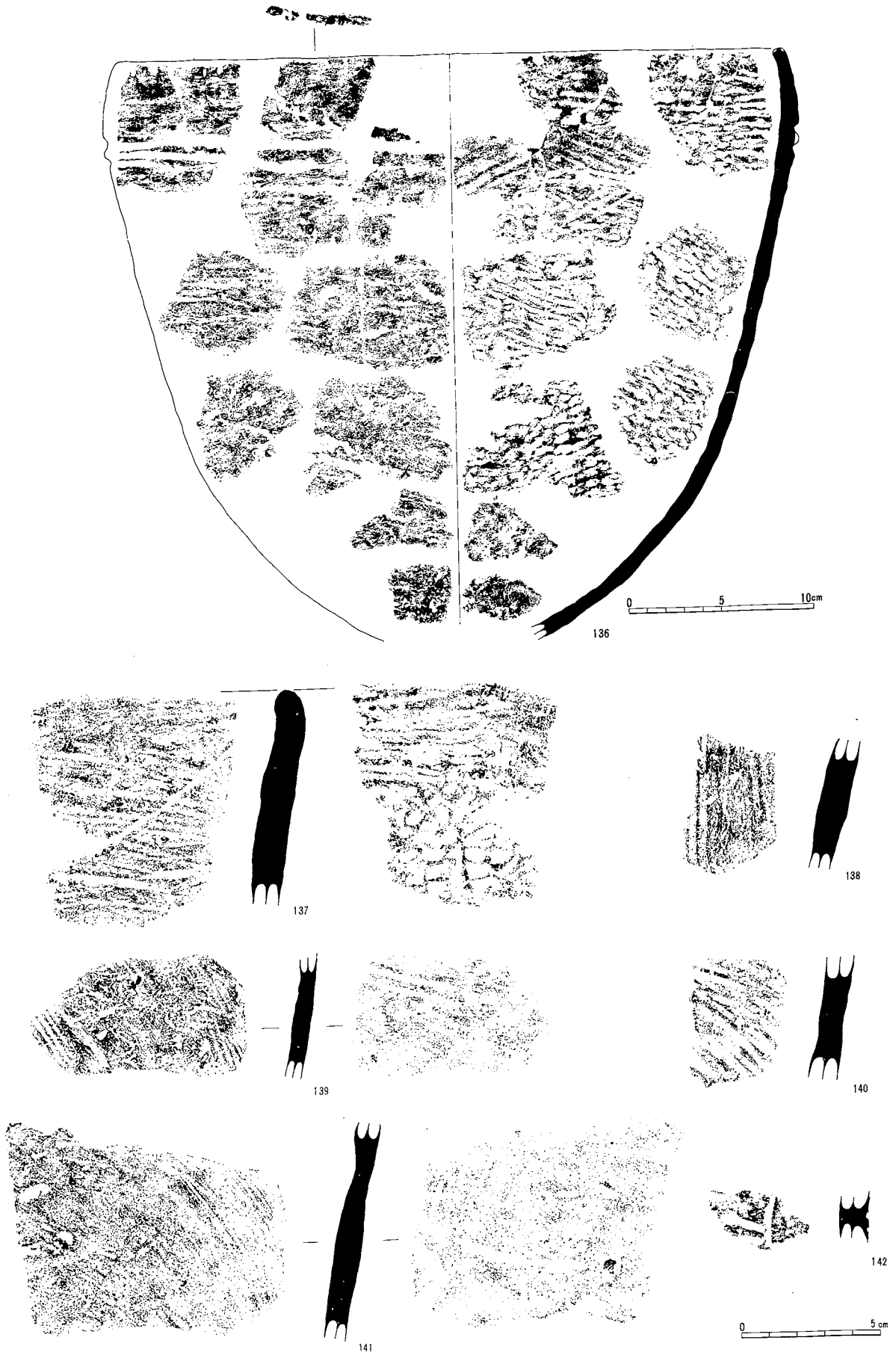


图6 頭殿沢遺跡土器拓影图(早期XI·XII·XIV群)

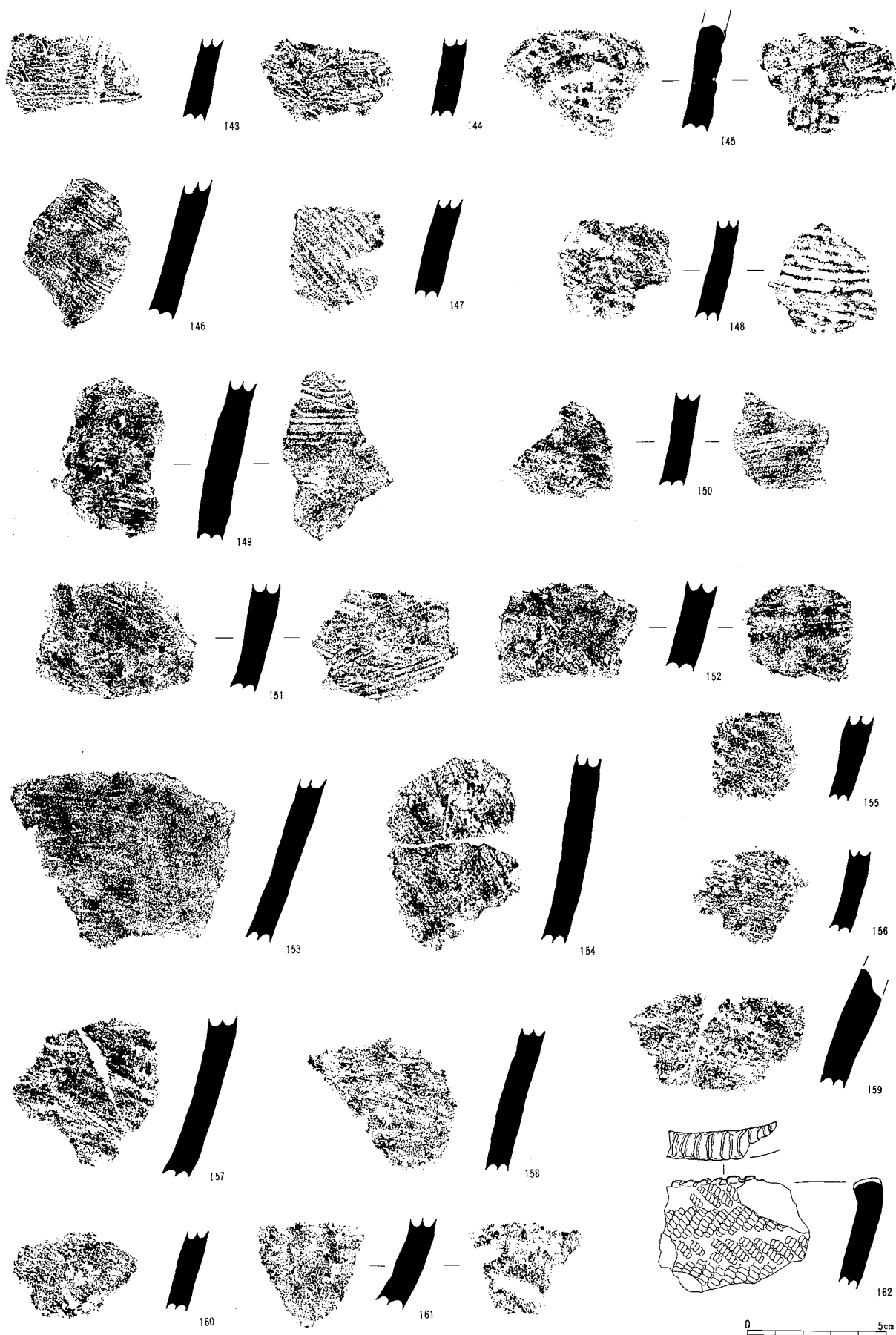


図7 頭殿沢遺跡土器拓影図(早期・前期・XIV~XVI群)

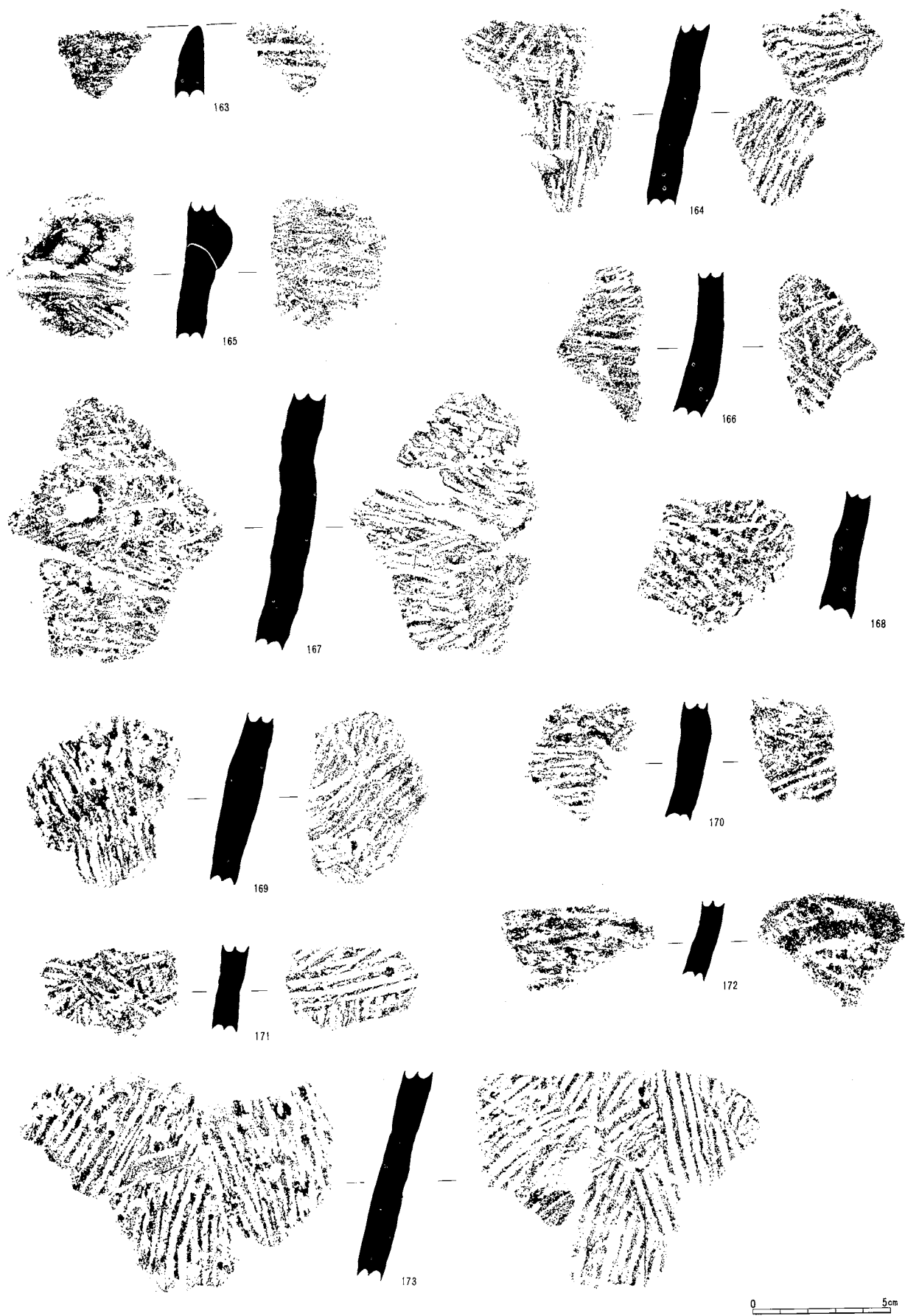


図8 頭殿沢遺跡土器拓影図（早期XIII群）

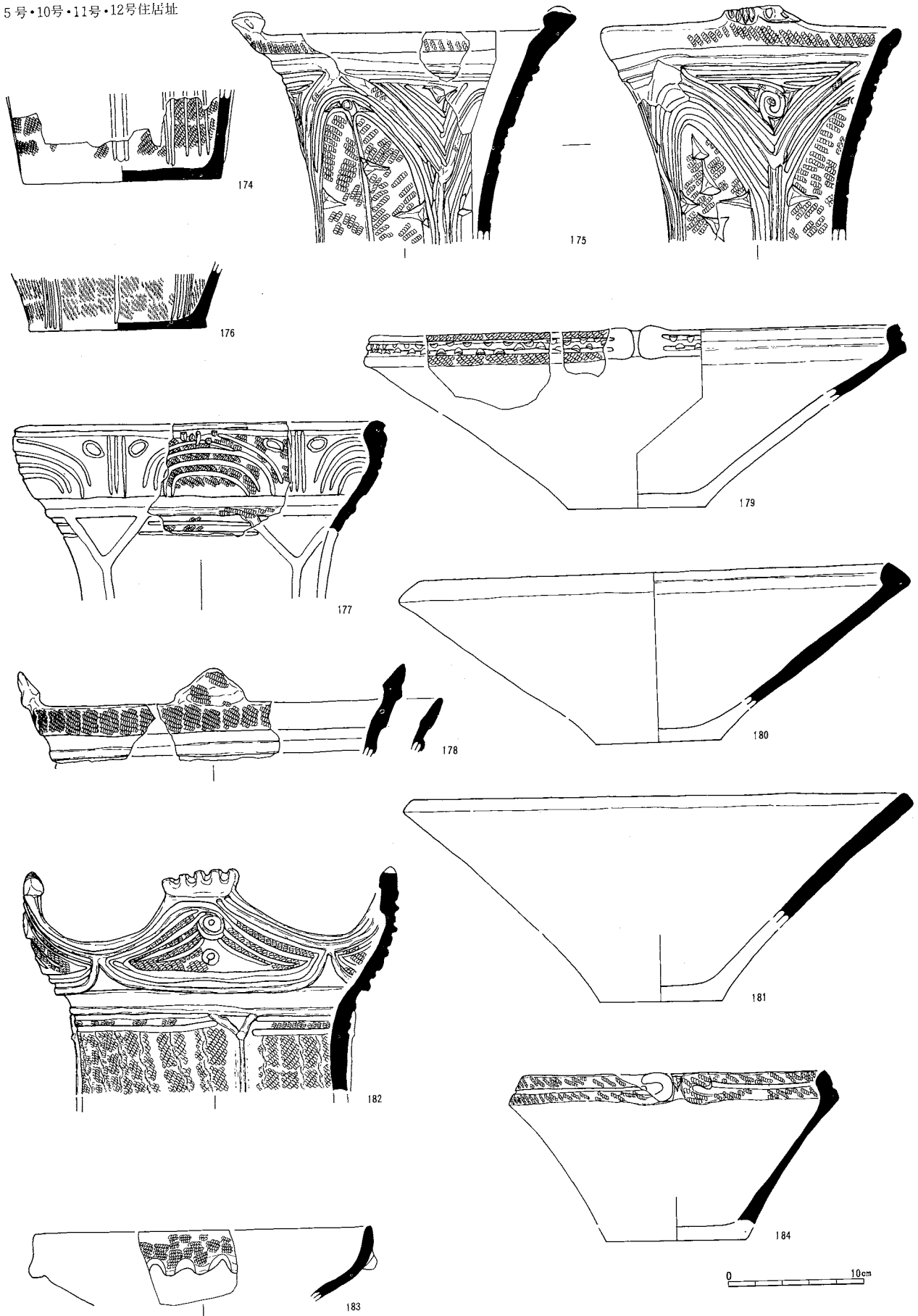


图9 頭殿沢遺跡土器実測図(中期初頭 5・10・11・12号住居址)

12号・14号住居址

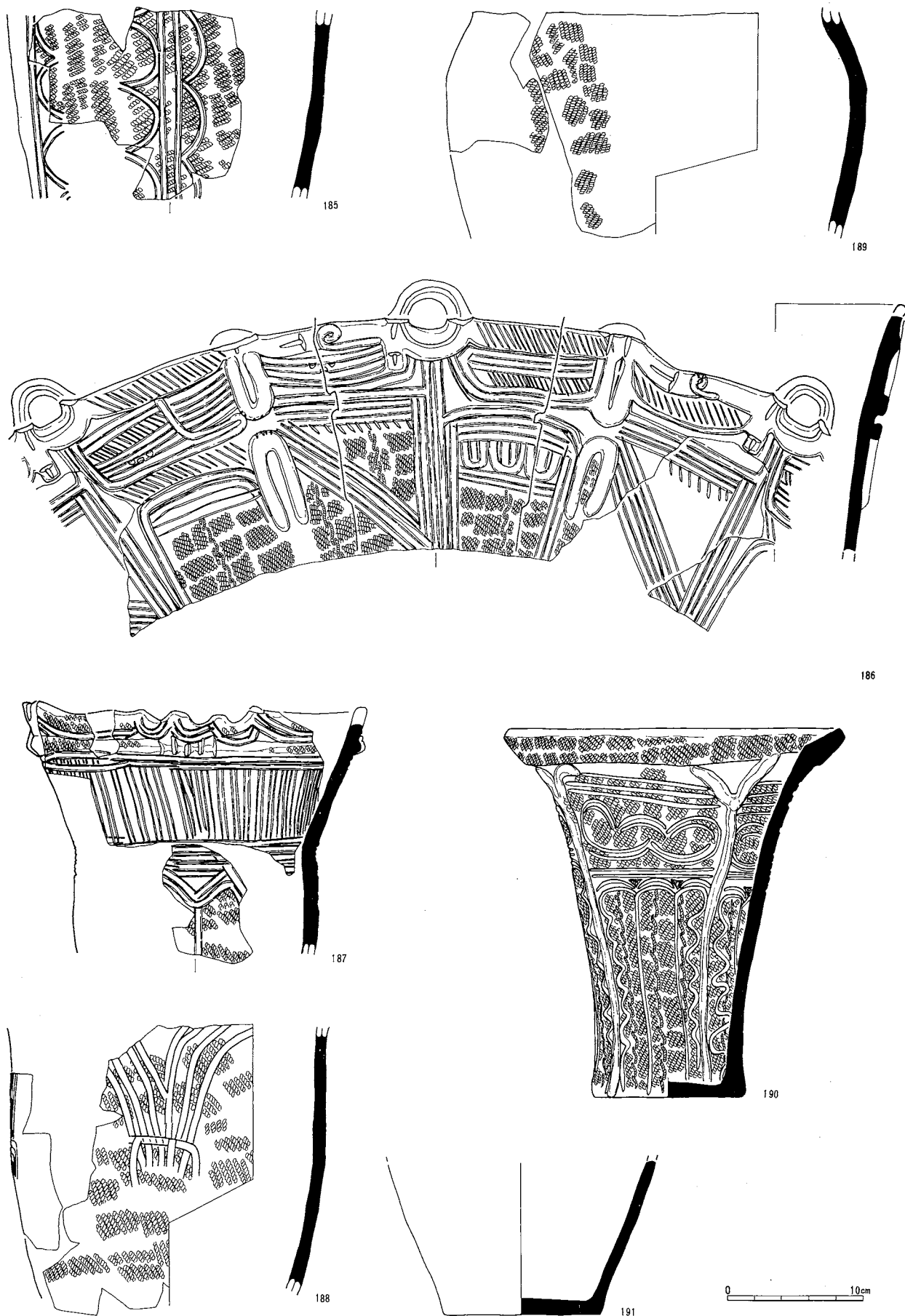


図10 頭殿沢遺跡土器実測図（中期初頭 12・14号住居址）

14号・15号住居址・土壙・遺構外

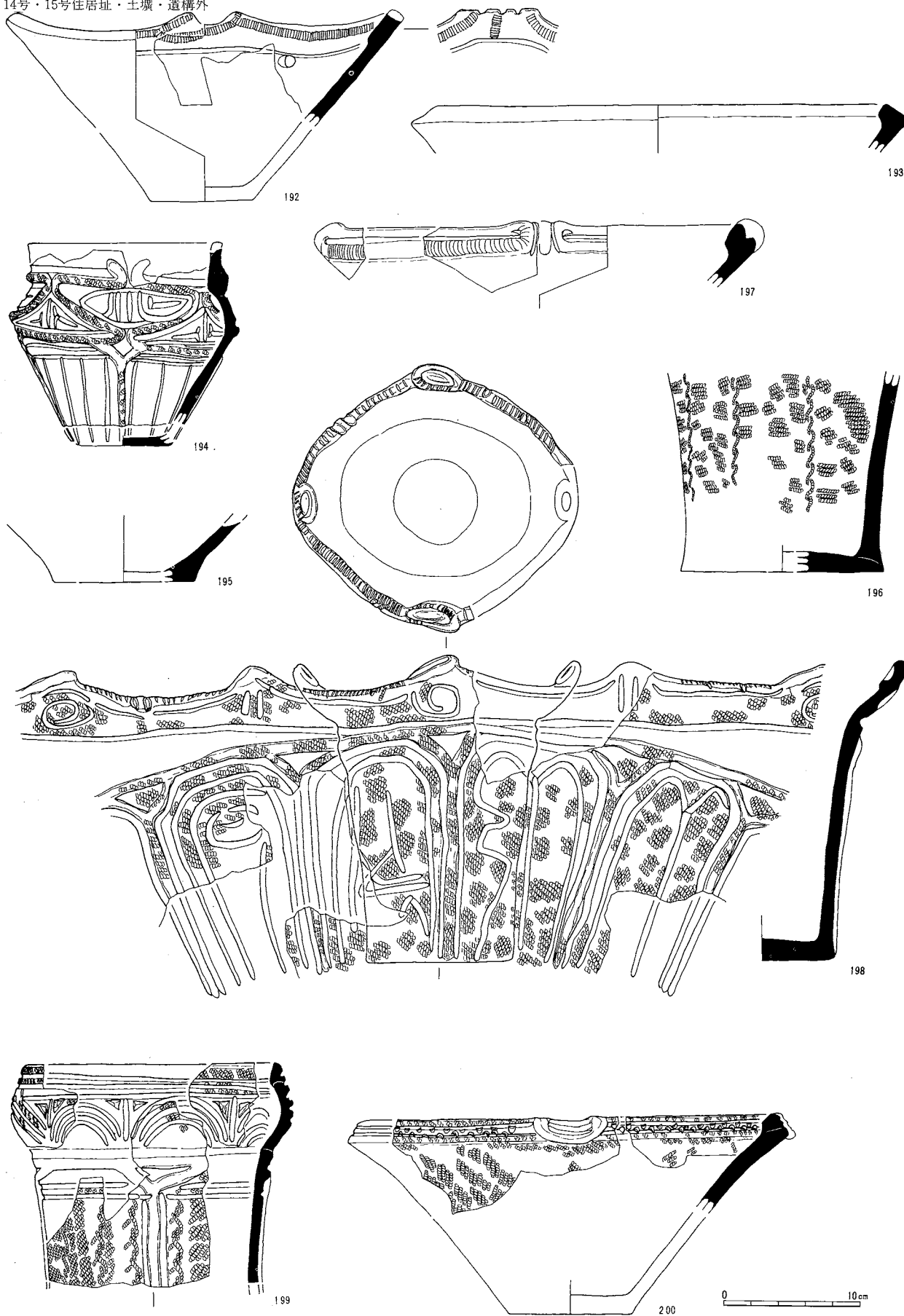
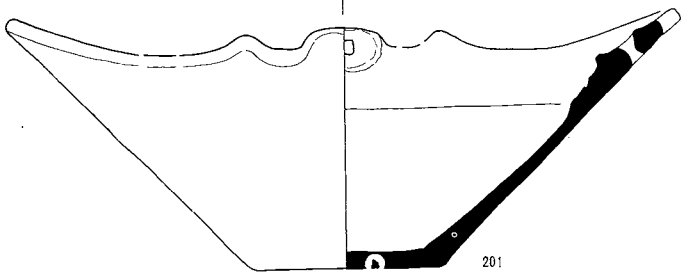
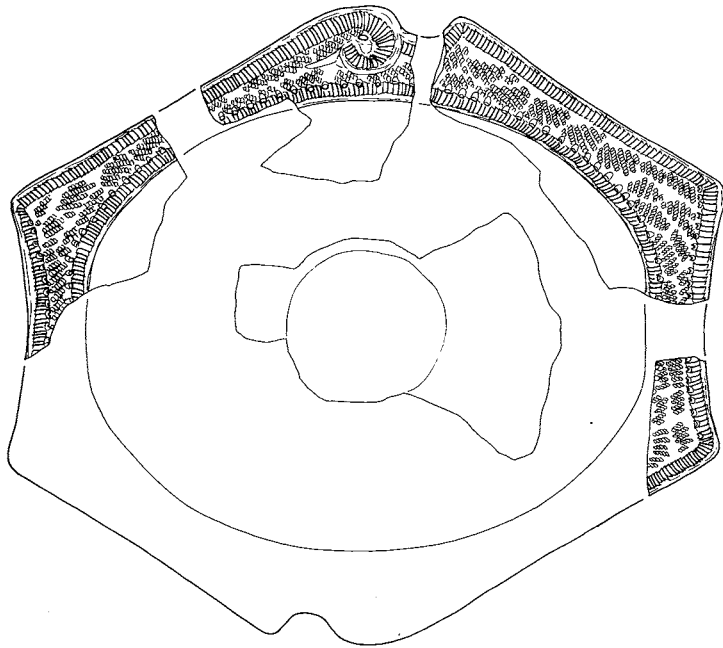
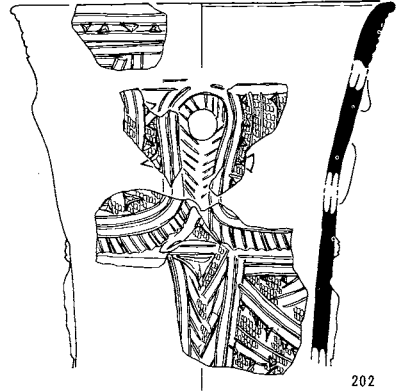


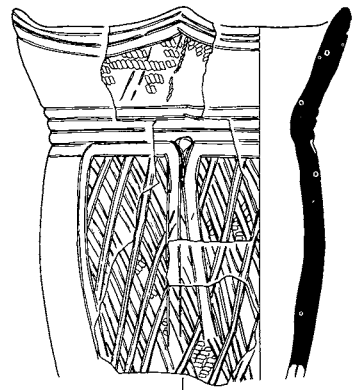
図11 頭殿沢遺跡土器実測図（中期初頭 14・15号住居址・土壙・遺構外）



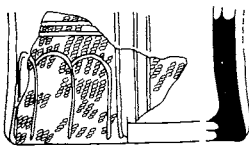
201



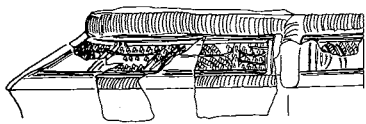
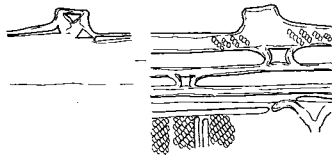
202



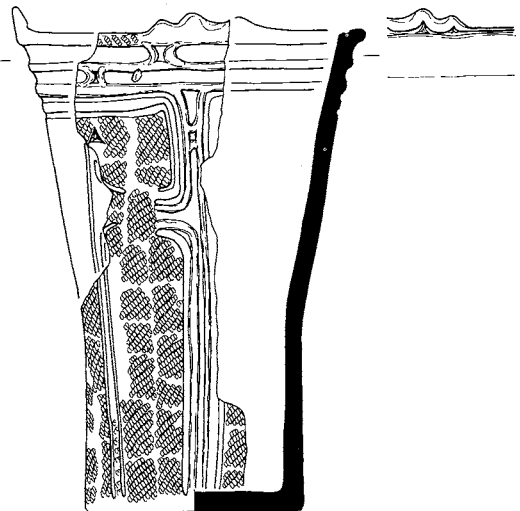
203



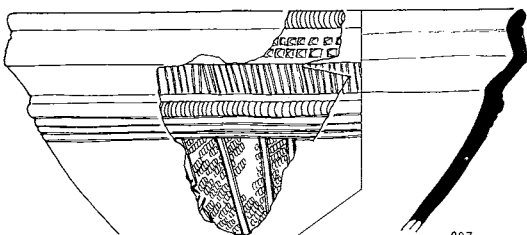
204



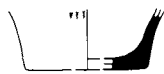
205



206



207



208



图12 頭殿沢遺跡土器実測図（中期初頭 土壙・遺構外）

遺構外

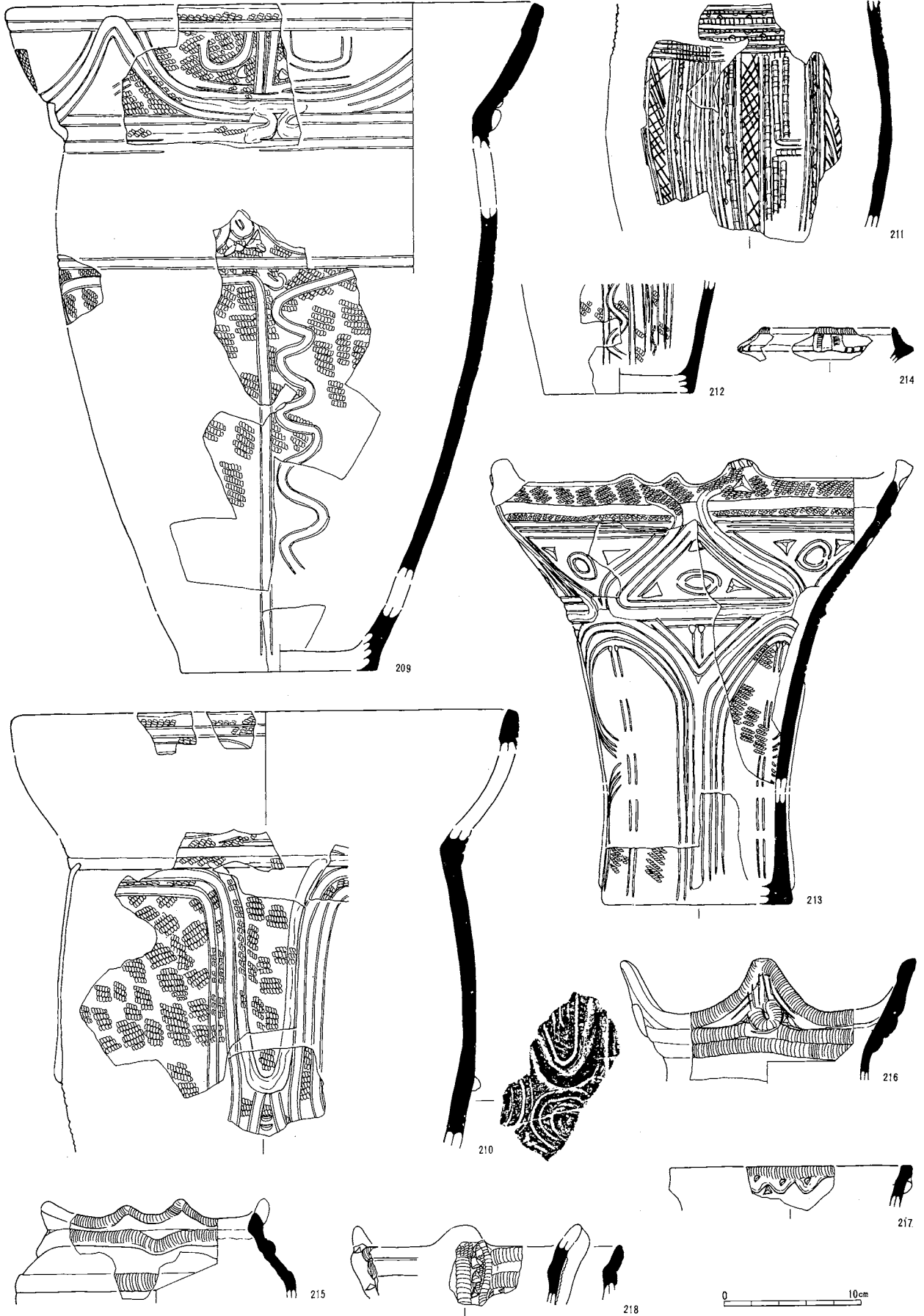


図13 頭殿沢遺跡土器実測図(中期初頭 遺構外)

遺構外

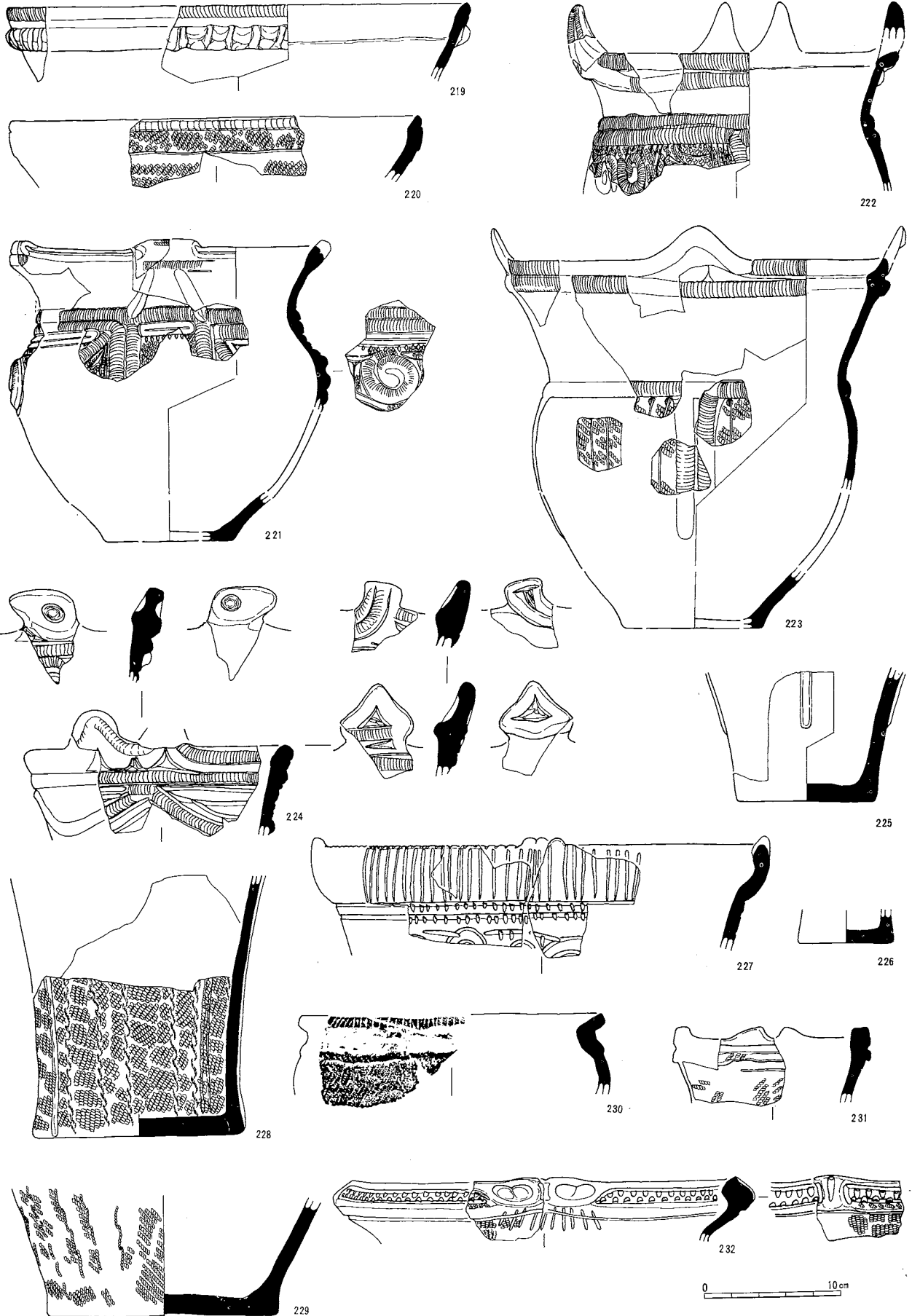


図14 頭殿沢遺跡土器実測図（中期初頭 遺構外）

遺構外

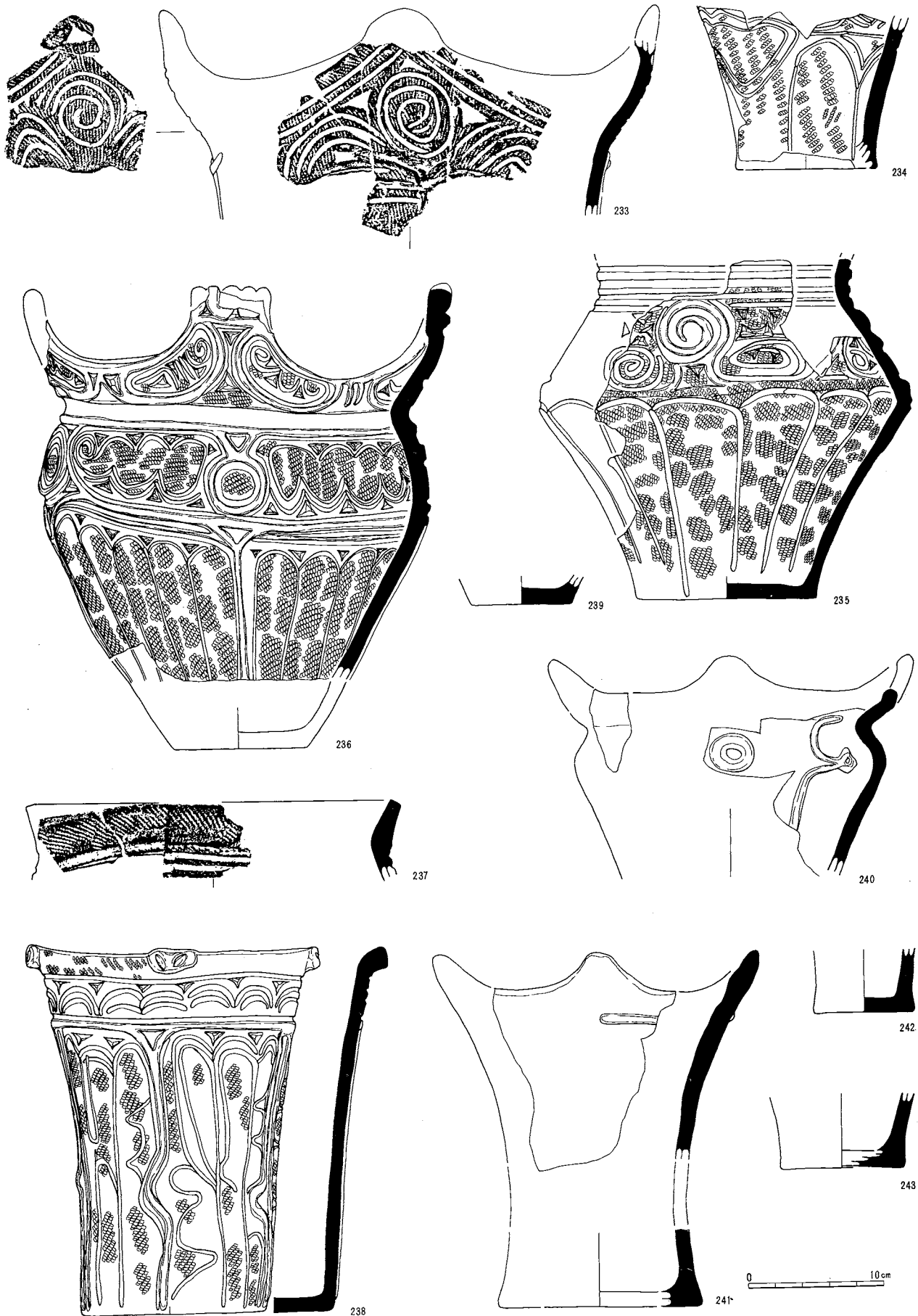


図15 頭殿沢遺跡土器実測図(中期初頭 遺構外)

遺構外・3号・4号住居址

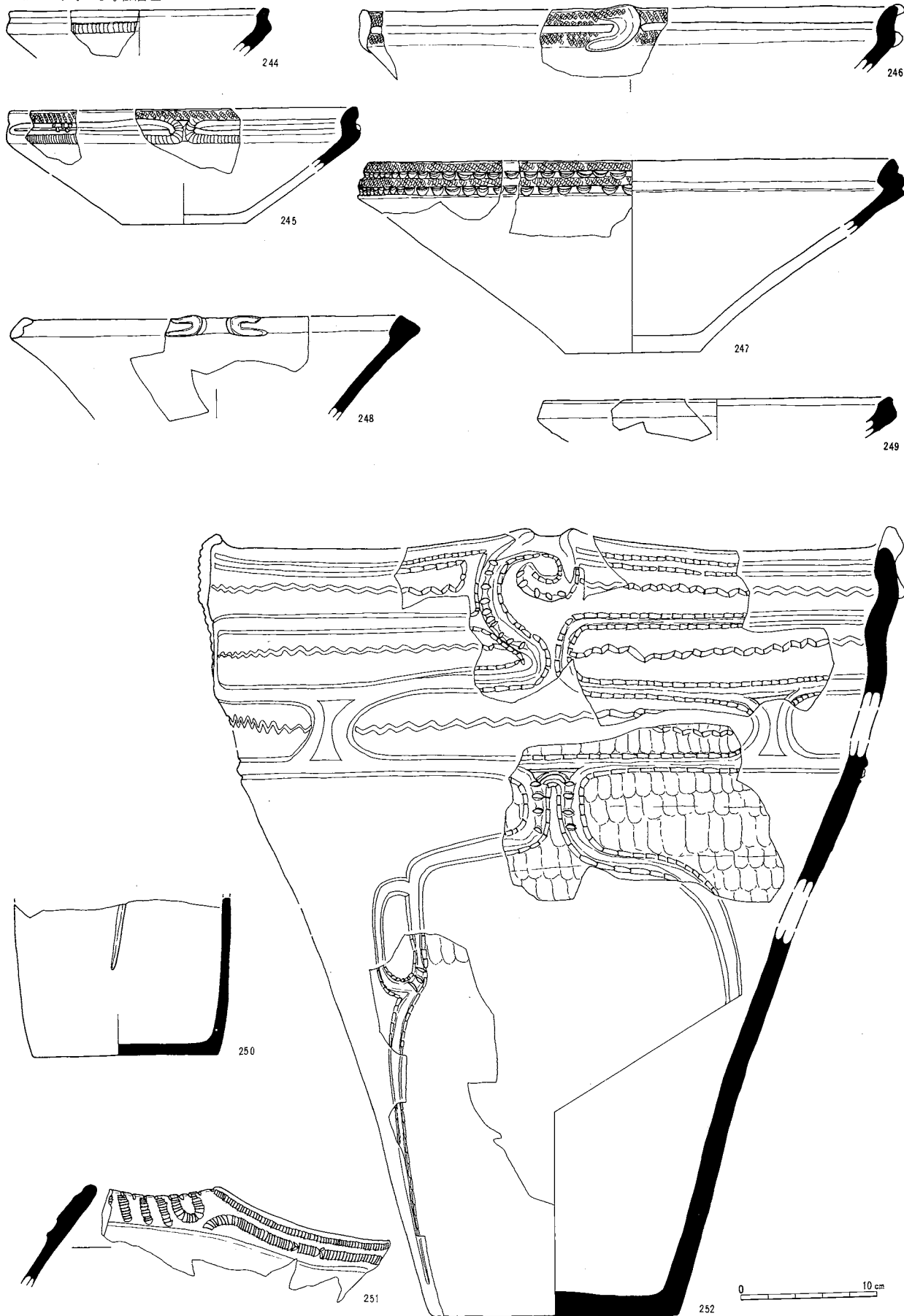


図16 頭殿沢遺跡土器実測図(中期初頭 遺構外・中期中葉 3・4号住居址)

4号・9号住居址

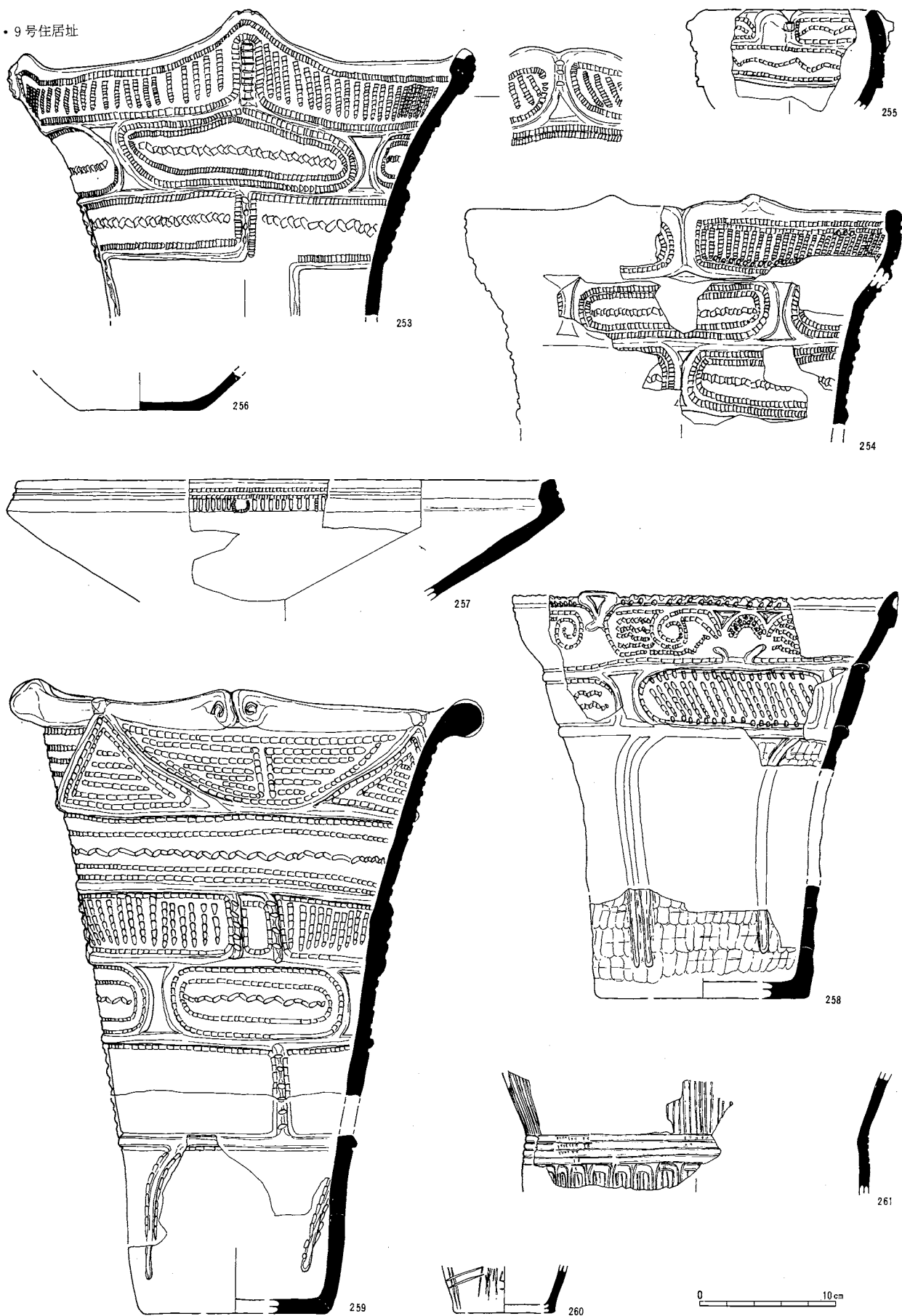


图17 頭殿沢遺跡土器実測図（中期中葉 4・9号住居址）

土壙・集石・遺構外

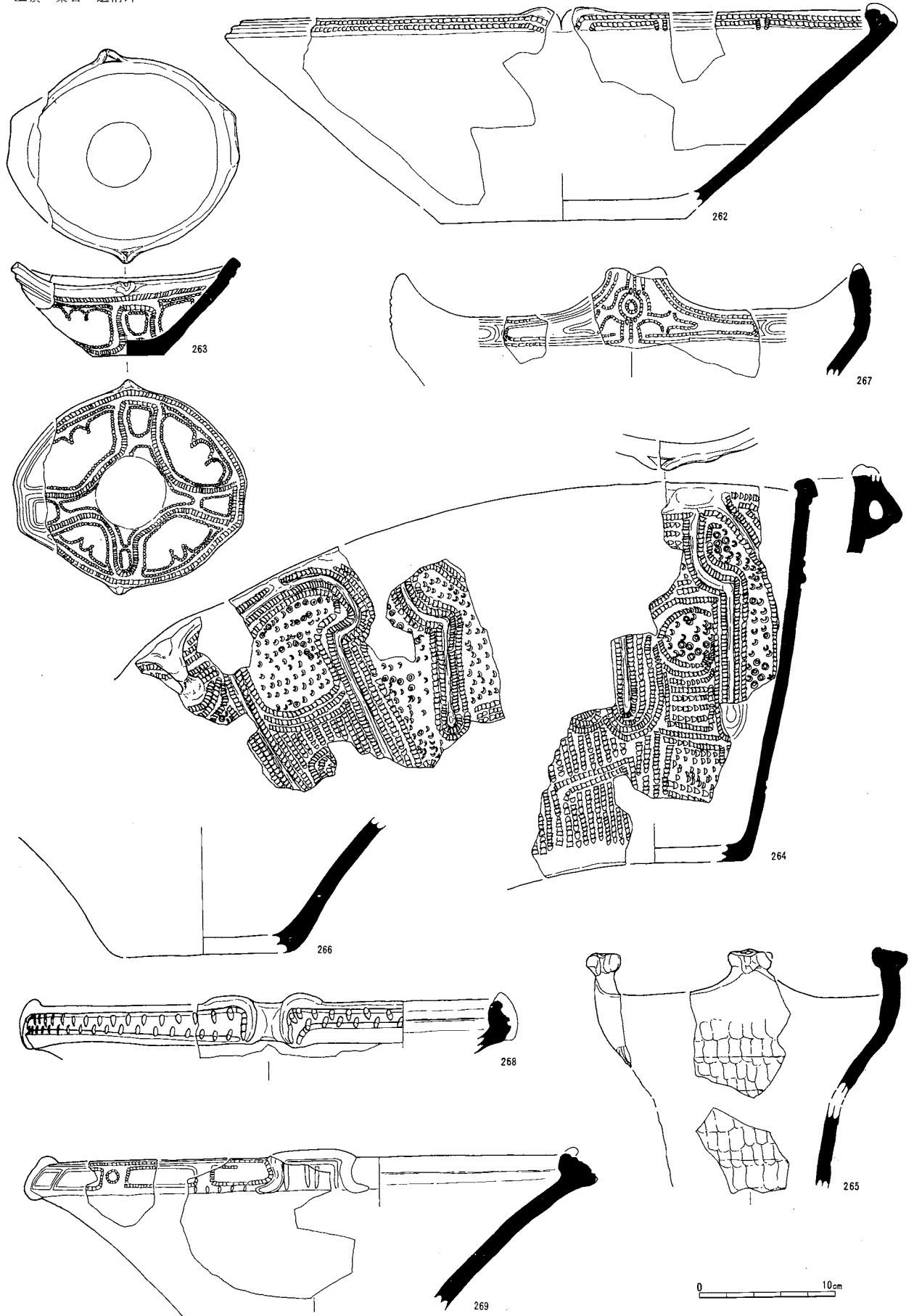


図18 頭殿沢遺跡土器実測図 (中期中葉 土壙・集石・遺構外)

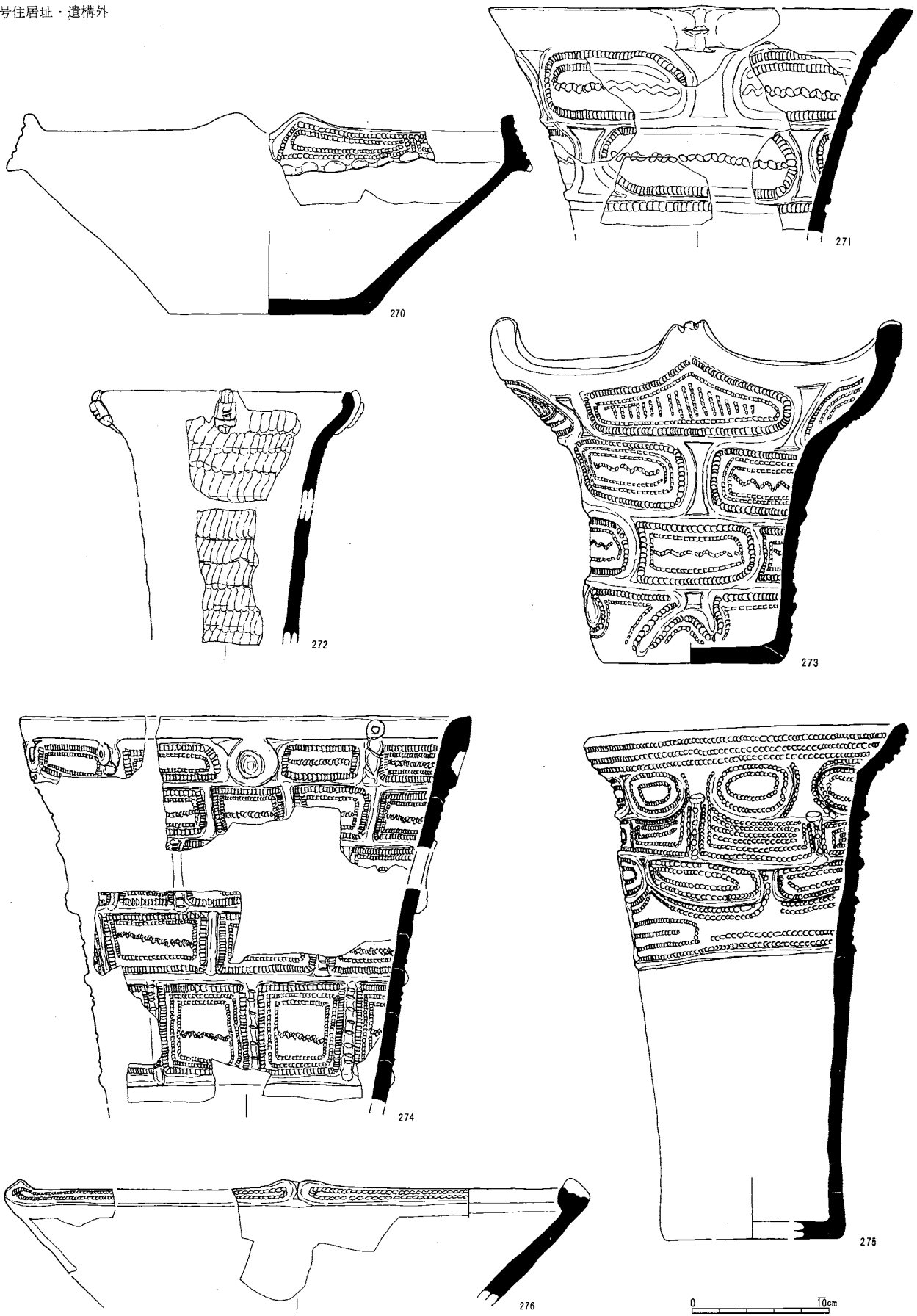
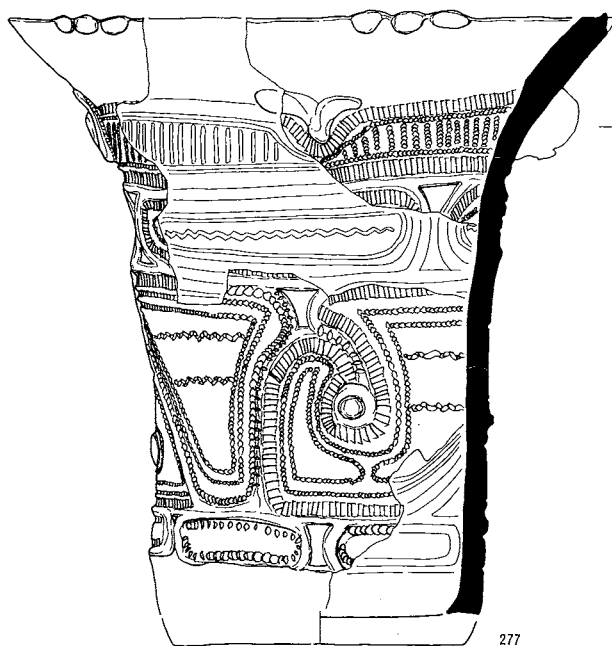
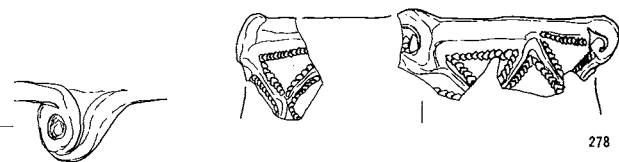


図19 頭殿沢遺跡土器実測図（中期中葉 9号住居址・遺構外）

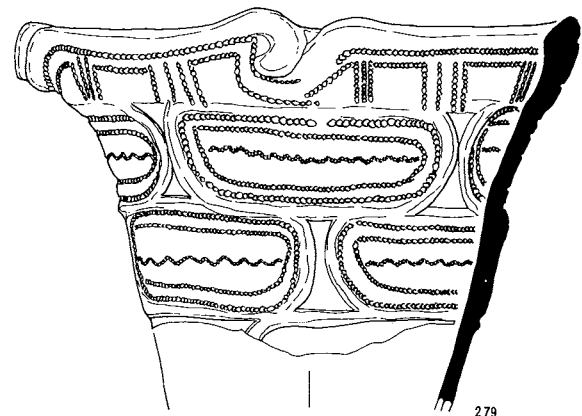
遺構外



277

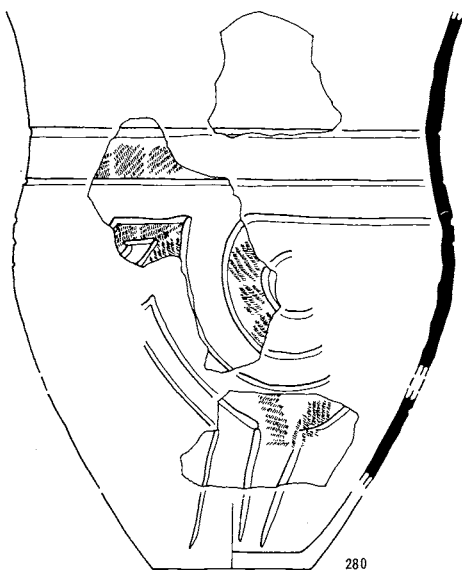


278

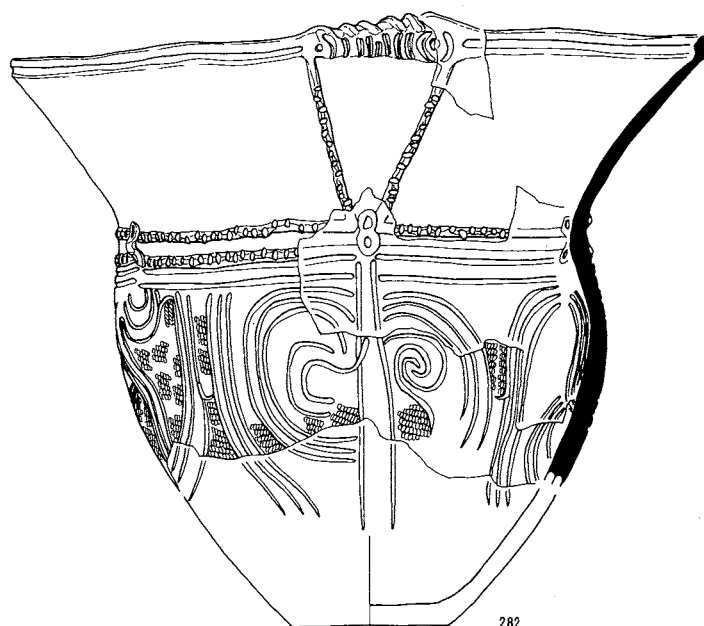


279

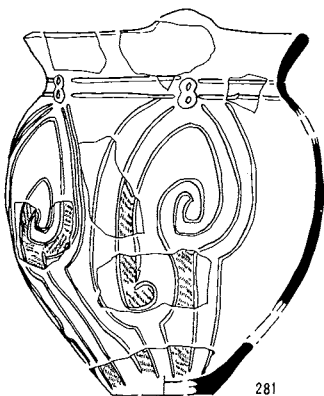
(後期)



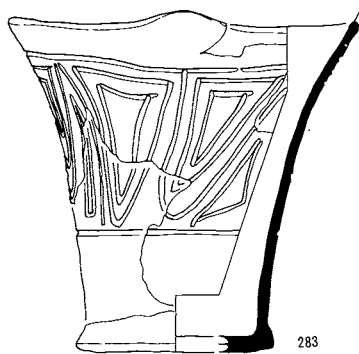
280



282



281

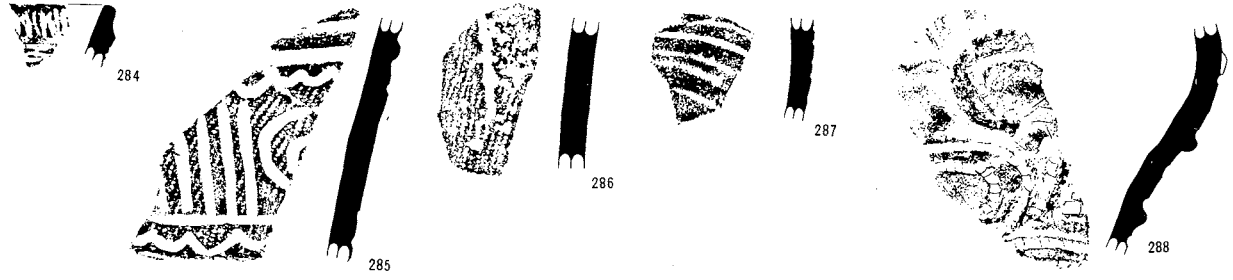


283

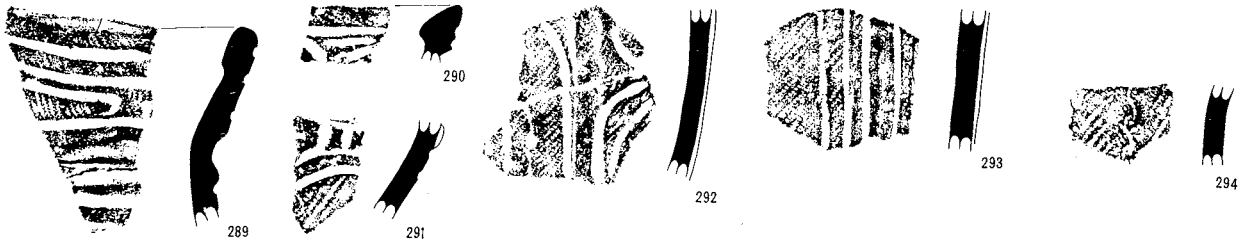


図20 頭殿沢遺跡土器実測図(中期中葉・後期 遺構外)

3号住居址



5号住居址



10号住居址

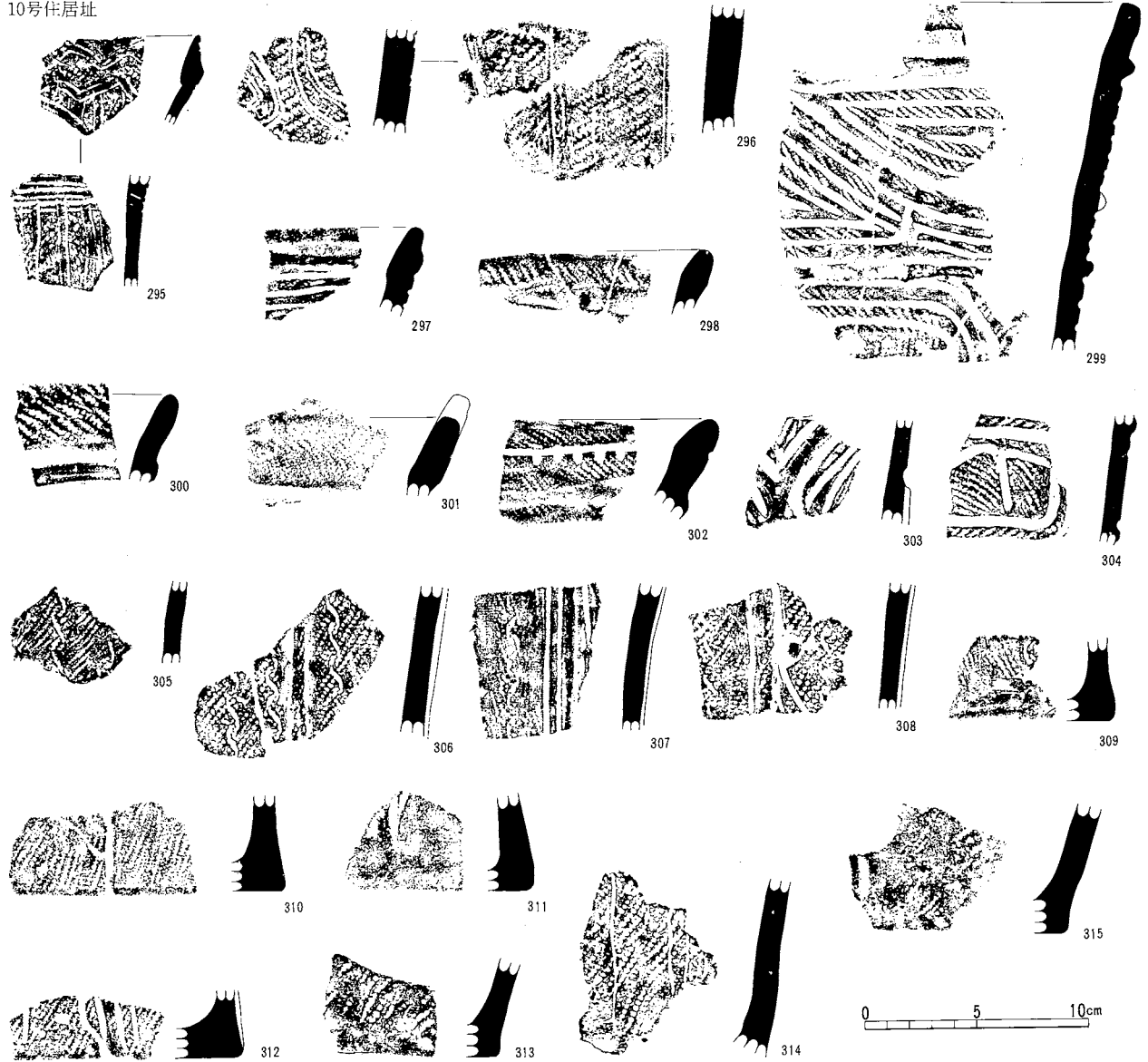
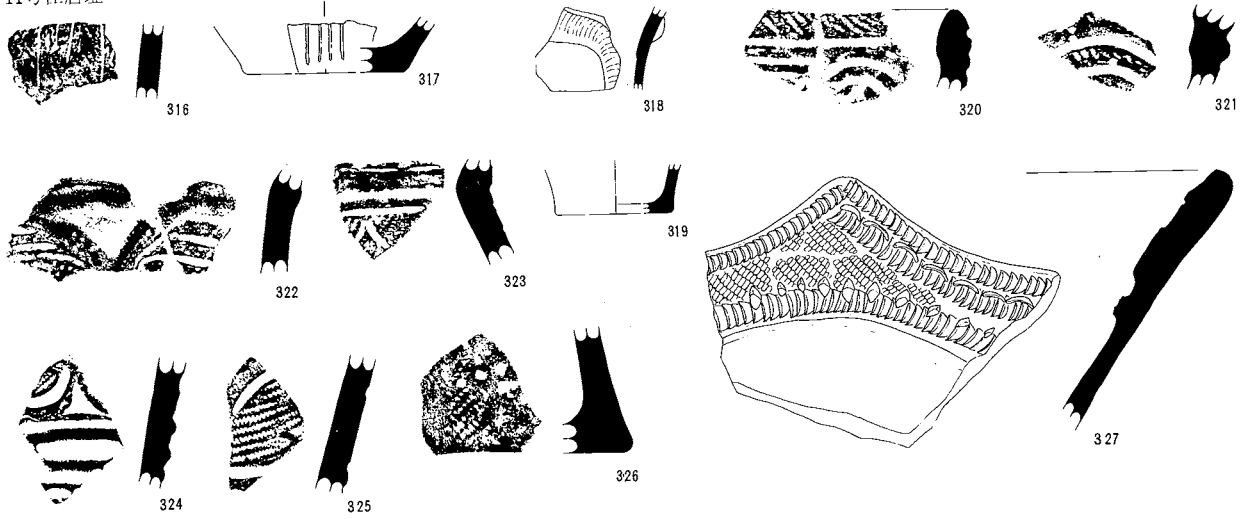
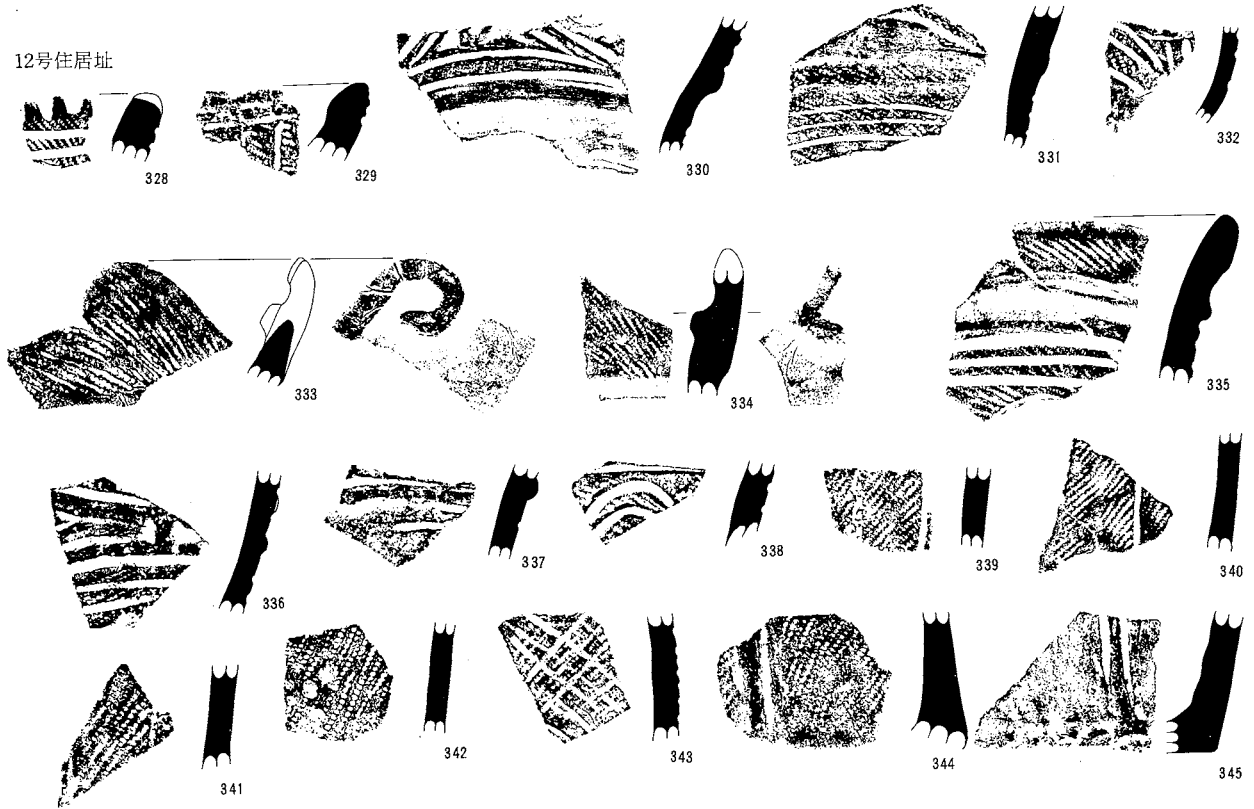


图21 頭殿沢遺跡土器拓影图 (中期初頭 3・5・10号住居址)

11号住居址



12号住居址



14号住居址

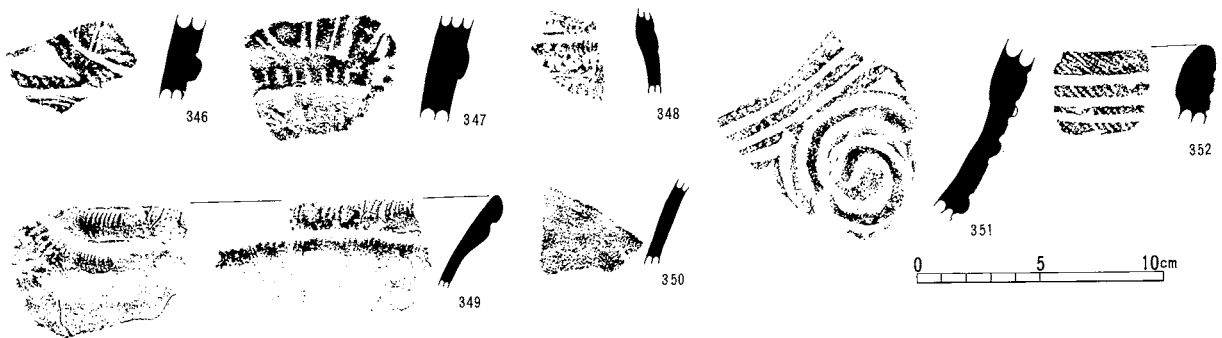
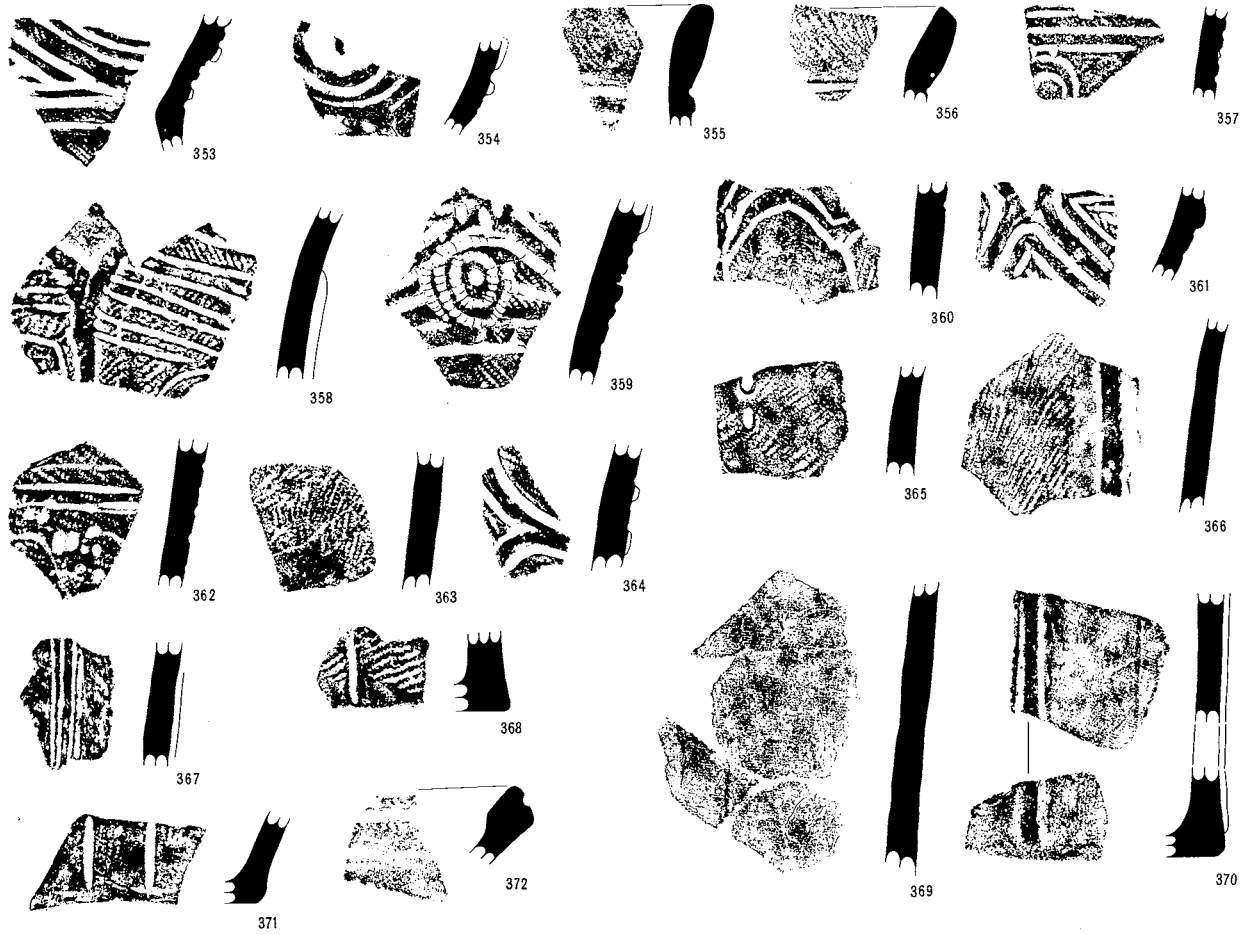


图22 頭殿沢遺跡土器拓影図（中期初頭 11・12・14号住居址）

14号住居址



15号住居址

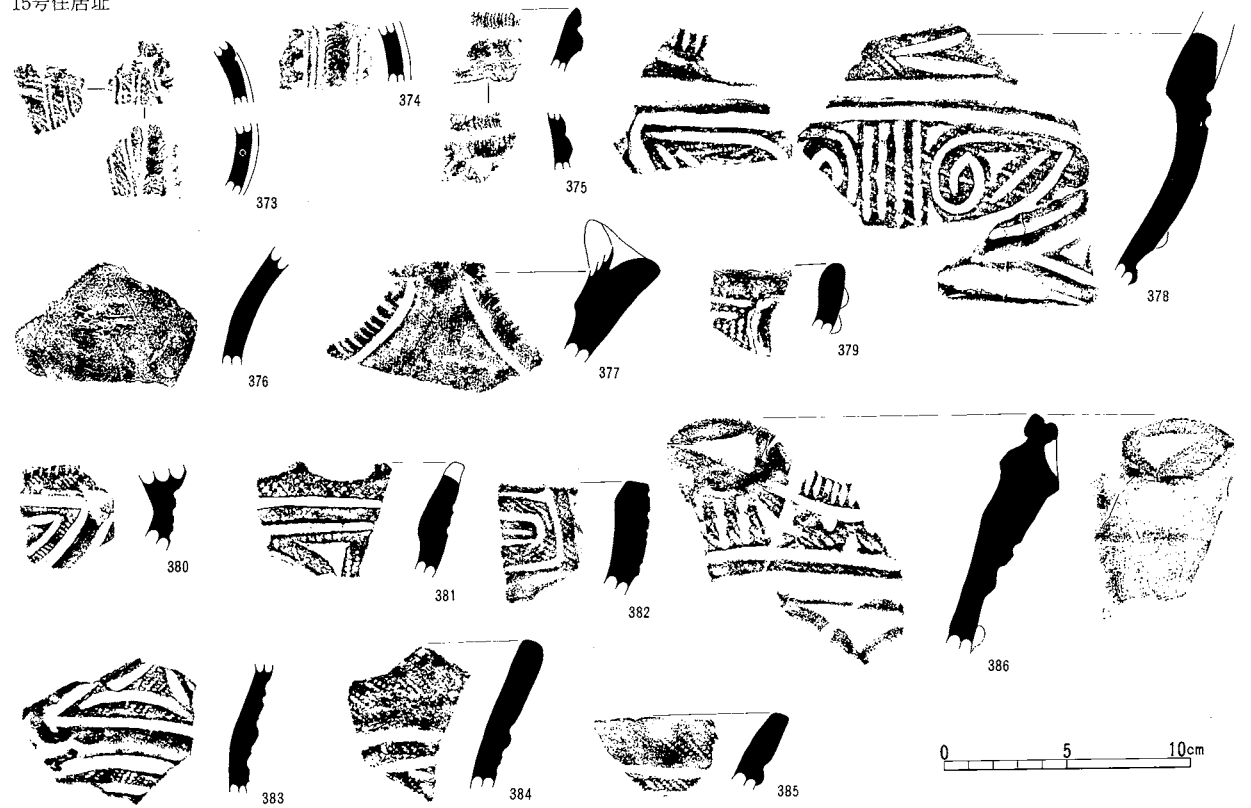


図23 頭殿沢遺跡土器拓影図 (中期初頭 14・15号住居址)

15号住居址

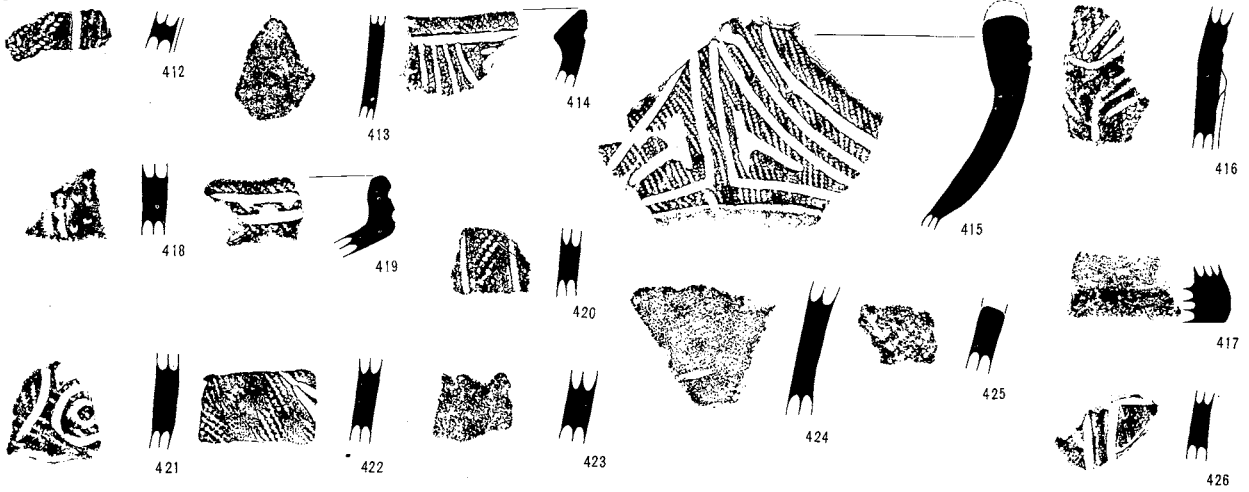


4号・9号住居址



図24 頭殿沢遺跡土器拓影図 (中期初頭・中葉 15・4・9号住居址)

竪穴・集石



土壇

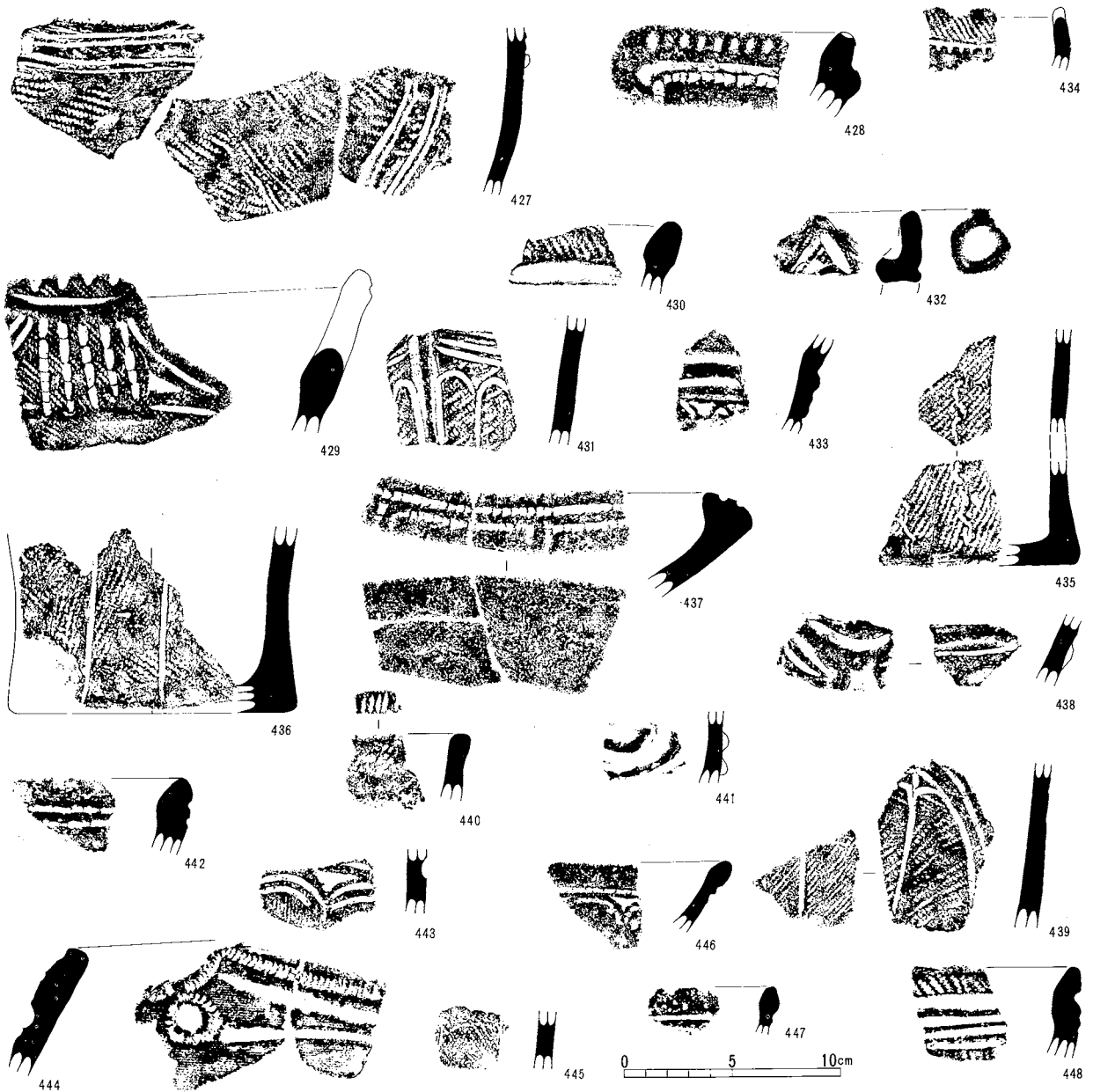


図25 頭殿沢遺跡土器拓影図 (竪穴 3・4 集石 2・5・7 土壇 8・9・
18・19・20・23・27・28・29・37・51・55・56)

土壙

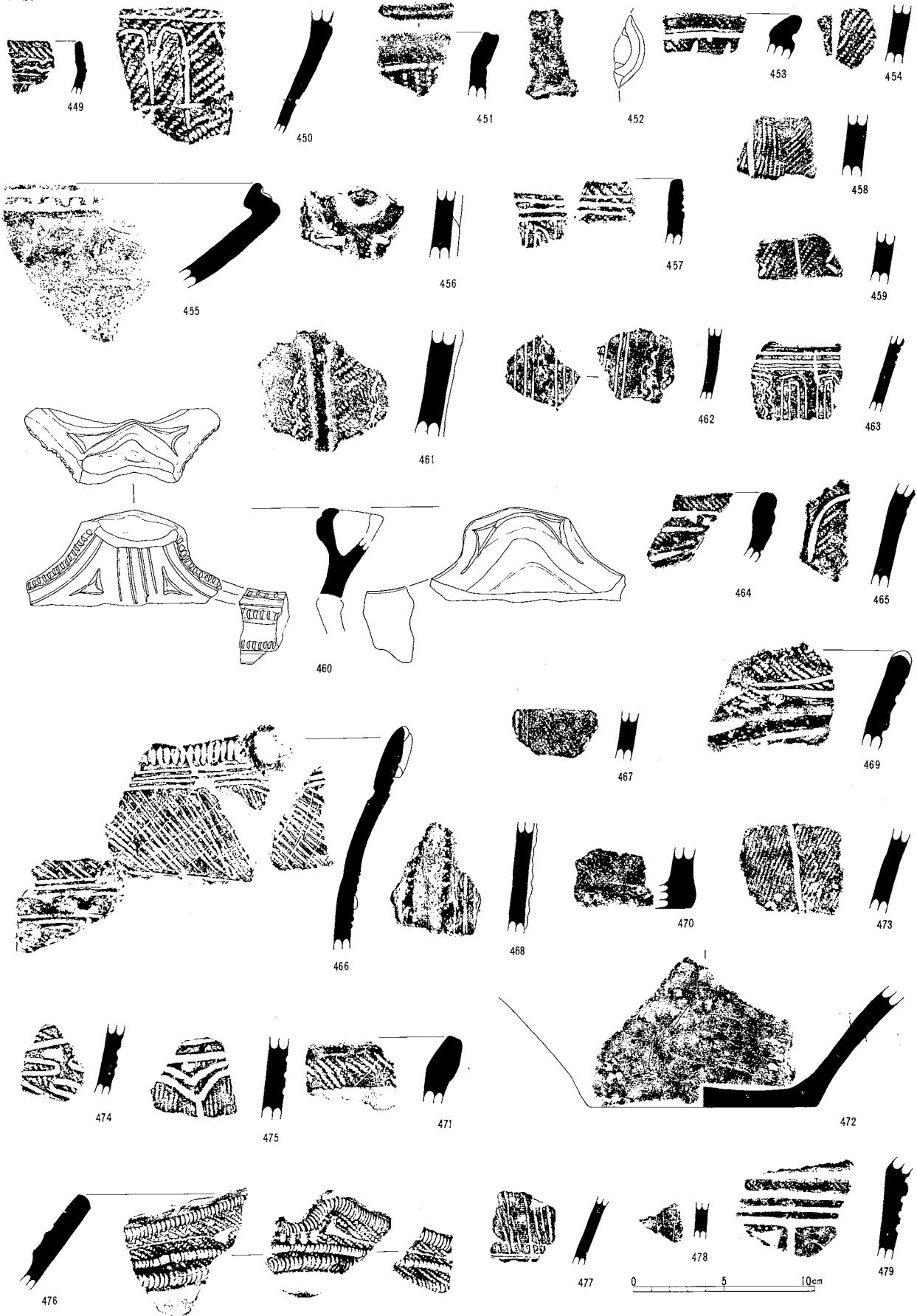


図26 頭殿沢遺跡土器拓影図 (土壙57・58・69・70・86・88・100・102・107・124・128・131・132・134・135・139・143)

土壤

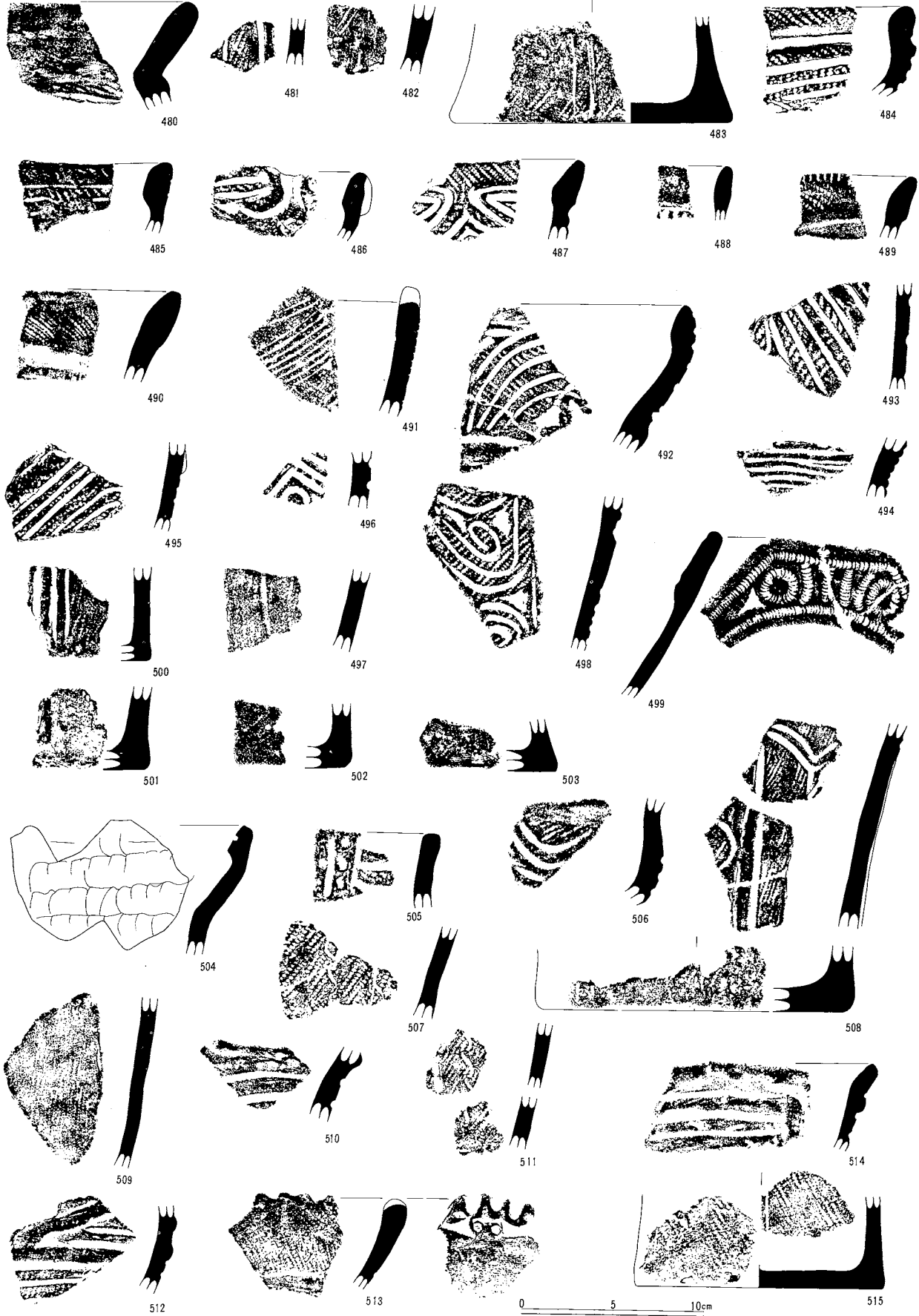


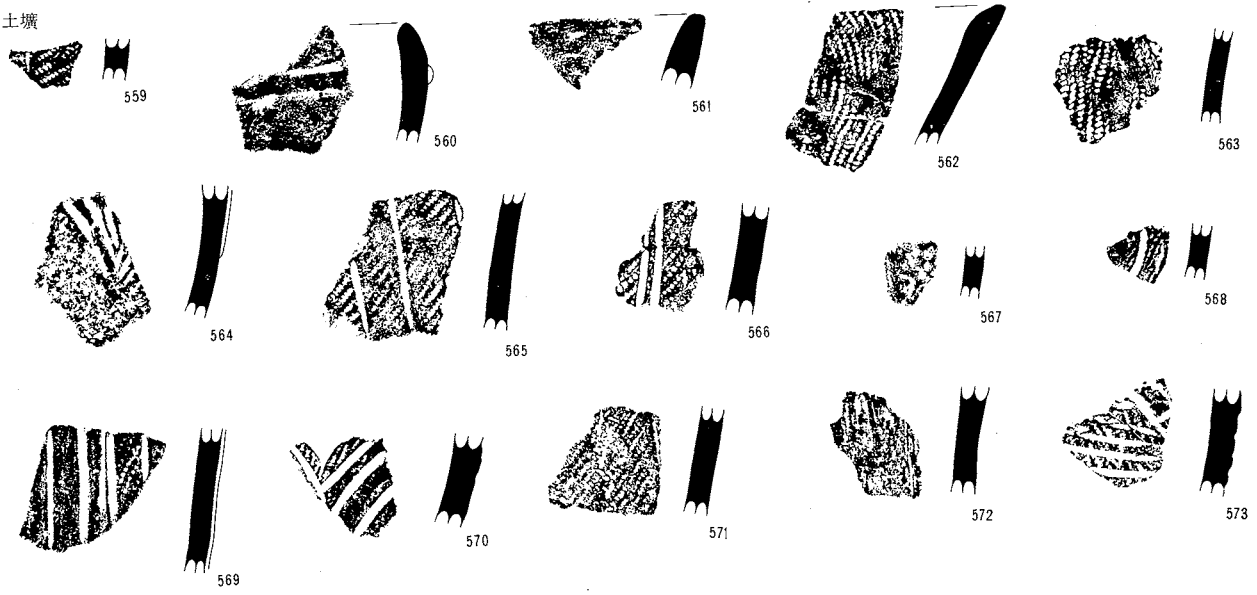
图27 頭殿沢遺跡土器拓影图 (土壤 167·174·182·184·185·189·193·210·217)

土壙



図28 頭殿沢遺跡土器拓影図 (土壙 220・225・228・231・235・238・248・252) (・268・269・281・300・301・319・320・325・366)

土壇



遺構外

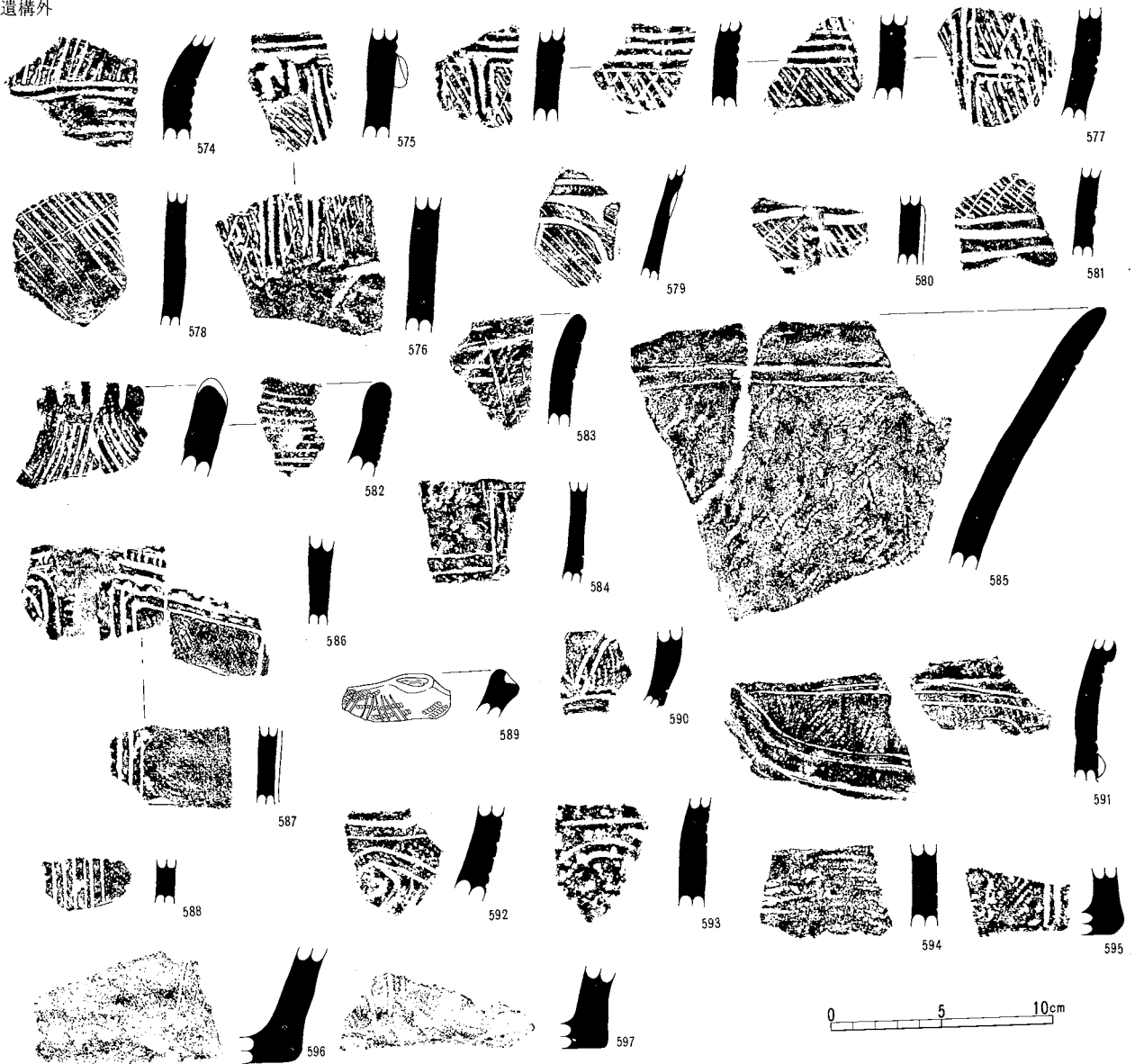


图29 頭殿沢遺跡土器拓影图 (土壇367·368·373·374·381·384·397·394、中期初頭 遺構外)

遺構外

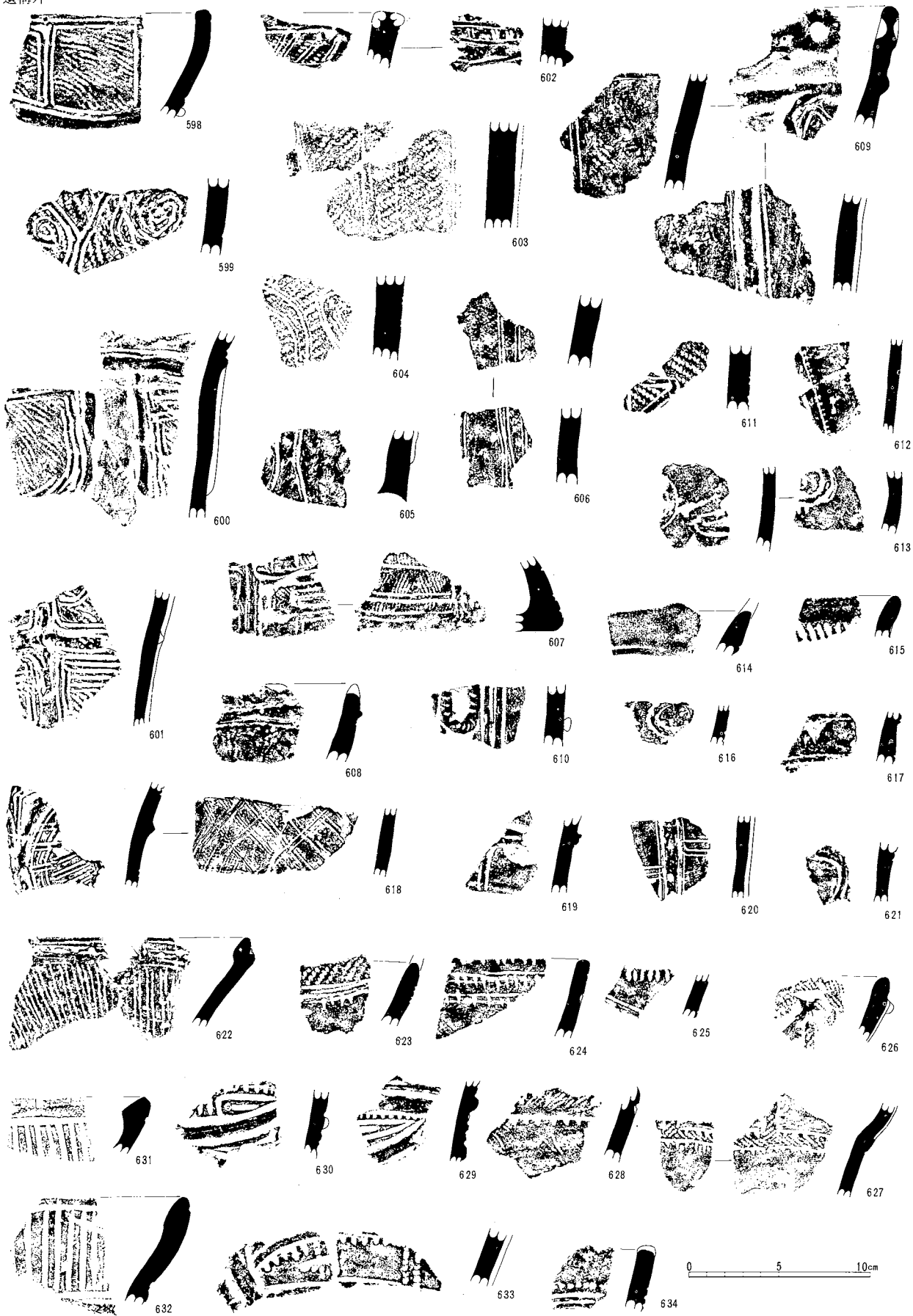


图30 頭殿沢遺跡土器拓影图 (中期初頭 遺構外)

遺構外

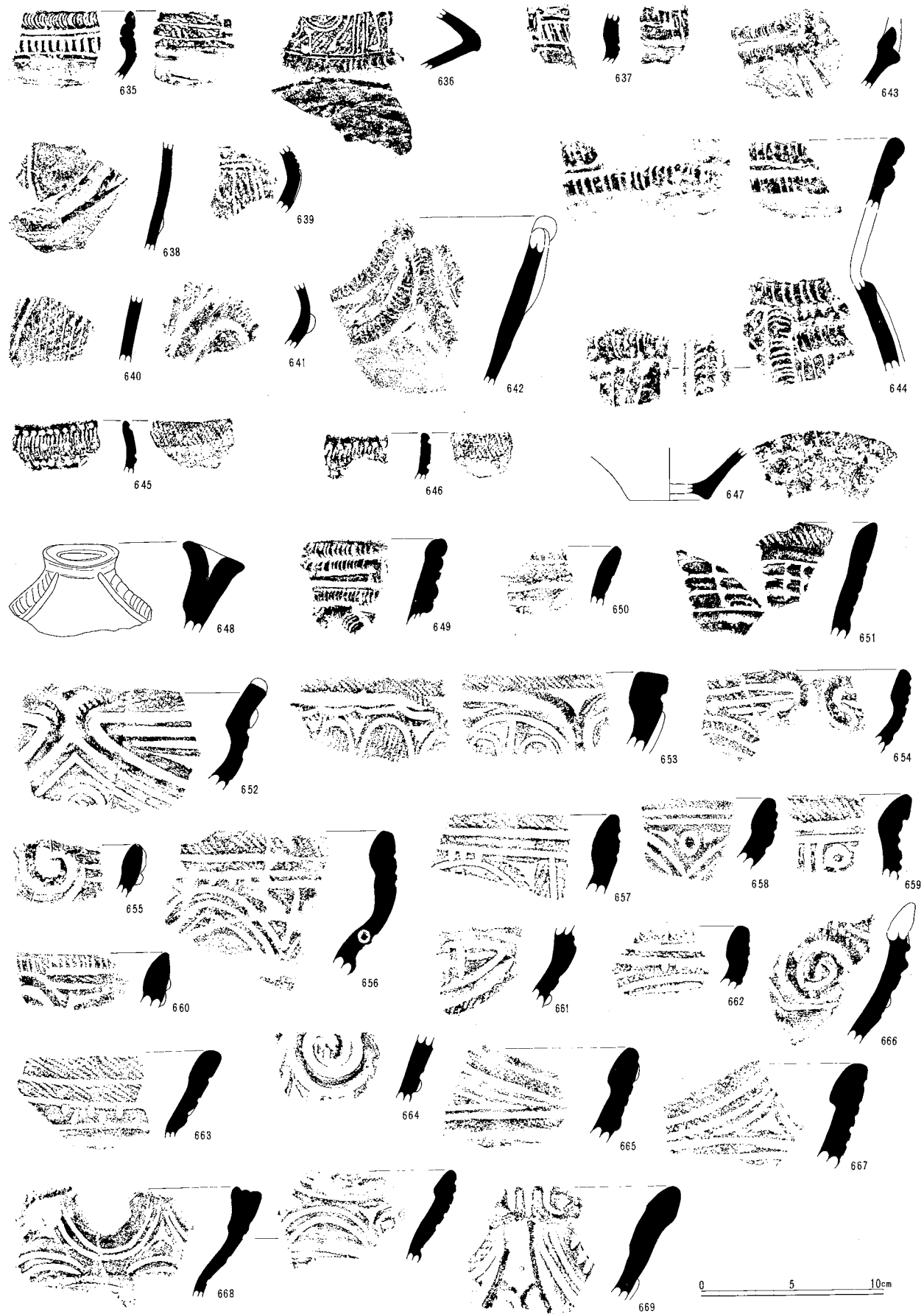


图31 頭殿沢遺跡土器拓影图 (中期初頭 遺構外)

遺構外

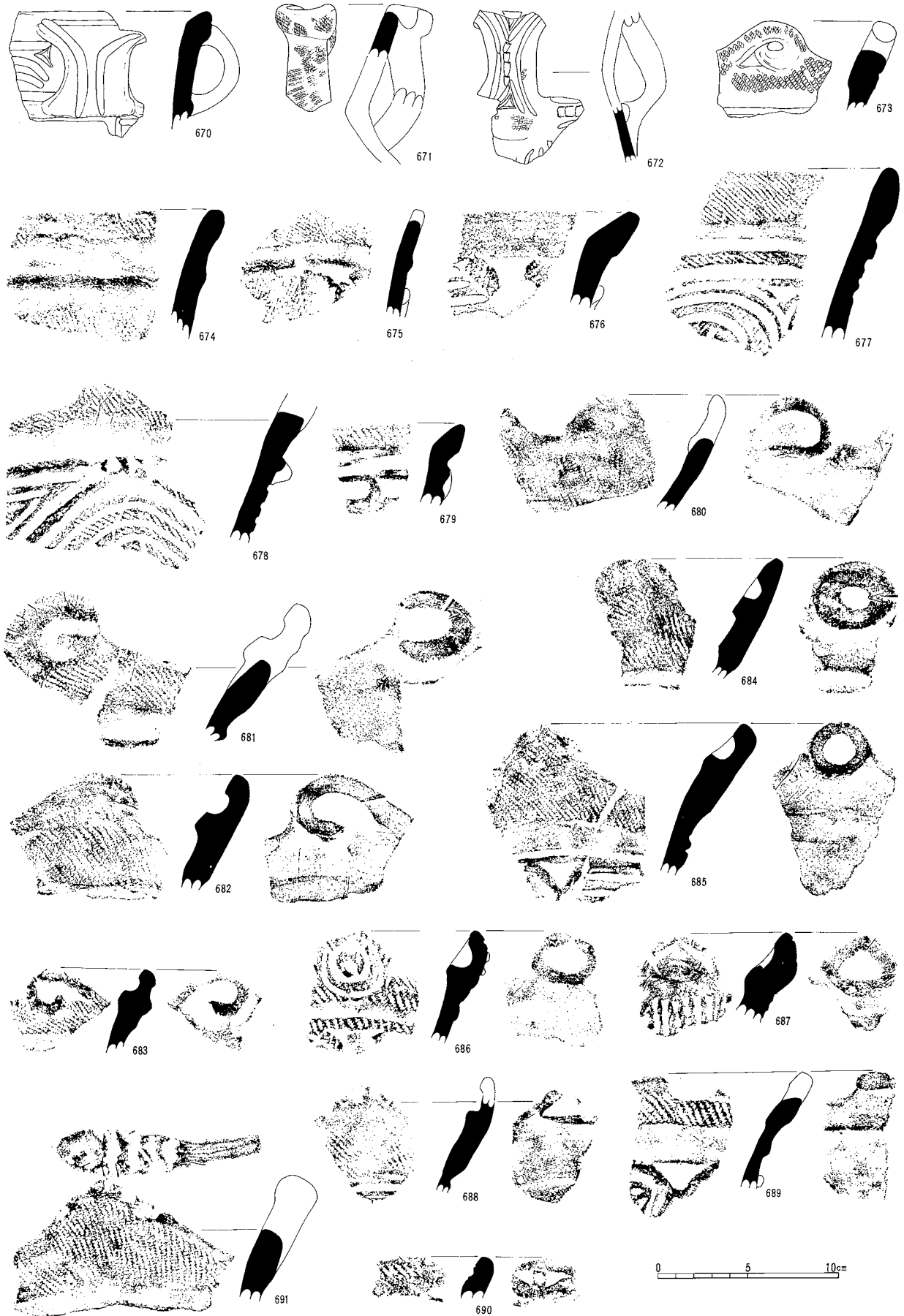


図32 頭殿沢遺跡土器拓影図(中期初頭 遺構外)

遺構外

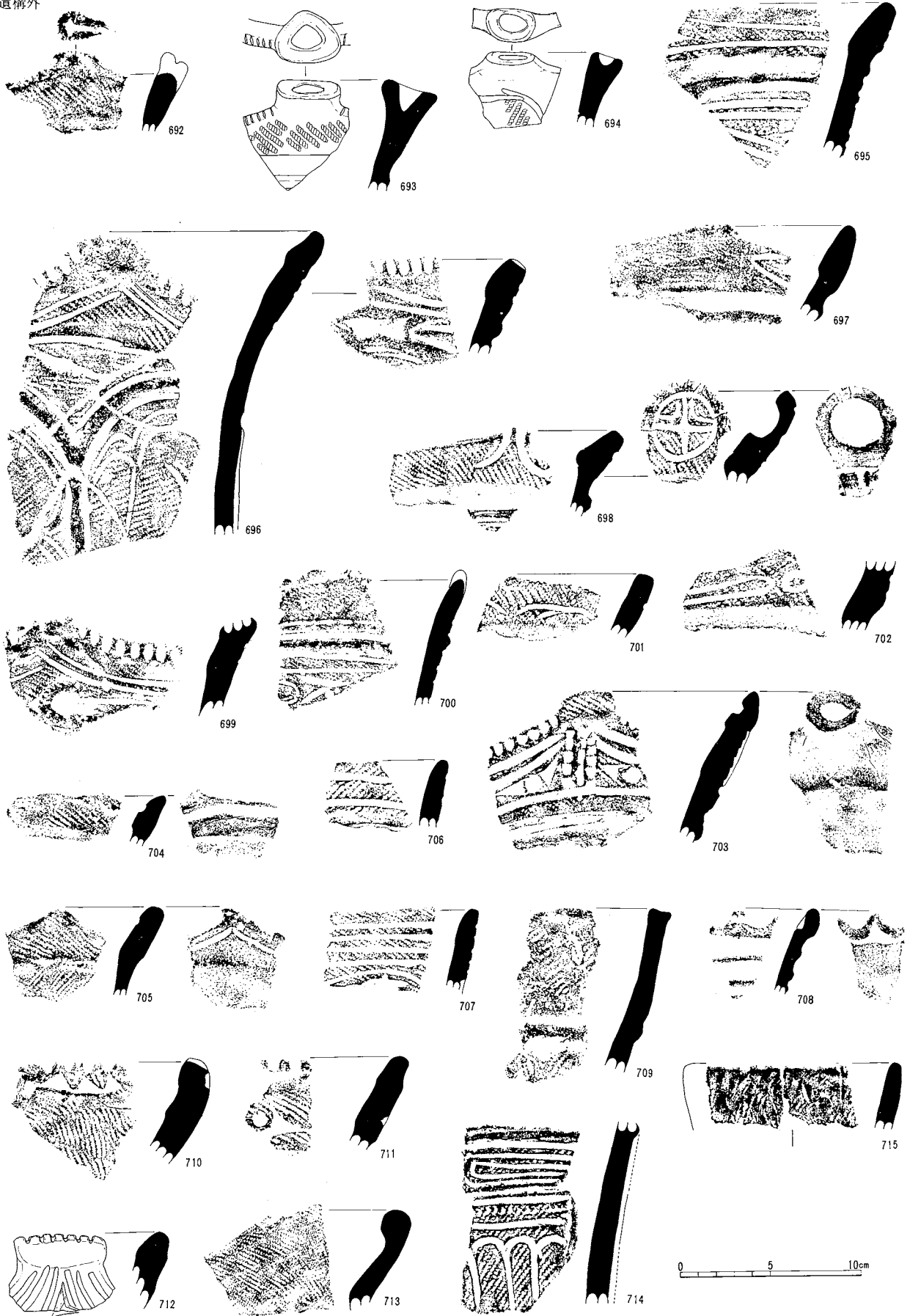


図33 頭殿沢遺跡土器拓影図（中期初頭 遺構外）

遺構外

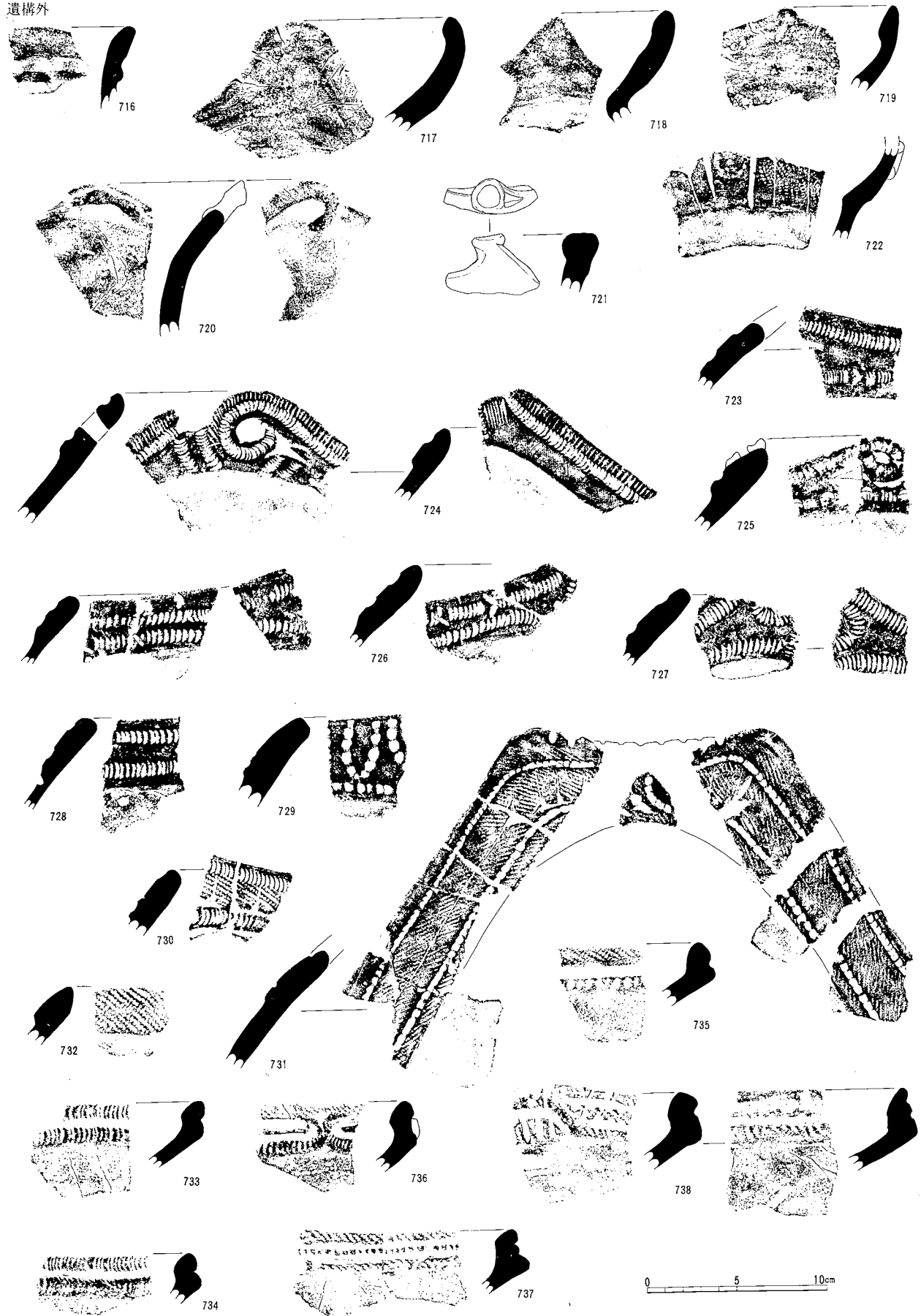


図34 頭殿沢遺跡土器拓影図(中期初頭 遺構外)

遺構外

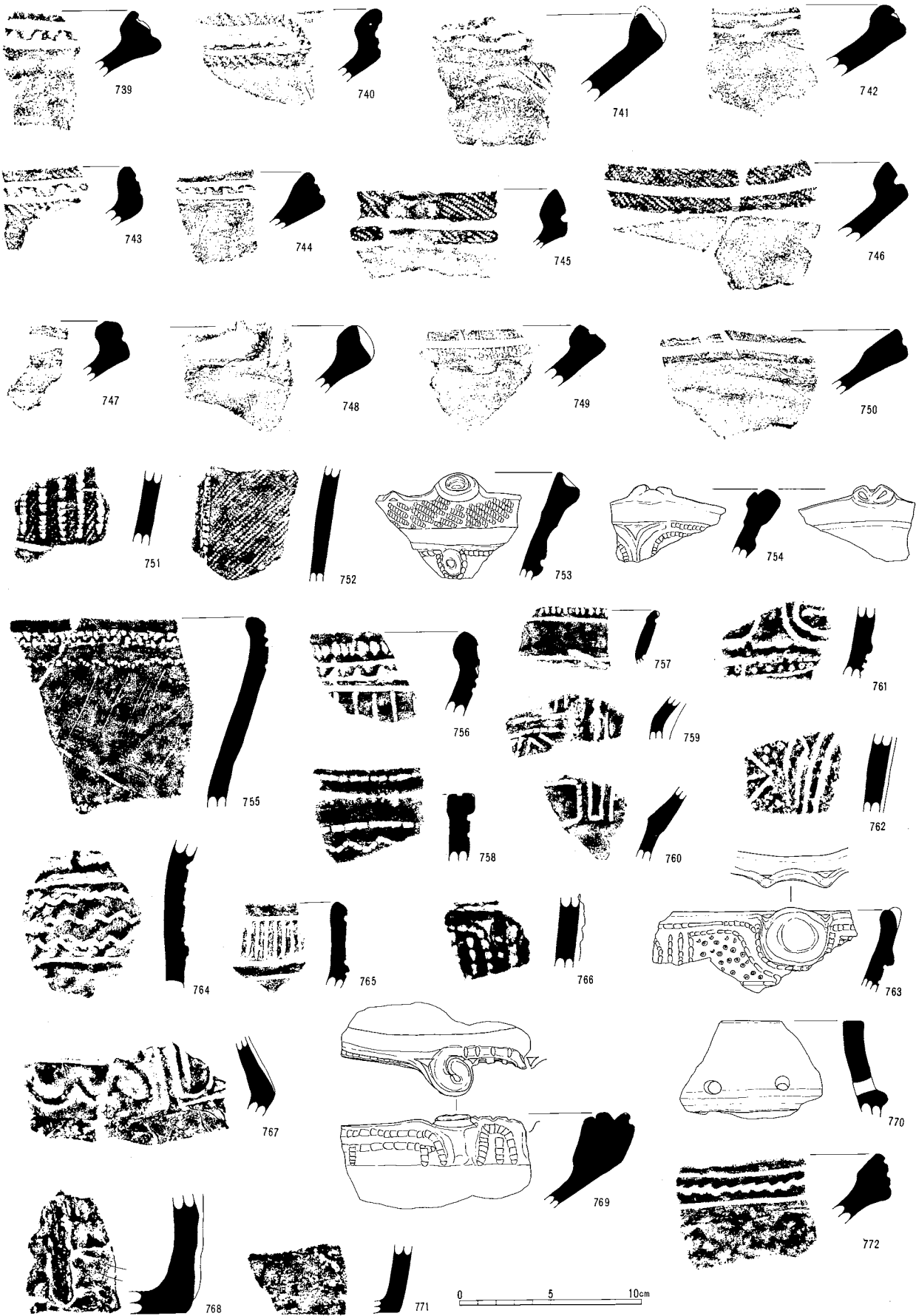


図35 頭殿沢遺跡土器拓影図（中期初頭・中葉 遺構外）

遺構外

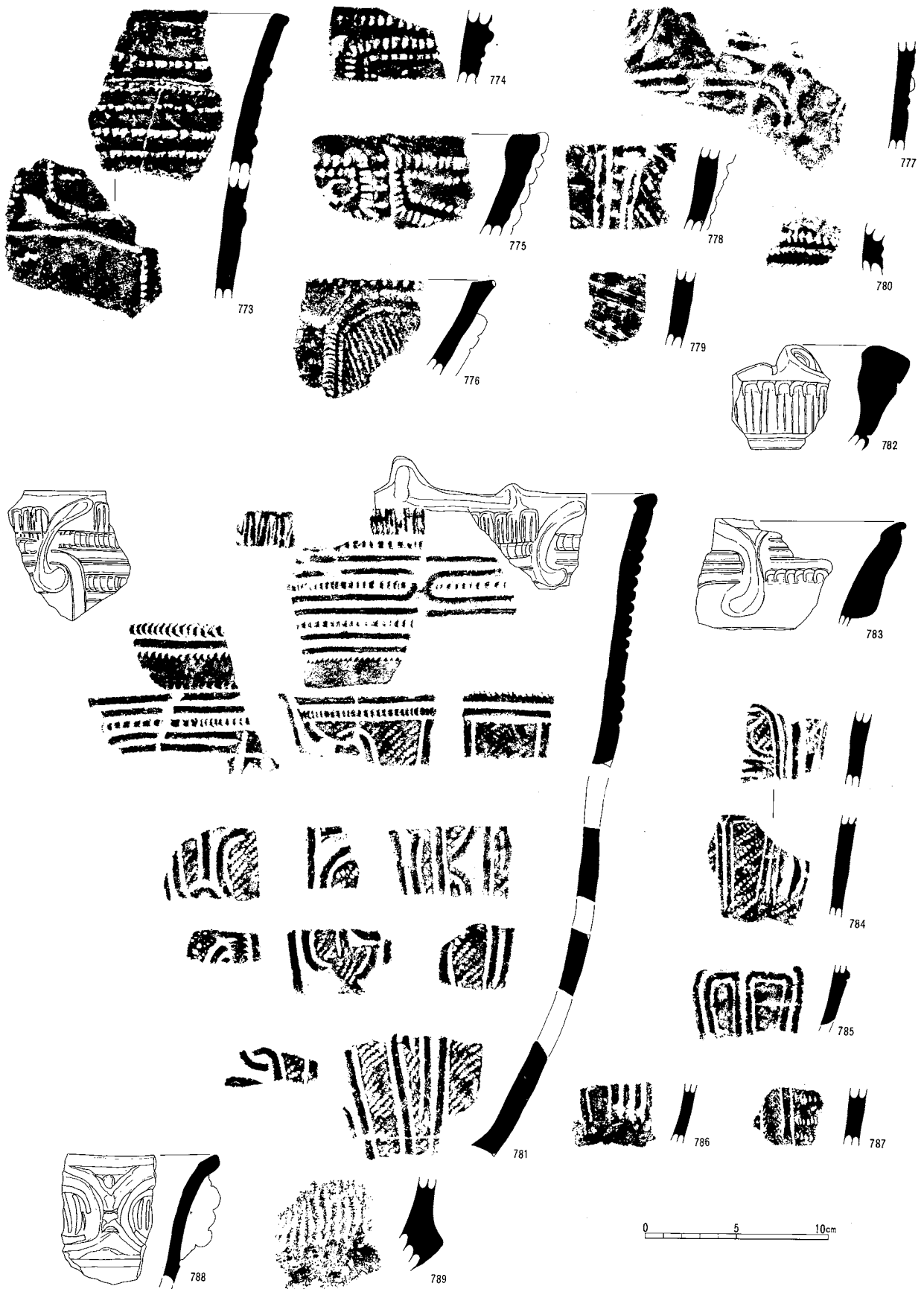


図36 頭殿沢遺跡土器拓影図（中期中葉 遺構外）

遺構外

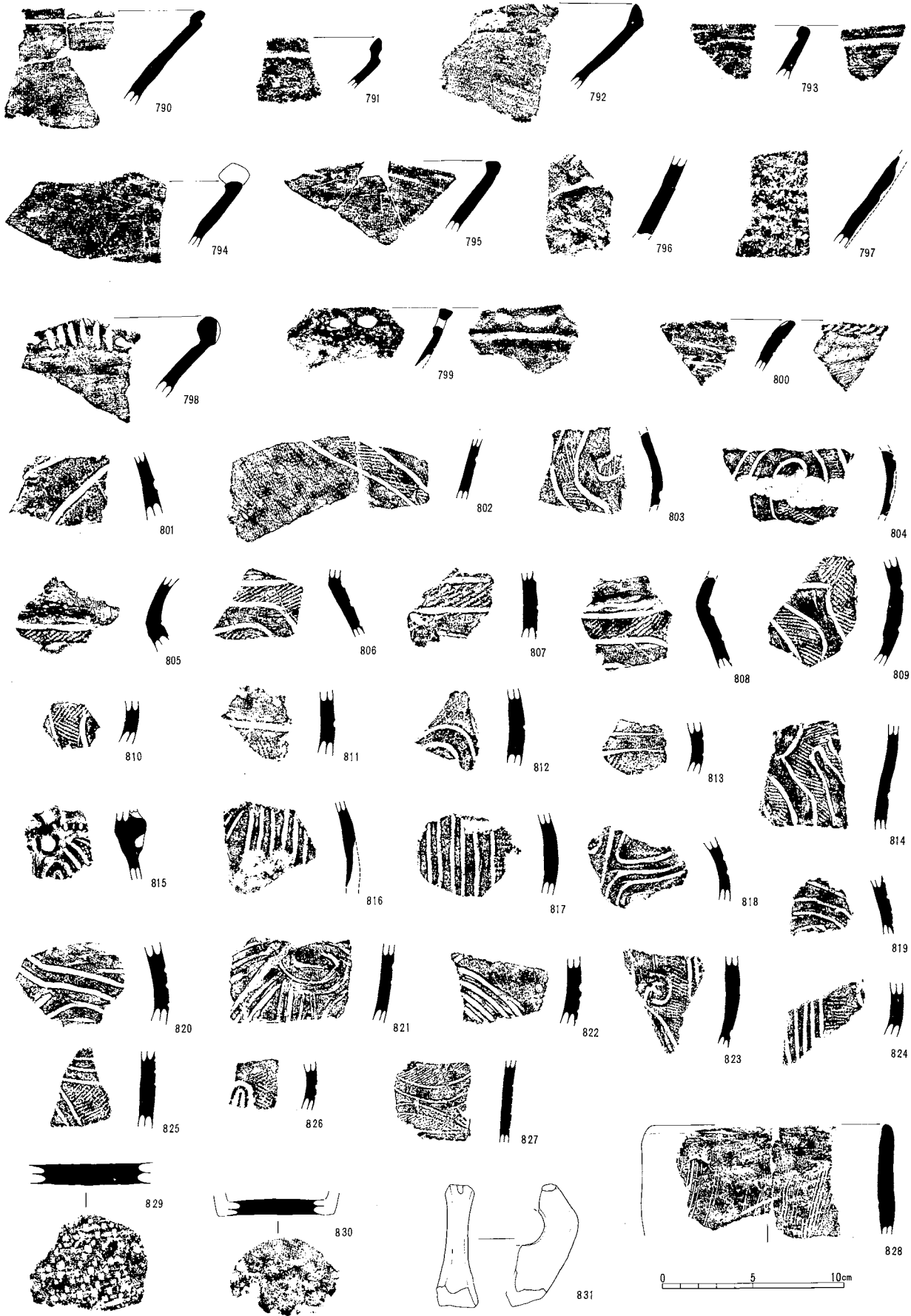


図37 頭殿沢遺跡土器拓影図（後期 遺構外）

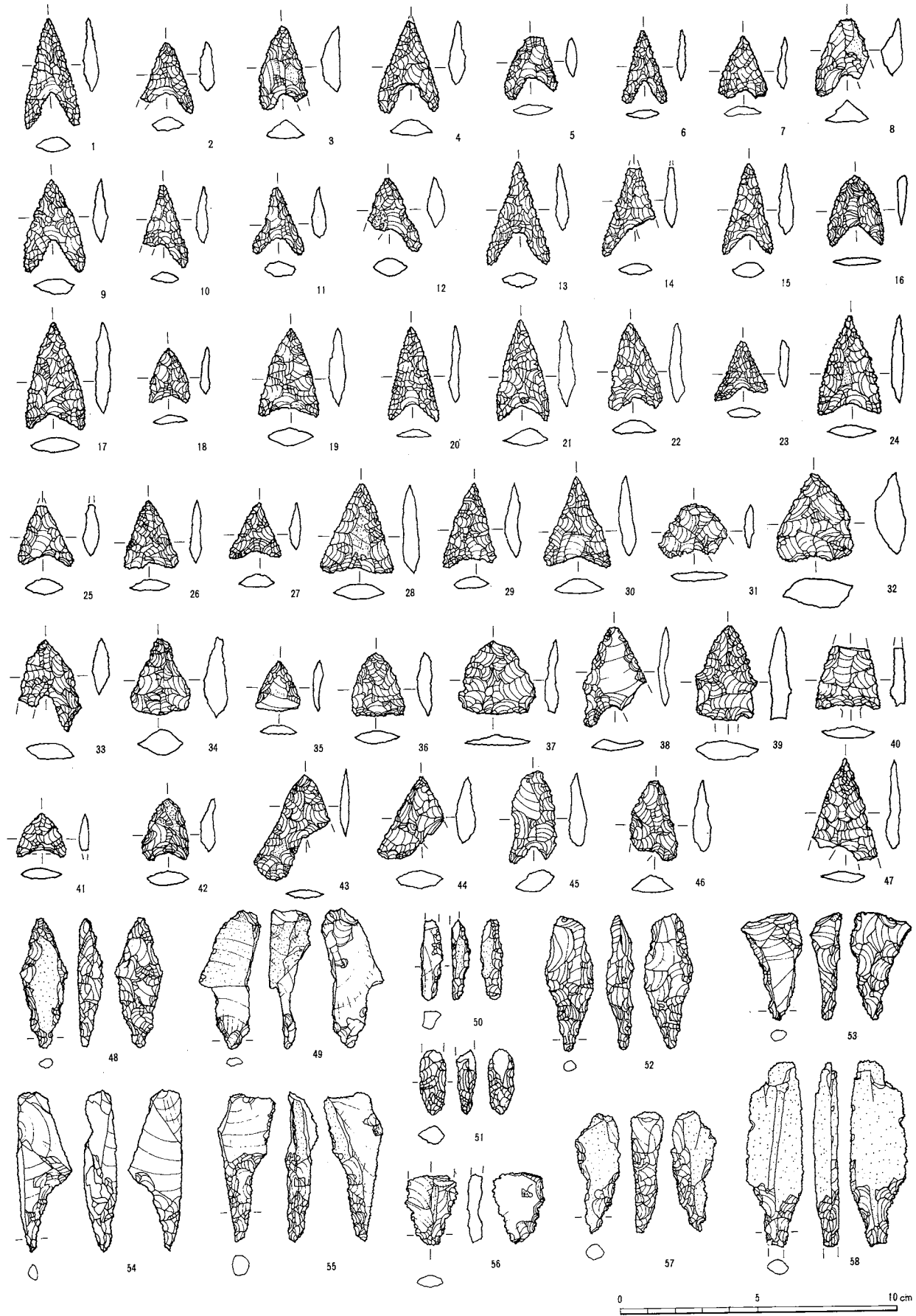


図38 頭殿沢遺跡石器実測図(石鏃・石錐)

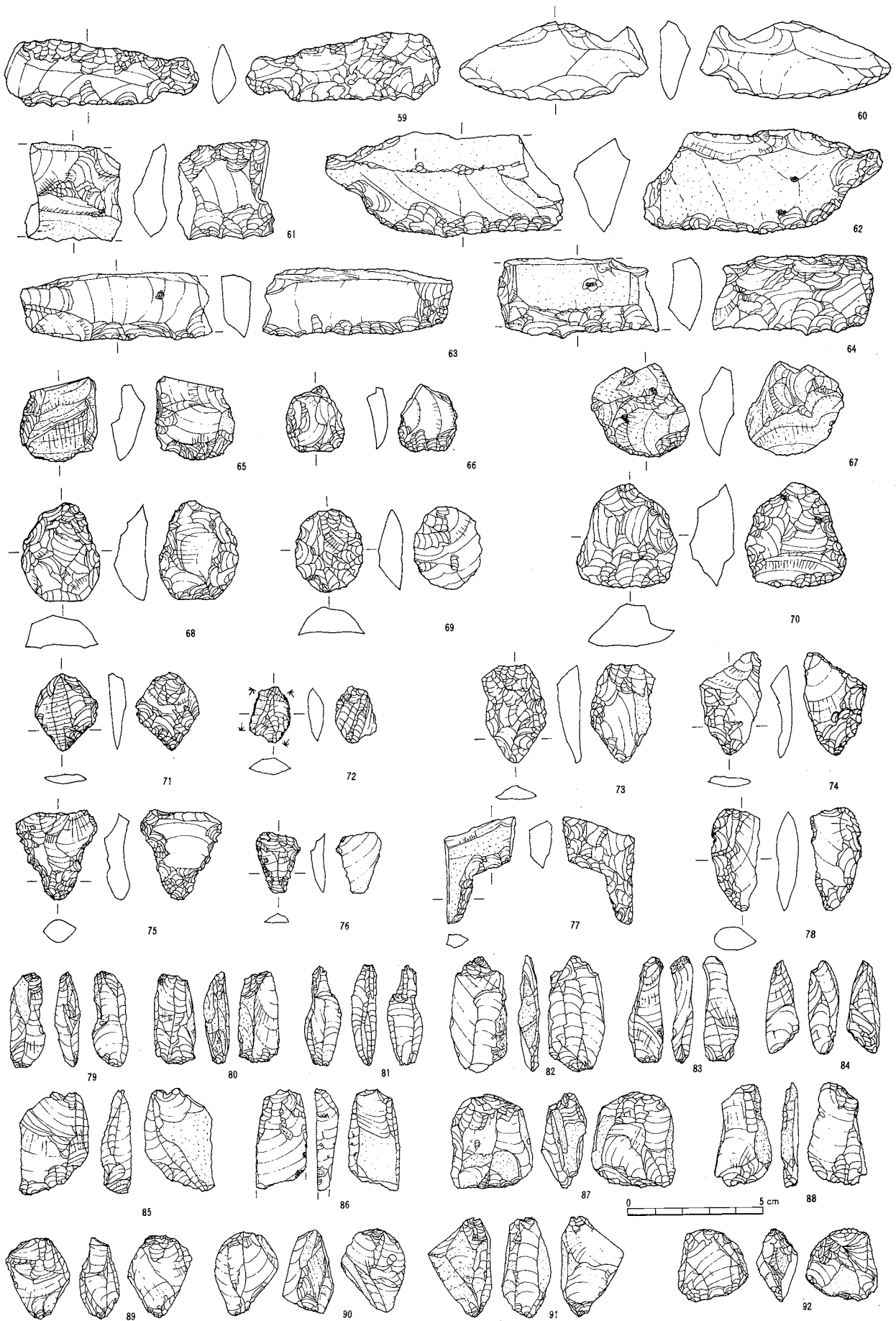


図39 頭殿沢遺跡石器実測図（スクレイパー・彫刻器類）

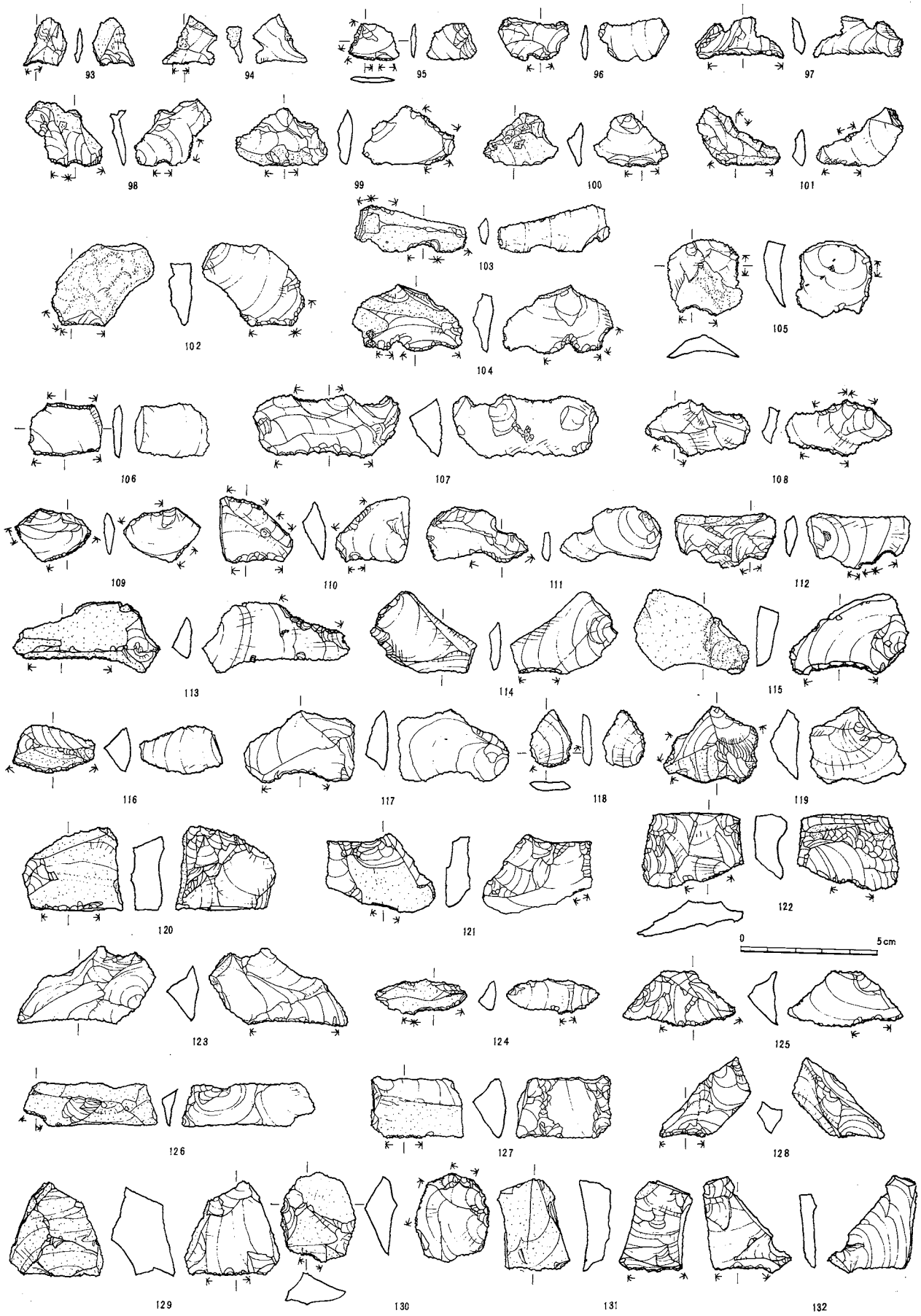


図40 頭殿沢遺跡石器実測図（使用痕ある石器）

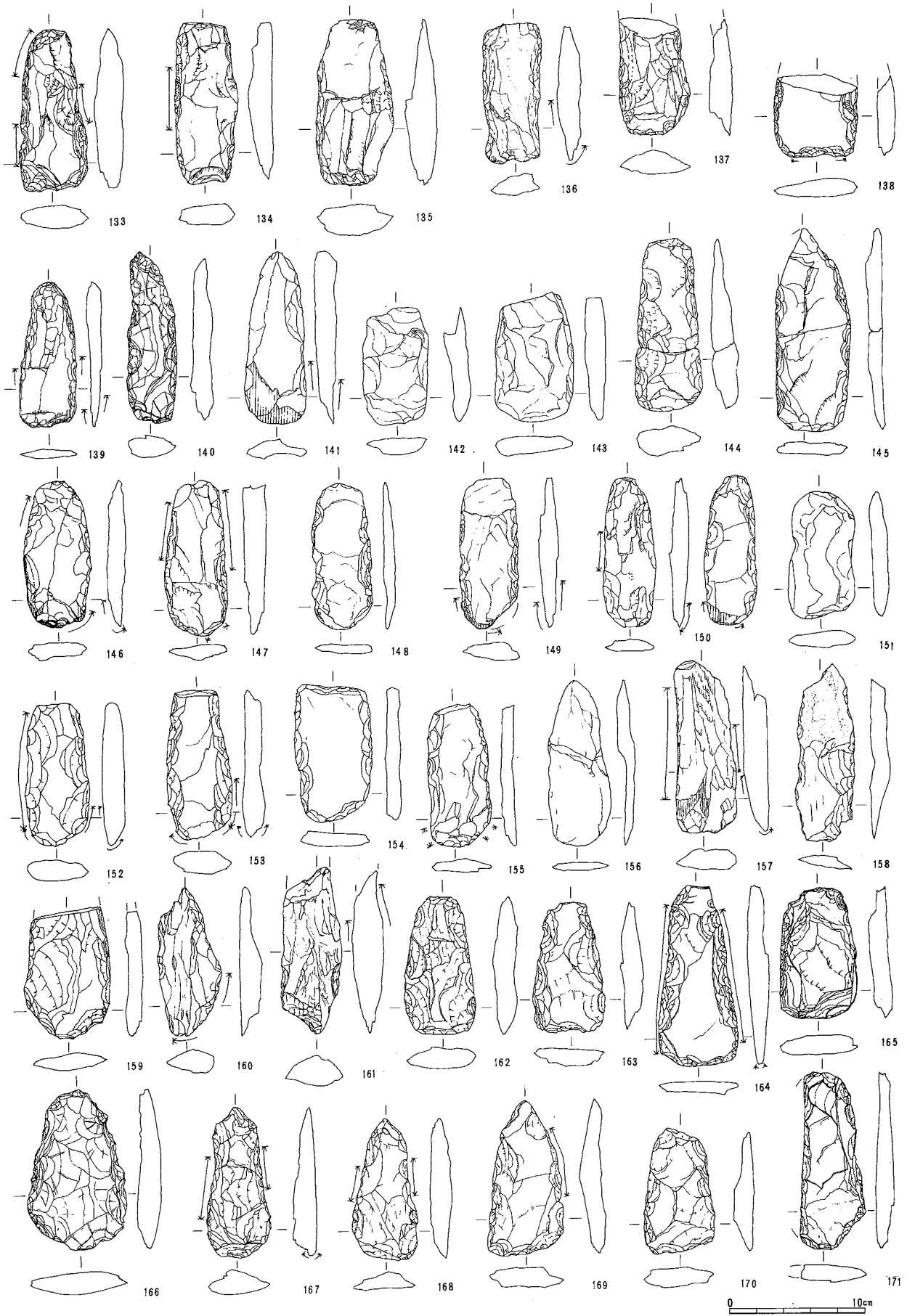


図41 頭殿沢遺跡石器実測図（打製石斧）

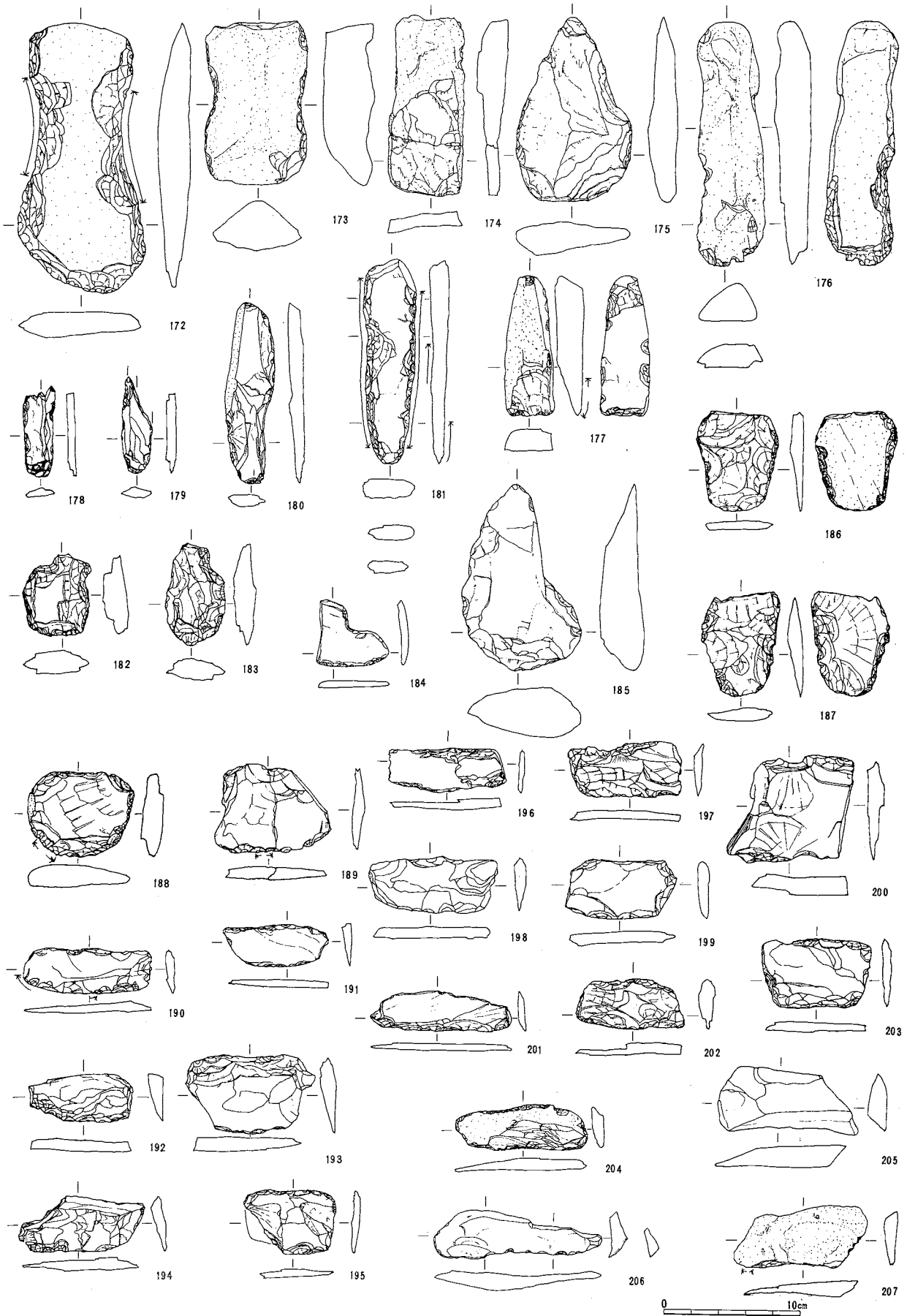


図42 頭殿沢遺跡石器実測図（打製石斧・その他・横刃型石器）

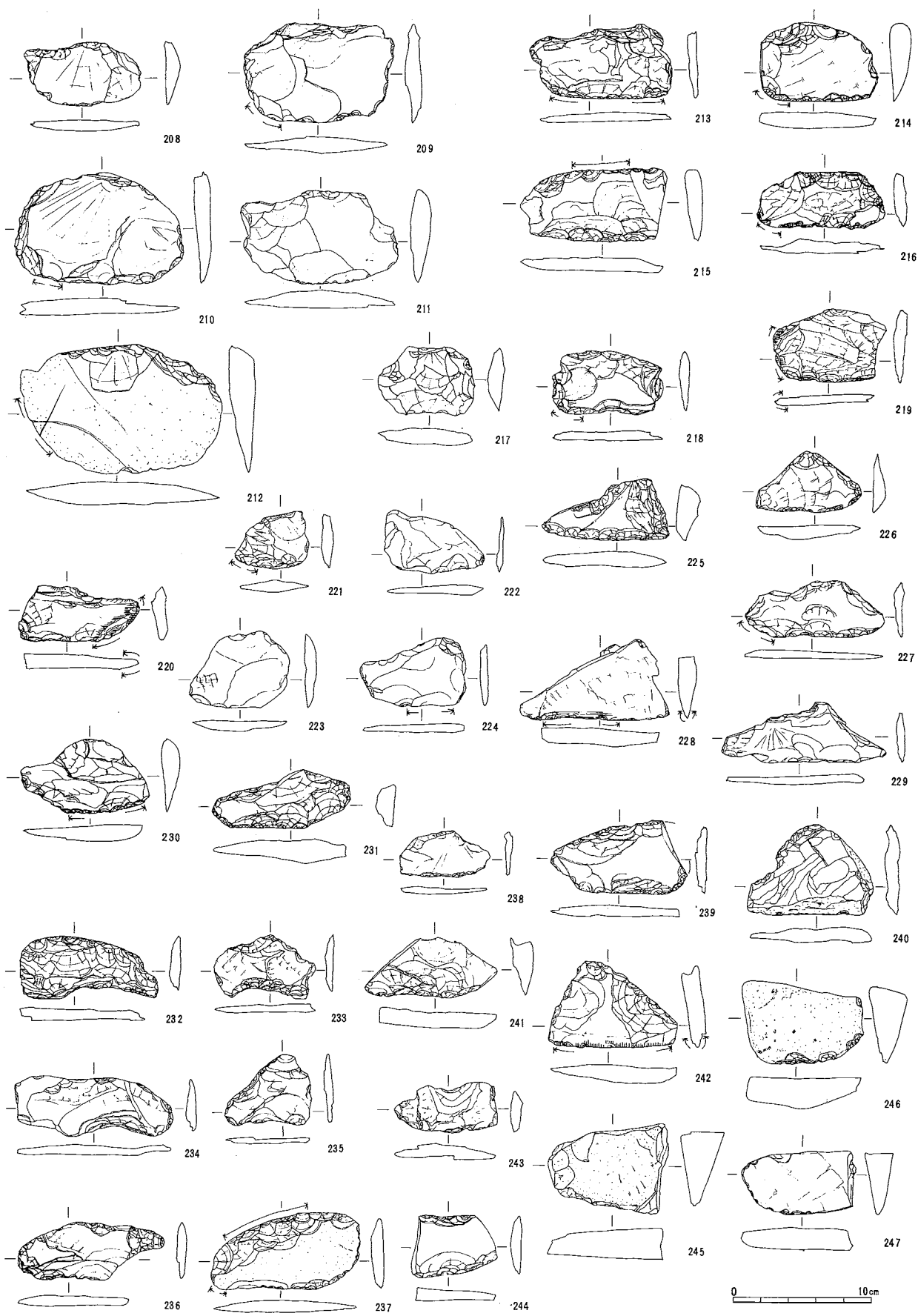


図43 頭殿沢遺跡石器実測図(横刃型石器)

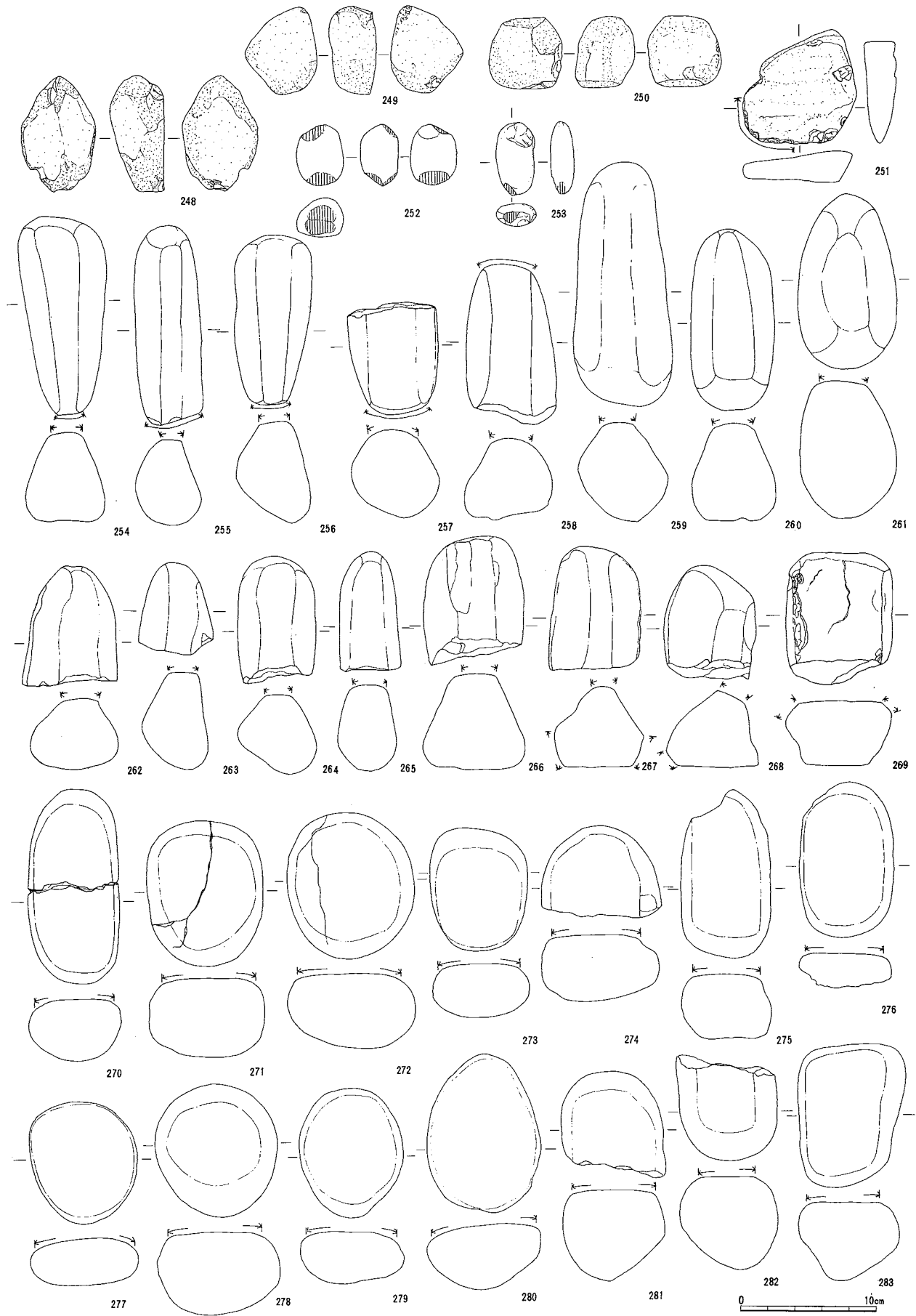


図44 頭殿沢遺跡石器実測図（敲打器・特殊磨石・磨石）

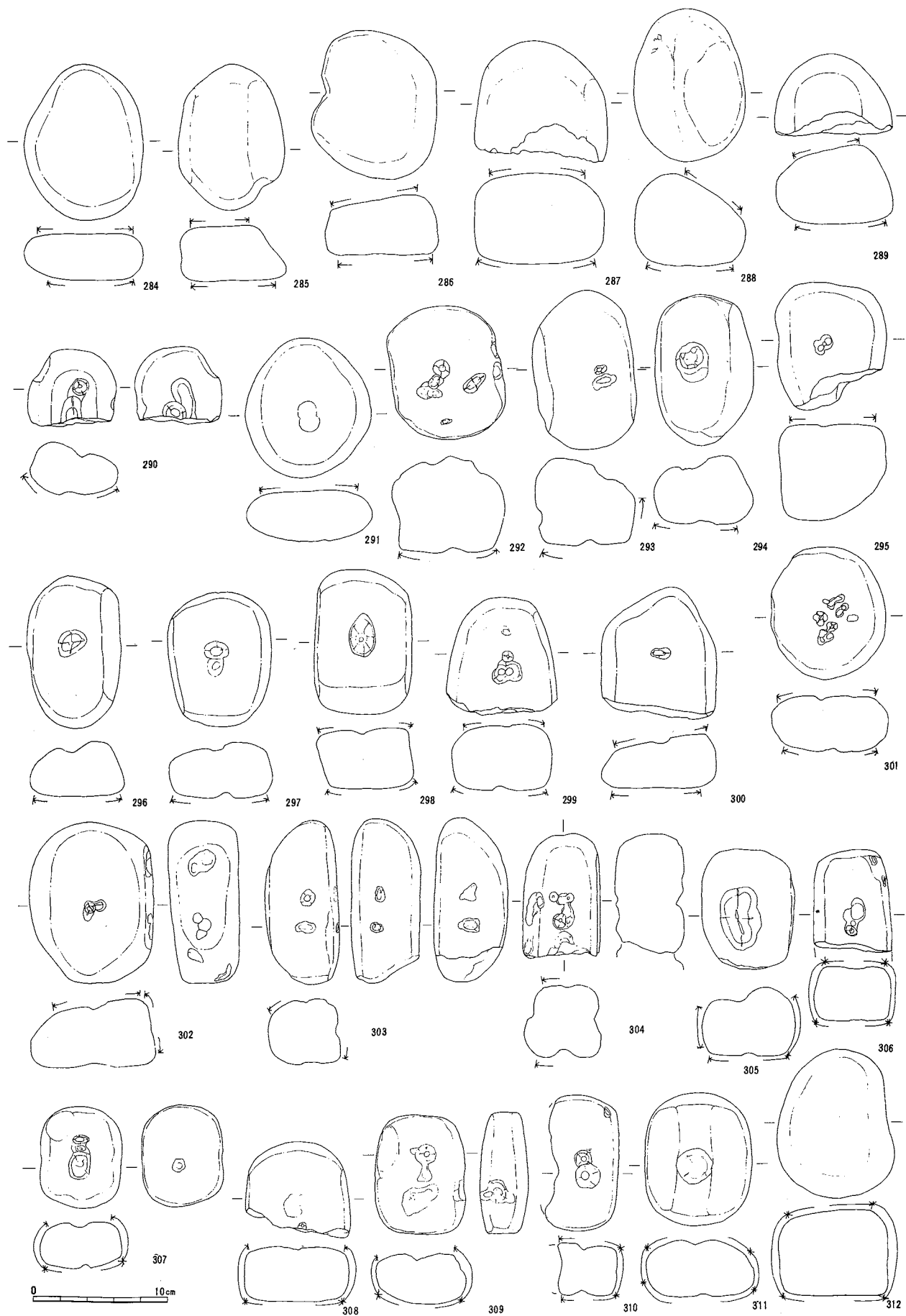


図45 頭殿沢遺跡石器実測図(磨石)

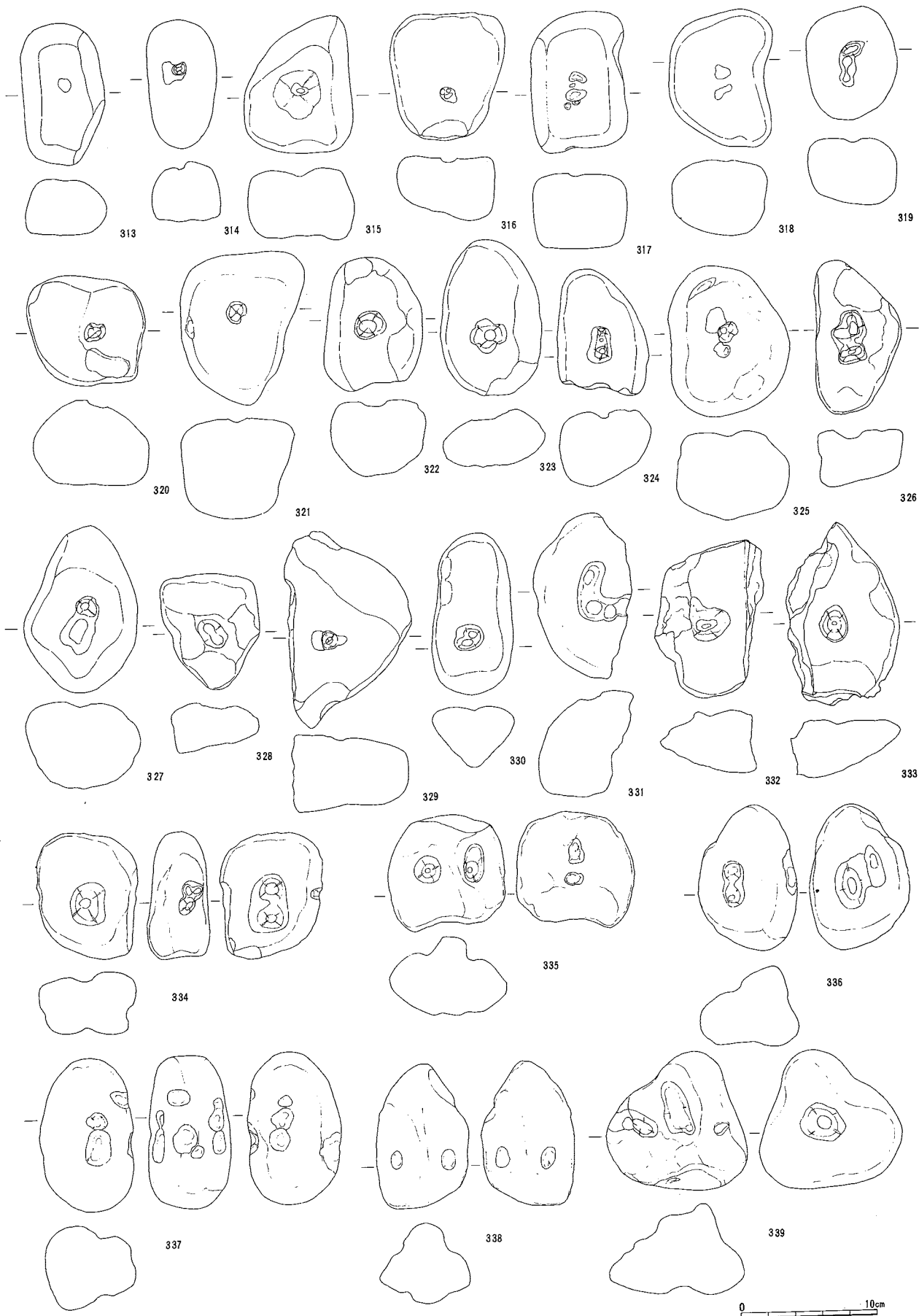


図46 頭殿沢遺跡石器実測図(凹石)

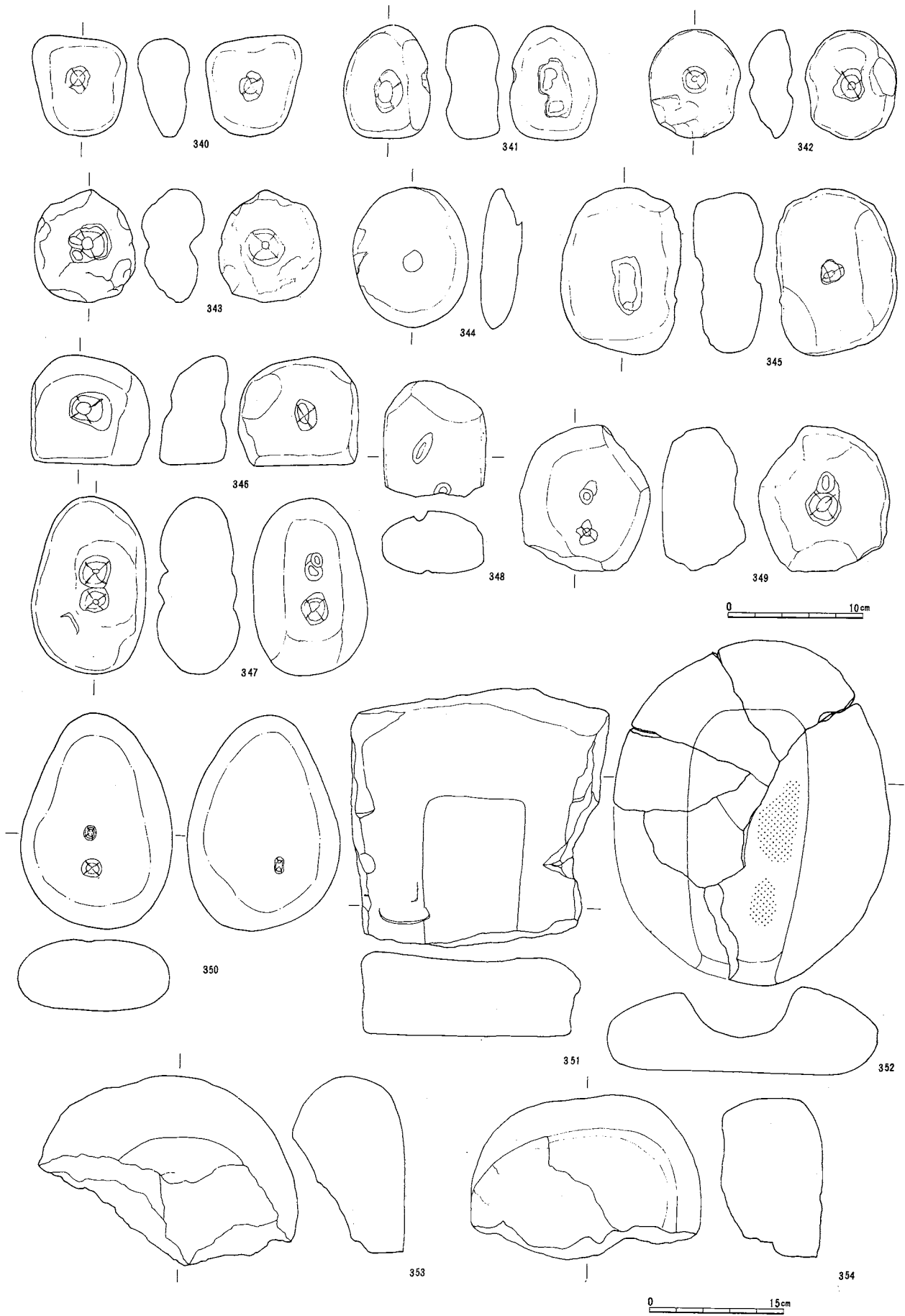


図47 頭殿沢遺跡石器実測図(凹石・石皿)

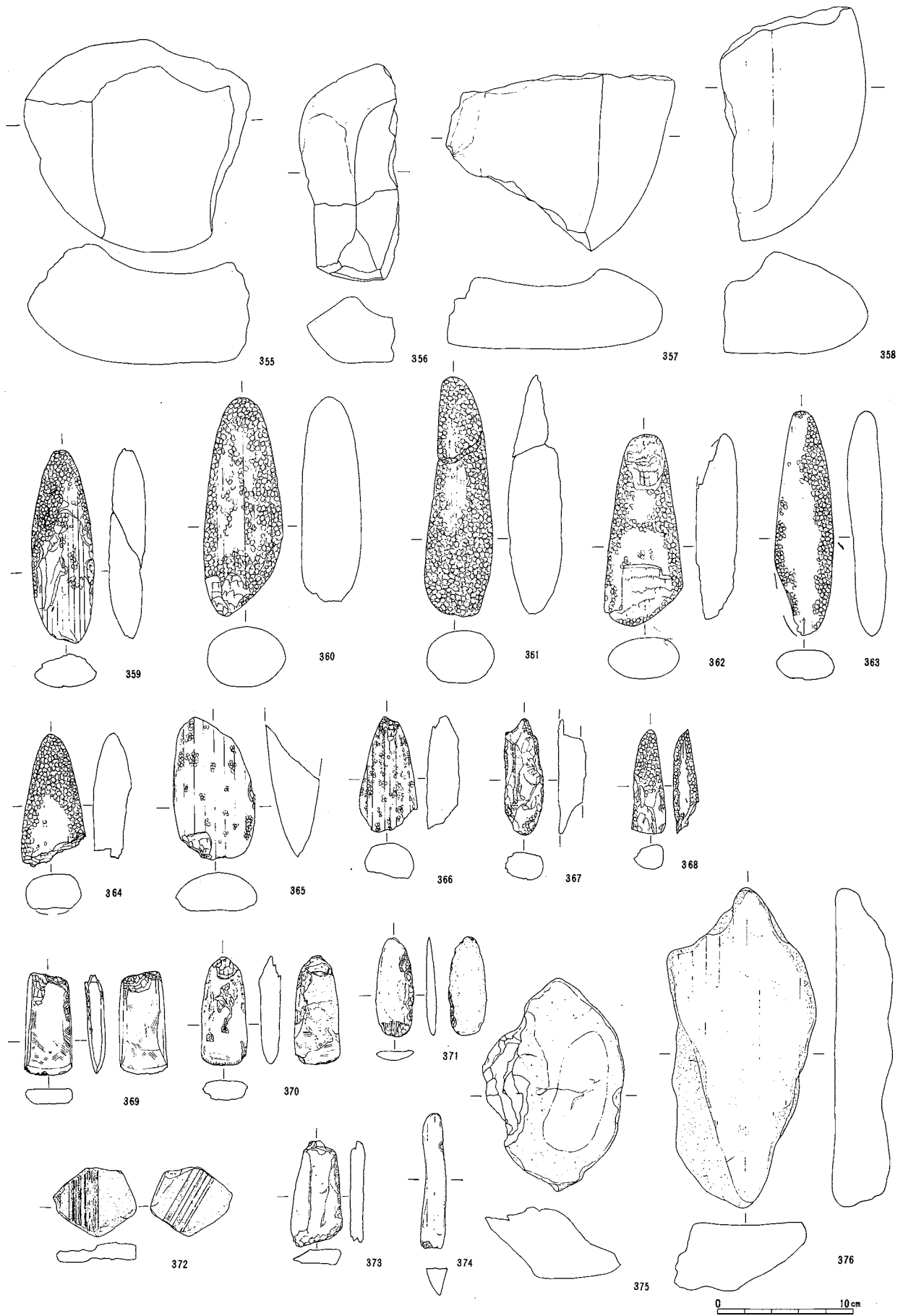


図48 頭殿沢遺跡石器実測図（石皿・乳棒状磨製石斧・砥石）

土製円板

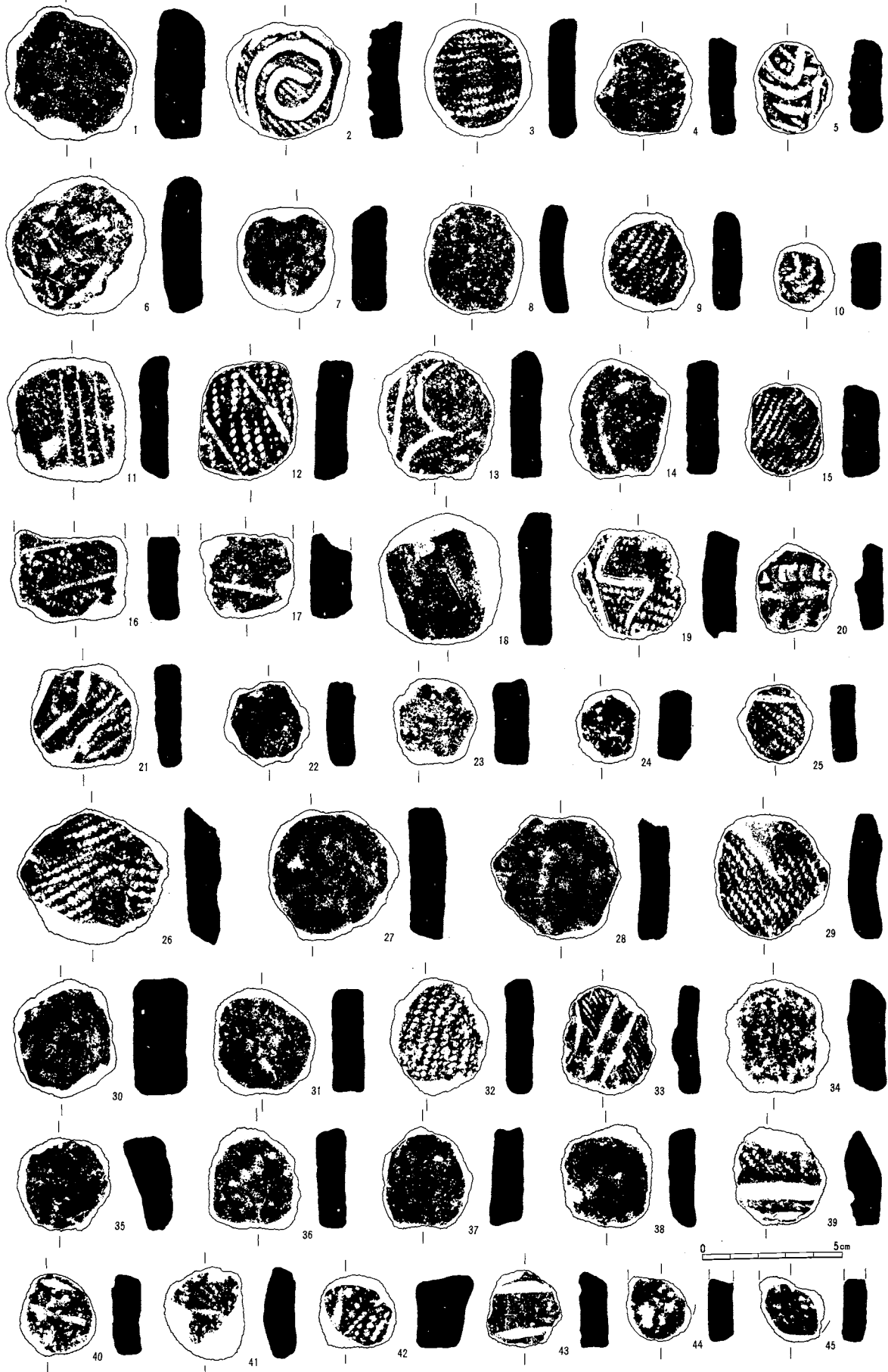


图49 頭殿沢遺跡土製品拓影图(土製円板)

表3 頭殿沢遺跡土壌一覽表

A…円形 B…楕円形 C…方形 D…三角形 E…不整形 ()の数字は遺物数
 a…たらい状 b…有ビット c…二段底 d…摺鉢状 打斧…打製石斧 磨斧…磨製石斧 横刃…横刃型石器
 ド…土壇 RM…ロームマウンド 深…深鉢 浅…浅鉢 片…土器片 中期中…中期中頭 中期中…中期中葉

土壌 番号	挿図 番号	形 態		大 小 (cm)			状 態	出 土 遺 物	土器図番号	時 期
		平面	断面	長軸	短軸	深さ				
2	既報告			440	330	120	RM	土師器(1)		平安時代
3	既報告			112	96	31	火葬墓	土師器(1) 凹石(図344)		平安時代
4		A	d	102	94	30	含礫ローム内に 堀りこまれる			
5		C	a	142	122	35	礫多く混入			
6	19-8	B	b	115	68	34	内部にビットあり			
7		B	a	182	120	31		猪沢浅片(1) ド9・23と同一個体	262	中期中葉
8		B	a	108	72	35	上面に平石	猪沢浅片(2) 九兵衛II深片II深片(1)	427・428	中期中葉
9		B	a	162	136	21	内部に礫多	九兵衛II深片II深片(1) 猪沢浅片(1)	429	中期中葉
10		B	a	148	113	30	ド9を切る			
11		B	d	113	75	44	ド17を切る 東側一段浅い	横刃(図203)		
12		A	b	188	184	47	ビットあり 木炭含む	九兵衛II深片(1) 平出3A深(1) 猪沢深片(1)		中期中葉
17		B	a	-	70	20	ド11に切られる			
18	19-6	B	b	122	102	23		九兵衛II深片(1)	430・431	中期中頭
19		B	d	118	97	36		九兵衛II深片(3)	432~434	中期中頭
20		B	d	-	107	23	農道にかかる 土器密着して出土	九兵衛II深片(2)	435・436	中期中頭
22	19-4	B	d	143	123	22	底面に平石 木炭含む			
23		A	a	105	92	17		猪沢浅片(1)ド7・9と接合	437・262	中期中葉
24		B	a	147	118	29				
26		A	d	95	88	17				
27		A	c	133	127	26		九兵衛II深片(9)	438・439	中期中頭
28	19-12	A	c	244	208	25	大形のわりに主要部浅い 木炭含む	九兵衛II深片(4) 石皿片(1)	440	中期中頭
29		B	a	100	75	16	木炭含む	九兵衛II深片(1)	441	中期中頭
30		B	d	120	110	29	木炭含む			
33		A	d	105	97	24	木炭含む			
35		B	a	180	130	22	木炭含む 覆土黒土			
37		A	d	285	275	46	RM	九兵衛II深片(3) 猪沢深片(1)	442	中期中葉
40		A	a	95	93	15	底面に平石 木炭含む			
47		B	a	119	87	11	大小の礫多			
49		A	d	154	143	28	西側に深い黒土 上面に平石	九兵衛片(1) 中期中片(1)		中期中葉
51		B	I	75	75	15	上面に自然石 木炭含む	九兵衛II深片(1) 五領台II浅片(1)	443~445	中期中頭
52		A	a	50	50	20	木炭含む 底面堅い	九兵衛II深片(2) 土師器片(1)		平安時代
53		A	a	75	75	15	上面に自然石、木炭含む			
54	19-3	A	a	80	80	10	底面に自然石			
55		B	a	200	125	11	ド59を切り ド60に 切られる	中期中深片(1) 猪沢深片(1) 打斧(図158)	446	中期中葉
56		A	a	170	170	35	ド66に切られる 底面に自然石	九兵衛II深片(5) 土製円板(図24)	447・448	中期中頭
57	19-5	B	c	160	100	34	中央大きく落ちこむ	九兵衛II深片(1) 平出3A深片(1) 船元II深片(1) 打斧(図158)	449	中期中葉
58		B	c	125	100	29	西側に深く落ちこむ	九兵衛II深片(1) 東海系深片(1) 打斧(2)	450・221	中期中頭
59		B	a	150	100	40	ド55・60との切合あり			
60		B	a	140	85	28	ド55・59に切られる			
61		B	a	85	75	16	縁部に炭化材あり			
62		B	d	100	70	17	底面に平石	打斧(1)		
63		B	d	80	60	15	上面に自然石			
64		A	d	65	65	22	底は小さく平			
66		A	a	100	100	12	ド56との切合い			
67		B	d	80	60	18				
68		B	a	110	80	22	南壁はゆるやかに傾斜	土製円板(1)(図2)		
69		B	a	100	70	18	上面に自然石	猪沢深片(1)	451	中期中葉
70		B	a	105	70	17	上面に自然石多	中期中土器把手(1)	452	中期中頭
71		B	a	90	65	29				
86		B	a	130	88	23		五領台II浅片(1) 九兵衛II深片(2) 堀ノ内 I深片(1) 打斧(1)(図139) 横刃(図201)	453・454	後期中頭
87		B	a	-	135	24	ド88を切っている			
88		B	a	-	75	31	南端道路にかかる		455・456	
92		A	a	70	70	14		九兵衛II深片(2)		中期中頭
93		B	d	110	80	20	壁軟弱			
94		B	a	105	88	22				
97		B	d	110	70	20				
98		A	a	80	80	20	ド99に切られる 底面凹凸			
99		A	a	80	80	15	ド98を切りド95に切られる			
100		E	a	270	265	26	底面南東側へ傾斜 上面に平石	九兵衛I深片(6) 平出3A深片(1) 横刃(図240)	457	中期中葉

土壌 番号	挿図 番号	形 態		大 小 (cm)			状 態	出 土 遺 物	土器図番号	時 期
		平面	断面	長軸	短軸	深さ				
101		B	a	114	90	18				
102		B	a	210	—	21	3住を切る、木炭を含む	九兵衛II深片(2) 平出3A深片(2) 打斧(図175) 横刃(図216)		中期中葉
116		B	c	128	86	32		中期初深片(1)		中期初頭
118		B	a	150	145	10	内部に石(3)あり	凹石(図319) 打斧(1)(図161)		
122		E	a	267	102	27	二・三の土壌の集合か	中期中浅片(1) 九兵衛II深片(1)		中期中葉
123		B	a	88	78	12	木炭含む	中期初浅片(1)		中期初頭
124		A	d	78	74	22		九兵衛II深片(1) 打斧(1)	460・461	中期初頭
128		B	a	105	83	24		九兵衛II深片(8)	458・459	中期初頭
130		B	a	118	104	19		中期初片(1)		中期初頭
131		B	a	100	80	28	炭化物含む	九兵衛II深片(10)	464・465・ 469	中期初頭
132		E	d	140	130	38	ト133・191・192を切る	九兵衛II深片(2)	470	中期初頭
133		B	a	90	80	16	ト132に切られる	九兵衛II深片(9)		中期初頭
134		E	d	400	320	30	RM	九兵衛II深片(2) 中期中土器底片(1)	471・472	中期中葉
135		B	a	110	78	15		中期初深片(1)	473	中期初頭
138		B	a	70	60	16				
139		D	d	375	295	115	RM	九兵衛II深片(2) 浅片(1) 打斧(1)	474~476	中期初頭
140		E	a	310	127	34	底面軟弱 木炭多量含む	平出3A深片(1)	477	中期中葉
141		E	d	123	80	39	ト150に切られる 土器密着して出土	九兵衛II深片(8) 平出3A深片(1) 後期深片 (1)		後期初頭
143		E	d	350	235	60	RM	九兵衛II深片(2) 平出3A深片(1)土製円板(図10)	478・479	中期中葉
144		B	b	105	82	51		九兵衛II深片・中期中深片(10) ビエス・エスキーユ		中期中葉
148		B	d	90	62	25				
150		E	d	200	120	53	ト141を切る 底部袋状となる			
157		B	d	75	70	26				
159		B	a	114	86	23		打斧(図170)		
160		B	a	152	90	27	底面凹凸している			
161		B	a	80	60	13				
166		B	a	121	89	14	上面に平石	中期初頭深片(1)		中期初頭
167		B	a	95	65	15		九兵衛II深片(2)		中期初頭
173		B	c	102	80	18	底面凹凸している		480・481	
174		B	a	120	96	32		九兵衛II深片(1) 横刃(図174)	482	中期初頭
175		B	a	88	67	29				
177		A	a	120	105	17				
178		D	d	112	100	24				
182		B	a	—	190	33	4住に切られる	九兵衛II深完形(1) 横刃(図200)	198・483	中期初頭
184		B	a	118	90	32	内部に礫含む	九兵衛II片(多) 敲打器(図250) スクレーパー(図65)	484~503 199・202	中期初頭
185		B	a	123	73	22	内部に土器片多	九兵衛II片(多) 打斧(1)(図142) 土製円板(図27) 石錐(図49)	504~508 199	中期初頭
186		A	d	108	90	36		中期初頭片(1)		中期初頭
189	19-9	E	d	85	—	45	4住を切る	九兵衛II深片(5) 新道式完形(1) 石錐(図34)	263・569 510・509	中期中葉
190		A	a	90	84	17	後期土器覆土中に多く 混じる	九兵衛II深片(2)		中期初頭
191		B	a	114	—	28	ト132に切られる			
192		B	a	—	76	25	ト132に切られる			
193		B	d	550	410	122	RM 193を切る	押型文片(1) 九兵衛II深片(3)	511	中期初頭
194		E	d	—	260	60	RM 194に切られる	押型文片(1)		早 期
195		B	a	140	130	30		押型文片(1)		早 期
201		E	a	125	93	21				
209		B	a	80	66	16	ト210に切られる 平石			
210		B	a	88	62	7	ト209を切る	九兵衛II深片(3)	512	中期初頭
211		A	a	67	66	20		中期初土器片(2)		中期初頭
217	19-10	C	d	157	130	37	木炭含む	九兵衛II深片(4) 柴栗の炭化物	514・515	中期初頭
219		B	a	137	105	13	木炭含む			
220		B	a	98	77	13	覆土中に平石	九兵衛II深底部片(1)	516	中期初頭
225	19-2	B	a	80	70	21	底面に平石	中期初頭片(2)	517・518	中期初頭
228	20-14 図版10	B	d	268	210	155	RM 西側が深く落ちこむ	押型文片(1) 中期初浅片(1) 特殊磨石(図257)	519	中期初頭
229		B	a	110	87	26	含礫ロームに埋りこむ	中期初土器底片(1)		中期初頭
230		E	d	177	127	35	含礫ロームに埋りこむ			
231		E	d	375	350	70	RM 底面に礫多	押型文片(1)	520	早 期
232		B	a	110	71	22		押型文片(1) 早期無文片(1)		早 期
235	20-15 図版9	E	d	380	230	100	RM 攪乱あり	早期片(4) 中期初・中片(多) 打斧(図162) 土製円板(1)	521~523 525	中期中葉
237		E	d	420	278	75	RM 北側に深溝あり			
238		E	d	420	215	55	RM 南東に溝 木炭含む	押型文(2) 中期初片(4) 後期片(1) 磨石(図270)	524・526	後 期
239		B	a	141	114	17	東側の底面が深い	押型文片(3)		早 期

土壌 番号	挿図 番号	形 態		大 き さ (cm)			状 態	出 土 遺 物	土器図番号	時 期
		平面	断面	長軸	短軸	深さ				
240		E	a	167	103	24				
241		B	a	175	90	34				
243		B	a	96	83	18	内部に大石	格子目片(1) 磨石(図281・282)		中期初頭
244		B	a	124	77	14	内部に礫多	早期片(2)		早 期
245		B	a	108	95	22		早期片(多) 九兵衛深片(1)	526	中期初頭
246		B	a	185	150	33	木炭含む	押型文片(1) 早期織維片(1)		早 期
247		B	d	80	50	22	底面不定形	押型文片(1) 石鏃(1)		早 期
248		B	a	490	290	55	RM 内部に礫多	早期・中期・後期片(多)		後 期
250	19-1	D	a	83	75	17	浮いて平石	磨石 石鏃(図23) 土製円板(1)		
251		B	a	90	65	22	ト252を切る	五領台浅片(1) 九兵衛II深片(1) 平出3A深片(4)	527~530	中期中葉
252		B	a	160	130	19	底面軟弱	中期初頭深片(1)・浅完形(1)	531・201	中期初頭
253		B	c	100	85	18	東側が深く落ちこむ			
254		B	a	80	60	16				
255		B	a	80	70	15				
256		B	a	115	80	20		九兵衛II深片(4)		中期初頭
257		B	b	130	110	20	東隅にビット 炭化物片少量含む			
258		E	a	105	90	15	内部に自然石			
259		B	a	60	45	17				
260		A	a	35	35	25				
261		B	a	120	90	20	覆土に大きな土塊			
262		B	a	160	105	23	木炭含む 底面に焼石	打斧(1)		
263		B	a	130	90	19	ト265を切る 木炭片少量含む			
264		B	a	80	60	16				
265		B	a	95	70	18	ト263に切られる			
266		B	a	110	70	10	木炭少量含む			
267		A	a	150	150	13	底面に自然石			
268		B	b	130	80	21	南側にビット	九兵衛II浅片(1) 深片(1) 猪沢深片(1)	532~534 265	中期中葉
269		B	a	130	80	21	木炭含む	九兵衛II深片(1)	535	中期初頭
270		A	a	50	50	21	ト271を切る			
271		A	a	150	150	22	ト270に切られる			
272		B	a	85	85	23				
273		A	a	100	85	18				
274		B	a	150	130	16				
275		B	a	100	80	21	木炭少量含む			
276		B	a	110	60	24				
277		B	a	160	95	13		磨石(図285)		
278		B	a	100	85	16		打斧(1) 磨斧(図364)		
279		A	a	85	85	24		横刃(図231)		
280		A	a	70	70	24	木炭少量含む	凹石(1)		
281		A	a	85	85	31		九兵衛II深片(6)	536・537	中期初頭
283	19-7	A	b	80	80	30	木炭片少量含む			
284		C	a	115	105	35	木炭片少量含む 底面堅い			
285		A	a	95	95	24	木炭片多量含む			
286		A	d	115	115	29	木炭片少量含む			
287		B	a	100	80	16	壁軟弱底面堅い	九兵衛I深片(1)	202	中期初頭
290		B	a	75	65	20		石匙(1)		
291	19-3	A	c	115	115	150	中央に柱穴状ビット 焼土あり			
292		B	a	100	70	22	木炭片多量含む			
293		B	d	80	70	22	底面凹凸あり			
294		C	a	105	70	15	底面に大石(2)			
295		B	a	90	75	23	木炭片含む			
300	20-16	B	d	630	550	115	RM	早期片(6) 九兵衛II深片(1)	539	後 期
301	20-17 図版9	B	d	580	450	100	RM 礫多量混入 ビット(4)	後期片(1) 打斧(図171) 土製円板図(図12)		
302		B	d	180	100	90	RM 礫多	早期片(6) 九兵衛II深片(2)	540~543	後 期
304		B	d	215	186	61	内部に礫多 底面に石(1)	平出3A深片(1)		中期中葉
305	図版10	B	d	183	120	38	木炭片含む			
306		A	d	95	80	21	木炭片含む			
307		B	a	145	90	23		磨石(1)		
308		B	d	150	110	34	底面凹凸あり			
309		B	c	125	95	41	底面凹凸あり			
310		B	a	110	95	20				
311		B	d	180	80	41	壁傾斜する			
312		B	a	170	145	21				
314		B	d	86	76	22				

土壌 番号	挿図 番号	形 態		大 き さ (cm)			状 態	出 土 遺 物	土器図番号	時 期
		平面	断面	長軸	短軸	深さ				
316	19-11 図版10	C	a	130	115	21				
317		B	b	150	120	101				
319		B	a	65	58	17	土器底面に密着して出土	九兵衛II深完形(1) 破片(3) 土製円板(図25)	205・206 544・545	中期初頭
320		B	d	280	275	70	RM	沢式片(1) 九兵衛II深片(4)	546~550	中期初頭
321		B	a	83	67	27				
322		B	a	97	53	24				
323		B	a	97	50	23		早期繊維片(1) 中期片(1)		中 期
325		B	d	415	310	90	RM	九兵衛I・II片(7) 平出3A片(1) 打斧(図150) 凹石(図324) ビエス・エスキーユ(図87)	551~557	中期初頭
326A		B	d	380	—	50	RM Bを切る	中期初片(1)		中期初頭
326B		B	d	—	265	28	RM Aに切られる			
327		B	d	87	75	25		中期初片		中期初頭
331	B	a	110	85	21					
333	B	a	100	80	23	西側の底部が深い				
340	B	d	75	55	52	底面に木炭堆積				
341	B	d	160	100	36	ド342を切る	中期中深片(1) 平出3A深片(3) 石棒打斧(1)		中期中葉	
342	A	a	100	—	32	ド341に切られる	中期無文深片(1)		中 期	
343	A	a	65	—	25	ド344に切られる 木炭含む				
344	A	d	110	110	39		中期初深片(1)		中期初頭	
345	B	a	130	85	36					
346	B	a	90	70	36					
347	A	d	100	100	28	木炭含む				
348	B	a	90	60	30	内部に自然石				
351	B	a	145	145	32	ド352を切る				
352	B	a	120	90	21	ド351に切られる				
353	A	a	95	95	24	ド354を切る 壁は傾斜する				
354	A	a	90	90	40	ド353に切られる 木炭含む				
355	A	a	95	95	26	壁傾斜する				
356	B	a	130	70	55					
357	B	a	80	55	21	木炭少量含む				
359	B	a	100	75	24					
363	B	a	150	90	22					
364	A	a	70	70	15					
366	B	a	100	90	22		九兵衛II深片(1)	558	中期初頭	
367	B	d	—	85	42	15住に切られる	九兵衛II深片(1)	559	中期初頭	
370	C	—	40	33	—					
371	B	—	74	58	—					
373	B	—	—	73	—		九兵衛II深片(1)	561	中期初頭	
374	図版12	B	—	—	65	—	九兵衛II深片(7)	562~566	中期初頭	
375	E	d	—	420	60	RM				
376	E	d	410	400	110	RM				
377	E	d	400	—	53	RM				
378	B	d	230	150	65					
379	E	d	350	—	50	RM				
380	E	d	380	—	65	RM	打 斧 (図 164) 九兵衛II深片(1)	567	中期初頭	
381	B	d	140	—	100	RM				
382	E	d	173	—	45	内部に礫				
383	B	a	60	55	30					
384	C	a	90	80	22		九兵衛II深片(1)	568	中期初頭	
385	図版12	B	d	260	175	45	早期片		早 期	
386	B	a	130	75	23					
387	B	a	93	85	28					
388	図版12	A	d	165	160	25	内部に礫多			
390	図版12	B	d	135	100	38				
391	B	d	140	88	38					
392	A	d	80	75	25					
393	A	a	80	70	18					
395	B	d	—	70	90					
396	B	a	55	35	32					
397	E	d	330	—	65	RM	九兵衛II深片(2)	573	中期初頭	
398	B	d	148	—	50	RM				
399	E	d	185	90	43	RM				

表4 頭殿沢遺跡縄文時代早期・前期土器観察表

番号	胎土	出土地点・成形・調整・整形手法の特徴	施文・施行手法の特徴	色調			備考
				外面	器肉	内面	
1	白色・白色不透明粒子を含む。	土壙238 内外面入念にナデ。外面に艶が認められる。	器面軟かい段階でR撚糸(時計廻り巻)を縦方向に回転施文。	黒色	暗赤灰色	赤褐色	
2	白色粒子・金雲母 ⁽¹⁾ を含む。	B B47 外面入念にタテナデ。内面剥落で不明。	器面軟かい段階でR撚糸(時計廻り巻)を縦方向に回転施文。	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
3	金雲母多量・白色不透明粒子を少量含む。	B F68 外面入念にナデ。艶が認められる。内面入念に指によるヨコナデ。	器面軟かい段階でL撚糸(時計廻り巻)を縦方向に回転施文。	明赤褐色	明赤褐色	暗赤褐色	外面、割れ口に煤が付着。
4	白色・白色不透明粒子を含む。	土壙238 内外面入念にヨコナデ。外面にぶい艶が認められる。	器面硬い段階でR撚糸(時計廻り巻)を縦方向に回転施文。	赤褐色	明赤褐色	赤黒色	内面に焦げが付着。
5	白色・白色不透明粒子を含む。	C N55 外面入念にナデ。ぶい艶が認められる。内面剥落で不明。	器面硬い段階でR撚糸4条巻を縦方向逆時計廻りに施文。	赤褐色	赤褐色	黒色	内面に焦げが付着。
6	石英・白色粒子を含む。	C T56 外面入念にナデ。艶が認められる。内面粗いナデ。	器面硬い段階でR撚糸(時計廻り巻)を縦方向に回転施文。	赤黒色	明赤褐色	明赤褐色	
7	金雲母・白色不透明粒子を含む。	C N55 外面入念にナデ。艶が認められる。内面粗いナデ。	器面硬い段階でR撚糸(時計廻り巻)を縦方向に回転施文。5同様逆時計廻りに施文。	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤灰色	外面に煤が付着。
8・9	金雲母・長石粒子を含む。	C D40・土壙248 外面入念にナデ。艶が認められる。内面粗いヨコナデ。	器面硬い段階でR撚糸を横方向に回転施文。	明赤褐色	明赤褐色	黒色	繊維を微量に含む。同一個体か。
10	白色粒子を含む。	A S47 外面施文で不明。内面入念にヨコナデ。	器面軟かい段階でR撚糸を横方向に回転施文。	明赤褐色	明赤褐色	明赤灰色	
11	白色粒子・金雲母を含む。	A M57 外面施文で不明。内面入念にヨコナデ。	器面軟かい段階でR撚糸施文。	褐灰色	褐灰色	灰褐色	繊維を微量に含む。
12	白色粒子を多量に含む。	A O46 外面施文で不明。内面入念にヨコナデ。	器面軟かい段階でR撚糸施文。原体部分沈線状に深くなる。	明赤褐色	明赤褐色	赤黒色	
13	金雲母・長石粒子を含む。	土壙248 外面粗いナデ。内面指押さへの指頭痕跡を残す。指によるナデ。外内とも小さな凹凸あり。	器面硬い段階でL撚糸施文。	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	繊維を微量に含む。
14	長石・白色粒子を含む。	A O47 外面施文で不明。内面粗いナデ。積み上げ痕がみられる。	器面軟かい段階でR撚糸施文。	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	内面に焦げが付着。
15	長石・白色粒子・金雲母を含む。	A S47 外面施文で不明。内面入念にヨコナデ。	器面軟かい段階でR撚糸施文。施文の先後関係は底部から胴部へ行っている。	橙色	橙色	橙色	撚糸施文後ナゾっている。
16	金雲母・白色・不透明粒子を多量に含む。	B B51 内外面粗いヨコナデ。口唇部他より入念にヨコナデ。	器面軟かい段階で太い原体を用い、横方向に施文。原体L R。	褐灰色	褐灰色	褐灰色	
17	白色不透明粒子を含む。	土壙231 外面施文で不明。内面硬い段階で粗いヨコナデ。	器面軟かい段階で撚りのあまい原体Rを横方向に施文。	褐灰色	褐灰色	褐灰色	焼成、色調等16に近似する。
18	金雲母を多量に含む。	B G67 内外面施文で不明。両面とも艶が認められる。器面硬い段階で艶出しを行っている。	原体R Lを内外面、口唇部に横方向に施文。	赤黒色	赤黒色	暗赤褐色	焼成は良好堅緻である。

番号	胎土	出土地点・成形・調整・整形手法の特徴	施文・施行手法の特徴	色調			備考
				外面	器肉	内面	
19	石英・長石・白色不透明粒子を多量に含む。	C Q60 外面にふい艶が認められる。内面入念にヨコナデ。	原体LRを左方向へ斜位回転施文。	赤黒色	赤黒色	暗赤褐色	外面に煤が付着。
20	金雲母・白色不透明粒子を含む。	A Y47 外面施文で不明。内面硬い段階でヨコナデ。	原体LRをBケース時計廻り施文。	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
21	長石粒子を多量に含む。	土壙228 内外面入念にナデ。内面ヨコナデ。	原体LRを縦方向に施文。	明赤褐色	明赤褐色	赤黒色	22と同一個体か。
22	花崗岩碎片を多量に含む。	CH56 外面入念にナデ。内面粗いヨコナデ。	原体LRを縦方向に施文。	赤褐色	赤褐色	赤褐色	焼成・色調施文方法が21と近似。
23	白色不透明粒子を含む。	土壙248 内外面粗いナデ。内面ヨコナデ。内面小さな凹凸がみられる。	原体LRを左方向へ斜位回転。	明赤褐色	明赤褐色	暗赤灰色	
24	白色不透明粒子を含む。	C Q59 内外面とも入念なナデ。内面ヨコナデ。	原体LRを縦方向に施文。	褐色	黒色	黒色	19に胎土、焼成、色調が似る。
25 32	黒鉛・白色粒子を含む。	CD53、CE55、BR37、土壙320、CA54、BA59 内外面入念にヨコナデ。32は器面硬い段階でタテナデ(ケズリ?)を行っている。内面艶が認められる。	原体は器面が硬い段階で施文している。原体山形の反復が小破片で確認できない。単位不明。	灰色	暗灰色	暗灰色	沢式土器を一括して扱った。
33 41	砂・白色不透明粒子を含む。	CB47、BJ53、YY54、土壙139、土壙231、2号住床面 内外面とも入念にナデ。	殆ど器面の硬い段階で、原体を施文する。33・34は原体二山で反復する。2単位。	褐灰色 赤褐色	褐灰色	褐灰色 赤褐色	樋沢式土器を一括して扱った。
42 91	石英粒子を多量に含む。	52・54・55・57・59、61~63、67~69、73・75・79・80・87・91 外面施文で不明。内面粗いヨコナデ。小さな凹凸がみられる。	胎土に基準をおいて分類したもので、個々により違う。総体としてみれば、器面が軟かい段階で施文している。確認できる原体の反復数。4単位。	明赤褐色 赤黒色	明赤褐色 赤黒色	明赤褐色 赤黒色	立野式土器を一括して扱った。
44 48 50	金雲母を多量に含む。	CT56・CS47・CL54 内外面とも入念にヨコナデ。44・48は外面に艶が認められる。	器面軟かい段階で施文。44は原体縦帯施文後、指でナゾリ無文部を作っている。	赤黒色 明赤褐色	赤黒色 赤褐色	赤黒色 黒色	
	花崗岩碎片を多量に含む。	42・43・45~47・49・51・56・58~60・64・74・78・81・84・90 外面は入念にナデられ平滑。内面は粗いヨコナデが行われ、小さな凹凸がみられる。	原体は細目の格子目を用いるもののみである。格子目以外の原体は、僅か5片である。格子目は器面硬い段階で施文している。	赤褐色 暗赤褐色	褐灰色 赤褐色	暗赤褐色 黒褐色	胎土は21・22に酷似する。42・43・51の外面に煤が付着。
	花崗岩碎片を含む。	70・72・77・82・83・85・88・89 内外面とも入念にナデ。	原体は不定形に印刻したものをを用いている。原体の反復はつかめない。軟かい段階で施文していると思われる。	赤褐色 黒褐色	赤褐色 黒褐色	黒褐色	第V群4類のもののみが含まれる。
92	白色不透明粒子(長石)を含む。	CC55 内外面とも入念にナデ。内面ヨコナデ平滑である。	縦方向に施文している。	灰褐色	灰褐色	灰褐色	繊維を含む可能性がある。
93	金雲母・石英粒子を多量に含む。	不明Z 内外面とも入念にナデ。内面ヨコナデ。外面光沢をもつ(研磨している可能性あり)。	棒状工具による平行沈線→貝殻腹縁で区画内充填。	暗赤褐色	黒褐色	褐色	断面サンドイッチ状になる ²⁾ 。
94	石英・白色粒子を多量に含む。	BU41 外面粗いヨコナデ。内面器面が硬い段階で粗いヨコナデ(ケズリの可能性あり)。	器面硬い段階で、貝殻腹縁をねかせて施文している。	橙色	黒褐色	褐灰色	繊維混入不明。
95	石英・白色粒子を多量に含む。	15号住 内外面入念にヨコナデ。口唇部荒れていて不明。外面にふい艶が認められる。	棒状工具による沈線。口辺部一周→平行沈線→貝殻腹縁で区画内充填。	赤黒色	黒褐色	褐灰色	断面サンドイッチ状。外面に煤が付着。

番号	胎土	出土地点・成形・調整・整形手の特徴	施文・施行手の特徴	色調			備考
				外面	器肉	内面	
96	白色・白色不透明粒子を含む。	CL41 外面ヨコナデ。内面粗いヨコナデ。	棒状工具による沈線。下端区画→格子目沈線(Bケース) ⁽⁹⁾ 。	褐色	褐灰色	赤褐色	断面サンド状。繊維少量を含む。
97	白色不透明粒子を含む。	CB56 内外面とも入念なヨコナデ。内面器面が硬い段階でヨコナデ。口唇部入念なナデ。	半截竹管状工具の腹部を使用、「へ」の字状に左→右へ施文。器面硬い段階で施文している。	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	繊維混入不明。
98	白色不透明粒子を含む。	CC60 外面入念な調整。条痕状の浅い線がみえる。内面入念なナデ。口唇部入念なナデ。	外面硬い段階で条痕状のものを横方向に施文(調整?)。内面2本の平行沈線を引く。	褐色	褐色	褐色	
99	白色不透明粒子を含む。	CE55 外面ヨコナデ。内面入念にヨコナデ。	外面硬い段階で半截竹管状工具の腹部使用。「ハ」の字状に施文している。	明褐色	明褐色	明褐色	微量の繊維を混入する。
100	金雲母・白色不透明粒子を含む。	BC67 内外面入念にヨコナデ。外面器面硬い段階でヨコナデ。	半截竹管状工具の腹部使用。横方向の平行線としている。	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	内面に紐が焼けた痕跡がある。
101	白色不透明粒子を含む。	土壙248 外面入念なナデ。縦方向にナデ?て、にぶい艶を出している。内面荒れていて不明。	半截竹管状工具の腹部使用。下端単一沈線で区画→左から右下→右から左下へ施文。	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	微量の繊維を混入する。
102	金雲母・白色不透明粒子を多量に含む。	CC51 内外面とも器面硬い段階でヨコナデ。浅い条痕状のもの(98に同じ)を横方向に施している。	半截竹管状工具の腹部使用。右から左下へ施文。	赤褐色	黒褐色	褐色	99、100、102は同量の繊維混入。
103	赤色・白色・黒色微粒子を含む。	CC57 外面条痕により平滑にされている。にぶい艶が認められる。斜位。内面剥落で不明。	半截竹管状工具の腹部使用。工具を平行移動して施文している。	赤褐色	赤褐色	赤褐色	
104	金雲母・白色粒子を含む。	CA59 内外面入念にヨコナデ。外面浅い条痕状のものを横方向に施している。	鋭利な棒状工具による単一沈線を、器面硬い段階で平行に引いている。	赤褐色	赤褐色	褐色	繊維微量に混入する。
105	赤色・白色・黒色微粒子を含む。	CC56 外面入念にナデ。外面浅い条痕状のものを斜めに施している。内面硬い段階でヨコナデ。	半截竹管状工具の腹部使用。103と同様の施文方法。	黒褐色	褐色	暗赤褐色	103と同一個体と思われる。
106	白色粒子・金雲母を多量に含む。	CU59 外面粗いヨコナデ。小さな凹凸あり。内面ヨコナデ。平滑。	棒状工具による単沈線。深い沈線である。	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
107	白色粒子を多量に含む。	CJ39 内外面とも入念なナデ。外面クテナデ。内面ヨコナデ。	細い単沈線を器面硬い段階で格子目(Bケース)に施文。	灰褐色	灰褐色	灰褐色	外面に煤付着。
108 109	砂粒子を含む。	CR59、BY63 内外面入念にナデ。内面小さな凹凸がある。	貝殻腹縁を立てて右下方へ施文。硬い段階で施文している。	赤黒色	黒褐色	赤黒色	同一個体? 繊維共に少量含む。
110 113	白色粒子を含む。	BG38、AW36 外面条痕を斜位に施し平滑にしている。内面入念なナデ。	貝殻腹縁は108・109よりもねせて施文している。	明褐色	明褐色	明褐色	
114 122	白色不透明粒子を含む。	土壙248・CF48・CI50、土壙301、土壙231 内外面条痕を横方向に入念に施している。内面器面硬い段階で指によるヨコナデ。条痕のものは軟かい段階で横方向に平滑に施している。	貝殻腹縁を立てて右下方へ施文している。器面硬い段階で施文している。	赤褐色 赤黒色	褐色 黒褐色	赤褐色 赤黒色	少量の繊維を含有する。同一個体かは不明。122に煤が付着。
123	砂粒子を微量に含む。	CK40 内外面とも条痕で平滑にしている。両面ににぶい艶が認められる。	口唇部に貝殻腹縁を施している。	赤黒色	黒褐色	赤黒色	断面サンドイッチ状。
124	砂粒子を微量に含む。	CA42 外面条痕による入念に施している。内面小さな凹凸がみられる。口唇部粗いナデ。	口唇部に貝殻腹縁を施している。	赤黒色	褐灰色	褐色	

番号	胎土	出土地点・成形・調整・整形手法の特徴	施文・施行手法の特徴	色調			備考
				外面	器肉	内面	
125	白色不透明粒子を少量含む。	CK41 内外面とも粗いヨコナデ。小さは凹凸がある。口唇部入念にナデ。艶が認められる。	小突起が波状を成すと思われる。一旦平口縁にして貼りつけている。口唇部腹縁で施文している。	赤褐色	黒色	赤褐色	断面サンドイッチ状。
126	白色不透明粒子を少量含む。	土壙300 外面粗いニデ。内面入念なヨコナデ。口唇部にふい艶がある。内外面とも小さな凹凸がみられる。	口辺に2条、口唇部に腹縁を施文。連続的に施している。	赤褐色	黒色	明赤褐色	断面サンドイッチ状。
127	白色不透明粒子を含む。	CH41 内外面とも条痕を横方向に施している。内外面とも粗く小さい凹凸がある。	器面硬い段階で口唇部に貝殻腹縁を施している。	赤黒色	黒褐色	褐色	断面サンドイッチ状。
128	白色砂粒子を少量含む。	CF41 内外面とも条痕を横方向に施している。口唇部入念にヨコナデ。	先端の鋭利なもので刻んでいる。	褐色	黒褐色	暗褐色	
129	白色不透明粒子を少量含む。	CL39 内外面とも入念に条痕を施す。内外面の条痕は相異なる2種類を使い分けている。	貝殻腹縁か櫛歯状の工具のようなもので刻んでいる。	褐色	黒褐色	褐色	断面サンドイッチ状。
130 132	白色不透明粒子を少量含む。	CR45、CH42、CF40 外面斜位に条痕を施している。内面外面と同様の条痕を用いて横方向に粗く施している。殆ど指による横ナデをしている。凹凸がみられる。	貝殻腹縁を連続的に左から右へ施文している。	赤褐色	黒褐色	赤褐色	断面サンドイッチ状。
133	白色不透明粒子を少量含む。	CA42 内外面粗いヨコナデ。器面硬い段階で施している。	板状の工具を用いて連続的に刻んでいる。	橙色	黒褐色	黒褐色	
134	白色不透明粒子を含む。	AY46 内外面とも粗いヨコナデ。小さな凹凸がみられる。	指で左から右へ鋸歯状に小さな波状をつくっている。	明赤褐色	赤黒色	明赤褐色	断面サンドイッチ状。
135	白色不透明粒子を少量含む。	CD38 内外面とも器面乾燥後、ヘラケズリをしている。	板状の工具を用い、連続的に刻んでいる。	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	繊維含有は他に比べ少ない。
136	白色粒子を少量含む。	CD39・土壙235 外面繊維を多量に含み器膚はザラつくが入念にヨコナデ。内面は外面より繊維が沈んでいる。絡条体条痕を横方向に施している。	口唇部、口唇部直下に浅い刻みをもつ。器面全面に簡単なナデ→隆帯を貼り付け→沈線を引くと同時に隆帯裾部をナゾっている。	暗赤褐色 赤褐色	黒色	暗赤褐色 黒褐色	多量の繊維を含み完全燃焼していない繊維がある。
137	白色砂粒子を含む。	CD39 器膚はザラつくが、絡条体条痕を内外面横方向に施している。	無文と思われる。	黒褐色	黒褐色	黒褐色	繊維多量に含む。
138	長石粒子を含む。	CI39 外面硬い段階で条痕を縦方向に施文。内面粗いヨコナデ。	無文	明赤褐色	黒褐色	明赤褐色	
139	白色粒子を微量に含む。	CK41 外面ナデ後条痕を斜めに施文。内面粗いヨコナデと粗い条痕。	無文	暗赤褐色	黒色	赤褐色	断面サンドイッチ状。
140	金雲母・白色不透明粒子を含む。	AM57 外面硬い段階で条痕を斜めに施している。内面粗いヨコナデ。	無文	明赤褐色	明赤褐色	暗褐色	
141	白色粒子を含む。	CG41 外面ナデ後条痕を斜位に施している。内面横方向に条痕を施している。	無文	赤褐色	黒褐色	赤褐色	断面サンドイッチ状。
142	金雲母を含む。	Z 内外面粗いヨコナデ。	沈線→押し引き	赤褐色	黒褐色	赤褐色	繊維を少し含み断面サンドイッチ状。
143	長石・白色粒子を多量に含む。	CF48 外面細い条痕を横方向に施している。内面粗いヨコナデ。	無文	褐色	褐灰色	褐灰色	

番号	胎土	出土地点・成形・調整・整形手法の特徴	施文・施行手法の特徴	色調			備考
				外面	器肉	内面	
144	長石粒子を多量に含む。	C J 57 外面細い条痕で横方向に施している。内面硬い段階でヨコナデ。	無文	赤褐色	赤褐色	暗赤褐色	内面に焦げが付着。
145	白色粒子を含む。	C F 40 外面粗雑なナデ。凹凸がある。内面条痕を主に横方向に施している。	無文	明赤褐色	黒褐色	褐色	断面サンドイッチ状。
146	金雲母・白色不透明粒子を含む。	土壙385 外面ヨコナデ後斜位に条痕を施文。内面硬い段階でヨコナデ。内外面とも小さな凹凸がある。	無文	赤褐色	赤褐色	暗赤褐色	
147	白色粒子を少量含む。	C G 57 外面入念に条痕を斜位に施している。内面器膚荒れて不明。	無文	赤褐色	黒褐色	赤褐色	
148	白色粒子を少量含む。	C D 39 外面入念に条痕で横方向に施文。内面入念に条痕を施している。	無文	暗赤褐色	黒色	赤黒色	断面サンドイッチ状。
149 152 154 157 158	白色不透明粒子を含む。	C F 48 内外面条痕を横方向に入念に施している。内面の条痕が深い。内面ヨコナデ後条痕。	無文	赤褐色	赤褐色	黒褐色	
153	白色不透明粒子を含む。	C Q 59 外面浅い条痕を横方向に入念に施している。内面荒れていて不明。	無文	赤褐色	褐色	褐色	
155	白色不透明粒子を含む。	C F 48 内外面とも粗いナデを横方向に施している。	無文	赤褐色	褐色	褐色	
156	金雲母・白色不透明粒子を含む。	C F 48 器面硬い段階でヨコナデ。内外面とも砂粒が移動して擦痕状になっている。	無文	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	内面に焦げが付着。
159	長石粒子を多量に含む。	土壙300 外面硬い段階でヨコナデ。砂粒が移動して擦痕状を成す。	無文	赤褐色	赤褐色	暗赤褐色	器肉に堅果種子圧痕がある。
160	砂粒子を含む。	C F 48 内外面とも硬い段階でヨコナデ。砂粒が移動して擦痕状を成す。	無文	赤褐色	赤褐色	赤褐色	
161	白色不透明粒子を少量含む。	C R 59 内外面入念にナデられ平滑である。内面に指おさえの痕跡がある。	無文	明赤褐色	褐色	明赤褐色	
162	長石粒子を多量に含む。	C L 59 内外面とも入念なヨコナデ。ともに指により平滑である。	縄文2種類を用い、LR→RL→LR→RLの順序で下から上に横方向に施文している。	赤褐色	黒褐色	赤褐色	断面サンドイッチ状。
163 173	白色粒子を多量に含む。	内外面とも器面軟かい段階で絡条体条痕を上半は横方向、下半は縦方向に施している。	絡条体条痕を全面に施す→隆帯貼り付け→条痕を擦→隆帯下端沈線状にヨコナデしている。	橙色	黒褐色	褐灰色	断面サンドイッチ状。

註1 所謂金雲母で、火成岩に含まれている黒雲母と同種のものと思われるが、色調より便宜的に用いたものである。

註2 安孫子昭二氏は「平尾遺跡」の報文中で格子目沈線を引く方法について記しているが、文章と図が逆である。文章に従えば、AケースがBケースで、BケースがAケースである。

註3 特に繊維土器に多く認められるようで、外面から器肉、内面まで同一の色調であるものを完全燃焼した土器と呼ぶならば、これらは不完全燃焼のものと思われる。おそらく鬆がはい入るのを防ぐために、焼成時間を短くした結果と考えられる。

表5 頭殿沢遺跡縄文時代中期・後期主要土器一覧表

角押・角押文(幅mm)、三押・三角押文(A<、B、C、)、篋(A、B)

文様帯変化のあるもの上から第1文様帯①、胎土安山岩-A 1(含雲母) 2(無雲母)、花崗岩B チャット等特殊C

土器番号	出土地点	調内	整外	主たる文様特徴(施文具の特徴)	単位	胎土	色調	備考
174	5住	横ナ	横ナ	RL+単沈線内外ザラザラ	4	A ₁	赤褐	底全周
175	10住	横ナ	横ナ	RL+単沈線+三叉文突起2? A+B+A'+B'	4	A ₁	暗赤褐	胴全周
176	10住	横ナ	横ナ	無節R+単線 内面輪積み痕・煤付着	4	A ₁	赤褐	底半周
177	10住	横ナ	横ナ	RL+単沈線+交互刺突	-	A ₁	赤褐	実測部
178	10住	横ナ	横ナ	単沈線+LR+(時計廻り)内面剥落外面煤付着	4	A ₁	黒褐	実測部
179	10住	横ナ	横ナ	RL+単沈線+交互刺突	-	A ₂	茶褐	実測部
180	10住	横ミ	縦ミ		-	A ₁	赤褐	1/4
181	10住	横ミ	縦ミ		-	A ₂	茶褐	1/4
182	11住	横ナ	横ナ	RL+単沈線	4	A ₁	茶褐	1/4
183	12住	横ナ	横ナ	繊細なLR隆帯上から、後に下から指圧	-	A ₂	橙褐	実測部
184	12住	横ミ	縦ミ	RL(時計廻り)+単沈 体部外面削り痕	3	A ₁	赤褐	口縁1/4
185	12住	縦ナ	縦ナ	RL+半隆起線B字文 縄文原体2種類	4	A ₁	赤褐	実測部
186	14住	横ナ	横ナ	半隆起・平行沈+篋沈・RL 区画隆帯 竹管内面ナデ 外面煤付着	2	A ₂	赤褐	全周
187	14住	横ナ	横ナ	RL+半隆起・平行沈線 胴Y字文連続 外面再火熱のため黒褐	実測部	B	橙褐	実測部
188	14住	横ナ	横ナ	RL+半隆起線 外面煤付着	4	A ₁	暗褐	実測部
189	14住	横ナ	横ナ	RL 軟質	-	A ₁	赤褐	1/4
190	14住	ナ	横ナ	RL+単沈線+三角印刻 多量の砂粒含み器面ザラザラ	4	A ₁	赤褐	1/4
191	14住	横ナ	斜ナ	外面削り後ナデ 内面荒れる、外面煤付着	-	A ₁	褐灰	1/4
192	14住	横ミ	横ミ	連続爪形文 補修孔	-	A ₁	茶褐	実測部
193	14住	ミ	横ナ		-	A ₁	茶褐	1/4
194	15住	横ナ	ミ	区画隆帯+単沈線+RL 口縁2単位、胴4単位	-	A ₁	赤褐	口縁欠
195	15住	横ナ	ミ		-	A ₂	橙褐	1/4
196	15住	横ナ	縦ナ	結節LR 篋具によるナデ 輪積み痕 器面ザラザラ	-	A ₂	茶褐	全周
197	15住	横ナ	横ナ	連続爪形文+単沈線	4	A ₁	赤褐	実測部
198	±182	ナ		RL+単沈器面風化 土壌184と接合	-	A ₂	赤褐	一部欠
199	±184	横ナ	-	RL+単沈線 土壌185と接合	4	A ₁	暗赤褐	1/4
200	±184	斜ミ	縦ナ	RL+単沈線+交互刺突	-	A ₁	橙	1/4
201	±252	横ナ	縦ナ	RL(時計廻り)+連続爪形+刺突	4	A ₂	暗赤褐	実測部
202	±282	ナ	ナ	RL+半隆起線+篋切沈+三角印刻 土壌5・287と接合	-	B	赤褐	実測部
203	遺構外	横ナ	-	RL+半隆起線+背面押圧点 内面下部炭化物付着	-	B	赤褐	1/4
204	遺構外	横ナ	-	RL+単沈線 内面黒褐色	-	A ₁	赤褐	実測部
205	±319	横ミ	斜ナ	連続爪形RL+半隆起線+篋切沈線・楔形文 内面指圧痕	4	B	赤褐	1/4
206	±319	横ナ	-	RL+単沈線三角印刻 土壌311と接合	4	A ₁	赤褐	1/4
207	遺構外	斜ナ	-	LR+連続爪+半隆起線・結節状沈線	-	A ₁	赤褐	実測部
208	遺構外	ナ	横ミ	半隆起線 内面炭化物付着	-	A ₂	暗赤褐	1/4
209	遺構外	横ナ	-	RL+半隆起線+押圧爪形・三叉文	4	A ₁	赤褐	実測部
210	遺構外	横ナ	横ナ	隆帯+RL+半隆起線+爪形押圧文 A+B 内面ザラザラ	4	A ₁	暗赤褐	実測部
211	遺構外	横ナ	横ナ	半隆起線・結節状沈線+交互刺突・篋切沈 内面下部炭化物	-	B	明赤褐	実測部
212	遺構外	横ナ	横ナ	LR+平行沈線 内面下部炭化物	-	A ₁	暗赤褐	1/4
213	遺構外	横ナ	横ナ	LR+平行沈線+押圧点・三角印刻 土壌73・75で小片	4	C	赤褐	1/4
214	遺構外	横ナ	横ナ	連続爪形文 内面黒褐	4	B	橙褐	実測部
215	遺構外	横ナ	横ナ	連続爪形文	-	B	赤褐	1/4
216	遺構外	横ナ	横ナ	連続爪形+半隆起線+三叉文 隆帯貼付前に篋線で割付	4	B	橙褐	実測部
217	遺構外	横ナ	横ナ	連続爪形+押圧点	-	B	橙褐	実測部
218	遺構外	-	-	RL+三角印刻+連続爪形文	-	B	橙褐	実測部
219	遺構外	ナ		連続爪形・隆帯へは上から、後下から指圧 外面煤付着	-	B	暗赤褐	実測部
220	遺構外	横ナ	横ミ	LR+連続爪形文	-	A ₁	橙褐	1/4
221	遺構外	横ミ	横ミ	RL+連続爪形+半隆起線+刺突・篋切沈 土壌58で小片	-	C	橙褐	実測部
222	遺構外	横ミ	横ミ	RL+連続爪形+半隆起線+刺突・篋切沈 内面下半部斜篋ナデ	-	C	橙褐	実測部
223	遺構外	横ミ	横ミ	RL+連続爪形+半隆起線+刺突・篋切沈 外面煤付着	-	C	赤褐	実測部
224	遺構外	横ナ	ミ	隆帯巾広竹管内面ナデ後爪形+単沈線三叉文	-	A ₁	赤褐	実測部
225	遺構外	横ナ	ミ	内面器肉とも黒褐色	-	A ₁	底全周	
226	遺構外	ナ	篋削		-	A ₂	赤褐	1/4
227	遺構外	横ナ	横ナ	単沈線+下方からの押圧列点・口唇押圧文 外面煤付着	-	A ₁	暗赤褐	実測部

土器番号	出土地点	調内	整外	主たる文様特徴 (施文具の特徴)	単位	胎土	色調	備考
228	遺構外	横ナ	横ナ	無節R・O段他条自縛 (逆時計廻り) 内面底炭化物吸着	4	A ₁	赤褐	3/8
229	遺構外	横ナ	縦ナ	RL 炭化物付着	-	A ₁	暗赤褐	全周
230	遺構外	横ナ	縦ナ	内外指によるナデ+RL・口唇篋切 外面煤付着	-	A ₂	暗赤褐	実測部
232	遺構外	横ナ	横ナ	RL+単沈線+交互刺突	-	A ₂	暗赤褐	実測部
234	遺構外	斜ナ	縦ナ	RL+単沈線 種子痕あり (径6×4mm)	-	A ₂	赤褐	1/2
235	遺構外	横ナ	-	RL+単沈線+三角印刻文 内面荒れる、外面一部煤	-	A ₂	赤褐	3/8
236	遺構外	横ナ	横ナ	RL (時計廻り)+単沈線+三角印刻文 ②A+B+A'+B'	4	A ₁	暗赤褐	把手3欠
237	遺構外	横ナ	横ナ	RL	-	A ₁	暗赤褐	1/4
238	遺構外	ナ	横ナ	RL+単沈線+三角印刻文 口辺3/8欠 内面炭化物付着	4	A ₁	暗赤褐	半完
239	遺構外	横ナ	横ミ	内面黒色 器肉暗赤褐	-	A ₁	赤褐	1/4
240	遺構外	横ナ	横ミ	外面胴部斜篋ナデ 口縁やや光沢有 頸部あまい稜線	-	A ₁	赤褐	1/4
241	遺構外	横ナ	縦ナ	貧弱な隆帯・口縁入念なナデ 底内面炭化物付着	-	A ₂	赤褐	実測部
242	遺構外	横ナ	縦ナ	内面暗褐色 長石少量 金雲母多量含	-	A ₁	赤褐	1/4
243	遺構外	横ナ	ナ	内面黒褐色	-	A ₁	赤褐	1/2
244	遺構外	横ミ	横ミ	口唇下凹線+連続爪形文	-	A ₁	暗赤褐	実測部
245	遺構外	横ナ	横ナ	RL+単沈線+連続爪形・交互刺突	4	A ₁	赤褐	実測部
246	遺構外	横ミ	斜ミ	RL+単沈線	-	A ₁	赤褐	1/4
247	遺構外	横ミ	縦ミ	RL (逆時計廻り)+単沈線+押爪形文	-	A ₁	明赤褐	1/4
248	遺構外	横ミ	斜ナ	フの字貼付文+単沈線	-	A ₁	赤褐	実測部
249	遺構外	横ナ	横ナ		-	A ₁	暗赤褐	実測部
250	3住	横ナ	横削	隆帯にそいナデ、輪積み指圧痕 (部分)、砂粒移動痕、隆帯1	-	A ₁	赤褐	全周
251	3住	横ミ	横ミ	ナデ調整+ミガキ+連続爪形文+刺突・口唇押圧	-	A ₁	赤茶褐	実測部
252	4住	横ナ	横削	口縁は指圧後篋横ナデ、胴上部連続指圧痕 角押-3.5mm	-	A ₂	赤褐	底全周
253	4住	横ナ	横ナ	①A+B+A+B 角押-5mm 鍵状懸垂文下部は左から連続指圧	4	A ₂	橙褐	全周
254	4住	横ナ	横ナ	幅1cmの篋で調整、角押-4mm・5mm	4	A ₂	赤褐	1/4
255	4住	横ナ	横ナ	指圧→指ナデ 角押-3mm 口縁 炭化物付着	-	A ₂	茶褐	1/4
256	4住	-	横ミ	積み上げ痕 内面剥落	-	A ₂	赤褐	1/2
257	4住	横ナ	斜削	横角押+縦押圧・押引 角押-3mm	-	A ₂	赤褐	実測部
258	9住	横ナ	指圧	角押文+指圧列点・三角印刻 角押-3mm 底埋裏炉	-	A ₁	赤褐	底1/2
259	9住	横ナ	横ナ	角押-3mm 外面上部炭化物・胴下部横削り	4	A ₂	黒褐	全周
260	9住	横ナ	横ナ	平行沈線文	-	B	橙褐	1/2
261	9住	斜ナ	-	平行沈線文 炉内より2片、他はグリット出土	-	B	橙褐	実測部
262	土7	横ミ	横ミ	角押-4mm 器面ザラザラ 補修孔1ヶ	-	A ₂	暗赤褐	1/4
263	土189	横ミ	横削	角押文による区画内を三角押文A 施文 角押-4mm A+A+B+B	4	A ₁	明赤褐	一部欠
264	土289	横ナ	ナ	角押文+竹管先端刺突 角押-竹管5mm 橋状把手	-	A ₂	暗赤褐	実測部
265	土268	横ナ	指圧	口縁篋横ナデ痕顕著 中初浅鉢胎土に似る。	-	A ₁	暗赤褐	実測部
266	集石5	横ナ	横削	体部篋削り砂粒移動痕顕著、パミス含む	-	A ₂	赤褐	3/8
267	遺構外	横ナ	横ナ	角押文+刺突 角押-2mm 焼成良	-	A ₁	赤褐	
268	遺構外	横ナ	横削	体部削り後研磨 部分的に押引沈線+粗間隔交互刺突	4	A ₂	赤褐	実測部
269	遺構外	横ナ	斜ナ	角押文+・沈線+押圧 角押-3mm	-	A ₁	暗赤褐	1/8
270	遺構外	横ミ	横削	角押-3mm 肩部 紐線文 体部砂粒移動痕顕著	-	A ₂	赤褐	底全周
271	遺構外	横ミ	横ナ	連続爪形-6mm・竹管-5mm	-	A ₂	赤褐	1/6
272	遺構外	横ミ	指圧	連続圧痕・輪積み	-	A ₂	赤褐	1/6
273	9住	横ナ	横ナ	胴指圧痕 鈍角三押A-6mm・角押-3mm 口唇一部赤色塗彩	4	A ₂	暗赤褐橙	一部欠
274	遺構外	横ナ	指圧	角押文類似 深い爪形密施 原体-5・3mm 内面荒れる	-	A ₂	橙褐	実測部
275	遺構外	横ナ	縦削	篋押引文・縦隆帯篋押圧刻目 篋B-4mm 胴下砂粒移動痕	4	A ₂	赤褐	1/2
276	遺構外	横ミ	横ナ	三押B 砂粒移動痕顕著	4	A ₂	赤褐	1/2
277	遺構外	横ナ	横ナ	連続爪形-9mm 三角押文A ①A+3B ③A+B+A'+B'	4	A ₂	暗赤褐	4/5
278	遺構外	横ナ	横ナ	三押A	4	A ₂	赤褐	1/2
279	遺構外	縦ミ	横ナ	三押A 広狭原体同一か。入字状把手	4	A ₂	暗橙	全周
280	遺構外	横ナ	ミ	沈線区画+L 内面指圧痕 口縁 煤付着	-	A ₂	暗赤褐	実測部
281	遺構外	横ミ	横ミ	沈線区画+L+研磨 内外二次焼成?で荒れる。	-	A ₂	明赤褐	実測部
282	遺構外	-	ミ	8の字文+紐線文+縦沈線+曲線文+LR	-	A ₂	赤褐	3/8
283	遺構外	横ナ	ミ	A+5B 口縁突起2対 口縁内外面炭化物付着	6	A ₂	褐灰	3/4

表6 頭殿沢遺跡出土小形石器一覽表
石鏃

図番号	出土地点	現存計測値 (cm・g)				破損状況	形態分類
		長さ	幅	厚さ	重さ		
33	9号住居址No.35	2.50	(1.70)	0.45	(1.05)	逆刺一端破損	224π22
10	12号住居址No.63	2.25	(1.25)	0.35	(0.72)	同上	21322
9	12号住居址No.64	2.55	1.70	0.40	0.95		214π22
22	土壙142	2.30	1.45	0.30	0.90		324π51
34	土壙189	2.10	1.60	0.65	1.55		53276
23	土壙247	1.55	(1.45)	0.30	(0.38)	逆刺一端破損	32234
35	土壙248	1.30	1.20	0.25	0.34		524π76
16	土壙394埋土	1.90	1.45	0.25	0.58		224π12
1	1号住居址No.25	3.00	(1.50)	0.40	(0.50)	逆刺一端破損	214π22
45	1号住居址	2.45	1.25	0.55	1.36		00002
38	1号住居址西土器集中区	2.65	(1.80)	0.20	(0.83)	逆刺一端破損	32152
17	A C 52	2.95	1.60	0.40	1.52		314π14
	A L 62耕作土	2.20	(1.30)	0.50	(1.18)	逆刺一端破損	23322
2	A M 61	1.90	(1.40)	0.35	(0.62)	"	22322
40	A M 61落込黒	(1.75)	1.75	0.35	(1.20)	先端・茎欠損	6 Z Z 37
36	A N 58耕作土	1.70	1.50	0.40	0.85		424π65
3	A N 61 II層No.18	1.15	(1.30)	0.50	(1.05)	逆刺一端破損	324π53
42	A N 62 II層	1.60	1.28	0.40	0.83		324π11
14	A O 46	(2.40)	(1.35)	0.30	(0.60)	先端逆刺一端破損	2 Z 232
11	A O 60 II層耕作土No.4	1.75	1.40	0.40	0.48		31252
39	A P 61 No.27	(2.60)	1.75	0.50	(2.00)	茎欠損	62177
41	A Q 61 III層No.92	(1.20)	1.35	0.20	(0.33)	"	624π17
31	A Q 64 III層No.93	1.40	(1.85)	0.20	(0.58)	逆刺一端破損	33344
32	A R 63 III層	2.30	2.10	0.80	3.58		424π51
	A S 55	1.85	(1.00)	0.30	(0.43)	逆刺一端破損	31332
18	A S 61 III層No.75	1.50	1.10	0.25	0.33		324π14
	A U 41耕作土	(2.30)	(2.00)	0.65	(1.95)	胴～逆刺破損	Z Z Z Z
12	A W 61	1.95	(1.40)	0.50	(0.72)	逆刺一端破損	22252
25	A X 51耕作土	1.65	1.55	0.45	0.75		33351
4	A X 64耕作土	(2.40)	1.60	0.40	(1.04)	先端破損	2 Z 352
46	A X 64耕作土	2.20	(1.30)	0.40	(1.08)	逆刺一端破損	02052
24	A区表採取	2.40	1.80	0.30	1.20		31221
26	A Z	1.85	1.45	0.30	0.70		42314
	B A 40	(3.00)	(2.45)	0.35	(1.80)	逆刺破損	Z Z Z Z
5	B B 37	1.70	1.55	0.30	0.50		244π52
43	B E 62耕作土	2.75	(2.20)	0.25	(0.97)	逆刺一端破損	22244
27	B F 61 II層No.10	1.45	1.40	0.30	0.40		32334
	B F 63 No.14 I層	(1.75)	(1.3)	0.25	(0.55)	胴～逆刺破損	Z 13 Z Z
6	B G 61黒色土層No.83	1.95	1.20	0.20	0.26		21352
37	B H 59耕作土	2.10	1.95	0.35	1.26		434π75
8	B H 67 I層No.57	2.05	(1.45)	0.50	1.05	逆刺一端破損	234π32
	B J 59褐色土層No.96	2.05	1.10	0.20	0.28	胴～逆刺一端破損	Z 133 Z
13	B K 44耕作土	2.80	1.70	0.35	0.87		21323
19	B K 60 No.36	2.35	1.60	0.40	1.25		324π11
15	B K 60黒色土層	2.45	1.40	0.40	0.58		31322
	B L 59耕作土No.34	(2.15)	(1.40)	0.30	(0.75)	胴～逆刺欠損	Z 1 Z Z Z
20	B L 59黒褐色土層No.81	2.55	1.40	0.20	0.60		31322
44	B L 64耕作土	2.15	(1.80)	0.50	(1.16)	"	32342
21	B X 44黒褐色土層	2.75	1.40	0.45	1.26		314π11
28	B X 54褐色土層	2.40	2.00	0.45	1.52		42331
47	B X 58耕作土	(2.70)	(1.80)	0.40	(1.30)	逆刺破損	313 Z 2
	B X 58耕作土	(2.05)	(1.20)	0.35	(0.62)	胴～逆刺破損	Z 13 Z Z
7	C D 44黒褐色土層	1.65	1.30	0.30	0.40		42352
	C P 43	2.20	(1.45)	0.35	(0.96)	胴～逆刺一端破損	Z 24π6 Z
	C Z	2.15	(1.25)	0.45	(1.20)	逆刺一端破損	21332
30	表採	2.40	1.80	0.30	1.20		31221
29	Z	2.20	1.45	0.35	0.78		31331

石錐

図番号	出土地点	現在計測値 (cm・g)				破損状況
		長さ	幅	厚さ	重さ	
49	土壙185	3.80	1.45	0.35	0.78	先端のみ残存
50	A O 61No41	(2.15)	0.60	0.50	(0.60)	
52	A P 45褐色土	3.60	1.80	0.65	2.55	
53	A Q 63III層	2.90	1.65	0.70	2.13	
54	A R 60	4.25	1.50	0.85	4.14	
48	A R 64II層No3	2.20	1.55	0.90	2.95	
57	A S 50	3.25	1.25	0.90	3.25	
55	A V 59黒色土	4.05	1.40	0.75	2.96	
56	AW36No104	3.40	1.25	0.60	2.45	
58	AW44暗褐色土	(5.00)	1.55	0.65	(4.22)	
51	表採	(1.75)	0.70	0.50	(0.67)	

スクレイパー類

図番号	出土地点	形態分類	現存計測値 (cm・g)				破損状況
			長さ	幅	厚さ	重さ	
68	12号住居址No.9	樽指状エンド	2.70	2.20	0.90	5.35	両端破損
65	ト184	スクレイパー	2.10	2.20	0.85	4.50	
66	A O 62II層	"	1.85	1.60	0.50	1.60	
69	A R 62III層No.2	樽指状エンド	2.30	1.90	0.70	3.04	
61	B F 59漸移層No.86	サイド	3.30	(2.75)	0.90	7.53	
70	B U 49褐色土	スクレイパー	2.90	2.70	1.25	7.74	
63	C G 56	サイド	1.90	(5.30)	0.80	11.02	
	C J 39	"	3.35	(5.00)	1.35	19.60	
62	CM42	"	2.85	(6.60)	1.40	25.00	
67	C R 45	スクレイパー	2.60	2.45	1.00	5.55	
	C V 56耕作土	スクレイパー	1.95	1.90	0.6	2.10	
64	Z	サイド	2.15	(4.30)	0.85	11.74	

定形石器

図番号	出土地点	現在計測値 (cm・g)			
		長さ	幅	厚さ	重さ
74	14住	2.85	1.80	0.55	1.95
78	土壙235	2.85	1.35	0.60	2.15
77	A J 53	2.40	1.95	0.65	2.70
73	B C 68	2.70	1.70	0.70	2.65
71	B G 62No.85黒色土	2.15	1.75	0.45	1.50
72	B Z	1.55	1.05	0.45	0.65
75	C A-Z	2.40	2.30	0.60	2.85
76	C H-58	1.70	1.20	0.35	0.60

石匙

図番号	出土地点	現存計測値 (cm・g)			
		長さ	幅	厚さ	重さ
59	B D 65	1.85	5.40	0.65	7.75
60	C T 42	2.20	5.30	0.80	8.55

彫刻器類

図番号	出土地点	型式分類	現存計測値 (cm・g)				破損状況
			長さ	幅	厚さ	重さ	
	5住	彫刻器	2.25	2.10	0.85	3.75	
	9号住居址覆土	垂管根型	2.00	1.90	0.60	2.00	
	14住No.69	"	1.85	0.95	0.50	0.75	
	14号住居址	ピエス・エスキーユ	1.85	1.15	0.60	1.10	
	土壙144	ピエス・エスキーユ	2.70	1.10	0.70	1.60	
79	土壙288	管根型	2.65	0.95	0.70	1.30	
85	土壙325	ピエス・エスキーユ	2.85	1.90	0.80	3.65	
92	A H 51	彫刻器	2.00	1.95	1.10	3.40	
	A I 59	ピエス・エスキーユ	2.50	1.55	0.70	2.90	
	A J 59	コア型	2.10	1.25	1.00	2.60	
87	A J 69	ピエス・エスキーユ	2.65	2.20	1.10	6.90	
89	A O・A P 61褐色土	コア型	2.20	1.65	1.05	3.40	
	A P 56	彫刻器	2.15	2.30	0.75	3.35	
82	A S 48	垂管根型	3.25	1.55	0.55	2.55	
	A S 52耕作土	ピエス・エスキーユ	3.60	2.85	1.00	7.45	
80	A U 50	管根型	2.50	1.15	0.70	1.80	
90	A U 56	コア型	2.30	1.75	1.40	4.30	
86	A V 65耕作土	ピエス・エスキーユ	2.85	1.40	0.60	2.65	
	AW69	"	3.25	1.35	0.95	3.70	
	A X 62	コア型	2.60	1.40	1.20	3.50	
	B G 60II層	片端彫刻器	2.95	1.85	0.80	5.35	
81	B P 38	管根型	2.80	0.95	0.65	1.50	
83	B S 39	垂管根型	2.90	0.95	0.65	1.15	
88	B U 41	ピエス・エスキーユ	2.85	1.60	0.50	1.75	
	B Y 50(15号住居址)	"	(3.40)	2.05	(1.20)	6.65	
	B Y 54耕作土	コア型	1.90	2.00	0.65	2.40	
	C A 55黒褐色土	管根型	2.45	1.05	0.60	1.15	
	C B 47耕作土	垂管根型	2.55	1.45	0.75	2.70	
	C B 52	彫刻器	1.80	1.10	0.50	0.75	
	C I 54	片端彫刻器	4.90	2.55	1.00	12.60	
84	Z	垂管根型	2.55	0.95	0.80	1.30	
	Z	"	2.40	1.20	0.65	1.45	
91	Z	コア型	3.30	1.55	1.10	5.05	
	Z	片端彫刻器	3.65	2.35	0.70	7.40	

図

版



2. 遺跡近景
(BC区西側)



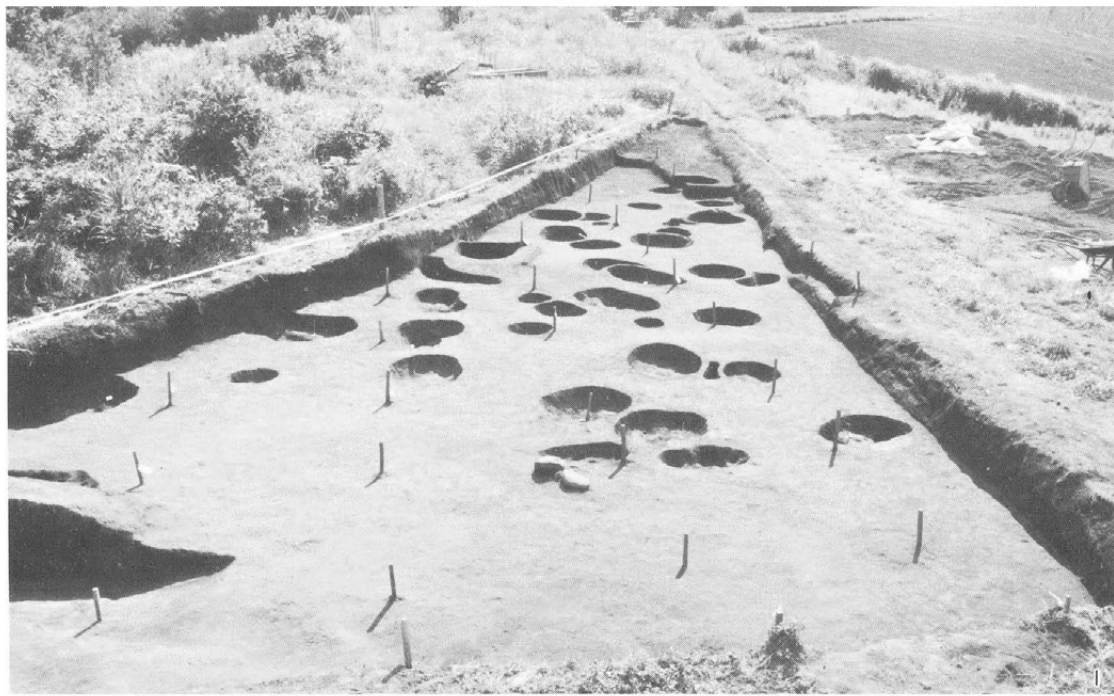
3. 遺跡近景
(BC区東側)





尾根頂上部近景

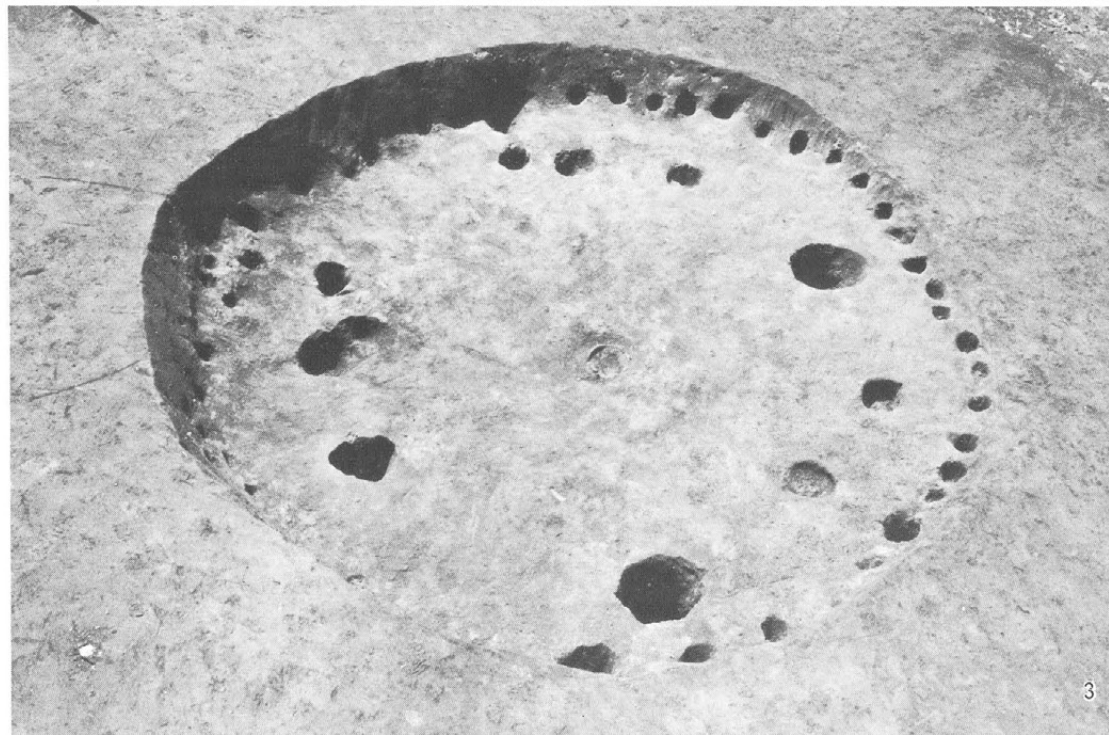
1. 農道取付部
近景



2. 早期土器集
中区



3. 3号住居址





1. 4号住居址



2. 5号住居址
(1)
炭化材出土
状態

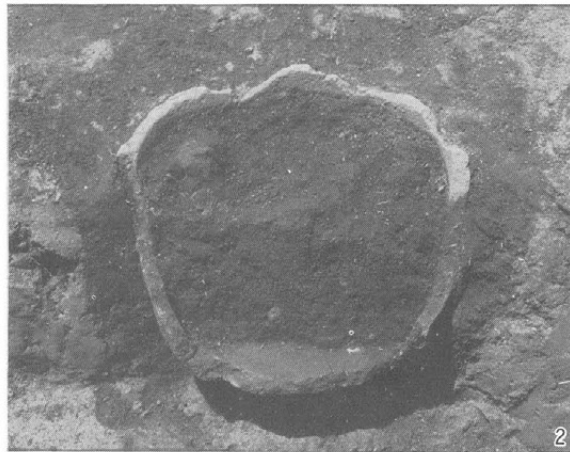


3. 5号住居址
(2)
精査終了後

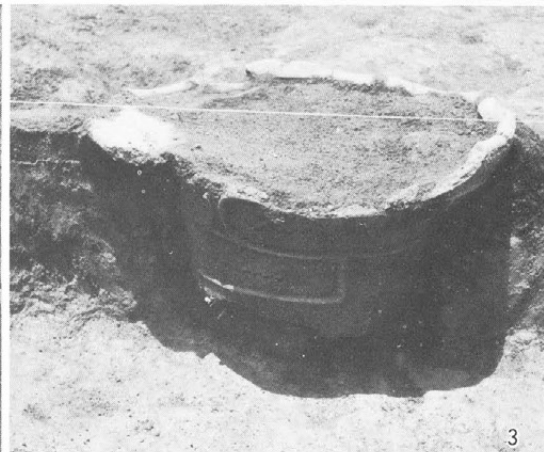
1. 10号住居址



2. 4号住居址
埋甕炉



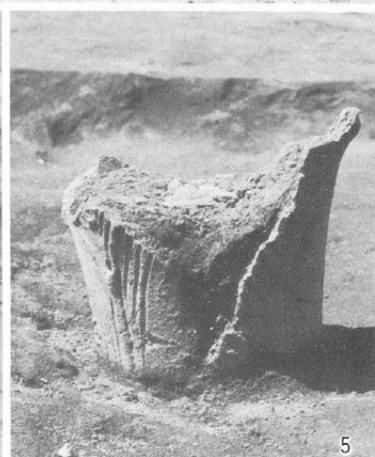
3. 3号住居址
埋甕炉



4. 12号住居址
埋甕炉



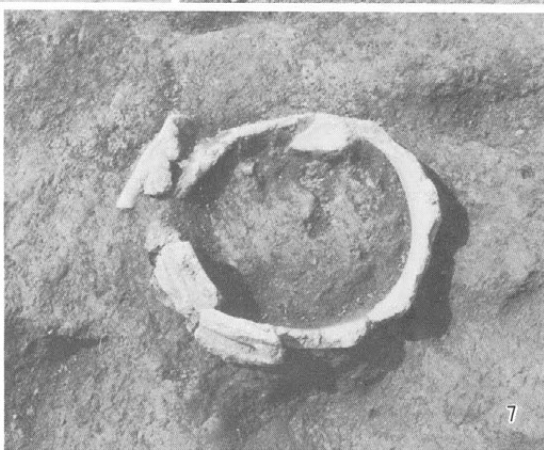
5. 10号住居址
埋甕炉



6. 14号住居址
埋甕炉

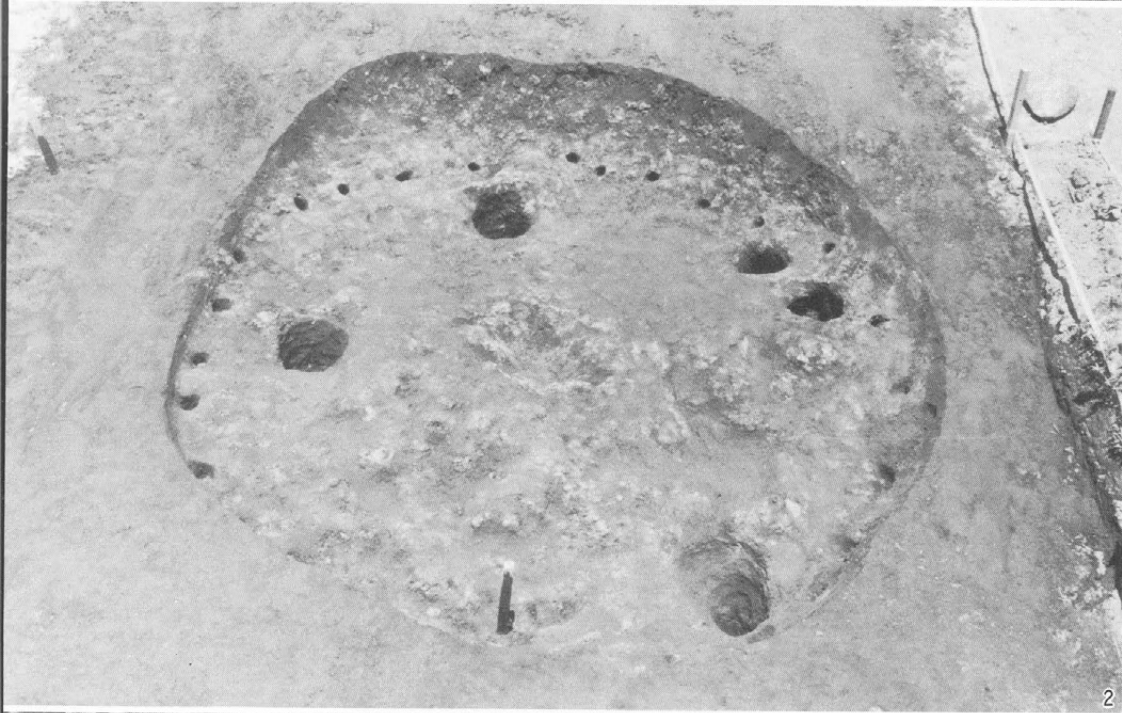


7. 15号住居址
埋甕炉





1. 9号住居址



2. 11号住居址

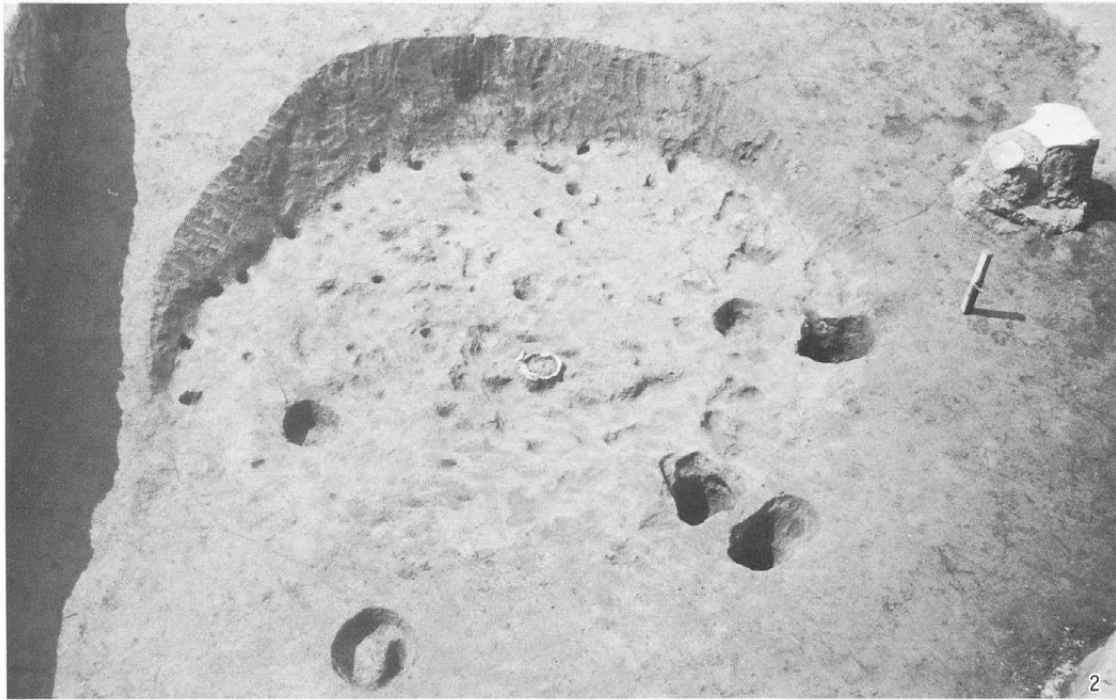


3. 12号住居址

1. 14号住居址



2. 15号住居址



3. 9号住居址
石囲炉(新)
と埋裏炉
(旧)





集石1.
1. 上面



2. 中間木炭出土面



3. 底面

1. 凹地のロー
ムマウンド
群



2. 土壇 235と
その周辺

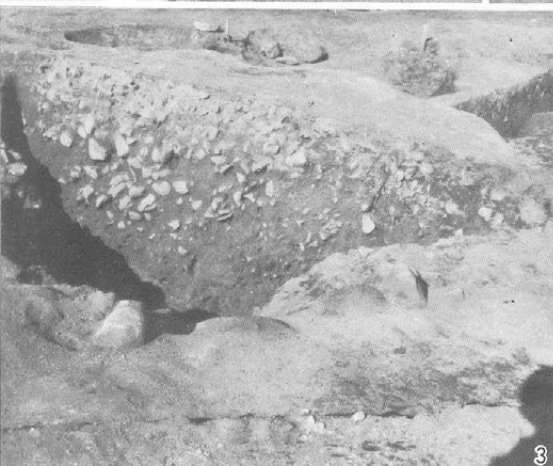


3. 土壇 301

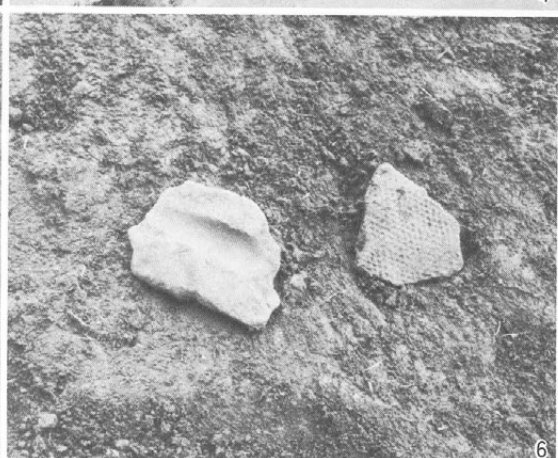
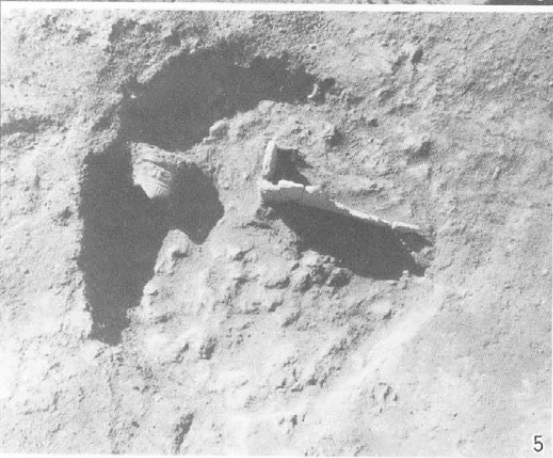




1. 集石 4
2. 集石 8



3. 土壇 228
4. 土壇 304



5. 土壇 319
6. 矢柄研磨器
と押型文土
器の出土状
態(C1-52)

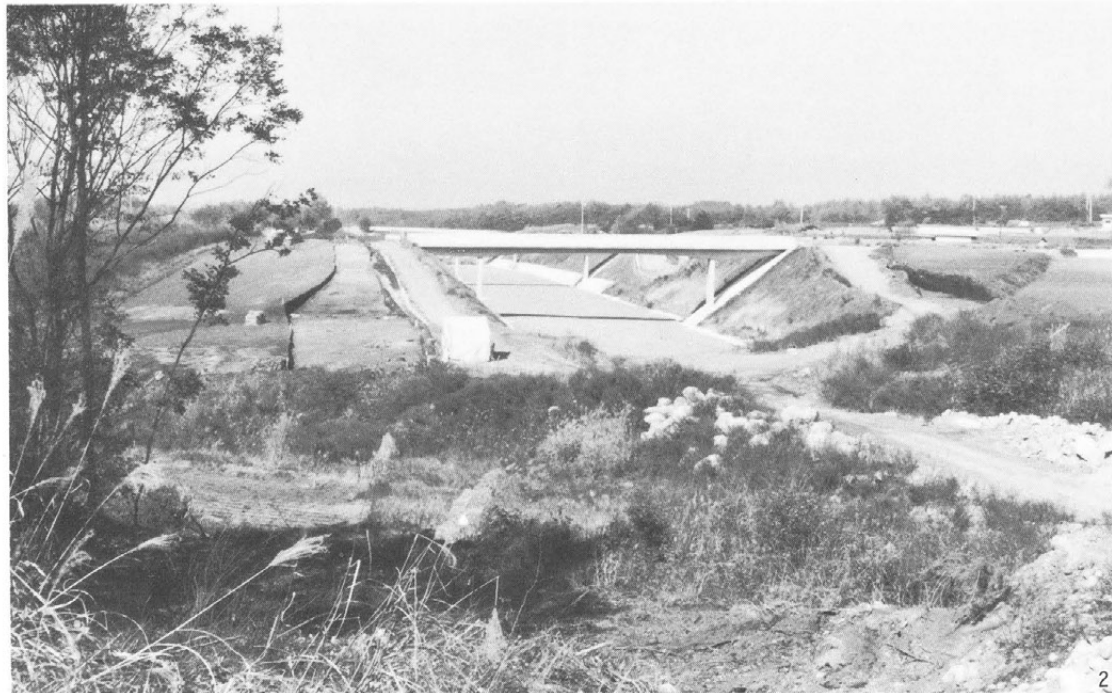


7. 土壇 189

1. 遺跡遠景
(調査前)



2. 遺跡遠景
(調査後)



3. 本線南側近景

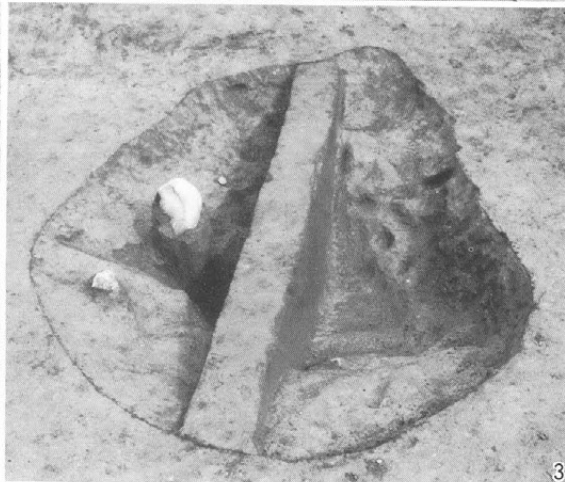




1. 西側近景



2



3

2. 土壇 374
3. 土壇 385

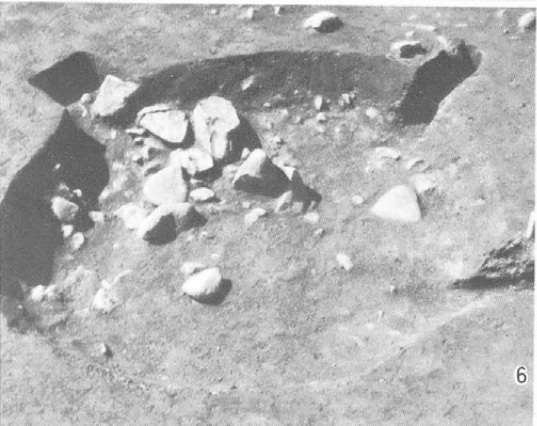


4



5

4. 土壇 390
5. 集石土壇 394



6



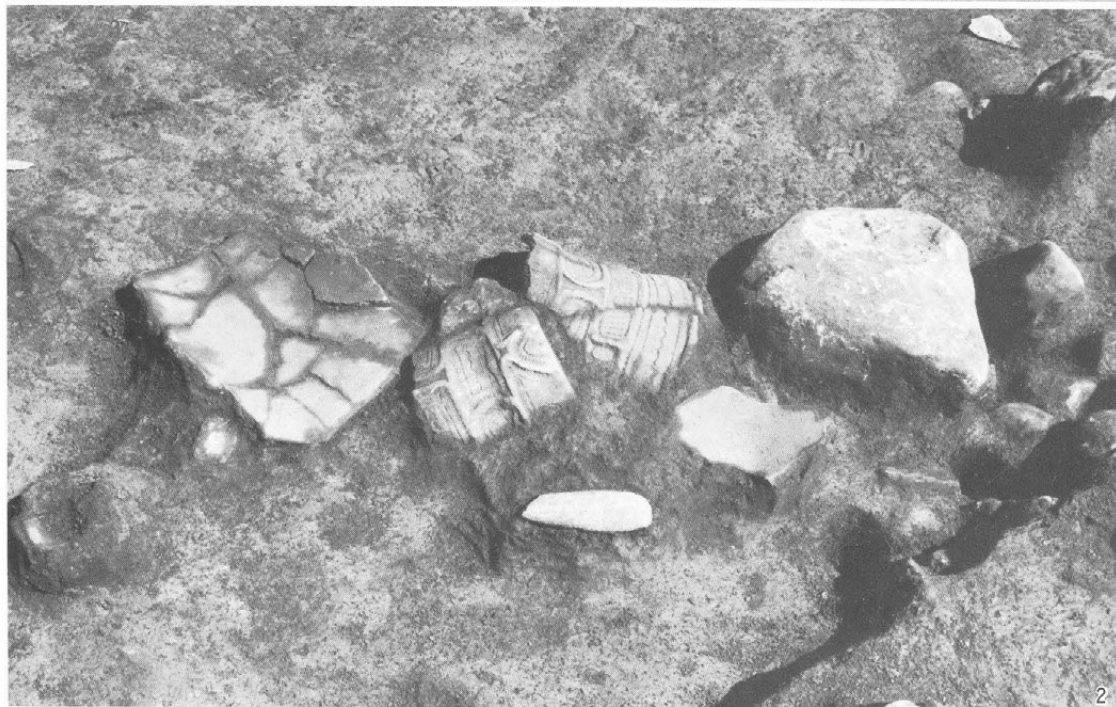
7

6. 土壇 388
7. 竪穴 4

1. 遺物出土状態(1)
15号住居址



2. 土器出土状態(2)
9号住居址



3. 土器出土状態(3)
AX-62



1

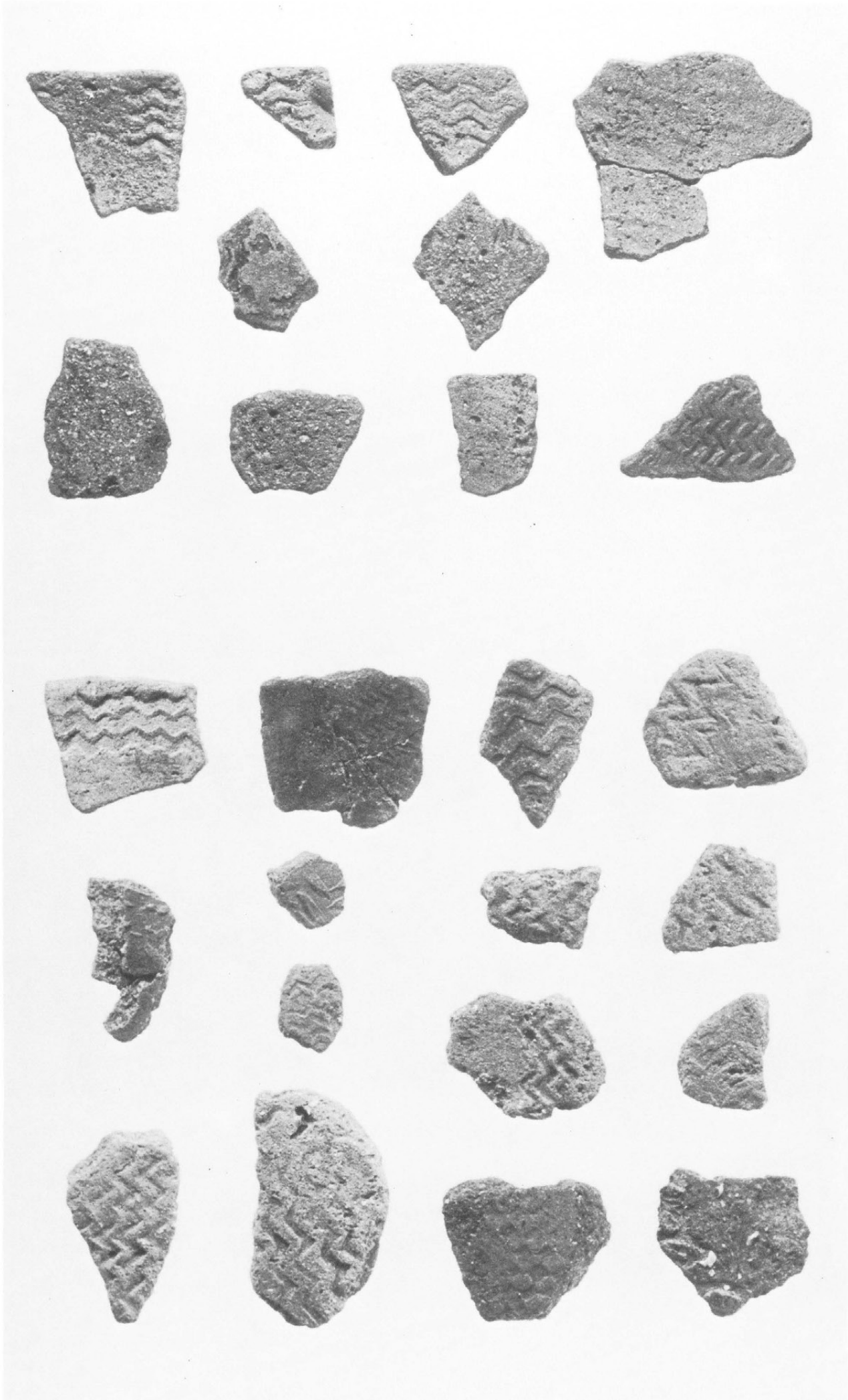
2

3

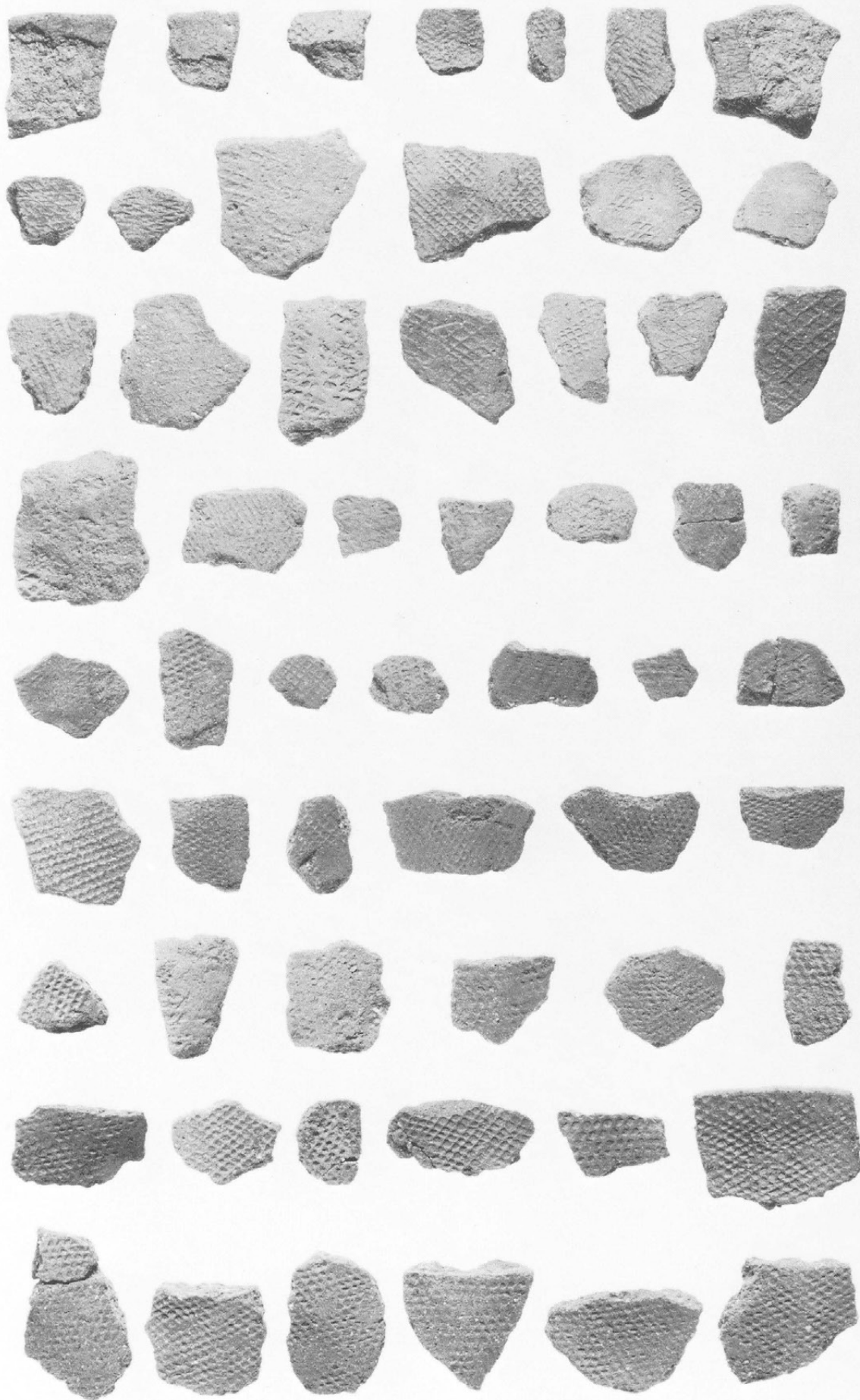
早期縄文土器(1)
(縄文・捺糸文)



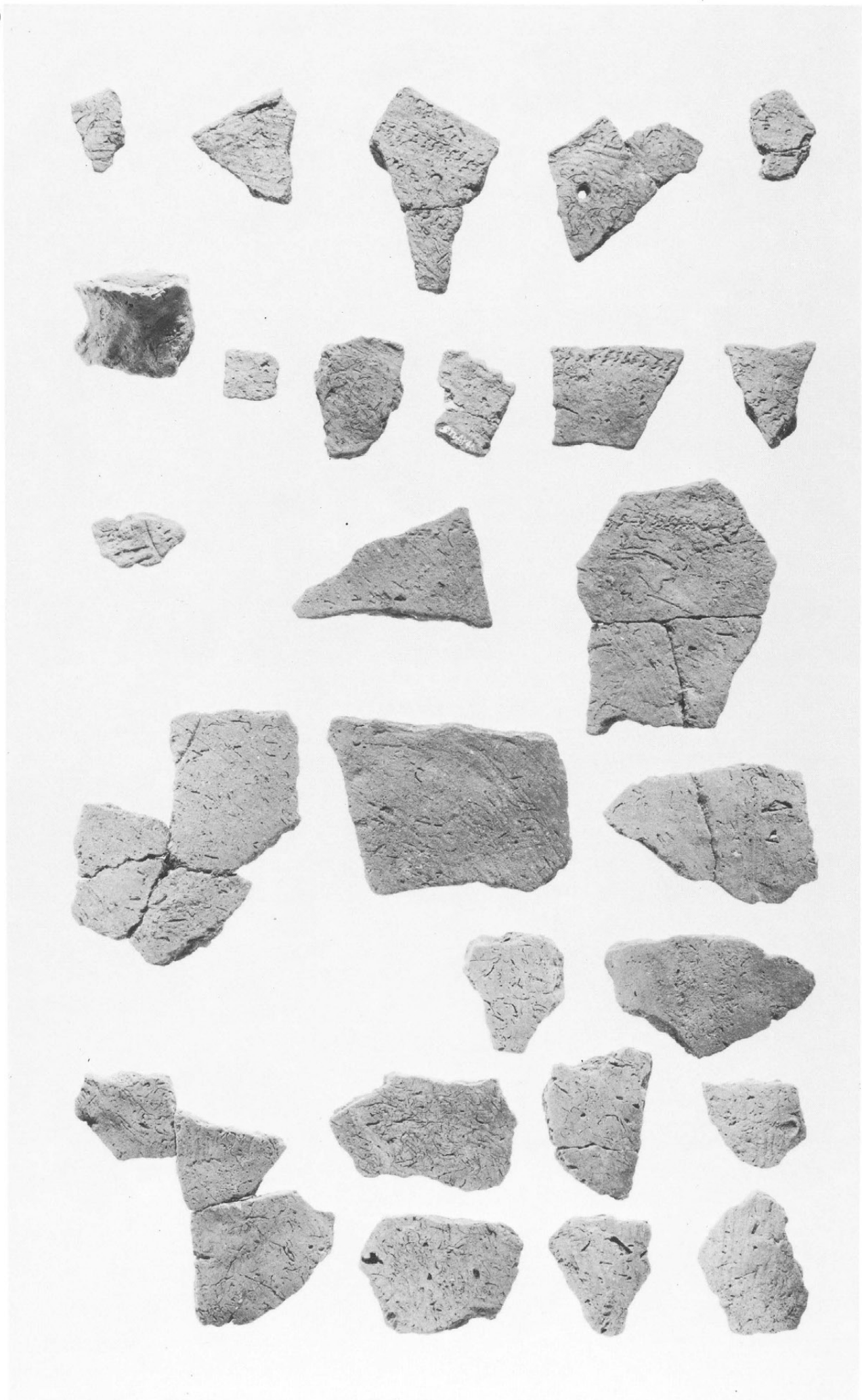
早期縄文土器(2)
(山形押型文)



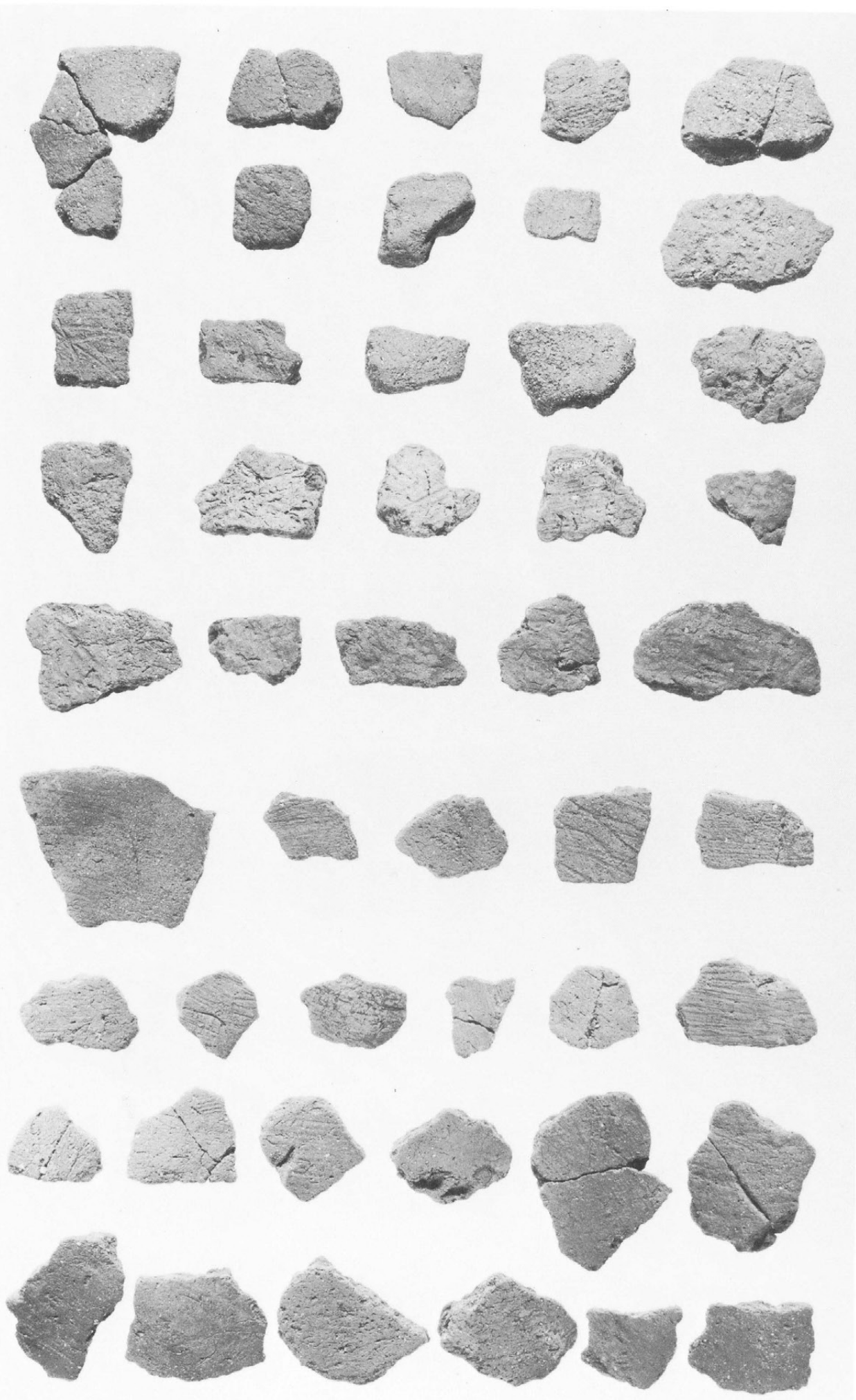
早期縄文土器(3)
(格子目押型文)



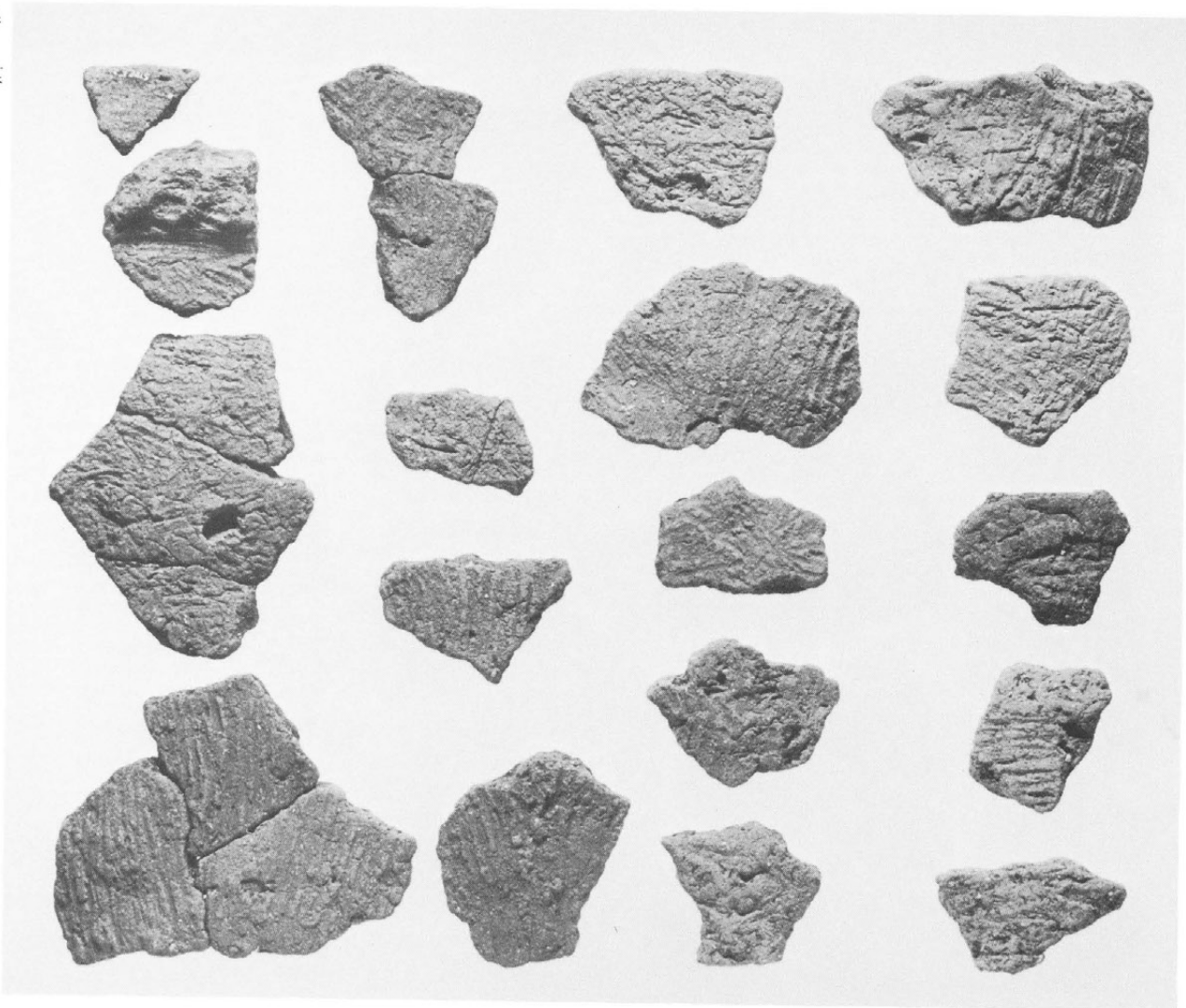
早期縄文土器(4)
(貝殻腹縁文)



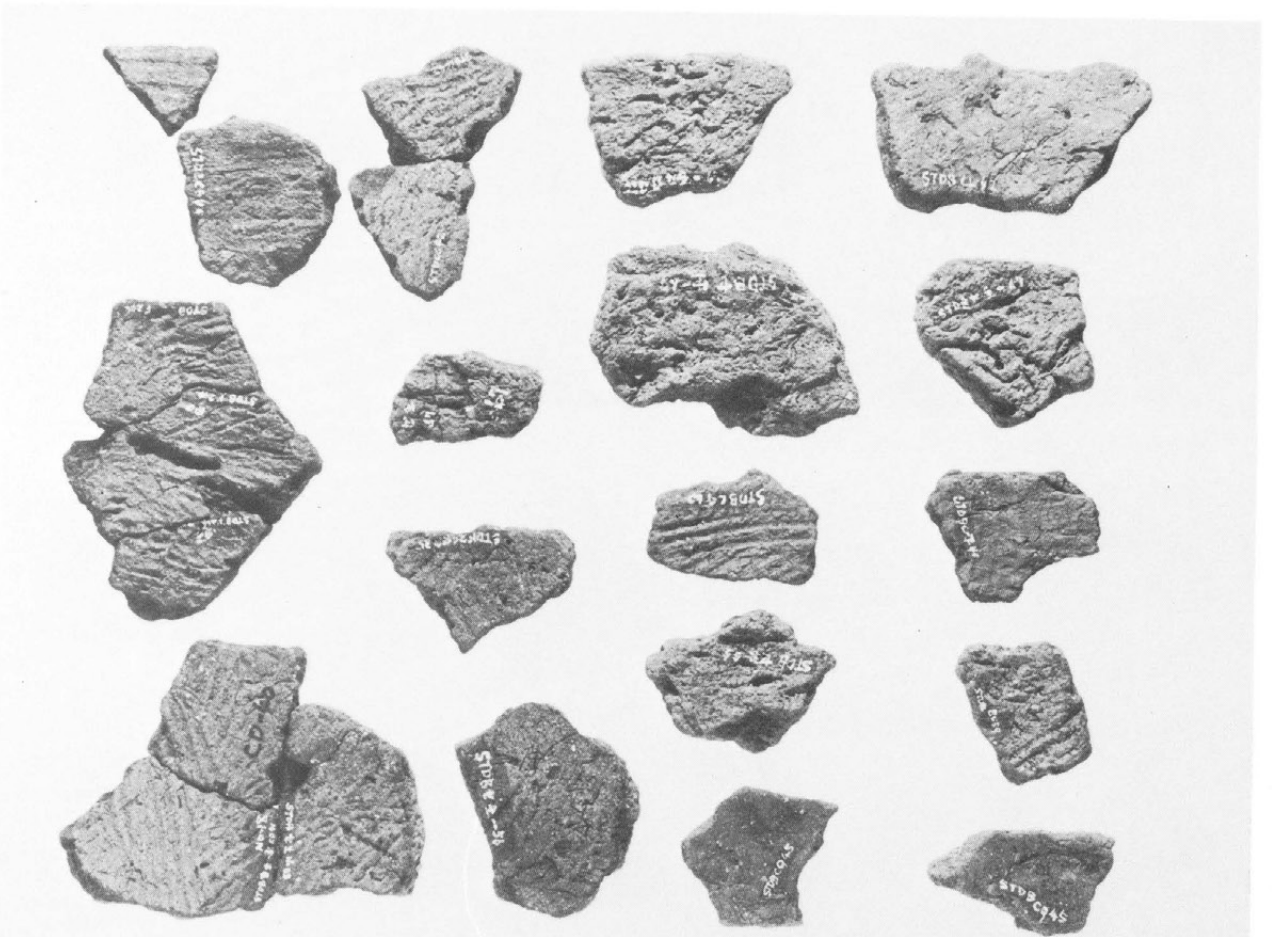
早期縄文土器(5)
(条痕文)



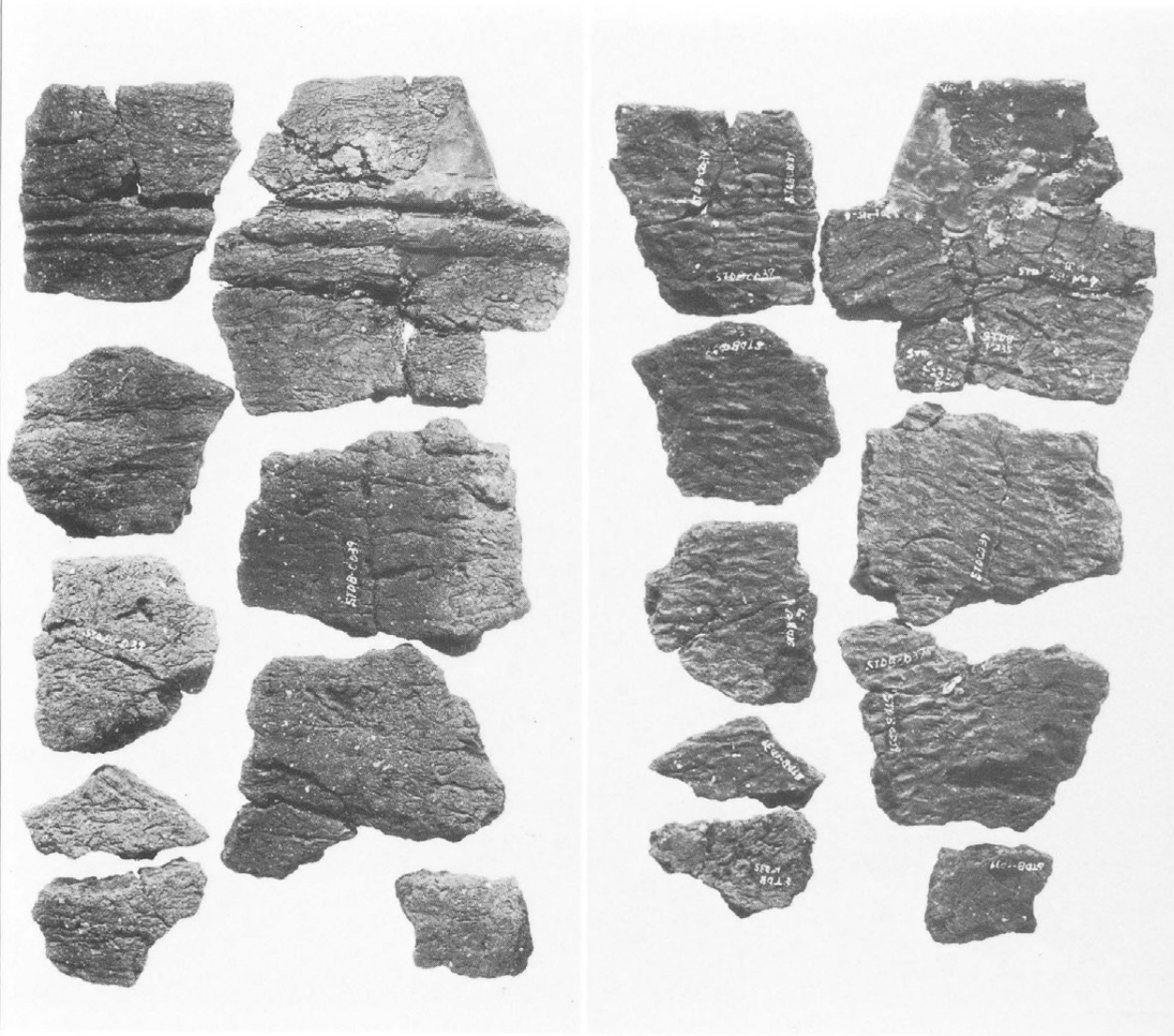
早期縄文土器
(6)
(絡条体压痕
文)
表面



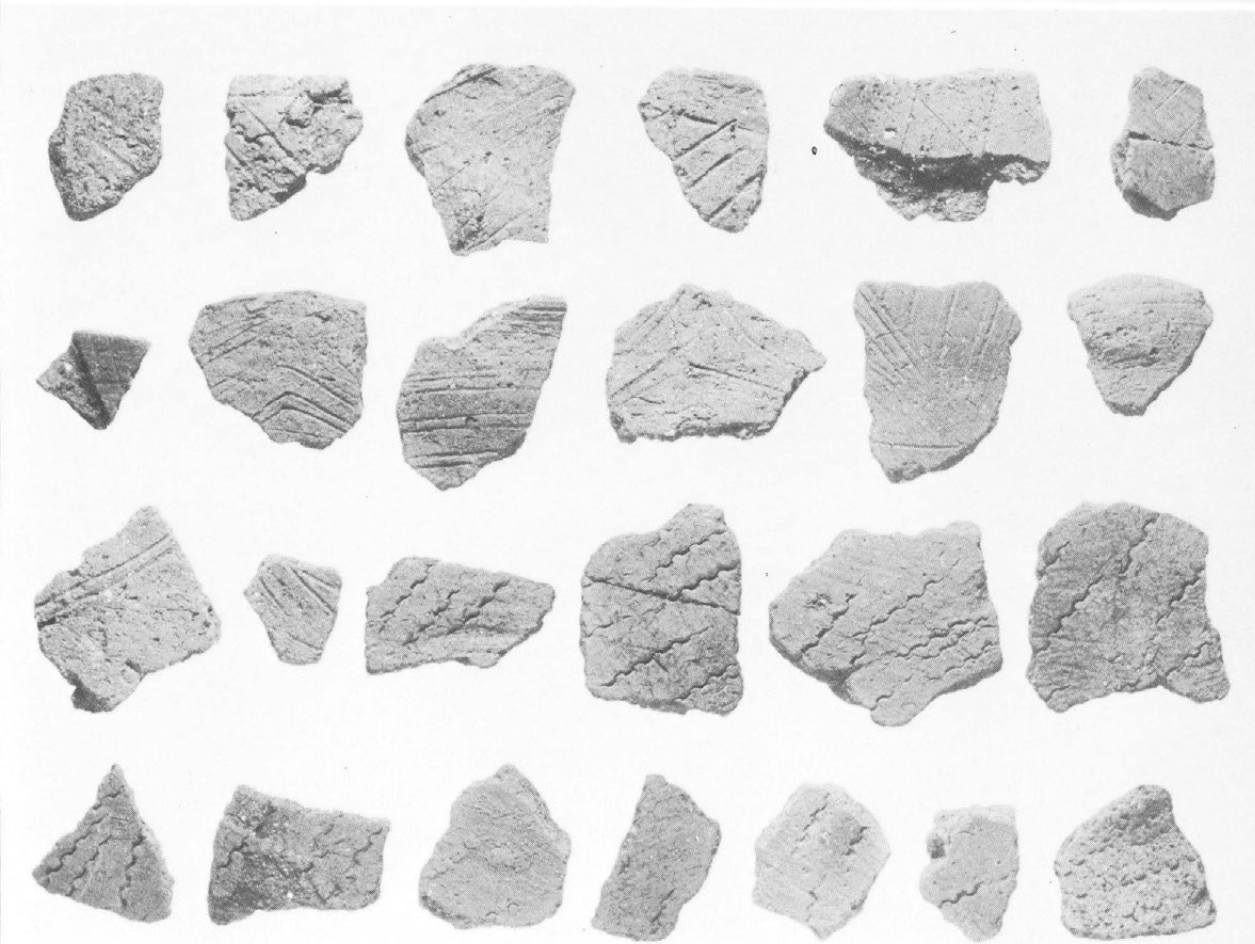
裏面



早期縄文土器
(7)
(条痕文)
左・表面
右・裏面



早期縄文土器
(8)
(貝殻腹縁文)



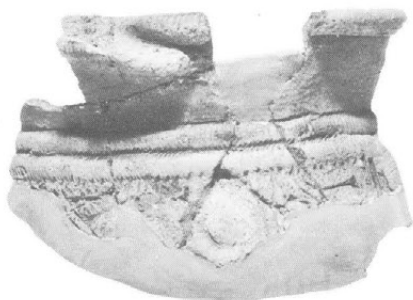
中期初頭繩文
土器(1)



175



184



222



205



190



186



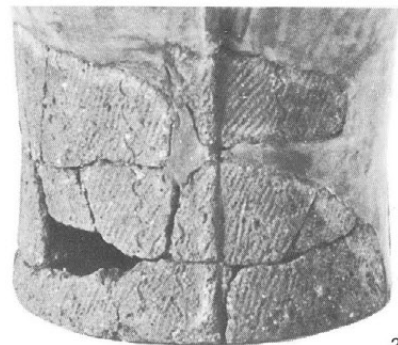
191



211



194



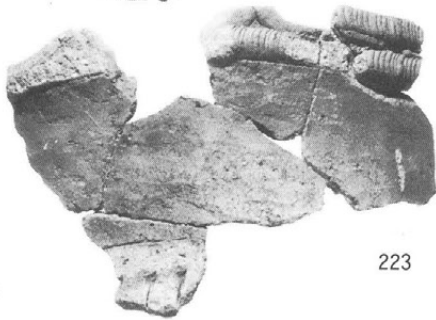
228



213



236



223



185



216



198



238



235

1. 中期初頭縄
文土器破片
(1)



2. 中期初頭縄
文土器破片
(2)



1

2



275



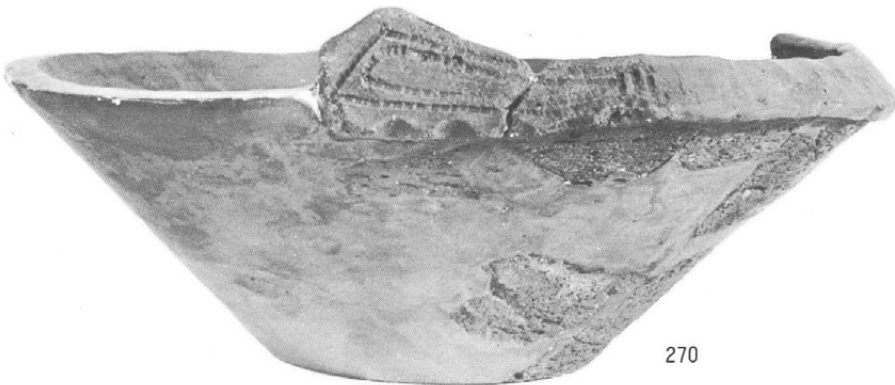
263



279



250



270

中期中葉縄文
土器(2)



259



259



258



273



258

中期中葉縄
文土器(3)
(253. 277)



277



283



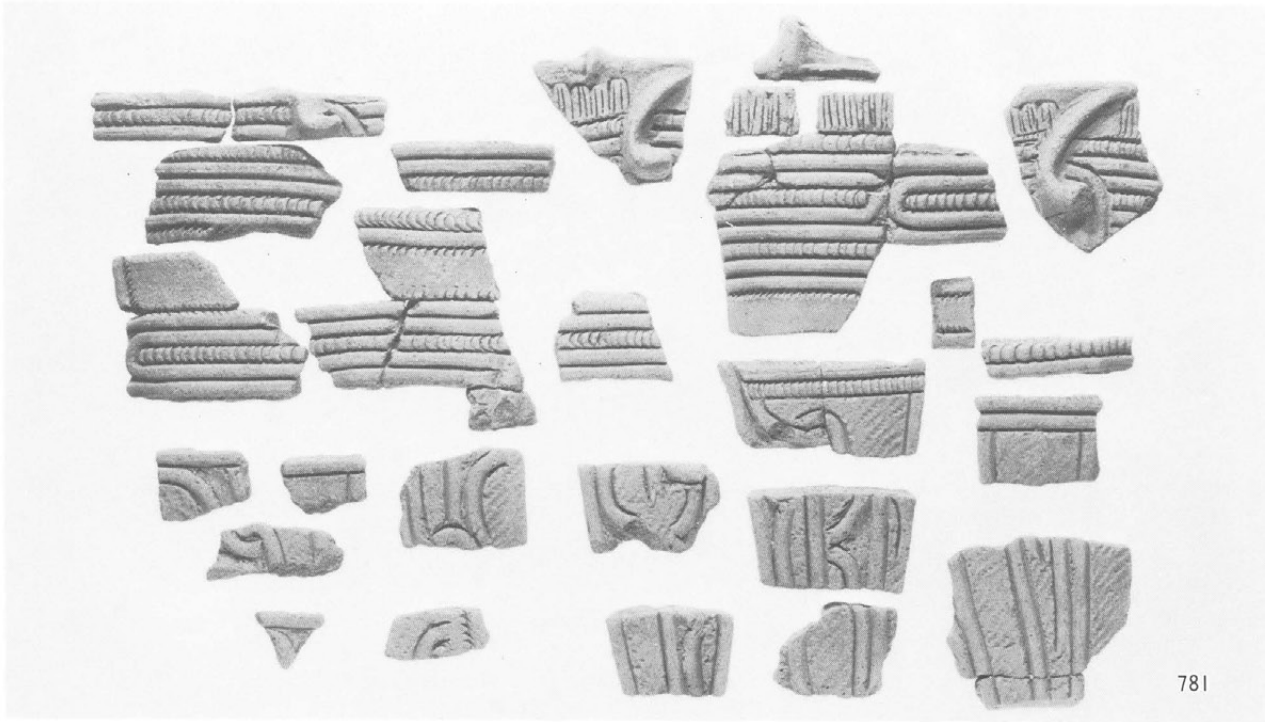
282

後期縄文土
器
(282. 283)



253

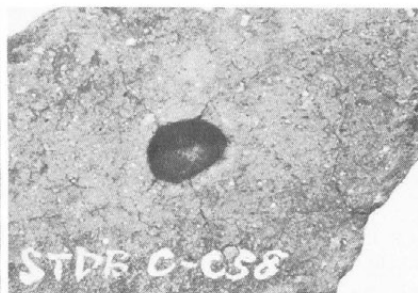
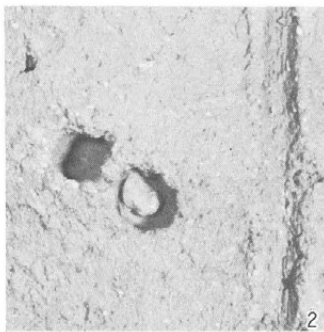
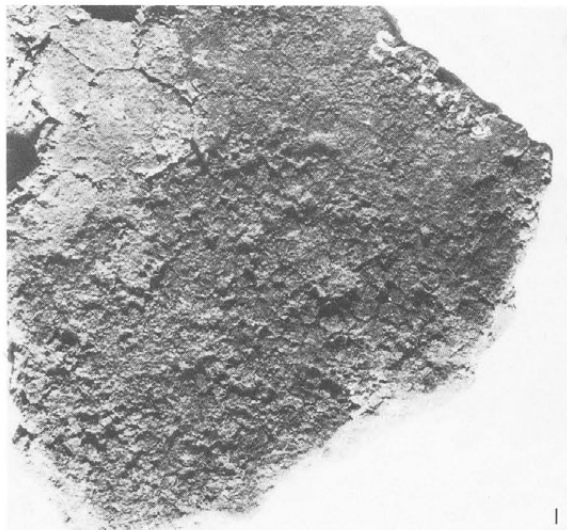
中期中葉縄
文土器(4)



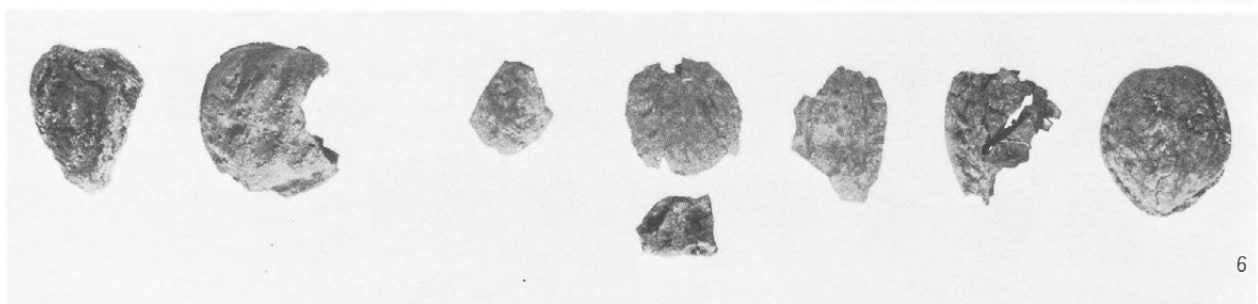
781

煮滓附着土
器(1)

種子圧痕土
器
(2・3・4・5)



炭化物
(くるみ)(6)



6

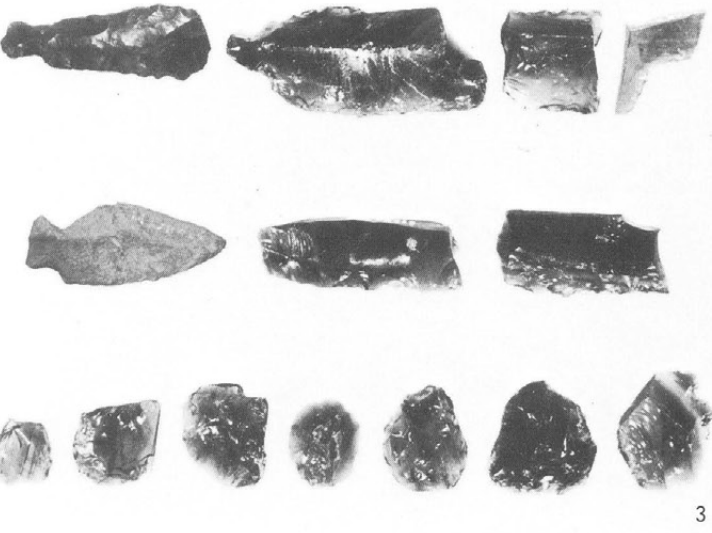
1. 石鏃(1:2)



2. 石錐(1:2)



3. 石匙・スクレ
ーパー類
(1:2)



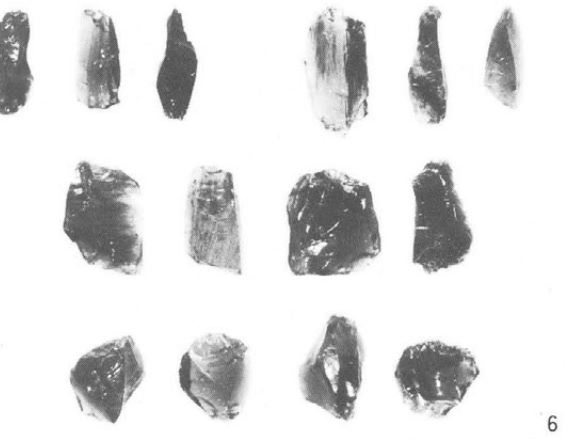
4. 使用痕ある
石核
(1:2)



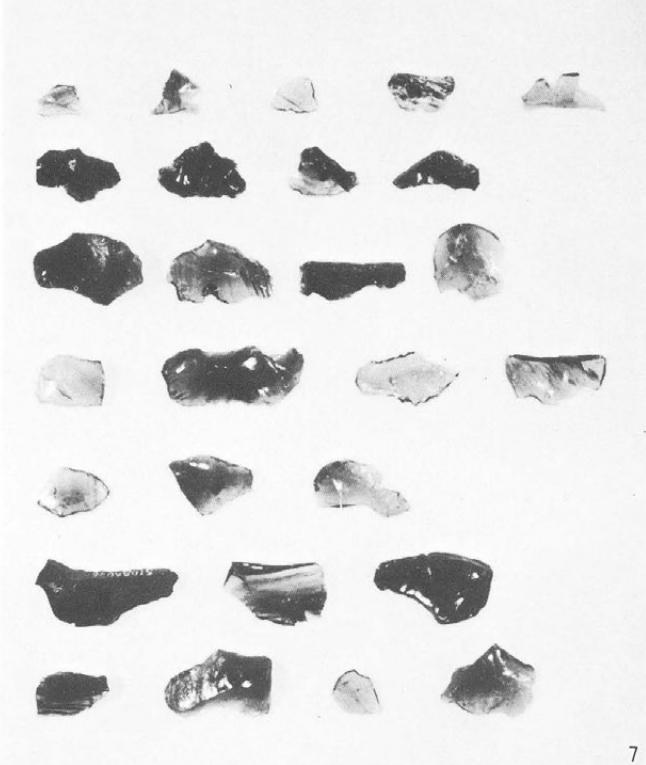
5. 定形石器
A~D
(1:2)



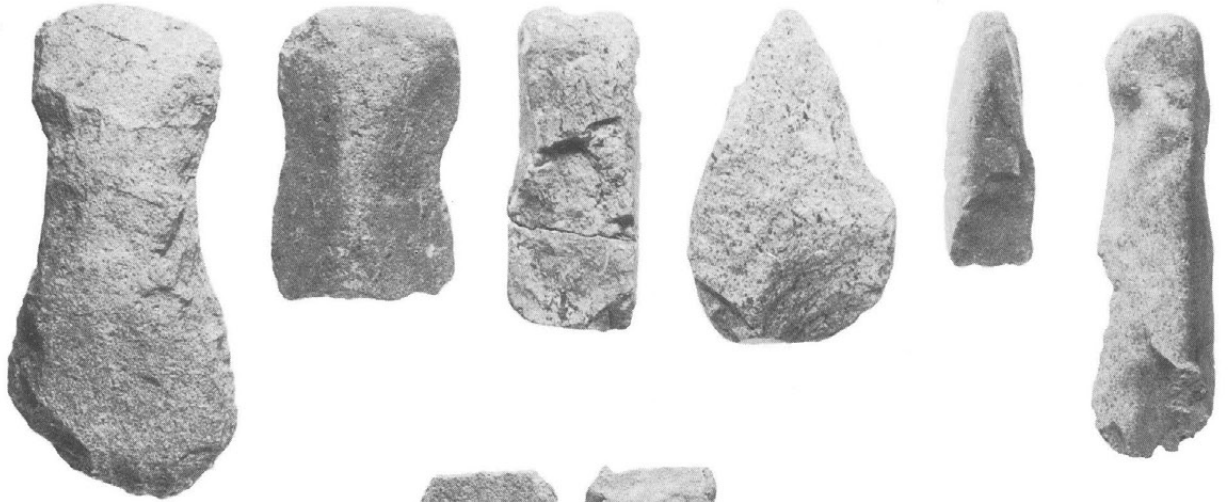
6. 彫刻器類
(1:2)



7. 使用痕ある
剥片
(1:2)



打製石斧砥
石類



横刃型石器

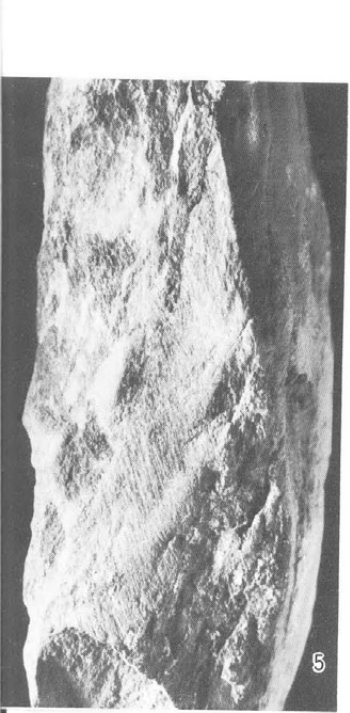
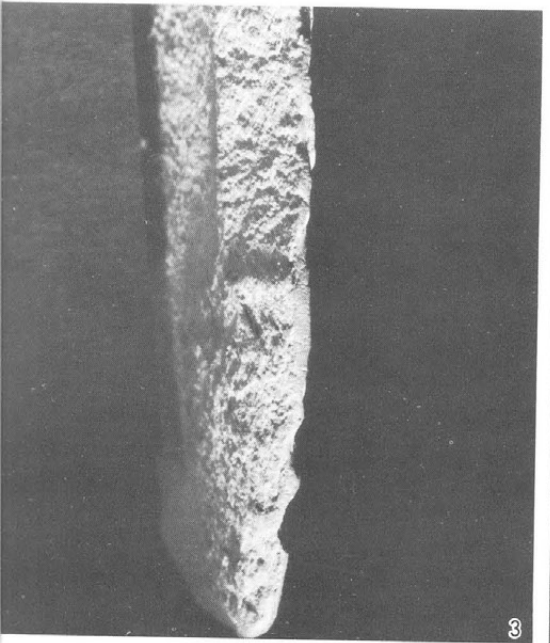
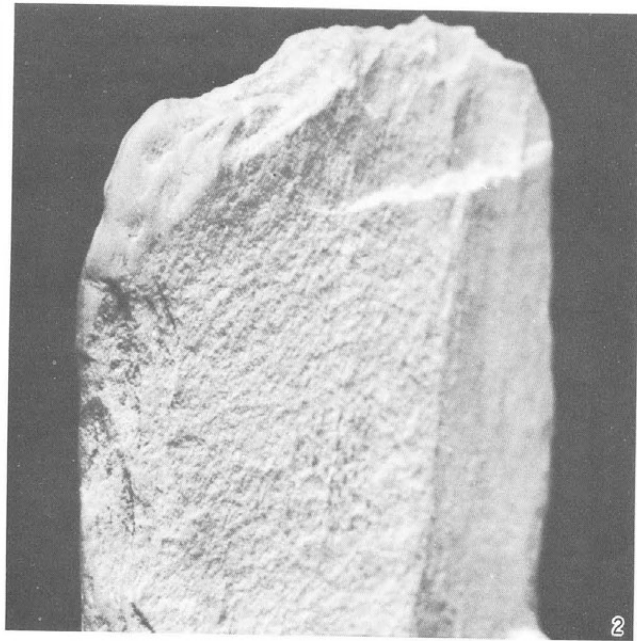
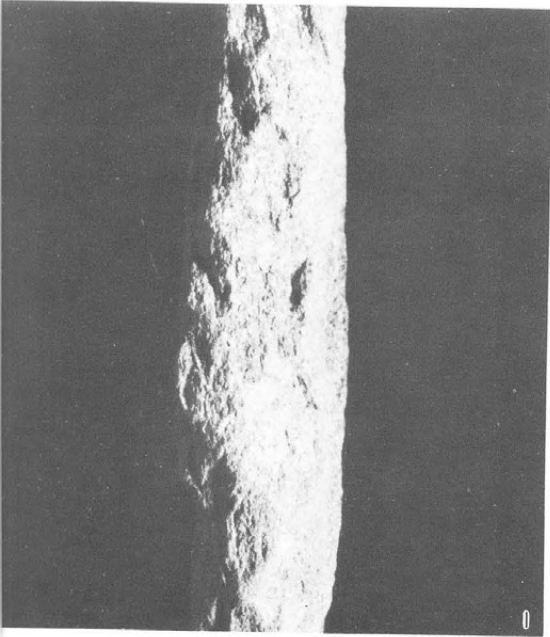


敲打器



特殊磨製石器





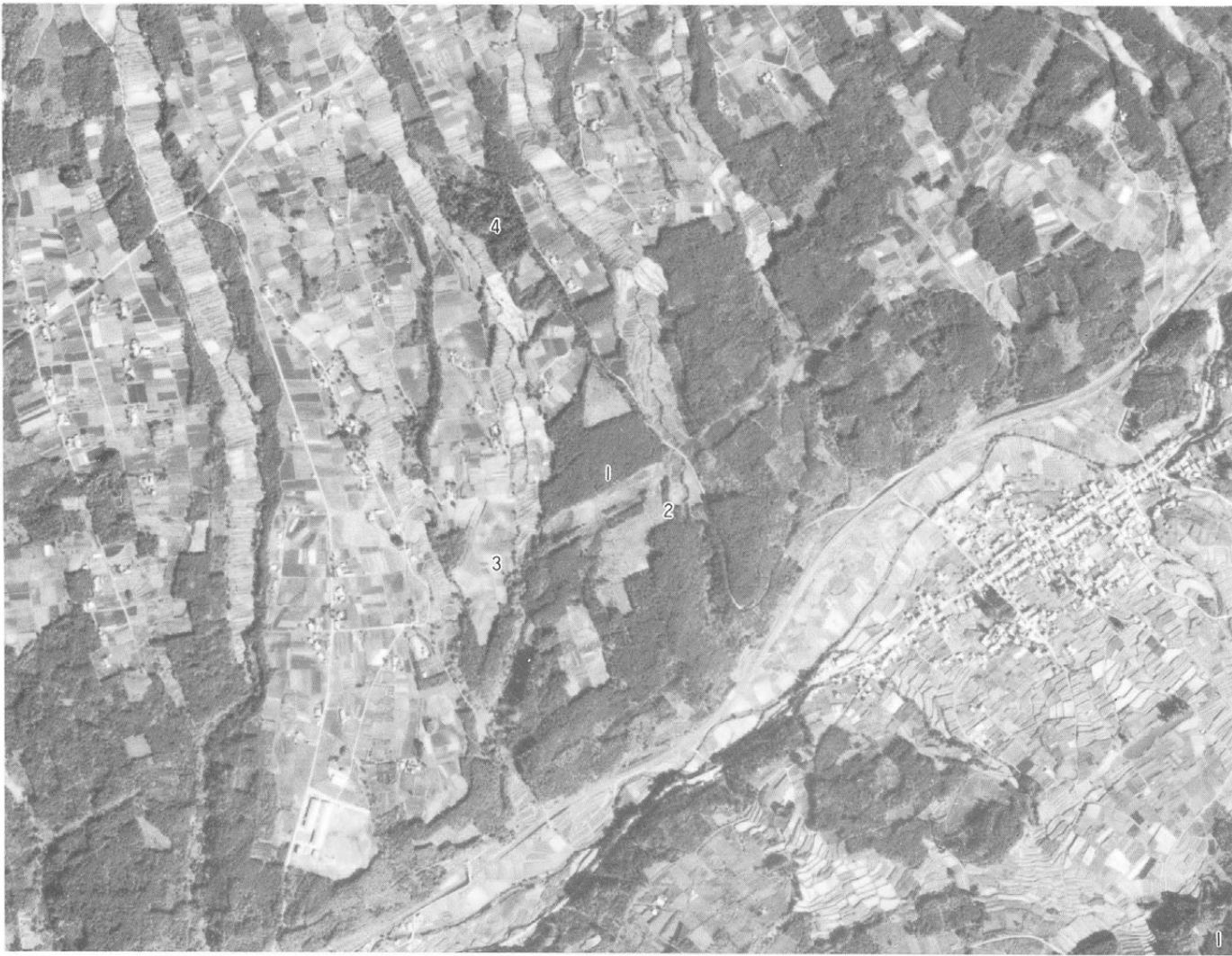
81. 石器に残された製作・使用の痕跡
(1)調整痕
(2)磨耗痕

(3)線条痕
(4)磨耗痕

(5)線条痕
(6)局部磨製

1. 遺跡付近
航空写真
(国土地理院発
行CB-73-7Y
CB-11使用)

- 1. 御射山西遺跡
- 2. 手洗沢遺跡
- 3. 頭殿沢遺跡
- 4. 御射山神社



2. 遠景(南より)

